# パパが見た映画
# 365本

第二集
（上）

磐田　匠

## はじめに

映画が大好きだった、父と

だんだん大きくなってきて、難しい映画とか見始めた二人の息子に。

そして映画を愛する全ての人々に、この本を捧げます

# この本はこんな本

ブログをやってました。

過去形で書くってことは、現在休止中でございます。

そのブログのなかで、やれドラマだとか映画だとか、音楽だとかを、ランダムにご紹介しておりましたが…

一日一本の映画を毎日紹介していって、一年で365本の映画を紹介できたりしたら、かっこええやろなって思ったのが全てのはじまりでございました。

更新が遅れると一日二本とか三本とかの映画を紹介し続けて、連載は二年ちょっと続きました。
今週はこんな映画見ました、今週はテレビでこんな映画やりますよって感じでしたね。

で、コツコツと書きためた原稿をまとめたものがこの「パパが見た映画365本」シリーズでございます。

一年続くかな、どうかなって思いながら始めた連載ですが、けっこう映画って見てるものでございます。

そんな事情がある本ですので、シリーズもののご紹介順とか、けっこうぐちゃぐちゃでございます。
テレビオンエア情報みたいな感じで書いていた時期もありますもので。

御勘弁いただきたいと思います。

あと、表記上のご注意。
えっと。スターのみなさんにはなんせ「さま」をつけさせていただいております。
なぜかというと。
一応、私、元役者なんですよね。大阪の古い演劇人の人なんかだと、先生って普通につけちゃいます。
西山先生とか端田先生とか堀内先生とか志摩先生とか。
そうじゃないと「さん」づけ。
須永さんとか馬場さんとか柳川さんとか田中さんとか。
萬子さんとか南条さんとか鍋島さんとかシュン太郎さんとかいのうえさんとか。
辰巳さんはつみさん、生瀬さんはさんちゃんさんだったけど。
で。
西山先生を先生って呼び、シュン太郎さんをさんづけで呼ぶ私が、ハリウッドスターを呼び捨てにしたらあかんやろって思って。
さまづけで統一させていただいております。
ただし、文頭のスタッフキャストは、映画本の慣例にならい、あえて呼び捨てです。

あと、個人的にね。映画のあらすじって、すげえ読みにくいなってずっと思ってましてん。
役名であらすじ書くでしょ。
このときジャックは…とか。ジャックって誰やねん、みたいな。
映画の世界を皆様にイメージしやすくしてさしあげたいなって気持ちでも書いておりますんで、邪道を承知で、演じたスターの名前であらすじ書いてます。
普通、友達に映画のこと説明するときに、「そのあとマクレーンはな…」みたいな説明する人、少ないでしょ。「ウィリスさまがね…」って説明するでしょ。

井戸端会議みたいな映画感想本を目指しておりますので、逆に役名で説明したほうがわかりやすそうな場合を除き、あらすじ上での役名表記も基本はしませんので、こちらもご了承いただきたいと思いまする。

前置きはこれくらいにしまして。

本編、おたのしみください。

はじまりはじまりぃ

# スクリーム

１９９６年アメリカ映画
監督　ウエス・クレイブン
主演　ネーブ・キャンベル、コートニー・コックス、スキート・ウーリッチ

記念すべき二年目最初の作品はホラーざんす。
ウエス・クレイブン監督の「スクリーム」でございます。
作品のジャンルとしてはホラーというより謎解きサスペンスになります。
ただし、やっぱり「エルム街の悪夢」のクレイブン監督らしく、殺人シーンはまったりずっぽり、これでもかみたいな感じで見せてくれます。
でも同じホラーの大巨匠「サスペリア」のダリオ・アルジェント監督ほど視覚的に痛い映像ではないですね。
この作品、クレイブン監督のホラーに対する愛情がひしひしと伝わってくる作品です。
冒頭いきなり、女性が殺されちゃうわけですが、これがなかなか怖い。女性が一人で留守番していたら、電話が鳴る。クイズに答えたら命を助けてやるとか言われます。
電話の相手は自分の姿が見える場所からかけてきているらしい。出されるクイズは…「『十三日の金曜日』の殺人鬼の名前は？」ここでちょっと笑ってしまいましたが。
彼女は答えを間違えてしまいます。で、殺人鬼乱入～
彼女は第一の犠牲者になってしまいます。
さてここから事件が始まります。物語の主人公はやっぱり女性。同じ殺人鬼に彼女が狙われるわけですな。かなりしつこく狙われます。
こうなると、もう自分の周囲の人間みんなが殺人鬼みたいに思えてしまって、彼女のことが心配になったといって様子を見にきた彼氏さえ疑って警察に通報してしまう始末。
結局彼氏には犯行が不可能だったことが証明されて、そこからは彼氏に守ってもらうことになります。
そうこうしているうちに学校が休みにはいり、クラスメートたちは友人の家に集まってパーティーなんぞをします。
みんな集まって見るビデオがなぜか「ハロウイン」だったりして、これまたニヤリとさせてくれます。
映画見ながら解説する奴がいたりして。
「みんながいる場所から『すぐ戻るね』なんて言って出て行く奴は、そのあとすぐに殺される」とか。
パターンやなあ。でもこの作品でも「すぐ戻る」って言って出て行った子は、やっぱりそのあとすぐに殺されてしまう。
やれやれ。
犯人がとっても意外。ホラーを知り尽くしたクレイブン監督ならではの、観客の予想の裏をいく

犯人設定。
「巧い」とうなってしまいました。結末は是非映像でご確認くださいませ。
おっとちなみに。作品冒頭のクイズの答え。「ジェイソン」と答えたあなたは殺人鬼に殺されちゃうパターンですよ～
正解は…「ボリーズ夫人」。ジェイソン君が殺人鬼として登場するのは「十三日の金曜日」ではなく、「十三日の金曜日パート２」以降です。
ひっかけ問題やあ～

# スクリーム２

１９９７年アメリカ映画
監督　ウエス・クレイブン
主演　ネーブ・キャンベル、コートニー・コックス、サラ・ミッシェル・ゲラー

ホラー映画ファンによる、ホラー映画ファンのためのホラー映画第二弾。
相変わらずホラー好きな皆様を喜ばせるような会話があちこちで出てまいります。
今回は第二弾もののホラーではこんなことがあるあんなことがあるって会話が面白かったですね。
あの事件から二年の月日が流れました。前作で事件を現地レポートしていた人が事件を題材にした本を書き、その本が映画化までされてしまいます。
映画の完成試写会で起こる第二弾第一の殺人（ややこしい）。
今回は前作で犯人がかぶっていた骸骨マスクをかぶって試写会を見にいっているお調子者がたくさんおりまして、それはそれで奇妙で危ない絵が展開します。劇場骸骨マスクだらけ。その中に犯人が骸骨マスクかぶって暴れまくる、みたいな。最初の殺人はこんな感じで力が入っておりましたが、第二の殺人からは前作みたいな感じです。ショックシーンもあまりパワーアップしてない感じ。
作中人物の会話にあったように、やはりよほど作品全体がよくできていないとパワーダウンしているように感じられます。第一の殺人はかなりすごかったんですが、第一話の生き残り組を狙う第二・第三の殺人はちょっとありきたりかなあ。
最後に明らかになる犯人も、前作の「映画ファンの常識を逆手にとった犯人像」ほど意外ではありませんでした。
とはいってもクレイブン監督、「前作の犯人像を知っている観客心理をさらに逆手にとった仕掛け」もあって、ちょっとニヤリ。でも百八十度の百八十度逆は三百六十度まわって元に戻りますでしょ？犯人像としては全然意外ではなくて、むしろ普通っぽかったです。もっとびっくりしたかったんですが。ちょい肩透かしの消化不良感が残りました。

# シュリ

１９９９年韓国映画
監督　カン・ジェギュ
主演　ハン・ソッキュ、キム・ユジン

とにかく最近勢いのある韓国映画でございます。
この作品にしても「シルミド」あたりの作品にしても、南北に分断された朝鮮半島の問題が作品のベースになっています。
分断された祖国への思いってものがあるわけだから、全てはデリケートな話にならざるを得ないですよね。
物語の主人公は韓国の警察官。
テロ防止のセクションにいる青年です。彼のもとに情報が入ります。北朝鮮からスナイパーが潜入したという話。
実際に何人もの人が犠牲になります。
そんな事件と並行して、韓国が開発した液体爆薬が北朝鮮のテロリストグループに略奪されてしまいます。
このグループってのが実に微妙な連中でして、北朝鮮軍部の命令をうけて行動してるわけではないことがだんだんとわかってくるわけですな。
というのも、南北朝鮮の友好的なムードを歓迎する勢力と、それに反対する勢力がいるわけです。
平和協調路線と強硬路線ですな。
テロリストグループは南北朝鮮の親善サッカーが行われているスタジアムに液体爆弾を仕掛け、韓国大統領と協調路線の北朝鮮の特使を一気に吹き飛ばそうとします。
それを阻止しようとする韓国側。
なんとテロリスト側は、爆破計画が失敗したときのためにスナイパーを待機させています。
そのスナイパーはなんと主人公が愛を誓った女性でした。いぐわあああ。
物語途中で北朝鮮のテロリストが戦いのビジョンを語る場面があります。
北朝鮮のテロリストでさえ、南北に分断された祖国の状況を憂えていて、南北統一を願っているわけです。
その方法論が違うだけなんですね。このあたりがとても複雑ですよね。重く、悲しく、とてつもなく素晴らしいドラマに仕上がっております。
必見といっておきましょう。

# トミー

１９７５年アメリカ映画
監督　ケン・ラッセル
主演　ロジャー・ダルトリー、アン・マーグレット、オリバー・リード、ジャック・ニコルソン、エリック・クラプトン、エルトン・ジョン

ロックバンド「ザ・フー」が発表したロックオペラ「トミー」の映画化です。
とにかく壮大な作品でございます。物語中、普通に台詞が喋られるところはほとんどないです。ほとんどの台詞が音楽です。まあ歌詞が台詞だと考えていただいたらいいんじゃないかと思います。
第二次世界大戦終戦の日に生まれた少年トミー（ダルトリーさま）。
戦闘機パイロットの彼の父は出征し、戦地上空で消息を断ちます。トミーの母マーグレットさまは女手ひとつでトミーを育てることになるわけですな。
トミーが六歳になったころ、母の前に男性が現れます。ホリデーキャンプのおじさん、リードさまでございます。
マーグレットさまとリードさまは次第に惹かれあい、やがてベッドを共にする間柄になるわけですが、突然トミーの父が帰還します。
リードさまは口論の末、トミーの父を殺してしまいます。間の悪いことにトミーはその現場を目撃してしまう。
「お前は何も見ていない。聞いていない。何も喋ってはいけない」とマーグレットさまとリードさまにつめよられ、父が殺される現場をみたショックも加わり、トミーは言葉を忘れ、自分の殻に閉じこもってしまいます。
責任を感じた二人は、息子を専門医（ニコルソンさま）に診せたり、怪しげな伝道師（クラプトンさま）のいる宗教の教えにすがったり、麻薬の女王（ティナ・ターナーさま）の世話になったりと、いろいろな治療を施しますが、一向に症状は回復しない。
ある日トミーは「鏡の中のもう一人の自分」に導かれ、家出をします。で、ゴミの山の中で廃棄されたピンボールマシンで遊んでいるところを発見されます。
ピンボールをやらせてみるとこいつが巧い。またたく間にピンボールチャンピオン（エルトン・ジョンさま）に挑戦するまでになり、とうとう彼を倒してしまいます。
有名人になったトミーですが、症状は回復しない。遂に母は錯乱し、鏡に向かって彼をつきとばす。
するとあらら、鏡が割れたショックで彼の身に奇跡が起き、トミーの症状は回復するわけですな。
もうこうなると奇跡の男。トミーを崇拝する若者が彼の周囲に集まりはじめるのですが、それが次の不幸の始まりとなるわけでございます。
ザ・フーってバンドは、日本では考えられないくらいアメリカイギリスではビッグネームです。

だからこそこんなにとんでもないメンバーが集まったんでしょうね。
再結成されたときの「トミーライブ」の映像を見ましたが、そのライブでもけっこうすごいメンバーが集まっていました。
作品的にどうのこうのというのではなく、ロックにひたすら浸っていただくのがこの作品の正しい見かたなんじゃないかと思いますです。

# アウトサイダー

１９８３年アメリカ映画
監督　フランシス・フォード・コッポラ
主演　Ｃ・トーマス・ハウエル、マット・ディロン、ダイアン・レイン、エミリオ・エステベス、トム・クルーズ、ソフィア・コッポラ

コッポラ監督の作品です。
不良少年たちの青春ムービーでございますな。
申し訳ござらんが、ちょいと苦手にしている系統の作品でござる。
恋愛映画・コメディ映画は「好んではあまり見ない映画」なんですが、こういう青春映画は「できれば避けて通りたい」ジャンルでございます。
アメリカの田舎町。そこではボンボンたちの不良少年集団と、下町の不良少年集団がいざこざを繰り返しております。
主人公のハウエルさまが所属するのは下町のグループ。この二派はとにかくしょっちゅうモメているわけですな。
その日もええ感じでモメます。
で、例によって喧嘩になり、殺される一歩手前までいっちゃいます。
で、ハウエルさま派の少年が、ナイフで対立グループの少年を刺してしまいます。
ハウエルさまとその「刺しちゃった少年」はグループの先輩格（ディロンさま）の計らいで郊外に逃げます。ほとぼりが冷めるまで田舎で暮らす、みたいなノリですね。
その田舎町で教会が火事になり、彼らがその火災現場に出くわすわけです。
二人は命懸けで教会に取り残された子供たちを救います。一躍二人はヒーローに。
しかし「刺しちゃった少年」は重症の火傷で生死の境を彷徨うことになってしまいます。
結果的にハウエルさまはその火事によって人生が好転したことになり、もう一人の少年は暗転したことになります。
しかしそれだけでは終わらないわけです。グループの少年たちにとっての不幸はさらに拡散していきます。
そして突きつけられる強烈なクライマックス。
ラストシーンに救いのある描写をもってきたのはコッポラ監督の良心の部分かもしれません。
途中、主人公を助ける仲間の少年役でエミリオ・エステベスさまが出演しています。
けっこうどうでもいい役でございます。そしてさらにどうでもいい役でトム・クルーズさまが出ております。
さらにクレジットにはソフィア・コッポラさまの名前もありましたが…
どこに出ていたのか結局わかりませんでした。なはは。

# 幻魔大戦

１９８３年角川春樹事務所作品
監督　りんたろう
声の出演　古谷　徹、小山芙美、江守　徹、なんと原田知世、白石加代子、美輪明宏

角川映画初のアニメ作品。平井和正様原作の大傑作。
それを故石森章太郎先生がコミックスにしたものが原作になっております。
小説のほうの原作はめっちゃ大作。文庫本で十巻以上のスケールだったと思います。
そんな作品を二時間や三時間のアニメにすること自体無理があるわけなんですが、そういうこと言ってしまうと、ほとんどの小説の映画化が難しいって結論になってしまいますね。仕方ないかな。
宇宙で破壊を繰り返している「幻魔一族」。
数々の惑星を滅ぼし、一族は地球にやってきます。
幻魔に対抗する一族もおります。故郷の星を破壊された超能力者の少女。
彼女は地球のある国の王女に転生します。悪の一族と戦い続けているアンドロイド戦士とかもおります。
王女とアンドロイド戦士は、全世界に散らばってい超能力戦士たちを集め、幻魔一族に対抗しようとします。
そんな王女様が強烈な力を感じたのは日本の高校生の少年。
突然目覚めた超能力者の力に戸惑いつつも、彼は幻魔一族と戦う決意をします。
一人また一人と超能力者が集まってきます。テレポーテーションが使える少年だとか、念動力が使える人だとか。
クライマックスは集結した超能力者と大魔王「幻魔」との壮絶な戦い。すげえすげえ。
りんたろう監督は、光の処理がとても美しく、印象的です。
この映画のすこし後になりますが、「さよなら銀河鉄道９９９」の映像など、とても素晴らしかった印象だけが残っています。本作も、超能力者が「力」を発揮するときに「光る」って設定がありまして、そこの光をインサートさせるときの処理がとてもすばらしかったです。

# ＭＵＳＡ（武士）

２００１年韓国映画
監督　キム・ソンス
主演　チャン・ツイイー、チャン・ウソン

ここ数年とにかく元気の良い韓国映画です。
そんな韓国の歴史スペクタクル大作でございます。
西暦１３７５年。中国では明が建国され、蒙古を北に放逐しました。
高麗と明の関係は明の使節団殺害事件によって悪化。
高麗は関係修復のために使節団を南京に送りますが、そのすべてが投獄されてしまいます。
そんな時代の物語です。
投獄された特使たちは流刑地に連れられますが、その途中で一行は蒙古の襲撃をうけ、護送の任にあたっていた明の兵士たちは皆殺しにされてしまいます。
しかし高麗の者に恨みはないということで、高麗の兵たちは命を助けられます。
そこは灼熱の砂漠。
犠牲をだしながらも武器商人の一行に会った使節団、そこで別の蒙古の軍隊に会うわけですな。
蒙古の兵は拉致された明の姫君をつれております。
姫君がチャン・ツイイーさまでございます。
で、高麗の奴隷兵がチャン・ウソンさまです。
高麗の将軍は、姫を救出して明へ返し、その上で使節団の使命を果たそうと考えます。
はてさて彼らの運命やいかに。
「ヒーロー」「グリーンディスティニー」「ラバーズ」「ＳＡＹＵＲＩ」のチャン・ツイイーさまと「私の頭の中の消しゴム」のチャン・ウソンさまの競演です。
とにかくすごいスケールです。お話もとっても面白い。途中からめっちゃ集中して見てしまいましたです。
物語後半はもう滅びの美学のオンパレード。
「ワイルドバンチ」というか「ダブルボーダー」というか「アラモ」というか「白虎隊」というか「シルミド」というか。
こういう滅び系の映画、日本人って好きですよね。
私も日本人だから嫌いじゃないんだけど、あんまり好んで見たくはない題材ですわなあ。

# 薄化粧

１９８５年松竹・五社プロ作品
監督　五社英雄
主演　緒形　拳、川谷拓三、藤　真利子、松本伊代、浅野温子

殺人犯にして脱獄犯の逃亡生活を、五社監督が丁寧なタッチで描きます。
冒頭いきなり爆破シーン。
犯人は緒形さまでございます。いきなりつかまって取り調べをうけます。
爆破で緒形さまと関係のあった女性が死亡。警察は彼の家を調べます。
そしたらなんと、床下から死体が出てくる。えらいこっちゃってことで緒形さまを締め上げようとしたら自殺未遂。
そしてその後脱獄。緒形さま、あちこちを転々としながら逃亡生活を続けます。
逃亡生活のなかで彼はこれまでの人生を回想すると、こういう筋立てでございます。
この回想がところどころ時系列を無視してインサートされるので、ちょっと混乱しそうですね。
もう緒形さまとにかく強烈。
めっちゃ悪い顔してます。すっごく優しい人の芝居もできるし、とんでもない悪人の芝居もする。
ほんますごい役者さんでしたね。
こういうどろどろした題材って、「鬼龍院花子の生涯」あたりから五社監督は好んでとりあげておられましたが、私は「雲霧仁左衛門」みたいな明快なアクションのほうが好きでしたから、あまり好きな世界ではないですね。
緒形さまの役柄としては、今村監督の「復讐するは我にあり」みたいな感じでしょうか。
こういう題材はやっぱり今村監督なんかが得意とする題材だったんじゃないかなって勝手に思いますが。
五社監督って、信頼できる役者さんをすごく大事にする人ですね。「陽輝楼」の緒形　拳さま、「雲霧仁左衛門」の川谷拓三さま、「吉原炎上」の藤　真利子さまなど、安定した巧さの俳優さんがたが出演しておられます。
その一方で故笑福亭松鶴師匠を起用したり、竹中直人さまや柳沢慎吾さまなんかも起用したりしておられます。
竹中さまなどは当時は青年座（だったと思いますが）所属ではあるものの、まだまだコメディアンとしてしか認知されていなかった時期ですもんね。
そういえば「鬼龍院花子の生涯」ではアゴアンドキンゾー（アゴイサムさまと桜　金造さまのコンビです）なんかも起用しておられましたね。
お笑いの人好きだったんでしょうか。

# 嗤う伊右衛門

２００４年「嗤う伊右衛門」製作委員会作品
監督　蜷川幸雄
主演　唐沢寿明、小雪、椎名桔平、香川照之、池内博之

京極夏彦さまの傑作原作小説を、演劇界の鬼才・蜷川幸雄さまが監督した問題作。
お岩・伊右衛門の物語を解体・再構成したって感じですね。
とはいっても、多少物語を組み直した四谷怪談って印象です。
四谷怪談でいうと、深作監督の「忠臣蔵外伝・四谷怪談」が傑作だったので、どうしても比較してしまいます。
今回お岩を演ずるのは小雪さま。伊右衛門は唐沢寿明さま。
小雪は藩の老臣・民谷氏の娘。過去に煩った病気がもとで、顔にただれたような傷があり、右目も色素がおかしくなっております。
仕官を希望する伊右衛門は、岩と結婚することを条件に仕官することになります。
しかし結婚してすぐに小雪＝岩の父である老臣が他界し、仕官話は流れてしまいます。
とっても貧乏な夫婦です。そのことが原因で夫婦の仲がだんだん微妙になってきたりします。
そんな唐沢伊右衛門に目をつけたのが藩のえらいさんの椎名桔平さまでございまして、この男がいろいろとわるだくみをしまして、話をややこしくするわけですね。
ってことで、物語が終わってみればこの話はお岩と伊右衛門の純愛物語と見れないわけでもないわけでございまして、これってどういうことやろ、みたいな感じですわね。
物語のラストまでお岩さんは死にません。
ってことはこの話は亡霊話にはなりようがないわけでございまして。
新解釈の四谷怪談ではあるわけですが、京極作品ってことでちょっと期待しすぎたかもしれませんね。
ただ、香川照之様演ずる坊さんがキーマンかもしれないです。
この設定は「巷説百物語」の主人公にそっくりなんで、原作では「巷説…」の作品世界にリンクさせる設定がなされているかもしれません。
それ以上に、原作は映画版とは別の結末があるのかもって思ってしまいましたです。
原作読もうって思っております。

# 吸血鬼ドラキュラ

１９５７年イギリス映画
監督　テレンス・フィッシャー
主演　クリストファー・リー、ピーター・カッシング、マイケル・ガフ

いわずと知れた恐怖映画の古典でございます。ハマープロって恐怖映画ばっかり製作していた映画会社がありまして、その会社の代表的傑作がこの作品です。
物語はあまりくだくだ書かないほうがいいでしょうが、一応おさらい。
この映画はキャラがとにかく有名なので登場人物名で書きますね。
主人公のハーカー君、トランシルバニアのある伯爵から、城の古書の整理を依頼されます。
招待主はドラキュラ伯爵。伯爵は昼間は全く姿を見せず、夜だけしか現れない。
で、どうやら自分は幽閉されつつあることに気づくわけですな。
実はハーカー君、吸血鬼研究の第一人者ヘルシング教授とともに、ドラキュラ伯爵を退治すべくやってきていたわけです。
やはり伯爵はこの世の住人ではなく、夜な夜な闇の世界を彷徨し、生ける者の生き血をすう吸血鬼だったわけです。
ハーカー君、伯爵に襲われ、次第に化け物になりつつあるので、これから伯爵を退治するつもりだと手紙を書いて教授に送ります。
手紙を受け取った教授が駆けつけたときにはすでに遅く、城はもぬけの殻。
哀れなハーカー君は吸血鬼の餌食になっておりました。ヘルシング教授は城から運び出された荷物＝棺を追ってイギリスに戻ります。
荷物の届け先はロンドンのどこからしい。時を同じくして、ハーカー君の婚約者のまわりに怪しい影。
きゃあああ。その女性がドラキュラに狙われていることを知った教授、窓にニンニク、首に十字架みたいな吸血鬼防衛ツールを駆使して彼女を守ろうとしますが…
とにかくドラキュラ伯爵がかっこいい。
クリストファー・リーさま最大のあたり役ですよね。
こんな作品にめぐりあえたことはある意味幸せでしょうが、この後、ハマープロは吸血鬼映画を量産し続け、最後にはわけわからなくなって、リーさまをして「私は二度とドラキュラ映画には出ない」と言わしめることになります。
そらそうやろ。シリーズ後半の「ドラキュラ７２」以降はかなりハチャメチャな映画になり、リーさま引退後ハマープロは香港映画と連携して、吸血鬼とカンフーの達人を戦わせたりすることになるわけです。
気持ちはわかるけど、それは違うやろ。

# 凶人ドラキュラ

１９６５年イギリス映画
監督　テレンス・フィッシャー
主演　クリストファー・リー、バーバラ・シェリー、アンドリュー・キア

ハマープロの「吸血鬼ドラキュラ」シリーズの第二弾。
ドラキュラ役のクリストファー・リー大先生は引き続き登板ですが、ヴァン・ヘルシング教授役のピーター・カッシング先生は本作ではお休みでございます。
と、いいますか、このシリーズって取り扱いが微妙なんですが、ハマープロの「タイトルに『ドラキュラ』とつく作品」としては本作は三作目にあたります。
二作目は「吸血鬼ドラキュラの花嫁」で、これにはクリストファー・リーさま演ずるドラキュラ伯爵は登場しません。
しかしピーター・カッシングのヴァン・ヘルシング教授は出てくるわけですな。
ちなみにヘルシング教授、三作目以降はあんまり活躍しておりません。
教授が大活躍するのは後期作品。「ドラキュラ‘７２」以降でございます。
これって、今回色々調べてわかったことですが。意外ですね。
禁断の「吸血鬼の領域」に踏み込んだ二組の夫婦が、ドラキュラ伯爵の城に迷い込み、そのうちの一人がドラキュラの下僕の手で殺害され、その血でドラキュラ伯爵が復活します。
おお、すげえ。
しかしですなあ、これだけの連作ホラーともなると、各作品ごとのコメントなんかがすごく難しいし、作品ごとのあらすじとかもとっても書きにくいです。
「１３金」なんかは、前半の作品群はかなりわかりやすい特色があったんで、まだ書きやすいほうなんですが、「エルム街」とか「ハロウイン」なんかのシリーズは、めっちゃ書きにくいです。作品ごとの特色が薄いですから。で、ドラキュラシリーズはどうかというと、途中の物語は特色が薄いんですが、ドラキュラのやられかたがええ感じで特色がでております。昨日紹介の「吸血鬼ドラキュラ」は太陽の光で滅びます。本作では「流れる水」で金縛りにあい、氷の池に封じ込められてしまいます。この後の「帰ってきたドラキュラ」では心臓に杭を打たれ、「ドラキュラ血の味」は確か心臓串刺しで、「ドラキュラ復活吸血のエクソシズム」では、手に持った槍に落雷して焼死でしたでしょうか。
シリーズ後半になってすげえ特色がでてきたのは「１３金」と好対照ですね。
「ドラキュラ‘７２」と「新ドラキュラ悪魔の儀式」は、順にご紹介しますです。

# ドラキュラ‘７２

１９７０年イギリス映画
監督　アラン・ギブソン
主演　クリストファー・リー、ピーター・カッシング。
ドラキュラシリーズのなかで、後期の三作はけっこう好きな世界です。
「帰ってきたドラキュラ」、「ドラキュラ血の味」、「ドラキュラ復活・血のエクソシズム」の中盤三作は、いずれも中世を舞台にした作品で、かなりマンネリムードが目につきます。
そこで考えましたハマープロ。ドラキュラ伯爵を現代に復活させてしまいました。
とりあえずクリストファー・リーとピーター・カッシングの二大ホラースターが競演しているだけで涙ちょちょぎれます。
ドラキュラシリーズの基本的なパターンは、その前の作品でドラキュラが滅ぼされる場面から始まって、ドラキュラの灰だとか遺品だとかを集める奴（これは弟子だとか下僕だとか狂信者です）がドラキュラを復活させて…って始まりかたをします。
本作ではいきなりヘルシング教授とドラキュラが疾走する馬車で戦います。
老骨のむちうって頑張るカッシングさま。ついに教授はドラキュラを滅ぼします。街には平和が戻ってめでたしめでたし、って感じでカメラが上空にパンすると、そこにジェット機が飛ぶ。
そこへタイトル「ドラキュラ‘７２」。
もうこれだけでノックアウトです。
しかし肝心の物語はもひとつ現代って設定を生かしきれていなかったように思いました。
今回ドラキュラを復活させるのはドラキュラの下僕の孫。
ヒッピーの若者たちを集めて復活の儀式を行い、遂にドラキュラは復活。うひょおおおお。
復活の儀式に参加していたのはかのヴァン・ヘルシング教授の孫のヘルシング（やっぱりピーター・カッシングさまが演じます）のそのまた孫娘。
ドラキュラ伯爵（この時代に復活しても伯爵なんだろうか）は逃げ出したその娘を狙います。
これまでのシリーズのパターン通り、作品冒頭のシーンは「その一つ前の作品のクライマックス」だって先入観があったもんで、映画のクライマックス（ってことはこの作品のオープニングです）で教授と伯爵が馬車で戦う作品、見逃したってずっと思っておりましたが、その場面はどうやらこの作品用に撮られた新撮影シーンだったようですね。
だってクリストファー・リーとピーター・カッシングのドラキュラ映画での競演は第一作以来ですから。
こういう異色作、大好きな人なんですわ。
ドラキュラシリーズの後期作品は、なにかにつけ賛否両論を巻き起こしています。
というか、「吸血鬼ドラキュラ」的ゴシックな作品世界がお好きな方は「これは違うやろ」と思われるかも。
しかしこういう作品世界が後に「ドラキュラ都に行く」だとか「フライトナイト」の世界に続くのも事実でありまして。

もう少し評価していただきたいな、と思う作品でございます。

# 新ドラキュラ悪魔の儀式

１９７３年イギリス映画
監督　アラン・ギブソン
主演　クリストファー・リー、ピーター・カッシング

現代版ドラキュラ映画最後を飾る大問題作。
厳密に言いますと、この作品のあとにハマープロ・香港ショーブラザーズ合作の「ドラゴン対七人の吸血鬼」なんて最高級の異色作がありますが、これはねえ、吸血鬼映画じゃなくてカンフー映画としてしか見てないですし、いくら異色作が好きな私でもこの映画だけはさすがに「これは違うやろ」って思ったくらいの作品でございますから、この作品には今回は触れないでおきましょう。
さて「新ドラキュラ悪魔の儀式」ですが。
次の「ドラゴン…」がカンフー映画だとしたら、この映画はスパイ映画。
なんじゃこりゃ。でも私的にはぎりぎり許せる世界かな。
謎のカルト教団があります。
この教団に潜入していた英国諜報部員（！）が命がけで本部にある情報をもちかえります。
そこには聖職者や大臣たちがその教団に参加しているということと、細菌を研究している大学教授がメンバーにいるということ。
大学教授の親友のヴァン・ヘルシング教授は、情報部の依頼でその教授と会うことになります。
そこへ教団のメンバーが乱入。細菌学の権威の教授は殺され、彼がペスト菌を培養していたことが明らかになります。
なんかすげえ展開。
細菌テロでございます。
そしてその教団を操っていたのは…ドラキュラ伯爵だったのだ～
あのねえ、って感じです。この作品ではドラキュラ様はもう吸血行為に興味がなくなったのか、そういうシーンはほとんどなし。
００７シリーズに出てくる悪の大富豪みたいになっております。
彼に対するのは、イギリス諜報部と警察とヘルシング教授。
別にこういう世界やりたいんだったらやったらいいんだけどお。諜報部はやりすぎやろ。
まあねえ、そもそもの小説版、ブラム・ストーカーの描いた「吸血鬼ドラキュラ」は、蔓延するペストの脅威を吸血鬼に置き換えて描いているってのは有名な話ですよね。
だからペストがでてきて「ほほう、やるやないかハマープロ」とか思ったりもしましたが、やっぱり大富豪みたいなドラキュラ伯爵はちょっと違いますわな。
ドラキュラ役でブレイクしたクリストファー・リーさま、この作品にブチギレしまして、「私は二度とドラキュラはやらない」と宣言いたしました。
その数年後、「００７黄金銃を持つ男」の悪役を演じ、英国諜報部のジェームズ・ボンド様と対

決します。
ドラキュラはやらないけど、悪の大富豪はやるんかいな。
ヘルシングとは戦わへんのに諜報部とは戦うんかいな。
どないやねん、ってつっこんでしまいたくなる顛末でございました。

# 蠅男の恐怖

１９５８年アメリカ映画
監督　カート・ニューマン
主演　ヴィンセント・プライス、アル・ヘディソン、パトリシア・オーウェンズ

この映画はねえ、めっちゃ強烈なシーンがありますので、すっげえ苦手な人、実は多いと思います。
私もちょっとどんよりした気分をひきずることになりました。
主人公のヘディソンさまは科学者でございます。
彼が研究していたのは、物質を原始に分解して再合成することにより、あらゆるものを電送しようとする実験でございました。
静物での実験は成功。
そして彼の実験は生物を電送する段階に到達。
自らをモルモット代わりにして電送実験が開始されます。
しかししかし。実験装置に蠅が一匹入り込んでしまいます。
再合成の段階で蠅と人間、顔と左手が入れ替わって再生されてしまいます。
これが蠅男ですな。身体は人間で、頭と左腕が蠅のモンスターになってしまいます。
問題の蠅を捕まえることができればなんとかなるのですが、そいつは逃げてしまっております。
えらいこっちゃ。ヘディソンさまは顔を頭巾で隠し、左手をポケットに入れたまま事故の対策を考えることになります。
すっげえ哀れ。かわいそう。
ヘディソンさまの奥さんがオーウェンズさま。
むっちゃきれい。ヘディソン博士は、筆談で妻とコミュニケーションをとることになります。
しかし左腕が徐々に言うことをきかなくなります。突然豹変した夫の態度に徐々に不信感をつのらせる妻。
そしてそして、ショック映画史に残る頭巾がとられるシーン。
頭巾の下には蠅の顔。叫ぶ妻。きゃあああああ。恐怖のあまり叫ぶ彼女の顔が昆虫の複眼を通して見たように分割されます。
秀逸な演出です。
結局博士は生き続けることをあきらめ、死を選びます。
巨大なプレス機で自らの頭と左手を潰すようにして死ぬわけですね。
なあんだ。「蠅男の恐怖」って言いながら全然「恐怖」じゃないじゃない。
頭巾とったときの一瞬だけじゃん。蠅男って人とかを襲うわけじゃないし、すっげえジェントルだったし。
って思っていたら、見ている人を恐怖のどん底に叩き込むようなとんでもないラストシーンが待っています。

ほんま夢に見るくらい強烈なラストシーン。
このシーンがトラウマになっちゃった人、けっこう多かったんじゃないでしょうか。
Ｂ級モンスターホラーの香り漂う作品ですが、とにかく蝿男は悲劇の主人公なんで、そういった点が高く評価されることになったわけでしょうね。
この物語は二十年以上の時を越え、デビッド・クローネンバーグ監督の手によってリメイクされます。

# ザ・フライ

１９８６年アメリカ映画
監督　デビッド・クローネンバーグ
主演　ジェフ・ゴールドブラム、ジーナ・デービス、デビッド・クローネンバーグ

前回ご紹介しました「蝿男の恐怖」のリメイク作品。
二十年以上の時を越えてのリメイクでございます。
前作では物質電送のプロセスのなかで、顔と左手が入れ替わって再合成されてしまったって話でした。
今回はもうちょっとすごい。同じように物質転送装置で実験をしていた科学者。で、やっぱり装置に蝿が紛れ込みます。
今回はＤＮＡレベルで合成されてしまうって設定でございます。
科学者を演ずるのはジェフ・ゴールドブラムさま。
この映画のあと、「ジュラシック・パーク」で天才数学者を、「インデペンデンス・デイ」でも学者を演じました。科学者顔ですもんね。
この作品でのゴールドブラムは、出かけるときの服を選ぶのが面倒だといって同じスーツを何着もドレッサーに入れているような変わり者。
彼は物質転送装置を研究しておりまして。やっぱり自ら実験を行います。
前作では装置から出てきたときには蝿男だったわけですが、今回はゴールドブラム様、めっちゃ普通に出てきます。
転送によって体内の細胞が純化されたと思ってご機嫌です。
しかしそれは、体内に蝿の遺伝子が入りこんできたからなんですね。徐々に変化をはじめるゴールドブラムさまの肉体。
蝿になっていくわけです。
体が崩れていく。精神が溶けていく。自分は蝿になる。きゃあああああ。
科学者ゴールドブラムさまは、人間と蝿男を転送機にかけ、人間のＤＮＡを回復させようとします。
ここらはリメイク版独自の設定です。
ゴールドブラムさまは自分の彼女デービスさまと自分を合成させようとします。
彼女と蝿男の運命はどうなってしまうのでしょうか。
すっげえハリボテっぽかった「蝿男の恐怖」ですが、やっぱりとんでもない勢いでＳＦＸが進歩しておりますから、こういう設定も可能になるわけですわな。
とにかくＳＦＸがよくできているし、ゴールドブラムさまも上手いです。
この映画は予想を越える大ヒット。第二弾の「ザ・フライ２」が製作されましたです。

# ポランスキーの吸血鬼

１９６６年アメリカ映画
監督　ロマン・ポランスキー
主演　ロマン・ポランスキー、シャロン・テート、ジャック・マクガウラン

えっと、この作品はホラーコメディのジャンルに入れられるとは思うのですが、素直にコメディとして評価されることが少ない作品です。
若い人にはわからないかもしれませんが、ある種特別な感慨にふけりながら見るって人がほとんどなのではないかな、と推測します。
えっと、シャロン・テートさま惨殺事件ってのがありまして。
シャロン・テートさまってのは、この映画の主演女優で、実生活ではロマン・ポランスキー監督の奥様だった人。
二人はこの映画の直後に結婚されました。
しかし、赤ちゃん誕生が近かったシャロン・テートさまが惨殺されます。
犯人はチャールズ・マンソンというカルト教団のリーダーでした。
ってことで、映画を見る人は「この映画はポランスキー監督がシャロン・テートさまという女優さんと競演した映画で、この映画のあと、彼女は惨殺される」ってことがわかっていて映画を見るわけで、その予備知識が逆に映画を楽しめなくさせてしまうってところがあります。
少なくとも私はそうでした。
コメディなんだけど、シャロン・テートさまやポランスキーさまが頑張れば頑張るほど、どんよりした気分になってしまいました。
内容のほうは、パロディ精神満載。
事件がなければ素晴らしいコメディ作品を作る監督になっていたかもしれませんね。
雪ふかいトランシルバニア地方。
教授と助手が吸血鬼退治の旅をしています。馬車に乗っていた教授、微動だにしない。
よく見ると凍っております。いきなりやってくれます。
二人は不気味な城にほど近いある村を訪れます。助手ポランスキーさまは村の娘テートさまが気になってしかたない。
しかしテートさまは城に住む吸血鬼の伯爵に目をつけられ、さらわれてしまいます。
で、二人はテートさまを救出に向かうわけです。
けっこう面白い作品に仕上がっていますが、やっぱり心底楽しめなかったです。
こういう事件の関係者の映画を見ると、見る側にも影響でちゃいますよね。
ポランスキー監督は事件のショックで、ちょっと撮る映画の傾向が変わってしまいます。
血みどろ古典映画「マクベス」だとか、悪魔を扱った作品「ローズマリーの赤ちゃん」など、
ちょっと見ていて辛い映画を撮り続けることになります。
最近の監督の作品は見ておりませんが、どんな作風になっているのでしょうか。またチェックし

たいと思っております。

# ウッドストック・愛と平和と音楽の三日間

１９７０年アメリカ映画
監督　マイケル・ウォドレー
出演　ジョー・コッカー、ザ・フー、サンタナ、クロスビー・スティルス・アンド・ナッシュ、ジミ・ヘンドリックス、スライ・アンド・ザ・ファミリー・ストーン、ジャニス・ジョプリン

１９６０年代の後半から１９７０年代にかけてっていう時代は、音楽が最も力を持っていた時代なんじゃないかと思います。
ミュージシャンも観客も、音楽で何かが変わると思っていた時期です。
結果から考えると、変わった部分と変わらなかった部分とがあると考えるべきなんでしょうが、例え変わらないにしても、「変わるんじゃないか」と信じさせてくれるだけの力があったような気がします。
残念ながら私はその時代の音楽というものをリアルタイムでは聴いていないですが、そんな時代の熱さを存分に感じさせてくれる作品がこの「ウッドストック」です。
１９６９年８月１５日から１７日にかけてアメリカ・ウッドストックの郊外で開催された史上空前規模のロックコンサートの模様を記録したドキュメンタリー作品でございます。
死者三人、病人五千人、出産二件、聴衆は３０万人とも４０万人いわれています。
出演者のほとんどがノーギャラ。
上記のアーティストのほかにも、ジョーン・バエズ、アーロ・ガスリー、クリーデンス・クリアウォーター、グレイトフル・デッド、ジェファーソン・エアプレイン、ザ・バンド、ブラッド・スエット・アンド・ティアーズ、テン・イヤーズ・アフターなんかが出演しました。
私のお気に入りパートはやっぱテン・イヤーズ・アフターとスライ・アンド・ザ・ファミリーストーンのパートざんす。
あと、出演が予定されていたのに公演直前に解散した第一期ジェフ・ベック・グループの代打として急遽参加が決定したといわれているサンタナの演奏も素晴らしいです。
ジョー・コッカーもとんでもなく良いですね。
そしてジミ・ヘンドリックス。ロックのかっこよさと素晴らしさを体現したギタリストですよね。
この人のパートもとても素晴らしいと思いますです。

# ハムナプトラ

１９９９年アメリカ映画
監督　スティーブン・ソマーズ
出演　ブレンダン・フレイザー、レイチェル・ワイズ、ジョン・ハンナ

ＵＳＪの期間限定アトラクションとして人気のシリーズの第一作。
フレイザーさまは冒険家でございます。
砂漠に埋もれた財宝を探しにエジプトにやってきました。エジプトを研究している学者のワイズさまもやってきまして、科学者チームは秘密の呪文が書かれた古文書を発見、ワイズ先生、その古文書を声をだして読んでしまったがために、３０００年前に封印されたミイラが蘇ってしまいます。
いぐわあああ。
ハムナプトラなんてアクションＳＦＸアドベンチャー風のタイトルですが、原題はマミー（＝ミイラ男ですな）ですから、描写はけっこうエグイです。
でもホラーだと位置づけたらちょっと物足りない。
でも普通のアドベンチャーだと思って見たらちょっとグロいし。
なんだか微妙な作品です。
作品そのものはＳＦＸ大作ノリなので、もう少しグログログチョグチョの描写を減らしたらもっといい感じに仕上がったと思うのですが。
ちょっと残念。だってミイラ男の復活の過程なんか、グチョグチョホラーの「ヘルレイザー」を思い出させるような感じだったもんで。
グロっぽい画面が苦手な人にはお勧めしにくい作品でございます。

# 愛と青春の旅立ち

１９８２年アメリカ映画
監督　テイラー・ハックフォード
出演　リチャード・ギア、デブラ・ウインガー、ルイス・ゴセット・ジュニア

もうねえ、タイトル打ち込んだだけでぎゃあああああって感じになります。
リチャード・ギアさま苦手なんですわ。なんかむっちゃええ男でしょ。
なんか男前が鼻についてムカツク。トム・クルーズなんかもたいがいムカツいてたんです。昔は。
でもトム・クルーズは「ザ・ファーム」とか「ア・フュー・グッドメン」「７月４日に生まれて」あたりで評価が変わって、「ミッション・インポッシブル」あたりで好きな男優さんになっちゃいましたが、リチャード・ギアとかヒュー・グラントとかは相変わらずめっちゃ苦手。
恋愛映画以外で私がハマるような作品がないからかなあ。
リチャード・ギアさまはアンディ・ガルシアさまと競演した悪徳警官の役がちょっとよかったですが、もひとつヒットしなかったしなあ。代表作が「愛と青春の旅立ち」と「プリティ・ウーマン」ときたら、もうあきません。苦手意識が先にたちます。
とはいえ本作「愛と青春の旅立ち」は、私が苦手な「恋愛映画」ではないんですが。
どっちかっていうと、青春根性もの。
でも最後がメッチャラブストーリーの終わりかたするんで、そっとしとこうと思ってあまり関わりあいにならなかった作品です。
ギアさまはまあ言えば社会のおちこぼれ者なわけですね。
そんな彼が一念発起して、士官学校に入ります。
彼の精神と肉体を鍛え上げるのがルイス・ゴセット・ジュニアさま扮する鬼軍曹ですわな。
もう、ほんまにめっちゃしごかれます。
全人格を否定するかのような罵声を浴び、それでもくじけずに頑張り続ける。
こんな画像を見せられたら、「ギア様素敵…」ってみんな思うんだろうなあ。
彼は紆余曲折を経て、士官となるわけです。
士官になった瞬間に、軍隊ではゴセット・ジュニア軍曹より階級が上になるわけでして。
鬼軍曹がギアに対して最敬礼し、敬語で話すラストシーンがなんか泣かせます。
「自分は下士官であります、サー」みたいな感じで。でも、全然いやらしくならずに、むしろ男と男ってかっこいいなあみたいな仕上がりになってます。
ここらがハックフォード監督、巧いですよね。ピーター・ハイアムズ監督の初期の作品みたいな清々しさでございます。
ここで終われば好きな世界なんだけど。
ギア様、士官の制服を着たまま彼女を迎えに行きます。
これがあかんちゅうねん。シンデレラやないっちゅうねん。

恋愛ものとしてはこのラストは必然なんだろうけどな。ちょっとひいてしまいましたです。

# コマンドー

１９８５年アメリカ映画
監督　マーク・Ｌ・レスター
出演　アーノルド・シュワルツェネッガー、レイ・ドーン・チョン、アリッサ・ミラノ、ジェームス・オルソン

「ターミネーター」で注目を浴びたアーノルド・シュワルツェネッガーさまが、みんなが主役級スターとして認めることになったのはこのあたりの作品だったのではないでしょうか。
シュワルツェネッガーさまとシルベスター・スタローンさまの肉体派スター二人。
彼らは何かにつけ比較されてきたように思います。最初に注目されたのは「コナン」シリーズと「ロッキー」シリーズ。
刑事ものだと「ゴリラ」と「コブラ」。
で、特殊部隊ものだとこの「コマンドー」と「ランボー」でございます。
私はスタローンさまよりシュワルツェネッガーさまのほうが好きでござんす。
でもこの作品の時点では明らかにスタローンさまのほうがリードしていた感じでしたね。
米軍の元特殊部隊の隊長がシュワルツェネッガーさまです。彼の娘がテロ組織に誘拐されます。
テロ集団の狙いは隊長の能力。テロ集団のリーダーはある国での政治闘争に敗れた高級軍人。彼はその国の大統領を暗殺して、政治権力を握ろうと考えます。
で、その暗殺者として選ばれたのが大統領の信任の厚いシュワ隊長なわけですな。
娘を人質にとられたシュワさまですが、やはり只者ではない。
暗殺場所に向かう飛行機内で監視役の男を片付け、飛行機から脱出。えらいことしはりますわ。
シュワ様、その飛行機が着陸するまでの間にテロ集団を壊滅させようとするわけです。
「んなアホな」、みたいな状況を見事に打破してしまうところはやっぱりスーパーコマンドーシュワさまでございます。
後半の暴れっぷりは圧巻。
やっぱり見ていてスッキリします。しかし一人で百人以上の軍隊全滅させたらあかんやろ。
この映画でのシュワさまの大活躍は、後に「ホットショット２」でパロディにされます。
それにしても、このコマンドーさんとランボーさんが戦ったらどっちが勝つんだろう。
そんな夢の対決、見てみたいような気がしますね。

# 風と共に去りぬ

１９３９年アメリカ映画
監督　ビクター・フレミング
出演　ヴィヴィアン・リー、クラーク・ゲーブル、レスリー・ハワード

誰もが知っている映画史に残る名作中の名作。
いまだにこの作品を人生最高の映画としておられる人も多いのではないでしょうか。
マーガレット・ミッチェル女史の傑作小説を製作者のデヴィッド・Ｏ・セルズニックさまが巨費を投じて映画化した作品。
主人公のスカーレット・オハラを演じたヴィヴィアン・リーさまはかのアトランタ炎上シーンの撮影直前にキャスティングが決定して撮影に合流しただとか、ビクター・フレミング監督に落ち着くまではメガホンをとる監督さえもが二転三転しただとか、映画をとりまくエピソードにも事欠かない大作です。
物語の舞台は１８６１年。南北戦争開戦直前のジョージア州。
スカーレット・オハラ＝リーさまは、いとこと結婚したアシュレー＝ハワードさまのことを愛しております。
やがてしのびよる戦争の影。戦火に包まれるアトランタの町。炎に包まれ、絶体絶命のスカーレットを救ったのは、レット・バトラー＝ゲーブルさま。
いぐわあああ。
燃えさかる町を背に走る馬車。映画史に燦然と輝くスペクタクルシーンでござんす。
その後、バトラーの求婚を受け入れ、彼と結婚するオハラ。
しかし運命はさらに過酷な試練をオハラに与えようとするわけです。いぐわあああ。
そして流れる主題曲「タラのテーマ」。
「Ｔｏｍｏｒｒｏｗ　ｉｓ　ａｎｏｔｈｅｒ　ｄａｙ」という映画史に残る名セリフを生んだのもこの映画でございます。
とにかくとにかく、見て損はないというか、見ておいたほうがいいというか、見て損はないというか。
そういう作品でございます。

# デッドゾーン

１９８３年アメリカ映画
監督　デビッド・クローネンバーグ
出演　クリストファー・ウオーケン、トム・スケリット

原作はスティーブン・キングさま。
監督はデビッド・クローネンバーグさま。
主演はクリストファー・ウォーケンさまでございます。
原作はさておき、微妙な監督さんが微妙な主演俳優使って撮った作品ですよね。
クローネンバーグ監督は、あまり嫌いじゃないんですが、作品に当たり外れがあるって印象があります。
「ヴィデオドローム」はすっごくよかったけど、「ザ・フライ」はかなり微妙だったし、「ミディアン」はクローネンバーグ監督だろうと思って観たら実はクライブ・バーカー監督作品だったし。
ま、いいか。
この作品はホラーというより超能力もの。
「フューリー」とか「炎の少女チャーリー」とかと同じ系列です。
生死をさまようほどの事故にあった主人公ウォーケンさま。彼はそのせいで、不思議な力を持つようになります。
握手したり体が触れ合ったりすると、その人の未来が見えてしまうわけです。
さまざまな人のさまざまな未来を予知するウォーケン。
やがて「彼」の感じる未来は定まった未来ではなく、変えることのできる未来なんだってことがわかってきます。
で、そんな彼がある日、議員さんに会うわけですね。
で、ふっと握手をする。その瞬間、見えてしまうわけです。ウォーケンは彼がやがて大統領になり、核爆弾のスイッチを押す男になることを予知してしまいます。
さてどうするどうなるアメリカの未来。
ここからはひたすらハードな展開になっていきます。
ここからの話が実は本題なんだけど。けっこう見応えのある作品に仕上がっておりまして、クローネンバーグ作品の中ではかなり「好き度」が高い作品でございます。

# 南極物語

１９８３年　フジテレビ・学研・蔵原プロ作品
監督　蔵原惟繕
出演　高倉　健、渡瀬恒彦、岡田英次、夏目雅子

ディズニーの制作でこの作品がリメイクされました。あまりにも有名なタロ・ジロの物語の映画化です。
小学校の教科書とかにも載っている話ですので、この話が実話だってことは皆様ご存知だろうと思います。
物語のおさらいです。高倉さま・渡瀬さまは南極調査隊のメンバーです。
南極では犬ぞりを使って移動とかをしているわけで、十数匹の犬たちが南極にいたわけですね。
調査隊は基地からの撤収を知らされます。
高倉さま・渡瀬さまはそのことを撤収作業のために南極にやってきた船の上で知らされます。
折りしも大陸に激しい吹雪がやってきます。残された犬たちを船まで連れてくる方法がない。
渡瀬さまは危険を承知でヘリを二回飛ばせてくれと懇願します。船長に無理だと言われた高倉、じゃあ一回だけでいいからヘリを飛ばせと言う。
助けることができないなら自分が行って犬たちを殺してくると言います。
しかしこの申し出も却下され、犬たちは鎖につながれたまま、南極にとり残されることになります。
やがて激しくなる吹雪。人間たちは帰ってこない。
犬たちは一匹、また一匹と首輪を抜け、南極の大地を走りはじめます。
ここからは南極の厳しい冬を生き抜く犬たちの描写と、犬たちを置き去りにして日本に帰ってきた高倉さま・渡瀬さまの苦悩とが並行して描かれることになります。
まあほとんどの人が結末をご存知でしょうから続けますが、鎖を抜けた犬たちも一匹、また一匹と大自然の前に力尽き、タロとジロの二匹の犬だけが生き延びることになるわけです。
やがて高倉さま・渡瀬さまが南極に戻ってきます。
そこに待っているのは、二人とタロ・ジロとの再会というドラマだったわけですな。
あるハリウッドスターが、子供と動物には勝てないなんて言っておられたそうですが、全くその通り。
犬たちの名演技がやたらと目立ったような気がするのは私だけでしょうか。
しかしなんだかんだいいながらも、良い映画には違いないです。
熱くて暖かい涙を期待しておられる人にはうってつけの作品かと思いますです。

# バックドラフト

１９９１年　アメリカ映画
監督　ロン・ハワード
出演　カート・ラッセル、ウイリアム・ボールドウィン、ロバート・デ・ニーロ

ユニバーサル・スタジオ・ジャパンのアトラクションにも取り上げられているパニックアクションの秀作でございます。
けっこう引き込まれる内容の作品。
主人公はボールドウィンです。彼は新米消防士。
彼の父は仕事中に殉職した消防士でございます。彼が配属された隊は、偏屈ものの兄が指揮をとる隊でございました。
二人は何かにつけ反目しあいます。隊には父の元部下って人がいたりするわけですな。
そんな彼らが働く消防署管内で、放火事件が頻発します。
強烈な爆発を伴う引火「バックドラフト」を故意に発生させているかのような放火事件なわけです。
火災調査官がデ・ニーロさま。今回のデ・ニーロさまはもう一つ強烈な輝きを発しているわけではありませんですなあ。
デ・ニーロさまファンの私としては、もうちょっとがんばって欲しかったような気がしますね。
この調査の結果で頻発する火災はやはり放火であると断定されます。
反目しあう兄弟は、やがて真実にたどりつき、連続放火事件の意外な犯人が明らかになります。
そこで二人がとる行動とは…　みたいな作品。
ラストはちょっとブルー入りました。
私としては、もっとハリウッド的な、ハッピーエンドを期待していたのですが、ちょっとキツい終わりかたしてしまいましたね。
それでも最後に「希望」をつなぐような描写で締めくくったあたりはさすがアメリカ映画だなあって思いました。
バックドラフトってのは、気密性の高い部屋で火災が起きたときに起こる現象らしいですね。
火はくすぶっているんだけど、酸素が不足して火が燃え上がらない状態が続いていて、そこに空気（酸素ですわな）が流れこんで、炎が爆発を伴って広がる、ってえ現象らしいです。
怖いなあ。皆様、くれぐれも火の用心でございますよ。

# キャシャーン

２００４年「キャシャーン・パートナーズ」作品
監督　紀里谷　和明
主演　伊勢谷　友介、麻生久美子、唐沢寿明

「たった一つの命を捨てて、生まれ変わった不死身の身体。鉄の悪魔を叩いて砕く、キャシャーンがやらねば誰がやる」懐かしいですね。
大人気だったアニメ「新造人間キャシャーン」の実写映画化でございます。
始まってしばらくは「ん？キャシャーンってこんな物語やっけ？」などと思いながら見ておりましたが。
近未来。戦争が続いています。地球上では疫病、公害病、戦争が原因のウイルス疾患や放射能疾患などが人類を脅かしております。
科学者寺尾さまは、病に冒された妻の命を救うため、自己修復する人口細胞、「新造細胞」を開発します。
軍部はこの細胞の軍事利用を考えます。
研究は進む。ある日、研究所に訃報が入ります。科学者寺尾さまの息子（伊勢谷さま）が戦死したとの連絡でございます。
伊勢谷さまの遺体が研究所に届けられたまさにその日、研究中の新造細胞が暴走し、大量の「新造人間」（唐沢さま・要潤さま・宮迫博之さま）が発生します。
軍部は「新造人間」鎮圧をはかります。
生き残った「新造人間」たちは町を離れ、廃棄された軍事基地を拠点に、大量のロボット兵を擁する軍団を作りあげます。
一方の寺尾さまは息子の遺体を新造細胞の培養液に浸し、その結果息子は新造人間となるわけです。
だから映画の予告編の「たった一つの命を捨てて、生まれかわった不死身の身体…（って伊勢谷さまのナレーションが入った予告編があったんですが…）」のフレーズは映画に限って考えればちょっと違いますよね。
戦死した息子を、父が新造人間にしたわけであって、アニメのように自らすすんで新造人間になる手術をうけたわけではないです。
さてさて、新造人間になった伊勢谷さま。
めっちゃ強い。ここからはけっこうノンストップアクションみたいな感じで物語が進んでいきます。
監督の紀里谷和明さまは、宇多田ヒカルさまのプロモビデオなんかを撮っておられた人で、この映画が初メガホンだそうです。
アニメ的な場面の組み立てはさすがって感じですね。
けっこう楽しく見ることができました。

ただ、うむむ。少なくとも、私が知っている「キャシャーン」とはちょっと違ったなあ。やっぱり。
テーマ曲、ええ感じで泣きそうになりました。やっぱりセンチな気分のときにこういう系の歌は胸にひびきますなあ。

# レインマン

１９８８年アメリカ映画
監督　バリー・レビンソン
主演　ダスティン・ホフマン、トム・クルーズ

ダスティン・ホフマンさまとトム・クルーズさまの主演によるヒューマンなロードムービーです。
学生時代の無茶な行動がもとで父親と断絶状態だったクルーズさま。彼は中古車販売会社の社長をしていますが、とんでもない経営危機で、会社は倒産寸前。
そんな彼のもとに父親が亡くなったという知らせが入ります。遺産目当てで父の葬儀に出向いたクルーズさまですが、父の遺言で自分にはほとんど遺産が残されていないことを知らされます。
遺産を相続するのは、その日はじめて存在を知らされた自分の兄、ホフマンさま。
彼は自閉症で、他人と交渉する能力に問題があるかわりに、驚異的な記憶力を持っています。
クルーズさまは障害者施設に入所していた兄を誘拐同然に連れ出し、会社のあるロサンゼルスに戻って兄の後見人訴訟を起こして遺産を手に入れようと考えます。
しかしホフマンさまはロスに向かう飛行機に搭乗することを断固として拒否。
止むなく二人は飛行機で行くと三時間の距離を三日かけて車で移動することになります。
この旅のなかで、クルーズさまは兄との交流を通して、自分が忘れていたいろいろなことに気がつくわけですな。
ええ話や。
しかしながらやっぱり小物のクルーズさま、ホフマンさまの記憶力を利用してカジノで儲けようと考えます。
うむむ。このへんは少しギスギスしてて嫌ですね。まあドラマの展開上、必要だから仕方ないけど。
さてさてどうなることやら。
ダスティン・ホフマンさまがとにかく巧いです。やっぱりこの人はいい役者さんですね。
って今さらのように書くなっちゅうねんって感じですが。
トム・クルーズさまもかなりいいです。
我儘・傲慢と優しさ・思いやりが交互に現れる微妙な感情を見事に表現しています。
よろしいなあ、男前は。何やってもサマになりますからね。

# ナバロンの要塞

１９６１年アメリカ映画
監督　Ｊ・リー・トンプソン
主演　グレゴリー・ペック、デビッド・ニーブン、アンソニー・クイン

ここから戦争映画特集でございます。
今日は懐かしの傑作「ナバロンの要塞」でございます。
１９６１年の作品だから、私が生まれるよりもまだ前の作品ですね。でもすっごく面白い作品でございます。
原作はアステア・マクリーンさま。
戦争冒険小説といえばこの人でございますね。グレゴリー・ペックさま若い。「ローマの休日」だとか「白鯨」とかに出てましたなあ。「オーメン」にも出てたなあ。
ご自身が出演された「恐怖の岬」のリメイク「ケープ・フィアー」に特別出演されていた姿を見かけて、「めっちゃ年とったなあ」とか思いましたねえ。
そら年もとるわいな。
舞台は第二次世界大戦中。ナバロン島にドイツ軍が要塞を建造します。
絵に描いたような難攻不落の要塞。まあ難攻不落だから要塞って言うんだろうけど。
連合軍は登山家のペック、爆発物のプロのニーブンらのチームを編成し、この要塞を爆破しようとします。
まあ言うたら特攻スパイ大作戦ってところですわな。でもね、やっぱり簡単にはいかない。
チームの中に裏切り者がいるようだってことがわかってくるわけですね。さあさどうなる。
かなり原作に手を加えたようですが、それが実にうまくいっております。
主要キャラの描きわけもしっかりしてて感情移入もしやすいし。
クライマックスもなかなか盛り上がります。えっと、ネタバレにならない程度に書きますが、爆破屋のニーブン、かなり巧妙な爆弾を仕掛けるわけですね。その仕掛けは平常時には作動しないけれど、要塞が臨戦体制に入れば作動する爆弾の仕掛けなわけで、この描写を見たときめっちゃびっくりした記憶があります。
とにかく最初から最後まで気が抜けず、楽しませてくれる一編です。

# ナバロンの嵐

１９７８年アメリカ映画
監督　ガイ・ハミルトン
主演　ロバート・ショー、エドワード・フォックス、ハリソン･フォード、バーバラ・バック、リチャード・キール

戦争映画特集でございます。
原題は「ナバロンからの第十部隊」って感じでしょうか。
だから前作で爆破された「ナバロンの要塞」は当然本編には出てきません。
というか、映画の冒頭にダイジェストっぽく、ちょこっとだけ出てくるんですが。
前作、要塞を爆破して、無事帰還した二人の男。彼らの表情がアップになる。
すると、グレゴリー・ペックさまとデビッド・ニーブンさまじゃなくて、ロバート・ショーさまとエドワード・フォックスさまになっております。
おお、すげえいい感じで物語がシフトしますなあ。ロバート・ショーってめっちゃ好きな俳優さんでございましてね。
それだけで高ポイントなのに、エドワード・フォックスさままで出ているではありませんか。
「ジャッカルの日」からこの映画まで、何してたんでしょうか。この人。
「人形の家」とかに出ていたくらいしか記憶にありませんが。
さて、ショーさまとフォックスさまは再び極秘任務に召集されます。
今度の作戦は、ドイツ軍に包囲された味方を助けるために、ネレトバの橋を破壊するってものです。
チームは橋の上流にあるダムを爆破・決壊させ、その水流によって橋を破壊しようとしますが…
前作を知っているだけに、やはりクライマックスでは前作に近い劇的シーンを期待してしまいます。
そういう意味ではほとんどの人が「作戦が失敗することはありえない」と思いながら見ていただろうと思います。
そういう意味では、続編って設定はやはり難しかったのでしょうか。
前作がとにかく評価が高かっただけに、かなり苦戦しているように感じてしまいました。
口の悪い友人が、「続編ものでは、『ポセイドンアドベンチャー２』と『ナバロンの嵐』は同じくらいイケてない」と言っておりましたが…
いいえて妙かも。

# グッド・モーニング・ベトナム

１９８７年アメリカ映画
監督　バリー・レビンソン
主演　ロビン・ウィリアムズ、フォレスト・ウィテカー

今日はちょっと変わった戦争映画。ロビン・ウィリアムズさまがとにかくいいですね。
圧倒的なトークの才能というか、言葉のリズム感というか、そういう「芸の素晴らしさ」がビシバシ伝わってまいります。
とにかくすごいの一言。映画を見ながら、自分がまるで彼の放送を聞く米兵になって、その場を楽しんでいるような気分にさえなりました。
って書くとオーバーかもしれないけど、それくらい集中させてくれる話芸です。びっくりしました。
舞台はベトナム。
戦線は膠着気味。
低下を続ける兵士たちの士気を高揚させるために、米軍放送の人気ＤＪのウィリアムズさまがベトナムに派遣されてまいります。
記念すべき第一回放送。いきなりやってくれます。
「グッド・モーニング・ベトナム」この第一声がとんでもない。すごいって思わせる、この一声は「芸」の域です。
まったりもっちゃりのクラシック音楽ばっかりを流していた米軍ベトナム放送ですが、そんなところでいきなりローリング・ストーンズなんか流すわけですからね。
そらえらいさんはひっくり返りますわな。
兵士たちからは大人気のウィリアムズさまですが、軍のえらいさんはそうは思っていないわけで、ここらの構造は現代の企業なんかと同じ構造なのかもしれませんね。
哀れウィリアムズさま、えらいさんの怒りを買って、彼の放送は中止に追い込まれてしまいます。
上層部から放送内容を批判され、落ち込むウィリアムズさまが、兵士とのコミュニケーションのなかで何かをつかむ、みたいな場面がありまして、そこの兵士たちとウィリアムズさまとのかけあいのシーンも実に素晴らしかったですね。
「字幕なしで映画を楽しめるようになりたい」って真剣に思わせてくれた映画の一本であり、この作品は私にとって大事な映画でもあります。

# ７月４日に生まれて

１９８９年アメリカ映画
監督　オリバー・ストーン
主演　トム・クルーズ、ブライアン・ラーキン、レイモンド・Ｊ・バリー

自らもベトナムに従軍し、負傷した経験をもっているオリバー・ストーン監督。
監督のベトナム三部作のなかの一編です。
第一作「プラトーン」では戦闘行為そのものの悲惨さと、味方同士で傷つけあい殺しあう異常さを描きました。
第三作の「天と地」ではベトナム女性の側からの戦争を描いておりましたね。
この作品では、一人の男の戦争後の生きざまを描きます。
７月４日の独立記念日に生まれた主人公（クルーズさま）。
彼は国のために働くために生まれてきたと信じ、海兵隊に志願してベトナムに派遣されます。
で、やっぱりベトナムは地獄だったわけですな。
民間人の女子どもを虐殺したり、仲間を間違って撃ったり。そして彼は自らも半身不随となる重傷を負って帰国します。
英雄として帰国した彼ですが、やがて世間の「ベトナム戦争」に対する評価がかわってくるにつれて、彼は批判される立場に立たされます。
そうなるとベトナム帰還兵に対する国の扱いが、手のひらを返したように冷たくなるわけでございまして、そんなこんなが積み重なってクルーズさまは「国と戦う」決心をすることになります。
トム・クルーズさまが素晴らしいです。
前半の「輝かしい未来にむかってつき進む青年」から、「戦争によって人生を奪われたあんちゃん」までを、堂々と演じます。
当然、きったねえ格好とかもするわけでございまして、あの男前があえてそういう役に挑戦するってのがとてもポイントが高かったことをよく覚えております。
「トップ・ガン」でブレイクして、この作品に出会うまでは、「カクテル」だとか「デイズ・オブ・サンダー」だとかの、男前のスターだったら誰でもいいような作品に続けて出演されておられましたが、この作品以降は、「ザ・ファーム」だとか「ア・フュー・グッドメン」だとかの演技をしっかり見せる作品にも続けて出演されました。
そういう意味ではトム・クルーズさまにとっては転機ともなる大事な作品なのではないだろうかと思います。

# シンドラーのリスト

１９９３年アメリカ映画
監督　スティーブン・スピルバーグ
主演　リーアム・ニーソン、ベン・キングスレー、レイフ・ファインズ

今回も戦争を題材にした人間ドラマです。
第二次世界大戦時のナチス・ドイツのユダヤ人虐殺を題材にしたスピルバーグ監督の感動巨編です。
大戦中のポーランド。実業家シンドラー＝ニーソンさまは、ユダヤ人を労働力に使い、軍需産業で儲けております。
そんな彼がナチスのユダヤ人虐殺を知ります。
最初は自分の工場の労働力確保のために躍起になって動き回っていたニーソンさまですが、自分の工場で受け入れることができなかったユダヤ人は虐殺されてしまうことを知り、一人でも多くのユダヤ人を工場に受け入れることによって彼らを助けようとします。
辺境の、ナチスの影響力が弱い土地に新たに軍需工場を借り受け、その工場近くに大人数の人々を移送するニーソンさま。
移送させる人のリストが「シンドラーのリスト」なわけですね。
どの名前をリストに入れて、どの名前をリストに載せないか。自分の作るリストによって、結果的に殺されてしまうかもしれない人がいる。
これでいいのだろうかという懐疑の気持ち。あと一人を助けられない自分の無力さを責める気持ち。
どれだけ頑張っても、苦悩は続くわけですね。やがて終戦のときがやってきます。
そして大感動のラストにつながっていくわけでございますな。
このラストは劇場で見ていて、涙が止まらなかったです。
ちょっとベタかもしれませんが、やはり真実が語るインパクトってものがあるわけでして。
ちょっと重い作品ですが、是非ごらんいただきたいなと思う作品です。

# 戦争のはらわた

１９７５年西ドイツ・イギリス映画
監督　サム・ペキンパー
主演　ジェームズ・コバーン、マクシミリアン・シェル

戦争を題材にした人間ドラマのご紹介を続けましょう。
今回は第二次世界大戦の末期の戦況をナチス・ドイツの側から描いた作品。
サム・ペキンパー監督の渾身の力作でございます。
時は１９４３年、場所はロシア戦線でございます。
もうこれだけでどんよりした内容の映画になるだろうなって空気ムンムンですよね。
明らかに敗色の濃いロシア戦線。そこにやってくるのが出世欲というか名誉欲というか、そんな欲望の塊のような士官、シェルさまでございます。
これまで戦線をささえてきた下士官たちには面白くないわけです。
この下士官がコバーンさまですな。当然二人はうまくいくわけないわけで、シェルさまは明らかに無謀な敵中突破をコバーンさまに命じます。
うわ、すげえ、って感じですね。
意地と意地のぶつかりあい。
戦って散って意地を貫き通す男の世界。
いぐわああ。
さすがペキンパー。
例によって詩的にさえ感じられるバイオレンス描写はさすがでございます。
クライマックスが大好きなんです。この映画。
クライマックスというより、ラストの落とし方なんですが。
明らかに作品としては落としてないわけなんですね。
なんだかすっげえ中途半端なところでストンと物語が終ります。
それでも主人公たちがこれから先どうなっていくのかってところが実にうまく伝わってきます。
むっちゃ無骨な兵士役のコバーンさまと、元貴族で名誉欲にとりつかれたようなシェルさまがともに名演技を見せてくれています。
しかしこのタイトル、なんとかならなかったんでしょうか。
なんで「はらわた」やねん。同じようなタイトルの作品を思い出すと、「悪魔のはらわた」「死霊のはらわた」「天使のはらわた」「処女のはらわた」と、みごとにホラー系＋エロ系の作品が並んでしまいます。
邦題つけた人のセンス疑ってしまいます。

# 太陽の帝国

１９８７年アメリカ映画
監督　スティーブン・スピルバーグ
主演　なんとクリスチャン・ベール、ジョン・マルコビッチ

戦争を題材にした人間ドラマシリーズでございます。
スピルバーグ監督の心温まる系特撮系戦争映画です。
この説明の部分だけ見るとなんかごった煮みたいな感じもしますが、とってもまともな作品です。
戦争も特撮も、あくまで主人公の少年の成長を描く上でのツールみたいな扱いでございます。それだけにけっこう素直に見ることができますね。
第二次世界大戦下の中国・上海。
ジム少年＝ベイルさまは零戦に憧れる男の子でございます。そんな彼の住む町に日本軍が侵略（進出ではないですわな。このネタわかる人はもうけっこうオジサマオバサマでしょうね）してまいります。
ベイルさま、両親とはぐれて捕虜収容所に入ることになります。
彼はそこで日本人アメリカ人、いろいろな人々と交流して、彼は成長していくわけですな。
戦闘シーンとか、あるにはあるんだけど、やっぱり印象に残るのは日本人零戦パイロット（というか飛行機乗りって感じかなあ）との交流のシーンでありまして、なんか「戦争がなければ出会うことがなかったけれど、戦争がなければ友達同士になれたかもしれない人と人との物語」みたいな感傷的な気分にされてしまう作品でありますね。
少年時代の、後の「バットマン＝ジョン・コナー役者」、クリスチャン・ベールの姿が見られます。
さらに、髪がふさふさのころのジョン・マルコビッチさまも。それだけで見る価値のある作品かもしれません。
しかしスピルバーグ監督、演出巧いですよね。
わかっていても引き込まれてしまいます。
もう一度、欲を言えば二～三回じっくり見たいと思える映画ですよね。
こういう映画をドンドン紹介していかなきゃいけないんだろうけど、私、ホラーやアクションみたいな、あまり頭を使わない映画好きだからね～

# ディア・ハンター

１９７８年アメリカ映画
監督　マイケル・チミノ
主演　ロバート・デ・ニーロ、クリストファー・ウォーケン

戦争を題材にした人間ドラマシリーズでございます。
えっと。ベトナム戦争がアメリカに対しておとした影ってのは半端なスケールではなかったわけでございます。
それだけに実に多くの監督さんがベトナム戦争を描いています。
「地獄の黙示録」をはじめ、「プラトーン」「７月４日に生まれて」「天と地」「ハンバーガーヒル」、変わったところでは「サイゴン」だとか「ジェイコブズラダー」なんかもベトナムを描いてますよね。
あの戦争の狂気ってものを描くことが、ある意味社会派映画人の使命みたいになっていた時期さえあるような気がします。
それだけに名作秀作が多い題材でございます。
この作品もベトナムで人生が狂ってしまった青年たちを描いています。
デ・ニーロさま、ウォーケンさまらは親友でございます。
彼らの趣味は鹿狩り。だから「ディア・ハンター」。わかりやすい。
けっこうアウトドア派の青春でございますなあ。
そんな彼らがベトナムに派遣されるわけですね。
前半の青春映画っぽい映像と、中盤のベトナムを描く落差が大きく、それがすんげえいい感じの効果を出すことに成功しております。
彼らが派遣されたベトナムはやっぱり地獄でございました。
主人公たちはベトコンに囚われ、彼らの前でロシアンルーレットを強要されます。
辛くも生き延びるわけですが、仲間の一人がこの一件によって精神が破壊されるわけです。
そのメンバーはベトコンの基地から脱出するときに行方不明になってしまいます。
数年後、アメリカに戻ったメンバーたちは彼の噂を聞きつけます。
おかしくなっちゃった彼は「見世物ロシアンルーレット」のプレイヤーとなっていました。
仲間の目の前で彼のゲームが始まります。そしてそして結末は…
あまりにも衝撃的なラストです。って書いてしまったらどうなるかバレバレです。
これもベトナムの狂気が生んだ秀逸な物語でございます。

# フルメタル・ジャケット

１９８７年アメリカ映画
監督　スタンリー・キューブリック
主演　マシュー・モディン、アダム・ボールドウィン、ヴィンセント・ドノフリオ

戦争を題材にした人間ドラマシリーズの最終回でございます。
最後を締めくくるのはやっぱりベトナム戦争ものです。
巨匠、今な亡きスタンリー・キューブリックが「シャイニング」以来久々にメガホンをとった作品でございます。
ではあるんだけど、この作品は私的にはあんまり評価が高くないです。
まあ、普通の戦争映画を撮るような監督さんでもないんですが。
海兵隊として厳しい訓練を受け、兵士としてベトナムに派遣される青年たちを描きます。
ってよくある話じゃないの。よくある話ではありますが、さすがキューブリック。
普通の描き方じゃありませんです。
とりあえず、映画は二部構成だと思ってくださいませ。
海兵隊でのとんでもなく厳しい訓練の様子を描くのが前半部。
物語がベトナムの戦場にシフトするのが後半部。
申し訳ないですが、後半部の描写はもひとつです。
ベトナムそのものを題材にした作品って多いし、この作品よりもリアルで強烈な作品はいくらでもあったんじゃないかな、って思ってしまいます。
後半部はすんごく印象が薄い。
っていうのは、前半部があまりにも強烈だからなんですね。
何がどう強烈なのかってことはここではあえて触れないですが、もう、悪い夢を見そうな勢いで強烈な場面が前半のハイライトになります。
作品タイトルになった「フルメタル・ジャケット」ってのは、ベトナム戦争中に兵士たちが使っていたライフルに装填する「完全被甲弾」のことらしいです。
どうやらすごく強烈な弾丸なんでしょうな。
この「フルメタル・ジャケット」って名前は、前半部に実際にセリフとして出てきます。
はっきりと「Ｆｕｌｌ　Ｍｅｔａｌ　Ｊａｋｅｔ」なんて言われると、もう映画を見終わったような気分になるのは気のせいでしょうか。
それともキューブリック監督も前半部を見せたかったんでしょうか。
次回からはウェスタンをとりあげましょうね。

# ヤング・ガン

１９８８年アメリカ映画
監督　クリストファー・ケイン
主演　エミリオ・エステベス、チャーリー・シーン、キーファー・サザーランド、ルー・ダイヤモンド・フィリップス

ウェスタンでございます。かなり最近のウェスタンですよね。
ウェスタン映画は、一時期隆盛を極めておりましたが、アメリカンニューシネマの代表的傑作の「明日に向かって撃て」が公開されたころ、「西部劇にとっての幸せな時代」が終わってしまったような気がします。
そこからは西部劇らしい西部劇ってあまり印象に残っておりませんね。
そんな状況のなかで、ときどき突発的にウェスタンが製作されたりします。
この作品もけっこうそういう感じです。当時大人気の若手俳優さんたちが大挙出演しております。
エミリオ・エステベスさま＆チャーリー・シーンさまに、キーファー・サザーランドさまにルー・ダイヤモンド・フィリップスさま。
すげえすげえ。しかし基本的には私のようなオールド映画ファン（に入れてもらえるのでしょうか。微妙な時期の映画が好きだったりするんだけど）がイメージするような、ガンアクション主体の西部劇ではなく、開拓時代の西部を舞台にした青春活劇、みたいな仕上がりになっています。
牧場主に雇われた青年ビリー＝エステベスさま。
彼はそこで出会った若者たちとすっかり仲良くなります。しかしそんな幸せな時間は長くは続かないのでありまして、牧場主が殺されてしまうわけです。
エステベスさまはシーンさま、サザーランドさま、フィリップスさまら仲間とともに、復讐の旅に出かけるのでありました。
ビリー・ザ・キッドを描いた作品ですが、脇を固める若手の役者さんなんかのほうが輝いていたりします。
私的にはやっぱりサザーランドさまとフィリップスさまがとにかく印象に残りましたですね。
サザーランドさまは、「２４」の大成功で今や重鎮でございますよね。
ことこの人に関して言えば、テレビドラマ転向は大正解だったみたいですね。

# ヤング・ガン２

１９９０年アメリカ映画
監督　ジョフ・マーフィー
主演　エミリオ・エステベス、キーファー・サザーランド、ルー・ダイヤモンド・フィリップス、クリスチャン・スレイター、ウイリアム・ピーターセン、ジェームズ・コバーン

前作「ヤングガン」の続編でございます。そらそうやわな。２やねんから。
これまでかなりの数の続編ものの映画を見てきましたが、これは珍しく続編のほうが面白い作品です。
と、私は思っております。
私的には、２のほうが面白い作品っていろいろありまして、「エイリアン」とか「ミッション・インポッシブル」なんかがそうだったんですが、ここらあたりの作品は、１と２ではあえて作品観を変えています。
「ヤングガン」の場合、正当な続編としての構造を保ちながら、前作よりもずっと面白い作品に仕上がっております。
だからといって前作が面白くなかったわけではないです。
前作もけっこう面白かったけど、第二作はもっと面白くなっちゃったって感じですかね。
西部の開拓時代を生き抜いた老人がおりまして、その老人がビリー・ザ・キッドの物語を語るわけですな。
なんか「マッドマックス２」みたい。
こういう冒頭だと、このじいさんはビリー・ザ・キッド一味の誰かだろうなとわかってしまいますが。
物語は前作で盛り上がった「リンカーン郡の戦い」以降を描きます。
ビリー一派はすっかりお尋ね者。彼らを追うのはパット・ギャレット＝ピーターセンさま。
賞金首のビリー一派の命を狙う連中はやはり多いわけで、ビリーの仲間たちは一人また一人と命を落としていきます。
そしてそして、ついにビリー＝エステベスさまとギャレット＝ピーターセンさまの対決の時がやってきます。
とにかく物語に深みを与えているのは、ビリー一味ひとりひとりのキャラクター描写がしっかりされていることでしょうか。
その中でも、やっぱりサザーランドさまとフィリップスさまがいいところもっていっております。
エステベスさまはねえ、ちょっと中途半端ですよね。
前作ほどの若さパワーもないし、でもビリー・ザ・キッドのキャラからはみだすこともできないし。
ちょっとばかり難しい役どころでしたね。

サザーランドさまとフィリップスさまは「ヤングガン」二作での競演ですっかり仲良くなったようで、その後も「レネゲイズ」で競演。
かのスーパーテレビドラマ「２４」でも、第一シーズン後半で競演しております。
これはきっとこの映画での二人の競演があったから実現したものでしょうね。

# ウォーター・ワールド

１９９５年アメリカ映画
監督　ケビン・レイノルズ
主演　ケビン・コスナー、デニス・ホッパー、ジーン・トリプルホーン

アドベンチャー系のアクション映画でございます。
映画そのものよりも、ユニヴァーサル・スタジオ・ジャパンのシアター系アトラクションの元ネタとしてひたすら有名になってしまった作品です。
ＵＳＪには何度か行きまして、もちろんこのアトラクションも見ましたが、作品世界だけが残されている感じでした。
元ネタにケビン・コスナーさまだとかデニス・ホッパーさまだとかが出ていたことって、なんとなく忘れられちゃってるみたいですよね。
物語の舞台は近未来の世界。
地球温暖化の影響で極地の氷が解け、陸地のほとんどが水没してしまった世界のお話です。
人々は海上に浮かんだ都市で生活するとか、あるいは生活に必要な物資を船に積み込み、船上生活を送るとかしています。
そして人々は残り少ない陸地「ドライランド」を探して放浪しているわけです。
主人公のコスナーさまも船上生活者です。
彼には秘密があるわけですが、まあそれは物語中盤で明らかになるサプライズですので、ここでは明かしませんですよ。
で、海上都市生活者と対峙するホッパーさまら。
極悪非道な海賊でございます。これはこれですごくわかりやすい敵役として設定されておりますね。
もっともホッパーさま、物語後半から急に存在がクローズアップされる悪役でございました。
映画前半は、コスナーさまと海上都市生活者とのイザコザが中心に描かれます。
物語中盤からは、「憧れ」「資源の宝庫」としての象徴「ドライランド」に至る秘密をめぐっての攻防となります。
アクションも特撮も確かにすごい。
ＵＳＪの人気アトラクションになるだけあります。
しかしケビン・コスナーさま主演作品としてはいささか弱い。
コスナーさまの影もうすいように感じます。
言葉は悪いですが、「別にコスナーさまでなくてもいいんじゃない？」って感じですわな。
悪役もホッパーさまじゃなくてもいいみたいな感じ。
うむむ。コメントしにくい。
どうなんやろ。私の感想ってとんちんかんでしょうか？
皆様からのご意見お待ちしております。

# ジュマンジ

１９９５年アメリカ映画
監督　ジョー・ジョンストン
主演　ロビン・ウィリアムズ、ボニー・ハント、なんとキルスティン・ダンスト

アドベンチャー系ファンタジー系アクション映画でございます。
なんかねえ、すっげえ安心して見られる系のアドベンチャーアクションでございます。
一度始めたら決して途中でやめることのできないゲーム「ジュマンジ」。
やめることができないだけじゃなくて、盤に書かれたことが本当に起こってしまうというとんでもないゲーム。
ゲームはジャングルでの冒険をコンセプトにしたゲームだもんで、大都会に猿だとかサイだとか象だとかが闊歩する結果になるわけですな。
かなり気が弱く、学校生活でもトラブルを抱えている様子の主人公の少年。
仲良しの女の子と一緒に、たまたま見つけた「ジュマンジ」というゲームを始めてしまいます。
そいつが実は魔法のゲームだったわけですな。
男の子はゲーム盤の魔力でジャングルに飛ばされ、女の子は突然現れた蝙蝠の大群に追われて逃げ帰ります。
それから数十年の時が流れて…　少年の一家は行方不明になった息子のせいで破産して一家は離散。
ゲームが行われていた屋敷は家具ごと売りに出されています。
この空家に入ってきたのが両親と死別した幼い姉弟。
姉役はなんと後にスパイダーマンの彼女役となりますキルスティン・ダンストさまでございます。
二人は物置におかれた例のゲームを見つけだし、その「禁断のゲーム」を再開させてしまいます。
数十年間ジャングルをさまよっていた元・少年＝ウイリアムスさまが盤の指示で呼び戻されます。
で、三人はこのゲームは中断できないこと、そしてゲーム終了まで勝手に終わらせることができないことを知り、すっかりおばさんになってしまった元・少女を加えた四人で「ゲームを終わらせるために」ゲーム、「ジュマンジ」を続行することになるのですが…
ＳＦＸがとてもよくできています。ジャングルの動物たちが大都会を暴走するシーンなどは迫力満点。かなり堪能させていただきました。
ロビン・ウイリアムズさまはやっぱり巧いですねえ。
いかにも善人然としたスタンスがちょっと鼻について嫌いだった時期もあるわけですが、この映画ではとにかく達者なところを見せてくれています。
なかなかハラハラさせてくれて、楽しませてくれる一本です。

# ストリート・オブ・ファイヤー

１９８４年アメリカ映画
監督　ウォルター・ヒル
主演　マイケル・パレ、ダイアン・レイン、ウイレム・デフォー

ラブストーリー系アクション映画でございます。
ラブストーリーが苦手な私は、この映画のこと「風と共に去りぬ」みたいなめっちゃ恋愛映画だと思っておりまして、長い間見なかったです。
だってビデオジャケットがすんごい恋愛映画っぽいんだもん。
この作品をちゃんと知ったのは、劇団時代だったですね。ある舞台のＢＧＭで、この映画のクライマックスで流れる曲が使われてまして、「かっこええ曲やなあ、誰の曲かいなあ」って思って調べてみたらこの映画のサウンドトラックでございまして、あわてて観たらけっこう面白かったです。
やっぱり映画はちゃんとチェックしないとだめですよね。
ロックスターのレインさま。
彼女は地元の町でコンサートを開きます。ライブの最中にならず者グループが乱入し、あわれレインさまは拉致されてしまいます。
彼女の兄がレインさまの元彼に手紙を送り、帰ってくるのがパレさまでございます。
パレはならず者のアジトに、レインさまを救出すべく向かうわけでございます。
いぐわあああ。かっこええ。
ならず者のリーダーがデフォーさま。めっちゃ若い。そらそうやわな。
当時、デフォーさまは自分より若干年上だったわけですから、今ではおっちゃんでございます。
「スパイダーマン」で久々に姿をスクリーンで拝見しましたが…　ここから先は書かないほうがいいですかね。
ともあれ、この作品ではすっげえ印象的な悪役を演じておられました。
この作品が「プラトーン」につながったんでしょうね。
しかしながらこの作品での悪役がはまりすぎていたのも事実です。「プラトーン」でも何か悪いことしそうな気がしてしかたなかったです。
物語後半のペレさまとデフォーさまの格闘シーンが出色の出来ですね。
ラストのダイアン・レインさまのライブシーンもとてもようございます。
余韻を残すようなラストもよかったです。
とりあえず、ポスターやビデオジャケットで映画の好き嫌いを決めつけちゃいけませんですね。

# ハドソン・ホーク

１９９１年アメリカ映画
監督　マイケル・リーマン
主演　ブルース・ウィリス、ダニー・アイエロ、アンディ・マクダウエル、ジェームス・コバーン

アクション映画のご紹介が続いております。
この作品はねえ、まあアクションはアクションなんだけど、ちょっとすかした系のアクション映画でございます。
主人公のウィリスさまは、まあ怪盗なわけですな。
美術品だとか高級品ばかりを狙う系の泥棒さんです。
「この映画すげえ」って思ったのは、作品最初の盗みの場面なんですね。
いっしょに盗みに入った仲間とおち合う時間と場所を決める場面があったわけですが、じゃあ今日は「〇〇にしよう」って曲のタイトルを言うわけですね。
で、おもむろに二人は別れてそれぞれに（曲を口ずさみながら！）仕事をして、曲がフルコーラス終わったところで無事おちあうと。
そんな洒落た怪盗が活躍する映画でございます。
１０年の刑期を終えて、自由の身になった怪盗ハドソン・ホーク（＝ウィリスさま）。
彼は世界征服を狙う夫婦にだまされて、ダ・ヴィンチの隠された美術品を盗まされることになりますが…
「ダイ・ハード」でスターの座に踊り出たウィリスさまですが、この作品ではとってもお茶目な演技を見せてくれています。
まあね、「ダイ・ハード」のジョン・マクレーンも自分の身の上に起こった事件をボヤきながら戦うヒーローだったので、かなりおちゃめだったんだけど。
ただ、この映画ではウイリスはかなり楽しみながら演じていたようですね。
なんかすごく余裕のある表情を見せていたような気がします。
いいなあ。こんな作品に恵まれて。って思っていたらウィリスさまの楽しげな表情の理由がわかりました。
この作品ってウィリスさま自身が企画した作品らしいです。そら楽しいやろな。

# アウトブレイク

１９９５年アメリカ映画
監督　ウォルフガング・ピーターゼン
主演　ダスティン・ホフマン、レネ・ルッソ、モーガン・フリーマン

ここからパニック系アクション映画を続けてご紹介。
この映画って、かなり堅くて難しい物語なんじゃないかなって勝手に想像してました。
「ストリート・オブ・ファイヤー」みたいにビデオジャケットで判断してたんですね、この作品も。
なんかダスティン・ホフマンさまが、ウイルス防護服みたいな服を着ている写真がビデオジャケットになっておりましたが。「ウイルスからアメリカを守れ」みたいな、学術シミュレーション映画みたいな作品をイメージしておりました。
映画を見て、あまりの面白さにびっくりした記憶があります。
アフリカで、強烈な致死率をもつウイルスが広がりはじめます。感染し発症すると、体じゅうから出血して死ぬというウイルス。
このウイルスに「感染しているけど発症していない」サルがアメリカ国内に持ち込まれます。
このサルに噛まれた男がウイルスに感染し、この男からウイルスは次第に町じゅうに広がっていきます。
軍の研究所でウイルスを研究しているのがホフマンさまでございまして、彼はウイルスの封じ込めと感染者の隔離を行うために町に入ります。ウイルスは当初、唾液を含む体液の接触による感染しかしないと考えられていましたが、次第にウイルスは変異し、空気感染をはじめます。
ここらのサスペンスの盛り上げかたが実に巧いですね。
ウイルスの封じ込めと並行して、「なぜこの町でウイルスが流行したか」を調べるプロセスも描かれ、やがて「感染しているけど発症していない」サルの体内には、ワクチン製造に不可欠な抗体ができていることが明らかになります。
すげえすげえ。ごっついもりあがり。
やがて町に医療班として入ったホフマンさまの元カノのルッソさまがウイルスに感染してしまいます。
えらいこっちゃ。
果たしてサルは捕まるのでしょうか。
ワクチンは間に合うのでしょうか。
いぐわあああああ。
「ＭＩ２」だとか「２４・シーズンⅢ」は、かなりこの作品に影響を受けているように感じます。
とにかくリアルでよくできています。
「いい映画見た～」っていう、すっごく幸せな気分を味わうことのできる一本でございます。

# 大地震

１９７４年アメリカ映画
監督　マーク・ロブスン
主演　チャールトン・ヘストン、エヴァ・ガードナー、ジョージ・ケネディ、ジュヌヴィエーブ・ビジョルド

元祖パニック系アクション映画です。
私ってねえ、この映画が公開される前後から映画に興味をもちはじめたので、ここらへんの映画には思い入れがあったりしますが。
えっとね、パニック映画の元祖はやっぱりこの作品になると思いますね。
これ以前にも、「大空港」だとか「ポセイドン・アドベンチャー」みたいなパニック系の映画はあるにはありましたが、「パニック映画」というジャンルが設定されたのはおそらくこの映画が最初だったです。
というか、「パニック」って言葉が一般的になったのがこの映画の時期だったと記憶しております。
この映画以降、パニック映画ブームの流れを決定づけた「エアポート７５」だとか「ジャガーノート」、タイトルにパニックって言葉を埋め込んだ「サブウェイ・パニック」だとか「マシンガン・パニック」だとかの映画が公開されます。
ちなみに「サブウエイ・パニック」「ジャガーノート」はパニックものではなくてサスペンス。
「マシンガン・パニック」はハードボイルドの刑事ものです。
「エアポート７５」も乗客がパニックに陥ってああだこうだって場面はほとんどありませんでしたから、厳密にはパニック映画ではないでしょうね。
「ポセイドン・アドベンチャー」は極限状況でのサバイバルドラマだし、「大空港」も人間ドラマっぽいサスペンスだったから、人々がパニックに陥ってどうのこうのって映画の元祖はやっぱりこの「大地震」ってことになるかと思います。
物語は…ロサンゼルスで大地震が起きます。以上。
だって本当にそれだけなんだもん。
チャールトン・ヘストンさま演ずる主人公が、奥さんのガードナーさまと不仲で、彼女のビジョルドさまを助けたくて、とか。
治安維持のために出動した軍の部隊が暴徒化しつつある市民に発砲したりとか。
地震でダムが決壊してとか。
みたいな細かい話はいろいろありますが、基本的には地震のあとのどさくさをわわわって描いた感じです。
申し訳ないですが、私はかの阪神大震災を直接経験しておりますので、ちょっとリアリティに欠ける話だと思ってしまいました。
地震が起きてもね、そんなに自分のこと見失うものじゃないですよね、人間って。

そういう意味ではテレビドラマの「救命病棟２４時」の第二シーズンなんかのほうがよっぽどリアルに地震の後ってものを描いていたように感じました。
ちなみにこの作品、（当時の）新時代の音響システム「センサラウンド方式」って音響方式を使って上映されました。
でもこの作品以降、「センサラウンド方式」の作品は一～二本くらいしか公開されなかったみたいなので、これってどうやらダメダメシステムだったみたいですね。

# ブローン・アウェイ・復讐の序曲

１９９４年アメリカ映画
監督　スティーブン・ホプキンス
主演　ジェフ・ブリッジス、トミー・リー・ジョーンズ、スージー・エイミス

パニック系のアクション映画を続けてご紹介しております。
今日はなかなかスリリングで面白い一作。
爆破魔と爆発物処理班との息詰る戦いを描いたサスペンスアクション映画でございます。
爆破テロの首謀者として北アイルランドの刑務所に収監されていた「天才爆弾魔」ジョーンズさま。
彼は囚われの身でありながら爆弾を作り、牢を爆破して脱走します。
彼の行く先はアメリカ。
そのころ、爆発物処理班の隊員ブリッジスさまは爆弾事件を見事に処理し、ヒーローとしてまつりあげられます。
ちょうどその報道の直後から、まるで処理班の隊員を狙ったかのような爆弾事件が連続して起こります。
犯人はもちろんジョーンズさまでございます。彼のターゲットはブリッジスさま。
そもそも彼が投獄されたのは、同じＩＲＡの同志だったブリッジスさまが裏切ったためだったからなんですね。
ってことで、ジョーンズさまはブリッジスさまに復讐するためにあの手この手を使ってくるわけですな。
処理班を狙っていたジョーンズさまは、やがてブリッジスさまの身内を狙いはじめます。
ブリッジスさまの妻と娘が外出から帰ってくる。ガスコンロに火をつける、コンセントにコードを差し込む、ドライヤーを使う…
どこに爆弾が仕掛けられているかわからない恐怖感を盛り上げる好演出でございます。
この場面、なかなか好きです。
あと、クライマックスもすごい。
ブリッジスさまとジョーンズさまの最終対決のシーン。
ジョーンズさまの仕掛けで、ドミノ倒しのような仕掛けで爆弾が爆発します。
おおすげえすげえ。すっごく屈折した爆弾魔を、トミー・リー・ジョーンズさま、大熱演。すごく楽しめました。
惜しいのは、この作品が製作されたのが、たまたま「スピード」と同時期だったことでしょうか。
私的には「スピード」もこの作品も楽しめましたが、それにしても内容かぶりすぎ。
そうなると、明らかにヒットした「スピード」が基準になってしまうので、「スピード」に似た話って思われてしまいます。

けっこう面白い話だったんですが。残念。

# ポセイドン・アドベンチャー

１９７２年アメリカ映画
監督　ロナルド・ニーム
主演　ジーン・ハックマン、アーネスト・ボーグナイン、ロディ・マクドウォール、シェリー・ウインタース

パニック系のアクション映画をご紹介しております。
えっと。「大地震」のときにも書きましたが、ちょっとおさらい。
この映画が公開された７２年当時には、「パニック映画」というジャンルは存在しませんでした。
そもそも「パニック」って言葉からしてそんなに浸透していなかったんじゃないでしょうか。
ただ、この作品が７４年から７５年あたりに盛りがった「パニック映画ブーム」の火付け役になったであろうことは事実でございます。
舞台は超豪華客船ポセイドン号。
その船を、海底地震によって発生した津波が襲い、船は天地逆になった形に転覆します。
んなあほな。ボートやあらへんねんから。
ジーン・ハックマンさま（若い！）演ずる牧師は、船の内部の様子から、海面は船底の方向にあると判断し、ひたすら上へ上へ、船底へ船底へと移動します。
もちろん最初の転覆で生き残った人たち全員が船底へ向かったわけではなく、ほとんどの生存者は牧師の声に耳を傾けようとはせずにその場にとどまり、わずかな人数だけが上へと上がっていくことになるわけです。
しかし、やっぱり現実は厳しい。
大多数の乗客が残されたメインホールは浸水、水没。
船底に向かった人たちも、一人、また一人と、力尽きて減っていくわけですね。
果たして何人が生き残ることができるのでしょうか。
ハックマンさま、ボーグナインさま、ウインタースさまがすっごくいい芝居してくれます。
もうそれだけでこの作品見る値打ちありますね。
作品序盤でのジーン・ハックマンさまのセリフ、「神は自ら助くものを助く」ってのは名セリフとして有名です。
しかしこの言葉を言ってしまうと、映画の中でのハックマンさまみたいにすっげえ行動でその言葉を証明しなきゃいけないですよね。
おいそれとは語れないセリフでございますが、そういう人生送りたいなって思っております。

# 黒い家

１９９９年「黒い家」製作委員会作品
監督　森田芳光
主演　内野聖陽、大竹しのぶ、西村雅彦、小林 薫

「黒い家」。
角川書店さんの「日本ホラー小説大賞」出身、貴志祐介先生の大賞受賞作の映画化でございます。
貴志先生の作品としては、最近「このミステリーがすごい」で見事一位になった「悪の教典」が映画化されました。
これも見たいんですよね。
ただ、「黒い家」のほうは... だがしかし、って感じですね。
あまりにもアクの強い森田演出に押され、さらには大竹・西村の強烈な演技、内野のリアルな熱演のおかげもあって、原作を読んだときに感じた「恐怖感」を感じることができなかったです。
演出が個性的すぎて、また役者陣が素晴らしすぎて、原作がかすんじゃった感じです。
物語は、ある保険金詐欺事件を中心に進んでいきます。
内野さまは保険会社のクレーム係。
彼は「その家」に、どうでもいいような話で呼び出され、そこで首をつって死んでいる小学生を見つけます。
父親はあからさまに怪しい西村さま。
彼の妻が大竹さま。
その日から西村さまは保険金請求のために内野さまの営業所に通いはじめます。
保険金殺人の匂いを感じた内野さまは、妻大竹さまに「父親が保険金目当てで子供を殺した疑いがある」との手紙を送ります。
保険会社の幹部は、事件を収拾しようと、アブナイ仕事の始末をつける「示談係」の職員小林さまを彼らの家に向かわせますが...
うむむ。新聞で読んだような話に似た展開ですね。
しかしこの原作小説は「あの保険金詐欺事件」の発覚前に書かれたものです。念のため。
癖のある映像。ところどころ挿入されるイメージショットやインサートショット。
手の込んだこういう演出が、逆に恐怖感を現実味薄いものにしているような印象をもちました。
クライマックスも小説のほうがずっと恐かったです。
さらにいうと、森田作品では（ホラー題材ではない）「３９～刑法３９条」のほうがよっぽど恐かったです。
原作は大好きな小説なんですが、残念。

# トップ・ガン

１９８６年アメリカ映画
監督　トニー・スコット
主演　トム・クルーズ、ケリー・マクギリス、ヴァル・キルマー、マイケル・アイアンサイド

トム・クルーズさまを一気にスターダムに押し上げた作品でございます。
テーマ曲はケニー・ロギンズの「デンジャー・ゾーン」でございます。
映画音楽としてもかなりいけてますよね。普通にヒット曲としてもかなりいい曲ですが。この曲が象徴するようなノリがよく、かっこいい世界がスクリーンの向こうで綴られます。
クルーズさまは米軍のパイロット候補生でございます。
調子がよく、軽いノリのあんちゃんです。
ただ、戦闘機の操縦テクニックは天才的。同期生にキルマーさまがおります。
で、教官はアイアンサイドさまね。私はこのマイケル・アイアンサイドさまって人大好きなんですが。
カナダの役者さんで、デビッド・クローネンバーグ監督の「スキャナーズ」で注目された人です。
それからは「面会時間」「Ｖ」「ダブル・ボーダー」「トータル・リコール」「スターシップ・トゥルーパーズ」、最近では「Ｘメン　ファースト・ジェネレーション」や「サベイランス」などなど、めっちゃ活躍しておられます。
この映画でも渋いところ見せてくれてますね。
映画のほうは、戦闘機に乗ることにかけた青春をまったりと描きます。
訓練中の事故でパートナーでもあるナビゲーターを失ったりだとか、いろいろあるわけですが、やっぱりね、基本線は明るく元気な青春恋愛ムービーでございますな。
戦闘機のドッグファイトシーンは迫力満点です。
主人公のクルーズさまを戦闘機のパイロットに設定したってのが、よくある恋愛映画と一線を画す効果をあげています。
やっぱりトム・クルーズさまかっこええですわな。
以前書いたと思いますが、クルーズさま、この映画以降、「カクテル」だとか「デイズ・オブ・サンダー」みたいな、けっこうどうでもいいような映画に出ておりましたが、「７月４日に生まれて」とか「ファーム」だとかの作品でおお化けしましたですね。
このトム・クルーズさまって人の「トップ・ガン」直後と、ジョン・ローンさまの「ラスト・エンペラー」直後の作品パターンって似ているような気がしますね。
ジョン・ローンさまも「チャイナ・シャドー」とか、ダンサーの映画とか、「何それ」みたいな映画に出てましたもんね。
この二人の差って、「化ける」ことのできる作品に出会えたかどうかって気がしてなりませんですね。

# フォーエバー・ヤング　時を越えた告白

１９９２年アメリカ映画
監督　スティーブ・マイナー
主演　メル・ギブソン、イライジャ・ウッド、イザベル・グラッサー、ジェイミー・リー・カーティス

最初に…こう書くと作品に対して失礼かもしれませんが、監督さんが何を言いたかったのかよくわからなかったです。
物語の発端は第二次世界大戦以前。
双翼戦闘機のパイロット・ギブソンさま。
彼の婚約者が交通事故で危篤状態に陥ります。
ギブソンさま、めっちゃ凹みます。彼女が死んでいく姿を見続ける気力がないって状態になりまして、彼は無謀にも軍の冷凍睡眠実験のモルモットに志願します。
彼は愛する婚約者との思い出を抱いて、長い長い眠りにつきます。
で、お約束通り時は流れて…
冷凍睡眠実験は、主任研究者の突然の死によって放置されております。
そもそもが軍の極秘プロジェクトだったもんで、ギブソンさまが冷凍催眠カプセルの中に入っていることさえみんな知らない時代になっております。
ギブソンさまは軍の廃倉庫みたいなところで、忍び込んだ子供の悪戯で目覚めるわけですね。
ここはどこじゃ、お前は誰じゃ、みたいな感じ。
（ごめんなさい。このセリフは同じ「冷凍睡眠」ものの「ＳＦソードキル」のセリフでござる）
自分のまわりにいるはずの軍の研究者だとか医者だとかがいない。
街をさまようギブソンさま。しかたなく、軍の施設に向かいますが、あまりにも荒唐無稽な話だけに、施設の司令官はギブソンさまのことを頭のイカレた男だと決めつけてしまいます。
再び街をさまようギブソンさまですが、彼が目覚めるきっかけとなった少年とめぐりあい、彼の家でやっかいになることになります。
一方、軍では、実験の秘密を知る一部の人々が、実験が継続されていたことに気づき、ようやくギブソンさまの身柄を保護しようと動きはじめます。
何たって第二次世界大戦前から冷凍になっていた被験者ですから。
そら追いかけますわな。
当時の同僚や研究者を探すギブソンさま。ギブソンさまを探す軍の研究者。さあどうなる、って物語です。
この話を見ていて、「天才バカボン」を思い出してしかたなかったです。
「天才バカボン」ってのは、一つの物語が一つのテーマをもとに進むのではなく、事件によって派生した枝葉のエピソードに話の軸が移って、その枝葉にエピソードが移って、またその枝葉にエピソードが移って…

結局もとの話って何だったっけ、みたいな展開を基本パターンにしておりましたが、この映画も同じです。
枝葉のエピソードが中心になって、そこからまた枝葉にいって…みたいな印象をうけました。
まあ破天荒な物語だけにこれでいいのかもしれませんが。

# 永遠に美しく…

１９９２年アメリカ映画
監督　ロバート・ゼメキス
主演　メリル・ストリープ、ブルース・ウィリス、ゴールディ・ホーン、イザベラ・ロッセリーニ

前回ご紹介した「フォーエバー・ヤング」とタイトルかぶってますなあ。
しかしこの作品の原題は「Ｄｅａｔｈ　ｂｅｃｏｍｅｓ　ｈｅｒ」なんで、タイトルがだぶっているわけではありません。
しかしこの原題がなんで「永遠に美しく…」になるんでしょうか。ラストなんか主人公たち、全然美しくないんだけど。
ウィリスさまは整形外科医です。それがいつしか葬儀屋の手伝いの死体メイクなどを手がけるようになっております。
彼は整形外科医時代にホーンさまとつきあっていたわけですが、元大スターのストリープさまに鞍替えしたりする無節操男です。
ホーンさまはそのショックで過食症になって悲惨なおデブさんになったりしております。
数年後、ウィリスの妻、すっかりおばはんになったストリープさまの前に、若い頃と全く変わらぬ美貌を取り戻したホーンさまが現れます。
あせるストリープさま。エステサロンの社長に紹介された怪しげな女性ロッセリーニさまに、若返りの秘薬を譲りうけ、ストリープさまもかつての美貌を取り戻します。
しかしこの薬には秘密がありまして、実はこれ、不死の薬だったわけですな。
つまり「死なない」、というか「死ねない」身体になってしまったわけです、ストリープさまは。
そのころホーンさまはウィリスさまに近づいて、よろしくやることになるわけですね。
で、ストリープさまを殺してウィリスさまといっしょになろうと計画するわけです。
妻殺害を決意するウィリスさま。
周到な殺人計画を立てていたわけですが、計画実行前にひょんなことからストリープさまと言いあいになり、口喧嘩の勢いでストリープさまを階段から転落させてしまいます。
首だとか足腰だとかボキボキいいながらの転落。普通死にます。
しかし首の骨とか折れてぐらぐらなのに死んでいないストリープさま。
さて、ウィリスさまからの電話連絡をうけて駆けつけたホーンさま。
ストリープさまが死んだと思いこんでいた彼女、ウィリスさまとの計画を修正する相談をストリープさま本人に聞かれてしまいます。
怒った（首の骨が折れた）ストリープさま、ホーンさまを至近距離から大型銃で撃ちます。
お腹に穴のあいたホーンさま、彼女も死なない。
ストリープさまは彼女も同じようにロッセリーニさまの秘薬を飲んだことを知ることになります

…
ゼメキス監督だし、ウィリスさまやストリープさまやホーンさまやロッセリーニさまみたいな一流どころのキャストで製作されてるんですが、なんだかとってもＢ級の香りがするのはどうしてでしょう。
それにしてもホーンさま、いくつになってもかわいい。
この人本当に秘薬とか飲んでるんじゃないでしょうか。
ストリープさまはこういう役ができる人だったんだとちょっと見直しました。
ウィリスさまはねえ。どうやろなあ。微妙なところですね〜
イザベラ・ロッセリーニさまがけっこういやらしい感じでよかったですね。

# 青い体験

１９７３年イタリヤ映画
監督　サルバトーレ・サンペリ
主演　ラウラ・アントネッリ、アレッサンドロ・モモ

イタリヤ映画です。イタリヤ。逆から読むとヤリタイ。
やりたいさかりの少年が主人公の初体験もののお色気コメディでございます。
イタリヤのちょっと田舎っぽい町に、妻を亡くした生地屋の亭主がおりました。
長男は大学生くらい。次男は中学から高校くらいで、三男は幼児。
お話の主人公は次男で、この子を演じるのがアレッサンドロ・モモさまです。
亡くなる直前のモモさまの母が、家政婦紹介所に住み込み家政婦の派遣を依頼しておりまして、それでやってきたのが若い家政婦アントネッリさま。
父も兄もモモさま本人も、アントネッリさまの色香にめろめろでございます。
真剣に彼女を後妻に迎えようとする父。彼女の前ではなぜかいつも体を鍛えているふりをするおバカな兄。
しかしモモ君には父や兄のことをとやかく言う資格はない。
だってめっちゃ危ない視線を送っているんだもん。
「目で犯す」ってのはこういう目つきのことを言うんだろうなってくらいいやらしい視線をおくります。
モモ君、気になるラウラさまが父と仲良くするのが面白くない。
夜中に、寝ている弟の耳元で母の話をして、母恋しさに泣きだす弟にてこずる父やアントネッリさまを見てご満悦になっております。
うむむ。悪質だなあ。
それでいながらラウラさまの近くをストーカーみたいにウロウロして、なんかエッチな会話したり。
若さというか、幼さというか、未熟さというか。
でもアントネッリさまもまんざらじゃないみたいだから、いいんだろうなあ。
モモ君の行動は次第にエスカレート。屋根裏からのぞいたり、高いところにある本をとってくれと言って脚立にのぼらせて下からスカートの中をのぞいたり。
これってほとんど変質者じゃんか。
あかんやろ、こんなんしたら。
こんな小僧はたいていひどい目にあうのが日本的倫理観なんだろうけど、さすがエッチの先進国イタリヤでございます。
アントネッリさまはそんな彼のこと、かわいいって思うみたいで、父も兄も留守の嵐の夜、停電になった屋敷の中、懐中電灯でストリップごっこをして、ついにはモモ君を男にしてしまうわけですな。

ラストは父親の花嫁になるアントネッリさまにモモ君がキスをして、「ママよろしくね」みたいな感じで終わります。
どないいやねんな。
えっとねえ、停電の中であんな大事なことしちゃいけません。
観客のフラストレーションたまっちゃうじゃないですか。
映画を見ていた皆様、きっとみんな「見えへんがな」って怒っていたことでしょう。
私も怒ったもん。しかしながら、今四十二才くらいから四十五才くらいの人って、この作品に特別な思い入れをもっている人、多かったりすると思います。
見たかったんですよね、ロードショーのとき。
でも小学校の高学年から中学生あたりの子が、「青い体験」なんて映画見れないですしね。
私は見たかったけど見られなかった子です。
小学校高学年でしたね。ロードショーのときは。
主人公を演じたアレッサンドロ・モモさまは、「青い体験」「続・青い体験」に主演したあと、１９７６年にオートバイ事故で急死しちゃった俳優さんです。
出演作品、もうちょっと見たかったですね。

# 殺人の追憶

２００３年韓国映画
監督　ボン・ジュノ
主演　ソン・ガンホ、キム・サンギョン

韓国映画でございます。２００３年の韓国での興行収入トップを記録したサスペンスドラマ。
韓国で実際に起こった事件が映画化されております。
六年間に十人の犠牲者を出し、迷宮入りしてしまった実在の事件。
ソウル郊外の農村で女性の惨殺死体が発見されます。
ガンホさまは地元の刑事。サンギョンさまは市警から派遣されてきた刑事です。
二人は協力しあって犯人探しに奔走するわけですな。二転三転する犯人像。
やがて二人は決定的に疑わしい一人の人物を絞り込みます。果たして犯人はその男なのか否か。
この作品は、本編を見るより先に、予告編を見てしまったわけなんですが、その予告編に「実際に起こった未解決事件をもとに映画化」なんて書いてありました。
情報としてそれだけのことがわかっていれば、犯人は逃げおおせるはずですよね。
そうでなければ「未解決事件の映画化」なんて書かないはずだし。
だと思っていたら、犯人と容疑者のＤＮＡを鑑定した結果が送られてくる場面以降、事件が解決しそうになったので驚きました。
でも、やっぱりすんげえグレイな描かれかたをして物語は終わります。
未解決事件の映画化ってどうしてもこうなってしまうんでしょうね。
そうじゃなければ、「ＪＦＫ」みたいに新事実を基にした仮定を描くとか。
実録ものにありがちな消化不良の印象が残りましたね。
この作品、友人がベタホメだったので見ましたけど、うむむ、どうなんやろ、って印象です。
どうしてその友人はすごく面白く感じて、私がどうなんやろって思った理由はねえ、たぶん、緒形拳様主演の「野獣刑事」を見たか見ていないかだろうと思います。
なんかねえ、途中、雨の降る中で犯行が行われる場面があったんですが、そのシーンの組み立てかたが「野獣刑事」そっくりで、「ありゃまあ」とか思いながら見てしまいました。
どちらもレイプ殺人鬼が題材で、雨が降る日に出没するって人を追いかける話なので、どうしても犯行シーンは似てきますがね。
偶然似てしまったのか、「野獣刑事」がこの作品の基になった事件を参考にしたのか、この作品が「野獣刑事」を参考にしたのか…
まあ題材が題材だけに「似てしまわざるを得なかった」ってところが正解かもしれませんが、私と同年代以上の映画ファンには不利ですわなあ。
「野獣刑事」の雨の中でのレイプ殺人シーンは、それこそ夢に見るくらい強烈な場面だったので、インパクトって面ではちょっとおちます。
申し訳ないですが、その場面からあとは頭の中で「野獣刑事」との比較がはじまってしまって、

「もひとつやなあ」って印象が残ってしまいました。
悪くはなかった作品なんですが。残念。

# ナルニア国物語・第一章　ライオンと魔女

２００６年アメリカ映画
監督　アンドリュー・アダムソン
主演　ジョージー・ヘンリー、スキャンダー・ケインズ、ウイリアム・モーズリー、アナ・ポップルウエル

時代は第二次世界大戦中。
ドイツ軍の空襲から逃れるため、イギリスの田舎に疎開してきた兄姉弟妹。
彼らが身をよせたのは「教授」と呼ばれる老人の家でございます。家についてすぐの雨の日、四人は妹の発案でかくれんぼをすることに。
空き部屋のでっかい洋服箪笥に隠れた妹ですが、その箪笥こそは不思議な国、「ナルニア国」に通ずる扉だったのでございました。
「ナルニア国」で昼から夜までを過ごして元の世界に戻った妹。不思議なことに元の世界ではほとんど時間が過ぎていなかったわけでございます。
「ナルニア」のことを兄姉に話す妹。最初は誰も彼女の言葉を信じなかったわけですが、ひょんなことから四人そろって「ナルニア」に入り込むことになります。
そこは百年以上冬が続いている国でございまして、「白い魔女」が国を支配しております。
国では予言が信じられている。
曰く、四人の「人間の子供たち」が現れたときに冬の魔女の支配が終わると、まあそんな感じなわけですな。
「人間の子供たちが現れると」って予言があるってことは、その世界には人間がおりません。
ビーバーだとかキツネだとか馬だとかがしゃべり、ケンタウロスやミノタウロス、小人なんかが普通にうろうろしています。
「白い魔女」への抵抗勢力は、王であるライオン、アスラン王を中心に戦争の準備をはじめます。
一方の白い魔女は悪知恵を働かし、四兄弟のうちの下の弟をだまそうと企みます。
さあさどうなる。
ディズニー作品らしく、愛と感動にあふれた力作でございます。
あらすじはわわわって紹介しましたが、これ以外にも細かいエピソードがいっぱいあってですねえ、まあとりあえずはご覧くださいって感じですね。
縦横無尽に伏線が張り巡らされております。その伏線がみごとに処理されていくのが憎いですね。
さすが世界的ベストセラー小説の映画化でございます。
私的には苦手なファンタジー作品なのですが、物語展開の巧さには感心してしまいました。
主役の兄姉弟妹揃って芝居も巧い。将来が楽しみでございます。

# 汚れなき悪戯

１９５５年スペイン映画
監督　ラディスラオ・バホダ
主演　パブリート・カルボ、ラファエル・リベリュス

「ジャンルごとにわわわって作品を紹介するシリーズ」。
ホラー、アクションときまして、今日からは名画・ミュージカル・人間ドラマなんぞをご紹介してまいりたいと思います。
今日はめっちゃ懐かしい映画でございます。
この作品は私が小学校高学年で映画を見始めたころリバイバル上映されてました。
たまたま映画を見たクラスの友人とめっちゃもりあがって、小学校六年のお別れ会のクラス演奏でこの映画の主題歌をやりたいって言ってクラスのみんなから顰蹙をかったという思い出の作品。
大人になってからＮＨＫの名画劇場で見ましたが、うむむ。どうなんやろって感じでした。
「懐かしの名作」って評価が一人歩きして、本来の面白さ以上に評判になってしまったのではないでしょうか。
そんなに感動しなかったです。
主人公の少年。名前はマルセリーノ。
彼は修道院の前に捨てられていた子供です。
彼は僧たちにかわいがられてすくすくと成長するわけですな。
ここでいきなり主題歌の「マルセリーノの歌」。「おっはっようマルセリーノ…」ってな感じでミュージカルっぽく歌われると、悪いけどひいてしまいます。
ドンびきしました。
このマルセリーノ少年、いたずらが大好きです。
ある日、マルセリーノ君、納屋に入ります。
お仕置きか忍び込んだのかどっちか覚えてないですが、彼はそこでキリスト像を見つけるわけですな。
そこから奇蹟が起こるという、メルヘン系ファンタジー系の物語でございますわ。
修道院だとかキリスト像だとか奇蹟だとか、ちょっと私には苦手なキーワードが並んでしまいました。
これはつまりね、ほとんどの日本人の皆様がそうお感じになった感想なのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。
確かにいいんです。
マルセリーノ君巧いし。感動的だし。
でも、キーワードに神だとかをもってこられると、キリスト教への理解にイマイチ欠ける私は、「あんまり感動できなかったかもお」って結論になってしまうわけですね。

私がキリスト教を信じている人だったりしたらもっとズルズルに泣ける作品だったのかもしれませんが。
この作品を根本から理解できなかったってのはちょっと残念。いい作品には違いないんですがね〜
神だとかを前面に出しすぎてましたですね。

# ウィズ

１９７８年アメリカ映画
監督　シドニー・ルメット
主演　ダイアナ・ロス、マイケル・ジャクソン

「テーマを決めた作品なんかをつらつら紹介するシリーズ」でございます。
名画～ミュージカル～人間ドラマ～歴史大作なんかあたりを紹介してまいります。
ここらの作品って私的にはボーダレスだったりしますので、乱暴にくくってしまって申し訳ございません。
名画シリーズはもっと続くはずだったんですが、なぜか作品そのものを思い出さないので、とりあえずミュージカルの部に進みましょうね。
私って劇団時代にいちおーミュージカルやってたわりにはあんまり見てないですね。
ただし、見たミュージカルはほとんどお気に入りになっておりますので、第一集でご紹介済みの作品が多いですね。
「コーラス・ライン」とか「ウエストサイド物語」とか。
「メリーポピンズ」とか「グリース」、「サウンド・オブ・ミュージック」なんかもミュージカルですよね。
「ローズ」はミュージカルになるんだろうか。これはちょっと違うかな？
さて「ウィズ」。私はそもそも「オズの魔法使い」の話がけっこう好きでございまして、劇団時代にこのお話を基にした芝居の台本を書いたことがあります。
そのときのエンディングに使おうと思っていたのが「ウィズ」の「イーズ・オン・ダウン・ザ・ロード」でございました。
この曲は大好きだったんだけど、映画のほうは期待が大きすぎたせいか、「あれ？」って感じでした。
申し訳ないです。
お話はもう解説の余地なしって雰囲気ですね。
えっと、カンザスシティに住んでおりますドロシーちゃん。台風の竜巻に飛ばされて、不思議の国みたいなところにたどりつき、ライオンだとか案山子だとかブリキの人形だとかを仲間に加えながら、故郷のカンザスに戻してくれる力があるという「オズの魔法使い」のいる町に向かう物語でございますわな。
ダイアナ・ロスさまにマイケル・ジャクソンさまが主演。
後に「ウイ・アー・ザ・ワールド」で競演する二人がスクリーンで楽しげに歌い踊ります。
そもそもブロードウエイミュージカルだったこの作品、実際に映画にしちゃうと、なんだか変な感じになってしまったような気がしてなりません。
逆に舞台っぽく、セットそのものをハリボテっぽく、もっと作り物っぽくしたほうが雰囲気でたかもしれませんね。

# ファントム・オブ・パラダイス

１９７４年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　ポール・ウィリアムス、ウィリアム・フィンリー、ジェシカ・ラング

「テーマを決めた作品なんかをつらつら紹介するシリーズ」、今日はミュージカルでございます。
といってもこの作品をミュージカルと扱っていいのかどうか悩みますが。
映画の元ネタは、かの「オペラの怪人」でございます。
それを思いきりロック仕立てにした感じでしょうか。
主人公はフィンリーさまでございます。
彼はなんかもひとつパッとしない青年ですが、すごい音楽の才能の持ち主だったわけですな。
彼はロックオペラ（だったかなあ、ロックシンフォニーだったかなあ）を作曲し、その作品をレコード会社社長のウィリアムスさまに見てもらうわけですね。
悪人社長のウィリアムスさま、作品の権利を独り占めしようとするわけですね。
哀れフィンリーさまは社長にはめられて、無実の罪で投獄されることになります。
数年後、出所したフィンリーさま、自分の作品がウイリアムスさまの作品として発表されていることに驚きます。
で、怒った彼はレコード会社に忍び込んでレコードのプレス機をぶっこわそうとしますが、逆に機械に巻き込まれて顔面を潰されるという大怪我を負います。
それからというもの、マスクをかぶった怪人が社長の周囲に出没することになるわけですな。
ウィリアムスさまむっちゃ悪い。
フィンリーさまあまりにも間抜けで空気が読めてない。
そらひどい目にあうやろなあ。こういうキャラだと。
デ・パルマ監督の演出は、まだこなれていない感じがありますが、随所に「おおっ」と唸らせるような場面がでてきます。
やっぱり才能ある人はそれほど知られてない時期からすごい映画撮ってるもんなんですね～
悪役のポール・ウィリアムスさまは当時けっこう知られていたミュージシャンでしたです。
まあ知る人ぞ知るって感じだったですかね。
万人が知っている感じではなかったけど。しかしこの作品見て、「ほうほう、ポール・ウィリアムスってすごい才能もってたんだあ」って見直しましたです。
この人、クリント・イーストウッドさま主演の「サンダーボルト」って映画で、主題歌の「故郷への道を教えて」って曲を歌っておりました。
この曲も好きだったなあ。

# 三銃士（１９９３）

１９９３年アメリカ映画
監督　スティーブン・デレク
主演　キーファー・サザーランド、チャーリー・シーン、クリス・オドネル

今日は歴史活劇でございます。
天下のディズニーがむっちゃ力を入れて作り上げた娯楽活劇でございます。
キーファー・サザーランドさまにチャーリー・シーンさまにクリス・オドネルさま。
もう、ベタベタの男前ばっかり集まりましたなあ。
ほんま、めっちゃベタベタ。
まあね、三銃士っていいましたら勧善懲悪の西洋チャンバラ映画にしかならないわけでして、こういう作品にはベタベタの男前がでたほうがパンチが効いていいんでしょうなあ。
舞台は十七世紀のフランス。
国王に忠誠を誓う銃士たちがあからさまな悪人を相手に大活躍する物語です。
世界的かつ古典的な傑作小説の五度目の映画化です。
一度目から三度目までの作品を見ておりませんのでああだこうだは言いにくいですが、とりあえずは四度目の映画化との比較になってしまいますね。
四度目のマイケル・ヨークさま＝ダルタニアン版がとにかく面白くて、しかも「三銃士」「四銃士」の二部作からなる大作でしたから、ちょいとスケールが違いすぎて比較しにくいかなあ。
それでもあえて比較してしまうと、どうしてもディズニー版にとっては辛い採点になってしまいます。
とりあえず悪役が弱いですね。
この作品でもがんばってはおられるのですが、ヨークさま版の悪役（チャールトン・ヘストンさまにフェイ・ダナウェイさまにクリストファー・リーさまでっせ）にはかなわないですよね。
物語も、なんだかわわわって進んでいった感じがします。
なんだかバタバタした感じでお話が進んでいきますので、二枚目俳優さんがたの男前自慢みたいなお遊びの場面が大事になってくるのでしょうなあ。
マイケル・ヨークさま版の「三銃士」と「四銃士」はいずれ回を改めてご紹介させていただきますです。
ちなみにこの映画の主題歌は、スティングさまとブライアン・アダムスさまとロッド・スチュワートさまの「スーパーシンガー三銃士」が歌う「オール・フォー・ラブ」。
これはこれで名曲です。

# 十戒

１９５６年アメリカ映画
監督　セシル・Ｂ・デミル
主演　チャールトン・ヘストン、ユル・ブリンナー、アン・バクスター

歴史超大作でございます。誰もが知っている旧約聖書の物語。
預言者モーゼのお話を、めっちゃすごいスケールで描きます。
セシル・Ｂ・デミル監督は、無声映画時代の１９２３年、「十誡」という作品を撮っております。
ですから、この５６年版の「十戒」はリメイクってことになります。
舞台は旧約聖書時代のエジプト。
新しく生まれたヘブライの子をすべて殺すという王のおふれから逃れるために、一人の男の子がナイル川に流されます。
おお、このへんはなんか「ウイロー」みたい。
ちゃうっちゅうねん、「ウイロー」がぱくったんやっちゅうねん。
下流の王国の王女に拾われたその子は、やがて王子として勢力を強めていきます。
この王子がモーゼ＝ヘストンさまでございます。モーゼは王の実子の企みで追放されてしまいます。
モーゼはそこで神の声を聞き、イスラエルの民を率いてエジプトを出ることになります。さあさどうなる…
映画史に残る「紅海が割れる」シーン。
やっぱりすごいですね。当時としては破格の強烈な制作費を投じたセットに特撮。
たいしたもんだ。ただ、今見直してみると、セットの奥行きが少し足りないような気がしますね。
まあこれはこれでしかたないのかな。
「ウィズ」のときは、もっと作り物っぽいセットを使って舞台っぽく作ったほうが良いと感じたわけですが、この作品に関していえば逆でございまして、セットっぽさを感じさせない画面作りをしていただきたかったですね。
生意気言うと、セットとロケの違いが一目瞭然で、そこに特撮画面なんかも加わるものだから、なんか何本かの映画のダイジェスト見てるみたいな気になりました。
今だとＣＧなんぞを使って、かなりクリアでリアルな「ありえない世界」を見ることができます。
まあ今の撮影技術と当時の撮影技術を比べちゃいけないですがね。
えっと、スペクタクル作品としてはけっこういけてます。
ただ、「汚れなき悪戯」のところでも書きましたが、キリスト教圏でない日本に住んでいる私に、聖書ネタはちょいとヘビーですよね。

# 天地創造

１９６６年アメリカ映画
監督　ジョン・ヒューストン
主演　マイケル・パークス、ウラ・ビルグリッド、リチャード・ハリス、フランコ・ネロ、ピーター・オトゥール、エヴァ・ガードナー、ジョージ・Ｃ・スコット

今日も聖書のお話でございます。
聖書ではありますが、旧約聖書の「創世記」の冒頭から２２章までの映画化でございます。
宗教書としての「聖書」はすんごい苦手なんですが、読み物としての「聖書」は何故か大好きなんですね。
とくにこの作品の原作になった部分なんかとにかく好きです。
思うに、ここらの物語ってのはほとんど神話か御伽噺の世界だからでしょうね。
このへんの物語とか、ギリシア神話とか古事記とかなんかすんごい好きなんですよね。
でも「十戒」とか「偉大なる生涯の物語」とかは苦手やなあ。
ちょっと変だと自分でも思いますけど。
この映画はいくつかの有名なエピソードに別れております。
最初はもちろんタイトルにもなった「天地創造」のエピソード。
つぎにアダムとイブが禁断の木の実を食べる話「エデンの園」、次が世界最初の殺人者にして兄弟殺しの悲惨な物語、「カインとアベル」。
カインを演ずるのは後にハリー・ポッターの校長先生を演ずることになるリチャード・ハリスさまでございます。
ここらからのエピソードの順がよく覚えてないんですよね～
信仰を忘れたカインの末裔たちを神が滅ぼそうと思い、ノア老人とその家族だけを助けることにするという「ノアの方舟」、ノアの子孫が神に近づこうと塔を建て、神の怒りをうける「バベルの塔」、乱れた人々を憂え、神がしもべ（ピーター・オトゥールさま）をつかわし、ソドムの町とゴモラの町を滅ぼしてしまうという「ソドムとゴモラ」、神に自らの信仰を試される老人の話「アブラハムの信仰」などの物語が続きます。
悲しいかな、前半の御伽噺的なおおらかさが、映画中盤から後半にかけて次第に宗教くさくなっていきます。
しかたないですよね。
映画の中では中盤部分にあたる「バベルの塔」「ノアの方舟」「ソドムとゴモラ」あたりが作品的クライマックスになるだろうと思います。
申し訳ないですが、ここから先はとにかく長く感じましたです。
まあキリスト教スピリットってえのは後半部分に集約されているような気がします。
すげえ強烈なオールスター映画ではあるんですが、個々の役者さんの印象がいまいち薄いのは、やはり特撮部分にウエートがおかれてしまったからでしょうか。

# ヒーロー

２００２年中国映画
監督　チャン・イーモウ
主演　ジェット・リー、トニー・レオン、マギー・チャン、チャン・ツイイー

中国映画界が総力を結集してつくりあげた歴史絵巻でございます。
画面の端から端まで気合はいっております。
なんかねえ、「ラストエンペラー」思い出しました。
あの映画のすごいところって、私的には「驚異的な画像の奥行き」だったわけです。
やっぱり黒澤監督だとかベルトリッチ監督クラスでないと、この奥行きは出せないんだろうなあって思っておりましたら、もう一人、驚異的な奥行きのある画像を表現できる監督さんが現れましたね。
すごいすごい。
物語の舞台は秦王朝前夜って時期です。
後に始皇帝となる秦王。
王ですから、やっぱり色々なやつらに命を狙われております。
ある日、王の前に、王の命を狙う三人の刺客を倒したという男、リーさまが現れます。
リーさまは王への謁見を許され、刺客を倒したときの様子を王に語ります。
話の矛盾点を王に指摘されたリー、今度は別の物語を語ります。
エピソードごとにイメージカラーが変わり、見事にエピソードのメリハリをつけてくれております。
この記事を書くにあたって、いくつかのレビューを見ましたが、賛否両論ですね、この作品。
リーさまが語る「偽りのエピソード」「次に語る別のエピソード」「その次のエピソード」。
それぞれ同じ登場人物が、別の物語を演ずるわけだから、前半部分でおやって思ってその気持ちをひきずってしまうと、頭の中が次のエピソードにうまくシフトしていかずに、「面白くない」「わけわからん」って印象が残ってしまうのかも。
私はけっこう楽しんで見ましたが。
残念だったのは、ラストシーンでございます。
えっとね、いくら良い場面でも、予告編で「弓が飛ぶ場面」をやっちゃいけないと思うんですね。
予告編で見た場面って、本編を見るときにその場面がでてくるのを待ってしまうんです。
で、勝手な想像でその続きの場面を考えたりしちゃうでしょ。
ラストの余韻を感じるために、また、ラストの衝撃をより感じるためには、あの場面は絶対に予告編で流してはいけなかったのではないかなって思います。

# マルコムＸ

１９９３年アメリカ映画
監督　スパイク・リー
主演　デンゼル・ワシントン、アンジェラ・バセット、アル・フリーマンＪｒ

作品テーマごとにいろんな作品をとりあげていくコーナー、昨日は歴史絵巻で今日は伝記。
なんか脈絡あるようでないような、変な順番になりつつありますなあ。
本当は「伝記映画シリーズ」として「アビエイター」だとか「アマデウス」だとか「タッカー」だとか「アラビアのロレンス」「ラストエンペラー」「ガンジー」あたりの作品を続けてとりあげるべきなんでしょうが。
見てない映画の紹介は書けないしい。
ってことで、伝記映画もこの作品一本だけで次に進むことが確定してしまいました～
今日ご紹介するのは「マルコムＸ」でございます。
予告で見て、すごく見たくて、でもロードショーは結局見ることができず、ビデオ化されてすぐに見た記憶があります。
感想は…　うむむ。私が思っていたような作品ではなかったですなあ。
キング牧師と並び、黒人解放運動の指導者で、戦後最も世界に影響を与えた思想家でもあるマルコムＸの青春時代と、運動家としてスタートしてから暗殺されるまでを描きます。
作品は三時間前後のすんごい長い映画。ちょっと集中力もたなかったです。
チンピラとして過ごしているマルコム。
彼はちょっとした罪で服役することになりますが、刑務所の中でイスラム教に出会って改宗し、出所してからは運動家になるわけですね。
ここらあたりまではかなりテンポよく物語が進んでいくわけですが、ここからが少し辛かったです。
彼は白人を敵対視する系の運動に没頭していくわけですが、メッカの巡礼を行ったことにより、全ての人種が愛し合わなければならないことを悟り、新しい理念に基づいた運動の展開をはじめて間もなく、凶弾に倒れるわけですね。
実話の映画化ってことで、マルコムＸがどんな最後を迎えるのか知った上で映画を見るわけでございまして、ここらがどうもつらいところでございます。
ラストシーンを待ってしまうわけですね。
そんな事情がありまして、中盤から後半にかけてはひたすらラストシーン待ち。
私みたいな性格の人には、こういう長編のどっしりした作品って向いてないのかもしれませんなあ。
この作品、とにかく評価が高いです。もう一度見直して、もう一度マルコムＸのメッセージをじっくり聞いてみなきゃいけないかなあって思っております。

# 告発の行方

１９８８年アメリカ映画
監督　ジョナサン・カプラン
主演　ジョディ・フォスター、ケリー・マクギリス、バーニー・カールソン、レオ・ロッシ

作品テーマごとにいろんな作品をとりあげております。サスペンス系のシリアスドラマをご紹介です。
今日は法廷サスペンスのシリアスドラマざます。
きれいかわいい系の女優さんだったジョディ・フォスターさまがアカデミー主演女優賞を受賞した渾身の力作。
アメリカで多発しているレイプ事件に鋭くメスを入れた傑作でございます。
場末の酒場でレイプ事件が発生します。被害者の女性はフォスターさま。
この事件を担当する検事がマクギリスさま。
マクギリスさまはフォスターさまの証言を頼りに、三人の男性を強姦罪で告訴します。
しかし被告側はフォスターさまが酒に酔っていたこと、マリファナをやっていたことなどの事実を調べ上げ、事件は強姦ではなく、双方合意の上の和姦行為であったと主張します。
やばいこれでは負けちゃうじゃん、って思ったマクギリスさま、被告側に対して司法取引を申し出るわけですな。
司法取引ってのは日本にはない制度でございまして、裁判を全面的に戦うのではなく、量刑の重いＡの件に関しては告訴しないから、量刑の軽いＢについて認めなさいって手法です。
マクギリスさまは、強姦については告訴せずに、被告にフォスターとの行為の最中の暴力行為を認めさせ、傷害罪として事件を処理します。
もちろん勝訴。
この話を聞いたフォスターさま、激怒するわけですね。
フォスターさまにしてみれば、あの行為が強姦であったってことをとにかく立証して欲しかったわけで、こんな形の司法取引をしてしまうと、強姦そのものがなかったことになってしまう。
それは納得いかないということをマクギリスさまに話すわけですね。
フォスターさまの真意を読み違えていたマクギリスさま、方法を考えます。
司法取引して結審してしまったので、元被告の三人はもう強姦では告発できない。
マクギリスさま、考えまして、三人の強姦罪では告発せずに強姦の事実を立証するという一発大逆転の賭けにでます。
果たしてその方法とは…
とにかくジョディ・フォスターさまがいいですよね。セクシーで、かわいくて、きれいで、巧い。
私はフォスターさまと同世代ですから、とにかくこの人には思い入れあります。
最近は「パニックルーム」だとか「フライトプラン」だとか、すっかりお母さん役が似合うよう

になってしまいましたね。
年齢的に当たり前なんだろうけど、ちょっと複雑やなあ。活躍はして欲しいんだけどなあ。

# ＪＦＫ

１９９１年アメリカ映画
監督　オリバー・ストーン
主演　ケビン・コスナー、ジョー・ペシ、ドナルド・サザーランド、トミー・リー・ジョーンズ、ケビン・ベーコン

サスペンス系のシリアスドラマです。
ＪＦＫ。
ウイリアムズ・藤川・久保田のその昔の阪神タイガースリリーフトリオの略称ではありません。
わかってるやろけど。関西人としてはとりあえずボケとかないといかんかなあと思いまして。
そういえばパチョレック・亀山・オマリーでＰＫＯなんて言ってた人もいましたが。
いうまでもなく、ジョン・Ｆ・ケネディ大統領のことでございますね。
１９６３年にダラスで暗殺されてしまいました。
ケネディネタでは、暗殺者側から事件を描いた「ダラスの熱い日」とか、元１０ＣＣのゴドレー・アンド・クレームが企画した「ＪＦＫ暗殺の真実」なんてものもありました。
正直、「なんで今更ＪＦＫなん？」って思ったりもしましたが、オリバー・ストーン監督的には避けて通れない話だったんでしょうね。
ケネディが暗殺されたことによってベトナム戦争が泥沼化したわけだし、監督はそのベトナムで重い心の傷を負った人ですからね。
地方都市の検事、コスナーさま。
ケネディ暗殺の報道を見て、彼は独自に暗殺事件のことを調べ始めます。
調べれば調べるほど陰謀の匂いがするわけですな。
なかなか証人にたどりつけません。ようやくたどりついた証人も謎の死をとげたりする。
ますます陰謀が感じられます。
そもそも描かれた内容が真実だとしたら、国家規模の陰謀でないとこんなに鮮やかな事実の隠蔽工作なんてできるわけがないですよね。
やがて情報提供者が現れます。
軍で大統領警護の任についていたＸと名乗る男。
この謎の男をドナルド・サザーランドさまが快演しております。
いいところぜんぶもっていってる感じですわな。
このミスターＸの語る暗殺の真実とは…
クライマックスはこの作品も法廷シーンであります。
大統領暗殺の黒幕とおぼしき人物を告発し、暗殺の新たな可能性を指摘するコスナーさま。
大統領暗殺の報告書の矛盾点を法廷で検証します。果たして評決はいかに…
物語の主人公、コスナーさまが演じるのは実在の判事、ジム・ギャリソンさまでございます。
映画にはギャリソンさま本人も出演しておりまして、氏が演じるのは、矛盾だらけの報告書を作

成した委員会の責任者ウォーレン氏。
まさにストーン監督の超ブラックジョークともいえるキャスティングですね。
ちなみにウォーレン報告書、「事件に関連する無実の人が損害を受けないように」との観点から、いまだに一部は非公開のままです。
この報告書が完全は形で見ることができるのは2039年であるとこのことです。

# 暗くなるまで待って

１９６７年アメリカ映画
監督　テレンス・ヤング
主演　オードリー・ヘップバーン、アラン・アーキン、リチャード・クレンナ

ブロードウエイで大ヒットしたフレデリック・ノット先生の舞台劇の映画化です。
フレデリック・ノットさまといえば、ヒッチコック監督の「ダイヤルＭを廻せ」の原作戯曲もこの人の手によるものでございます。
密室劇が得意なんですなあ。
オードリー・ヘップバーンさまが盲目の美人妻を演じます。
夫が海外出張の帰りに、謎の女から人形を預かります。
この人形の中には麻薬が縫いこまれていたわけですね。
で、この麻薬を取り戻そうとする悪人たちがヘップバーンの家に置いている人形を狙うわけでございます。
夫が出かけてから、一人になったヘップバーンの家に、入れ替わりたちかわり悪人たちが訪れます。
悪人だから適当なこと言ってあがりこむわけですね。
で、ヘップバーンが盲目なのをいいことに、普通の会話をしながらゴソゴソやるわけでございます。
それでも人形は見つからない。
遂にキレキレのワル登場。
アラン・アーキンさま熱演でございます。
ナイフにジュラルディーンなんて名前をつけるようなアブナイ男。
アーキンさまは強行手段にでるわけですね。
こっそり探して見つからないなら脅してもいいから強引に奪ってしまえ、ってなもんです。
そしてクライマックスでは、暗闇の中でのヘップバーンさまとアーキンさまの追いかけっことなるわけでございますな。
私が劇団をやっているころは、まだけっこうこの作品が舞台で上演されておりました。
「ダイヤルＭを廻せ」はほとんど上演されていなかったようですね。
「暗くなるまで待って」って作品は女優さんの演技力が試されるみたいな芝居なので、演技派女優さんがたはけっこうチャレンジしてみたい作品なんでしょうね。
ちなみに私の周囲の男性俳優陣の「やりたい芝居」第一位は、ダントツで「十二人の怒れる男」でございました。

# 氷の微笑

１９９２年アメリカ映画
監督　ポール・バーホーベン
主演　マイケル・ダグラス、シャロン・ストーン

エロティックサスペンススリラーでございます。
作品どうのこうのとか、サスペンス描写どうのこうのとか、トリックどうのこうの以前に、シャロン・ストーンさまがノーパンミニスカートで足を組み替える場面だけがやたらと有名になってしまった不遇な作品でございます。
私も喜びいさんでビデオ借りた記憶がありますねえ。
例のシーンを静止画で見たりコマ送りしたり。
でもあんまりよくわからなかったです。よくわからなかったって何がやねん。
まったくもってわかりやすい、普通のスケベ親父の目線で見てしまった映画ではありますが、実はなかなか面白いサスペンス映画でございます。
中年男が全裸でベッドに縛りつけられてアイスピックで殺されます。
彼女の恋人で作家のストーンさまが容疑者として浮かぶわけですな。
事件の数ヶ月前に発表された彼女の小説が今回の事件とそっくりだったってのが容疑者とされた理由だったわけですが、果たして犯人は彼女なのだろうかって考えたのが今回の事件担当の刑事ダグラスさま。
調べていくうちに、ダグラスさま、だんだん彼女に惹かれていくわけですな。
ダグラスさまは相棒の刑事とか友人の精神科医なんかの協力で犯人を追います。
そしてあっと驚く結末でございます。
作品の中では、誰が犯人だったかってことが明確に描かれないってのが最大のポイントなのかもしれません。
けっこう映画を見た人どうしで意見が分かれたりして、実際のところ「誰が犯人なんよ」、みたいな終わり方をします。
こんなんありでしょうか。
しかしながら、何度か見たら犯人がわかるような伏線がはられております。
二年に一度くらい放送されている「綾辻行人＆有栖川有栖からの挑戦状」なんかを見ておられる人なら見抜くことができる伏線かと思いますが。
そうです。その人が犯人です。
犯人が誰であるかわからないようにしている割に、メモとかとりながらけっこう真剣に見ている人とぼわあんって感じで映画を見ている人とでたどりつく犯人が同じってのはいただけないなあ。
真剣に見ないと犯人がわからないって作品だったらもっと真剣に見て、もっと好きになった作品かもしれませんが。

# コレクター（１９９７）

１９９７年アメリカ映画
監督　ゲイリー・フレダー
主演　モーガン・フリーマン、アシュレイ・ジャッド、ケリー・エルウエス

ジェームズ・パターソンさま原作の「刑事アレックス・クロス」シリーズの第一弾。
それならそうとちゃんと言ってくれよって感じです。
というのも、主演と予告編の雰囲気だけで勝手に勘違いしまして、この作品の続編にあたる「スパイダー」とこの作品がごっちゃになってしまいまして、見てないのに「スパイダー」のテレビオンエア見逃してしまいました。
「コレクター２」とかにしてくれたらちゃんと見たのに。
ちなみに「スパイダー」のビデオ版タイトルは「スパイダー／コレクター２」だったそうです。
さて「コレクター」のご紹介。
女性連続誘拐事件が発生します。アレックス・クロス刑事＝フリーマンさまは、姪が事件に巻き込まれた様子であることを知って現地に向かいます。
それまでに十人近い人数が誘拐されていますが、殺されて発見されたのは二人。
この二人が誘拐された順番に殺されていなかったことから、犯人の誘拐の目的は殺人ではないこと、そして姪はまだ監禁されて生きている可能性があると考えます。
そんななか、行方不明になっていた外科医ジャッドさまが犯人のもとから脱出し、生還します。
フリーマンさまはジャッドさまの協力を得ながら、犯人逮捕を逮捕すべく奮闘することになります。
サスペンス映画のわりにはあまり盛り上がらなかったと感じるのは私だけでしょうか。
そもそも誘拐した女性に逃げられるってのが犯人まぬけすぎ。
まさかそんな設定ありえへんってついつい思ってしまったもんで、最初はアシュレイ・ジャッドさまを疑っちゃいました。
結果的にシリーズ作品になってしまったこの「アレックス・クロス」シリーズ。
作品の一枚看板にしたらモーガン・フリーマンさまはちょっと弱いかもしれないですね。
フリーマンさまに華がないって言うつもりではありませんが、もうちょっと別のキャストで見てみたかった素材でございます。

# 依頼人

１９９４年アメリカ映画
監督　ジョエル・シューマッカー
主演　スーザン・サランドン、トミー・リー・ジョーンズ、ブラッド・レンフロ

ジョン・グリシャムさまの傑作サスペンスの映画化でございます。
とにかく面白く見ることができた作品です。サスペンスとしても一級品ですし、リーガルサスペンスとしてもとてもよくできています。
トミー・リー・ジョーンズさまがとにかくいいですよね。
記憶によると、この映画の時期あたりから急にいろいろな映画に出演するようになったはずです。
さて物語。ひょんなことからマフィアの秘密を知ってしまった少年。
少年はマフィアに命を狙われることになります。
しかし警察はあてにできない。少年はトレーラーハウスで暮らす貧しい階層で、彼のいう事などまともにとりあってもらえないわけです。
少年はわずか１ドルを持って弁護士事務所をまわります。
ここでももちろんとりあってもらえないわけですが、ただ一人彼の話を聞いてくれた弁護士がおりました。
これがサランドンさまでございます。サランドンさまは少年の依頼をうけ、調査を開始します。
しかし、少年の存在を知った検察側ジョーンズさまは、彼を法廷で証言させようと動くわけでございます。
しかしこれはまだまだ物語の序盤部分でありまして、ここからとんでもなくサスペンスが盛り上がってくるわけですね。
ラストもとってもいい感じです。ハリウッド的であってハリウッド的ではないラスト。
ちょっとわかりにくい説明ではありますが、そんなラストです。
とりあえずサランドンさまとジョーンズさまの演技合戦を見るだけでも値打ちのある一本でございます。

# ザ・ファーム　法律事務所

１９９４年アメリカ映画
監督　シドニー・ポラック
主演　トム・クルーズ、ジーン・ハックマン、ジーン・トリプルホーン

今日も昨日に引き続き、ジョン・グリシャムさまの傑作サスペンスの映画化です。
「ペリカン文書」以降、この人の小説が続けて映画化されておりますが、どれもかなり面白い。
とにかく物語が面白いんですよね。
っていうことは、やっぱり原作がよくできているってことになるでしょうね。
ものすごく面白いジョン・グリシャム作品を、名匠シドニー・ポラック監督が映画化。
それだけじゃなくて、トム・クルーズさまを名優として開花させてしまった作品でもあります。
と、これは私がそう思っているだけなのですが。
大学のめっちゃええ成績で卒業したクルーズさま。彼は金持ち相手の大手法律事務所で働くことになります。
順風満帆の社会人生活のスタートって感じですが、この事務所には謎の死をとげた四人の弁護士がおりまして、彼らの死には何やら秘密がありそうなわけです。
その秘密を探ろうとするクルーズさまとそれを隠そうとする上司のハックマンさま。
この二人の演技合戦がすばらしいです。やがて事務所を影で操る巨大な悪の存在が浮かび上がり、クルーズさまは自分の命を危険にさらしながら隠された証拠を探し、そして最後の賭けにでるわけでございます。
とにかくクルーズさまが良いですね。
びっくりしました。この人、競演者運がすごく良い役者さんやなあって思いますよね。
本作では名優ジーン・ハックマンさまだったし、同じ法律ネタの「ア・フュー・グッドメン」ではこれまた天下の名優ジャック・ニコルソンさまだったし。
こんなレベルの役者さんを相手に弁護士役をやるわけだから、そら演技も上達しますわなあ。
監督運もすごくいいですよね。オリバー・ストーンさまにシドニー・ポラックさまにキューブリックさまにジョン・ウーさまにデ・パルマさまでしょ。
まあウーさまとデ・パルマさまはプロデューサーとして自分が選んだ監督さんですが。
スピルバーグさまとも仕事したし。本当、うらやましい限りですよね～

# スニーカーズ

１９９２年アメリカ映画
監督　フィル・アルデン・ロビンソン
主演　ロバート・レッドフォード、シドニー・ポワチエ、ダン・エイクロイド、リバー・フェニックス

テーマ別につらつらと作品をご紹介していくシリーズ、サスペンス映画編。
今日は豪華キャストで製作されたハイテクサスペンス作品。
なんと主演はロバート・レッドフォードさま。
この人、監督業に進出してからはどうも堅い役ばかりがまわってきてしまって、若いころの代表作「スティング」のような洒落た映画から遠ざかっていたように感じますね。
「明日に向かって撃て」もけっこうしゃれっ気のある役だったですが。
なんか久々に明るく立ち回るレッドフォードさまを見たような気がします。
「スニーカーズ」ってのは、主人公たちのチームの名前です。
依頼をうけた会社に侵入し、その会社のセキュリティの弱点をみつけるという仕事をやっているチームですな。
元ハッカーとか元ＣＩＡだとか、政府の情報に精通している男だとかがメンバーでございます。
ある日、彼らのもとに政府から依頼がきます。
ある博士が開発した「ブラック・ボックス」ってえ暗号装置。
どうやら博士はその装置を他国に売るみたいだって話がありまして、政府としてはそいつはまずいと。
だもんで、その装置が他国に渡る前に盗みだして欲しいという依頼でございます。
チーム「スニーカーズ」は見事盗み出しに成功するわけですが、その機械は暗号装置などではなく、逆にあらゆる暗号を解読してしまうというスグレモノのマシンだったわけですな。
政府との取引に赴いた「スニーカーズ」のリーダー、レッドフォードさまですが、「政府の人間」にそのマシンを奪われてしまいます。
さらに驚くべきことに、そいつらは実は政府の人間なんかではなく、その暗号解読装置を使って、世界征服を企てるワルだったってことがわかります。
「スニーカーズ」たちは「ブラックボックス」奪還のために、難攻不落のワルボス(ベン・キングズレーさま)のビルに侵入を試みます…
いかがっすか？
面白そうざんしょ。
けっこう楽しめました。こういう深く考えずに見られる映画って好きなんですよ～
満喫してしまいました。もう一回見たい作品でございます。

# ダイヤルMを廻せ

１９５４年アメリカ映画
監督　アルフレッド・ヒッチコック
主演　レイ・ミランド、グレース・ケリー、ロバート・カミングス

テーマごとにいろいろな作品をつらつらご紹介する特集ざます。
サスペンス映画のご紹介が続いておりますです。
けっこう見てるんだなあ、サスペンス映画って。やっぱり見ている映画って偏ってるなあってちょい反省しております。
ホラーとかアクションとかサスペンスって、実はめっちゃ見てますねえ。
それに比べて、伝記ものとかミュージカルとか名作とか、そんなに見てないんだなあ。
恋愛ものとか青春ものとかもほとんど見てないんじゃないでしょうか。
そろそろ恋愛ものと青春ものいこうと思っておりますが。
さて今回のお題は「ダイヤルMを廻せ」でございます。
今回は若干ネタバレです。
この作品、未見の方はご注意下さい。
フレデリック・ノットさまの傑作舞台劇の映画化。
妻ケリーさまの自分に対する愛情が冷めたと思い込んだ男ミランドさま。
彼は妻の殺害計画を立て、それを実行に移します。
毎週小額の現金を引き出し続けて現金を用意し、ほとんど面識のないならず者を雇います。
彼に妻殺害を依頼するわけですね。犯行の詳細はすべてミランドさまが計画し、男に指示します。
ミランドさま自身はオペラハウスでアリバイを作る。
ミランドさまはオペラハウスからケリーの待つ自宅に電話をかけるわけですが、これが計画のなかにうまく取り込まれておりまして、でもたまたま公衆電話がふさがっていて予定時間に電話できなくて…とか、なかなかのサスペンス。
しかしちょっとしたことから彼の計画に狂いが生じます。
妻殺害は失敗、殺人者は逆に事故死。
しかしそこは頭脳派ミランドさま。みごとに計画を修正し、まんまと妻を殺人犯として陥れることに成功します。
ミランドさまに疑惑の目を向けるのは妻の密会相手と警部さんでございます。
ミランドさまに罠をしかけるわけですな。
ラストは実によくできています。本当に巧いラストです。舞台劇の特性を生かした、ビジュアル的にインパクトたっぷりのラスト。
密室頭脳トリックってのはこういう作品をいうんでしょうね。
何度でも見たい傑作映画であると言っておきましょう。

# 鳥

１９６３年アメリカ映画
監督　アルフレッド・ヒッチコック
主演　ティッピー・ヘレドン、ロッド・テイラー

サスペンス映画特集でございます。
この映画は純粋なサスペンスではないとは思うんですが。
ジャンル分けするとしたら、やっぱり「アニマル系パニックホラー映画」みたいな分類になるのかなあ。
原作はダフネ・デュ・モーリアさまの短編小説でございます。
中学生くらいのときにハヤカワノベルスで読んだ記憶がありますが、内容忘れてしまいました。
映画のとおりではなかったような気がするけどなあ。
なんだか理由はわからないけど、とにかく鳥が人を襲うわけです。
サンフランシスコだかロサンゼルスだかの、ハーバータウンが舞台です。
最初はカモメが人を襲うって事件が続くわけです。
やがてすげえ大量の鳥が町全体を襲うようになります。
ここらのもっていきかたがさすがサスペンスの神様ですわな。
ガソリンスタンドで給油中の店員を鳥が襲う。ノズルからあふれ出るガソリン。それがたらたらと流れていき、その先にはタバコを吸っている男性…
過不足なく情報を開示し、観客を手玉にとる演出の妙でございますな。
あちこちにサスペンスやホラーのお手本みたいな場面があって、とっても楽しめるし、勉強になります。
ホラー映画のショックシーンばかりを集めた映画「ザッツショック」で、ヒッチコック監督のインタビューとともにこの映画がとりあげられております。
「鳥」を見て「ザッツショック」を見ておられない人、是非「ザッツショック」の監督のインタビュー映像もご覧いただきたいと思います。
本当にいいことおっしゃっておられます。

# ハンニバル

２００１年アメリカ映画
監督　リドリー・スコット
主演　アンソニー・ホプキンス、ジュリアン・ムーア、レイ・リオッタ

サスペンス映画特集でございます。
アンソニー・ホプキンスさま主演の「ハンニバル」です。
あまりにも有名になってしまった「羊たちの沈黙」の続編。
あれから十年。あのハンニバル・レクター博士、再び降臨でございます。
今回は私が崇拝しているジョディ・フォスターさまは出演しておりません。
出て欲しかったんですが。残念。
ＦＢＩ女性捜査官クラリス役は、今回はガス・バン・サント版「サイコ」や「エボリューション」などに出演しておりましたジュリアン・ムーアさまでございます。
悪くはないんだけど、ちょっとイメージ違いますね。
この映画、物語の展開が非常に早いので、ついてくのが必死でした。
ＦＢＩ捜査官のクラリス＝ムーアさま。
前作でＦＢＩ研修生だった彼女は今では麻薬の売人を追う一人前の捜査官です。
麻薬組織の元締めを検挙するチームの指揮をまかされましたが、彼女の指示に従わない警察官の失敗で売人は射殺され、そこから始まった銃撃戦で警察側にも死傷者が出てしまいます。
責任者ムーアさまは現場から外されてしまいます。
そんなある日、彼女はかつてレクター＝ホプキンスさまに殺されかかった大富豪の男に呼び出されます。
大富豪はムーアさまにホプキンスさまを捕まえるように言うわけです。
彼の狙いはホプキンスさまへの復讐です。ムーアさまは汚名返上のためにホプキンスさまを捕まえようとするわけですな。
当のホプキンスさまはフィレンツェに潜伏しておりました。
地元警察の刑事は、ムーアさまらＦＢＩからの捜査協力要請を不思議に思い、色々と調べるわけです。
刑事さん、フィレンツェにいるフィル博士と名乗る男がホプキンスさまだと気づき、同時に彼には大富豪から賞金がかけられていることを知るわけですな。
刑事はホプキンスさまを逮捕しようとしますが、ザコキャラの警察官につかまるような男ではないですよね。
刑事さん、かわいそうにとんでもないやられかたをしてしまいます。
なんとしてでもホプキンスさまに復讐したい大富豪は、卑劣な罠でムーアさまを休職処分にし、彼女を助けに現れたホプキンスさまを捕らえようとします…
ここからの物語がこれまたけっこうすごいわけですが、ここから先の展開は伏せておきましょ

うね。
というか、かなり起伏の激しい物語展開ですので、限られたスペースでは巧く書けないてのもあったりして。
とにかく短い時間にいろんなことが起こります。事件てんこもり。
前作もそんな感じだったんだけど。けっこう楽しませていただいた作品であります。

# ピクニック・アット・ハンギングロック

１９７５年オーストラリア映画
監督　ピーター・ウィアー
主演　レイチェル・ロバーツ、アン・ランバート

サスペンス映画特集でございます。
サスペンス映画とかミステリー映画とかにカテゴリー分けされておりますが、こちらはとにかく微妙な作品でございます。
実際この作品をそういうジャンルに入れていいものかどうなのかよくわからないですが。
たとえて言うなら、韓国映画の「少女たちの遺言」みたいな感じ。
あの映画はけっこうミステリーの部分は解き明かしてくれましたが、この作品に関してはもっと中途半端な状態で投げ出されます。
「氷の微笑」より微妙なところで放り出されます。困ったもんだ。
１９００年に『実際に起きた事件』をもとに映画化されたお話。
すっげえ規律が厳しい名門女子学園で、ピクニックにでかけるわけなんですが、行き先の岩山「ハンギングロック」で、三人の女学生と老女性教師が岩場の間に姿を消します。
おしまい。
こんな感じで放り出されるわけですな。
結局、少女たちはどこに消えたのかっていうミステリーだとか、姿を消した少女たちがどうなったのかを描くサスペンスになるわけではなくて、そこまでのプロセスを淡々と描いて、ラストでは「少女たちはどこに消えたのでしょう、心配ですわ～」となって終わるという、よくわからない映画です。
物語の筋道を楽しむ映画ではなく、名門女子学園のヒラヒラフリルの女の子を見て、なんとなくそういう世界を楽しむ映画でございます。
でもなあ。私ってヒラヒラお嬢様よりムチムチねえちゃんのフトモモに心ひかれるタイプでございますので、ちょっときつかったですね。
心ひかれるのはお嬢様より「バイオハザード」のミラ・ジョボビッチのフトモモだし、心配になるのは「悪魔のいけにえ」のホットパンツはいたねえちゃんだし。
ちなみに、ハンギングロックでの少女の失踪事件は、原作者ジョアン・リンゼイさまの創作であるという説もあるようでございます。
だとしたらウムムって感じですなあ。どないやっちゅうねん。

# 羊たちの沈黙

１９９０年アメリカ映画
監督　ジョナサン・デミ
主演　ジョディ・フォスター、アンソニー・ホプキンス、スコット・グレン

サスペンス映画特集でございます。
五十音順に映画タイトルを並べた資料とか使っていると、こうなってしまいます。
続編の「ハンニバル」を先に紹介しちゃいましたね。申し訳ない。
この映画、サスペンス史上に輝く傑作と申し上げておきましょう。
主人公クラリス＝フォスターさまはＦＢＩの研修生です。
彼女にある仕事が任されます。
女性の連続誘拐皮剥ぎ殺人事件が起こっており、ＦＢＩとしても犯人の絞り込みができずにおります。
で、ある人物から捜査のアドバイスをとってきてもらいたいと、こういうことでございます。
その人物こそ殺人・人肉食事件で投獄されている天才犯罪者、レクター博士＝ホプキンスさまなわけです。
殺人鬼の心理分析を自ら検証してしまったホプキンスさま、捜査資料を見ただけで犯人の居住地や心理などの目星をつけた様子ですが、それを話そうとしない。
交換条件としてフォスターさま自身のことを話せだとか、留置環境を変えろだとかいろいろ言ってくるわけですね。
情報が欲しいフォスターさまはホプキンスさまに要求を受け入れると嘘を言って情報を手に入れようとします。
しかしホプキンスさまは謎めいた言葉でフォスターさまを煙にまいたりします。
しかしここで事件が動くわけですね。連続誘拐皮剥ぎ犯に、議員さんの娘が誘拐されてしまうわけです。
ここでなんとしてでも事件の早期解決を目指す警察上層部の判断によって、劇的に状況が変わり、博士はＶＩＰ犯罪者待遇になってしまいます。
で、同時にうまいこと博士を利用しようとしていたフォスターさまの嘘がホプキンスさまにばれてしまうわけです。
博士は移送されます。
しかし移送先で看守たちを惨殺して脱走。
フォスターさまはここから一人で捜査を続けることになります。
ネタバレが怖くて書けなかったですが、クライマックスのハラハラドキドキが実に良いです。
ドラマとしてもめっちゃ面白い。
かなりグロい場面とかもありますが、それを差し引いても面白さを堪能できる作品にしあがっております。

未見の方はぜひご覧くだされ。

# ボディ・ダブル

１９８４年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　クレイグ・ワッソン、メラニー・グリフィス、グレッグ・ヘンリー

サスペンス映画特集でございます。
ブライアン・デ・パルマ監督という人は、熱烈なヒッチコックファンとして有名でございます。
「悪魔のシスター」だとか「ファントム・オブ・パラダイス」あたりは別として、ミステリーサスペンスを撮りだして以降は、そこここにヒッチコック監督へのオマージュのような場面が出てきます。
「殺しのドレス」。
犯人の金髪からして「ファミリープロット」を思い出させますし（これは二重の意味でね。両方見られた方はおわかりでしょ？）、「サイコ」を意識した場面もありましたよね。
「ミッドナイト・クロス」は「泥棒成金」、「愛のメモリー」は「めまい」の逆パターンかな？
「スネーク・アイズ」の冒頭は「ロープ」の発展形だし、「ファムファタール」はこれまた「めまい」の複雑化ヴァージョンと過去のご自身の映画（「ミッション・インポッシブル」だとか「アンタッチャブル」だとか）の混成みたいな感じです。
さて今日のテーマは「ボディ・ダブル」。
すっごくわかりやすく「めまい」と「裏窓」をモチーフにしております。
主人公のワッソンさまは売れないホラー男優。
吸血鬼役なんかを引き受けるわけですが、この男、重症の（高所恐怖症ならぬ）閉所恐怖症。
棺桶に入る場面がどうしてもできなくて顰蹙をかっております。
そんな彼は金持ちの友人から留守番を頼まれます。そこは高層マンション。
隣の窓を望遠鏡でのぞくと、あらあら。めっちゃきれいなねえちゃんが着替えをしていたりするわけです。
覗きを続けているうちに、彼は隣家での殺人事件を目撃してしまいます。
ワッソンさまは（「裏窓」の主人公みたいに骨折とかはしていないわけだから）次第に事件に巻き込まれていくわけですが、そこには犯人が目撃者ワッソンさまを陥れるために仕掛けた巧妙な罠が待っているわけです。
デ・パルマさまって監督さんは、撮る作品にすっごくムラがありますよね。
大スターをほとんど使わずに、アイデア勝負みたいな低予算作品を撮っていたかと思うと超大作撮ったり。
職人っぽい監督さんですなあ。
この作品は低予算作品の典型みたいな感じ。
監督の技法はなかなか楽しめますが、肝心のミステリのトリックがあまりいけてないので、残念って感じです。

惜しい作品ですね〜
ちなみにタイトルの「ボディ・ダブル」ってのは、代役のことです。
監督は「殺しのドレス」のアンジー・ディッキンスンさまのシャワーシーンの代役女優さんを見てこの作品を考えついたそうです。
ってことは、あの体はディッキンスンさまじゃなかったんだ。そらそうやわな。

# ミザリー

１９９０年アメリカ映画
監督　ロブ・ライナー
主演　ジェームズ・カーン、キャシー・ベイツ

サスペンス映画特集でございます。泣く子も黙るスティーブン・キングさま原作のホラー系サスペンスの映画化。
故・淀川長治先生風に表現すると、「こわい、こわい映画です」って感じでしょうか。
スティーブン・キングさまクラスの作家の作品になると、「原作の力に負うところが大きい」みたいな評論のされかたしたりしますが、この作品に限っていえば、作品の成功は女主人公（なんでしょうね、やっぱり）を演じたキャシー・ベイツさまの力ですよね。
カーンさまが演ずるのは作家でございます。
「ミザリー」というタイトルのシリーズ小説で人気作家になっております。
しかしながら本人は「ミザリー」シリーズを書くのがいやになっておりまして、発売を間近に控えた最新刊で主人公を死なせてシリーズを完結させようとしています。
執筆のために別荘にこもって、その帰る途中、彼は運転を誤って転落事故を起こしてしまいます。
奇跡的に助かった彼が目覚めたのはベイツさま演ずる看護師の家。
彼女がカーンさまの命を助けたわけです。しかし寝たきり状態です。
看護師のベイツさまは小説「ミザリー」の大ファン。自分が助けた男が「ミザリー」の作者だと知って大感激するわけですね。
で、彼女は「ミザリー」の最新刊（というか最終巻ですわな）の原稿を読んでしまうわけですな。
彼女の態度は本を読み終えた瞬間から激変します。
「なんで主人公を殺したの？」みたいなノリです。
さあ、ここからが怖い怖いですよ。ベイツさまはカーンさまを監禁します。
そして小説「ミザリー」の改筆を強制するわけですな。
「主人公は死ない、そしてまだまだミザリーシリーズは続く」って内容に書き直せとカーンさまにせまるわけです。
そこからはとってもホラーな世界に入っていくわけです。
カーンさまはベイツさまの拷問を受けながらミザリーを書き直すことになってしまいます。うひょおおお。
キャシー・ベイツさま、文字通りの怪演。
彼女はこの作品の演技で、アカデミー主演女優賞を受賞しました。ジェームズ・カーンさまはイマイチ精彩に欠けるって感じ。
もうちょっと何とかならんかったんでしょうか。

# ゆりかごを揺らす手

１９９２年アメリカ映画
監督　カーティス・ハンソン
主演　レベッカ・デモーネイ、アナベラ・シオラ、マット・マッコイ

サスペンス映画特集でございます。
普通のサスペンス映画だろうなあって思って、あまり期待しないで見たけど、思いのほか面白かったのでけっこうよく覚えている作品でございます。
レベッカ・デモーネイさまがけっこういいですよね～
こういう人と知り合いになりたいもんだ。
デモーネイさま、かわいいんだけどけっこうすごい役でございます。逆ギレ女というか何というか。
デモーネイさまは産婦人科医の妻。
出産間近の幸せな妻でございます。
しかし産婦人科医の夫が少し曲者だったわけですね。
彼は診てもらいにきた患者さんにセクハラをするようなトンデモ医師だったわけです。
怒った患者のシオラさまは医師を告訴。
追い込まれた医師は自殺してしまいます。
妻デモーネイさまは夫の死のショックで流産。
あららかわいそう。
やがてシオラさま夫婦にはかわいい赤ちゃんが生まれます。
夫婦はベビーシッターを雇うことになるわけですが、なんとなんと、やってきたベビーシッターはデモーネイさまだったわけです。
そう、彼女は産婦人科医の妻であった過去を隠し、復讐のために夫妻に近づいてきたわけです。
ぎえええええ。かくして逆恨み女の復讐ドラマが始まるわけでございます。
デモーネイさまの動機部分がかなり同情できるように描かれているので、被害者加害者どちらにも感情移入できる構造になっております。
ある意味哀れな女性としてデモーネイさまを描いたことで、単調になりがちなホラーサスペンスに奥行きがでたように思いました。
いったい何が原因で恨みを買うかわからない、現代社会の危うさみたいなものが巧く描かれてましたです。
なかなか面白い作品です。
とにかくデモーネイさまが色っぽくて、かわいくて、そして怖い。
もっと出てきて欲しい女優さんだったんですが。このあとあまり見ませんね～

# ルール

１９９８年アメリカ映画
監督　ジャミー・ブランクス
主演　ジャレット・レト、アリスア・ヴィット、ジョシュア・ジャクソン

サスペンス映画特集でございます。
えっとね、この作品はカテゴリーとしてはホラーに属する作品だと思います。
「スクリーム」とか「ラストサマー」あたりと同系列の作品。
とりあえずそういう予備知識をもって、心の準備をして見ていただきたいですね。
けっこうエグい場面とかあります。それでもけっこうみんな見ているみたい。
というのも、「スクリーム」とか「ラストサマー」みたいに、売り出し中の若手の美男美女俳優さんたちが大挙して出演されているからだそうです。
最近のこういう系統のホラー映画って、昔からは考えられないくらい出演者のレベル高いですよね～
「ラストサマー」なんてジェニファー・ラブ・ヒューイットさまとかサラ・ミッシェル・ゲラーさまとか出てましたもんね。
最近の若手俳優さんのことよくわからないですが、この作品に出演しているのも売り出し中の若手アイドル俳優さんたちらしいです。
えっとねえ、作品は「都市伝説」がモチーフです。
こういう話に詳しい人ならわかると思いますが、「めっちゃ怪しいガソリンスタンドがあって、店員はどうやら自分を拉致しようとしているようで、必死でそこから脱出して、車を走らせたら、そこに残された店員が『違う、後部座席に刃物を持った男が乗っていることを知らせようとしてたんだ』ってつぶやいた」とか。
「ルームメイトが部屋でごそごそしてて、ボーイフレンドとイチャイチャしてるのかなとか思って、電気をつけずに自分の部屋にいったら、翌朝ルームメイトが殺されてて、壁に血文字で犯人が、『電気つけなくてよかったな』って書いてあった」とか。
ひえええええ。
書いてるだけでめっちゃ怖い。
そういう都市伝説が物語の中に織り込まれています。
ほうほう、こういう手法があったのね、って感じです。
連続殺人事件が起きまして、その事件に巻き込まれていく女子大生と、スクープを追う学生新聞の記者が事件の謎を追うって話。
話としてはそれだけなんですが、やっぱりところどころでででてくる都市伝説的恐怖が作品の絶妙なアクセントになっております。
実は都市伝説系怪談、めっちゃ好き。
ホラーサスペンス的な評価は別として、けっこう楽しんで見てしまいましたです。

# レッドツエッペリン・狂熱のライブ

１９７６年アメリカ映画
監督　ピーター・クリフトン他
主演　ジミー・ペイジ、ロバート・プラント、ジョン・ポール・ジョーンズ、ジョン・ボーナム

伝説のハードロックバンド、レッドツエッペリンのライブフィルムと、この映画用に撮影されたメンバーそれぞれが主演するプロモフィルムっぽいフィルムが、絶妙の編集でまとめられております。
レッドツエッペリンっていうと、ハードロック界の頂点に君臨し続けたスーパーグループです。
この映画が製作された１９７６年ごろってのは、その後のロック界を牽引することになるクイーンだとかキッスだとかはまだデビューしてまもなくで、ハードロックのもう一方の雄、ディープ・パープルは解散直前くらいの時期だったと記憶しております。
ライブが収録された時期は、グループとして脂がのりきっていたころです。
すんげえ名曲のオンパレード。
お気に入りは「ロックンロール」「天国への階段」「モビーディック」「ノークオーター」「胸いっぱいの愛を」あたりのナンバーです。
「ノークオーター」「胸いっぱいの愛を」で使われる楽器、何というのでしょうか。赤外線を使った楽器をジミー・ペイジさまが熱くプレイ。めっちゃかっこええ。
「幻惑されて」でジミー・ペイジさまが、「モビーディック」ではジョン・ボーナムさまが、「ノー・クオーター」ではジョン・ポール・ジョーンズさまがメインになってイメージビデオを製作。
ロバート・プラントさまは「永遠の詩」「レイン・ソング」ね。
今は亡きジョン・ボーナムが、「モビー・ディック」のドラムソロをバックに、サーキットでレーシングカーぶっとばすシーンが大好きです。

# リーサル・ウエポン

１９８７年アメリカ映画
監督　リチャード・ドナー
主演　メル・ギブソン、ダニー・グローバー、ゲイリー・ビジー、トレーシー・ウルフ

人気シリーズの第一作。
ハードアクションが売り物の刑事ものでございます。
メル・ギブソンさまっていいますと、「マッドマックス」で注目を集めた役者さんです。
「マッドマックス」以降、イマイチはじけることができていませんでしたが、このシリーズで見事にトップ俳優の仲間入りを果たしました。
ムチャするメル・ギブソンさまと、彼をおさえるグローバーさま。
けっこうええ感じで役割分担ができております。
刑事仲間から人間兵器（リーサル・ウエポン）と呼ばれている刑事、ギブソンさま。
妻を失ってむちゃくちゃばっかりしています。
そこで警察のえらいさんは慎重派の老刑事、グローバーさまをギブソンさまのパートナーにするわけですね。
で、二人は麻薬組織を壊滅させようと走り回るわけです。
物語そのものはよくある刑事ドラマって感じです。
凸凹コンビがあーだこーだ言いながら麻薬組織壊滅…　あるある。
とりあえずよくある設定ってハンデをはねのけるのは、やっぱりアクションですわ～
むっちゃびっくりするようなアクションシーンの連続。
とりあえず冒頭の、ギブソンが自殺志願者といっしょにビルから飛び降りるとんでもないシーンが印象的。
病んじゃってるギブソンさまが、とんでもなくきったねえ部屋で、自殺未遂を繰り返すなんて設定もすごく面白かったです。

# めぐり逢えたら

１９９３年アメリカ映画
監督　ノーラ・エフロン
主演　トム・ハンクス、メグ・ライアン

原題は「スリープレス・イン・シアトル」。
物語のなかでの主人公の呼び名ですね。
ペンネームとかラジオネームとかハンネとか、そんな感じでさぁね。
この作品の場合はラジオの人生相談の中での呼び名だからラジオネームでしょうか。
シアトル在住の建築家がハンクスさまでございます。
彼は妻を亡くしておりまして、そのショックから立ち直れないでいるわけですね。
ある日、彼の息子がラジオの人生相談に父のことを相談します。
たまたまそれを聞いていたボルチモア（だったかなあ）在住のライアンさまが、会ったこともない彼に次第に思いをよせていくことになるってえ話でございます。
なんでも往年の名作「めぐり逢い」をモチーフにした場面なんかがあるらしいのですが、残念ながらその作品は未見でしたので、本作のどの場面がどうだったのかってことにつきましてはコメントできませんです。
ごめんなさいね～
ともあれ、私が見た数少ないラブストーリーの一作でございます。
しかしねえ、何と言いましょうかねえ。
困りますよね。
メグ・ライアンさまだとかトム・ハンクスさまだとか。
恋愛ドラマを中心に活躍する人って、そのまま恋愛映画路線を進んでいってしまう傾向にあるから、その人の作品ほとんど見たことないって状況になってしまうこともしばしば。
さすがにトム・ハンクスさまは何本か見たことあるけど、メグ・ライアンさまなんかはほとんど映画見てないですね。
ヒュー・グラントさまだとかジュリア・ロバーツさまだとかも実はほとんど見てなかったりします。
困ったもんです～

# ピンク・パンサー３

１９７６年イギリス映画
監督　ブレーク・エドワーズ
主演　ピーター・セラーズ、ハーバード・ロム

ブレーク・エドワーズ監督、ピーター・セラーズさま主演の「クルーゾー警部シリーズ」の第四弾。
第一作の「ピンク・パンサー」と第三作「ピンク・パンサー２」の間に「暗闇でドッキリ」って作品が入るため、クルーゾー警部ものとしては第四作目にあたります。
そもそもピンク・パンサーってのは、第一作で大泥棒デビッド・ニーブンさまが狙った宝石の名前です。
続編でもこの宝石が登場しました。
本作はピンク・パンサーをタイトルに冠した第三弾。この作品から「ピンク・パンサー」は物語に登場する宝石の名前から、シリーズ名として独り歩きすることになります。
前作「２」でクルーゾー＝セラーズさまの暴走の被害にあい、頭の線がブチ切れて病院入りした元署長のハーバート・ロムさま。
彼はあらゆる手段を使ってクルーゾーを葬ろうとします。
今回はセラーズさまとロムさまの戦いってことになります。
しかししかし、映画の中で一番熱く戦うのはクルーゾー家の召使いケイトーとの戦いだったりして。
しかしなぜ召使いとあんなに熱く戦わなければいけないんでしょうか。よくわからんけど。
やたら有名になったピンク色の豹はオープニングアニメで見ることができます。
このオープニングアニメも評判になりまして、後にアニメ作品として独立することになります。
いろいろな意味で画期的作品だったわけですね～

# 悪魔の赤ちゃん

１９７４年アメリカ映画
監督　ラリー・コーエン
主演　ジョン・Ｐ・ライアン、シャロン・ファレル、ガイ・ストックウェル

いったいどないやねんな系のＢ級ホラーでございます。
この映画のお話の前に、ちょいとウンチク。
青年雑誌「ビッグコミック」だったと思いますが、その雑誌に一時期、「夜光虫」って医学マンガが連載されておりました。
私が高校生くらいの時期だったかなあ。
その「夜光虫」ってマンガ、いきなり連載中止に追い込まれました。
なぜかってえと、障害をもった胎児の命にかかわる問題を描いちゃったからです。
確かね、赤ちゃんが生まれてくる前の検査で、胎児に障害があることが判明しまして、産婦人科の医師が赤ちゃんが生まれてくる前に胎児を安楽死させて、死産として処理すると、なんかそういう話だったような記憶があります。
これがいけなかった。
生まれてくる前に障害児であることがわかってしまうってことは残酷な話です。
マンガではその重荷を両親に背負わせるのは酷だから、あえて赤ちゃんを安楽死させるんだって話でしたが、同じ障害をもちながら懸命に生きている人の気持ちを考えなければいけません。
このマンガのはるか以前に、かの「ブラックジャック」でも同じような話がありました。
生まれても生き続けることが難しい「無脳児」を出産させるか否か、みたいな話。
赤ちゃんネタではけっこうデリケートな問題がついてまわるわけです。
そんなヒューマニズムをブチ壊すような問題作がこの映画。
薬物公害ですんごいグロテスクな赤ちゃんが生まれてしまいます。
赤ちゃんは医師や看護師を殺して姿を消します。
それからというもの、町では同様の手口の惨殺死体が発見されるわけですな。
そらあんた、逃げた赤ちゃんがやってることに違いないやおまへんか。
かくして、逃げた「赤ちゃん」捕獲プロジェクトが始まるわけですね。
なんぼなんでもこういう話はないやろ。
とってもブルーな気分にさせられた作品でございます。
ちなみにモンスターベイビーの特殊メイクを担当したのは、名手リック・ベイカーでございます。
こんな仕事せんでもええのに。

# オーシャンと１１人の仲間

１９６０年アメリカ映画
監督　ルイス・マイルストン
主演　フランク・シナトラ、サミー・デイビス・ジュニア、ディーン・マーティン、アンジー・ディッキンスン

ジョージ・クルーニーさま、ブラッド・ピットさま、マット・デイモンさま、アンディ・ガルシアさま、ジュリア・ロバーツさまらの主演で映画化された「オーシャンズ・イレブン」。
この娯楽大作の元ネタはこの作品だったわけでございます。
調べてみましたら１９６０年版の原題も「オーシャンズ・イレブン」だったです。
ってことは、オリジナルのシナトラさま版も、リメイクのクルーニーさま版も、原題は同じだったわけです。
しっかし。
それにしてもこの邦題。むっちゃいなたい。
「オーシャンと十一人の仲間」。
『仲間』でっせ。
最近こういうタイトルつけないですから、それだけですんごい古い映画だってことがわかります。
物語の大筋はリメイク版とあまり変わらなかったような気がします。
「気がします」というのは、私がこの映画見たのは小学校六年くらいの頃なんですよね～
大晦日の深夜１２時に、カジノの大金をいただいちゃおうって犯罪映画。
とりあえず小学校六年のころの私は、大晦日ってえと除夜の鐘を聞きながら過ごすもんだと思い込んでいましたので、映画の中で描かれていたように、カジノでギャンブルしながらカウントダウン、みたいなシチュエーションをすごく変に思ってしまいました。
当時すんげえ有名だった「シナトラ一家」勢ぞろいです。
サミー・デイビス・ジュニアさまだとかディーン・マーティンさまだとか。
そういえばこの映画見たころって、けっこうシナトラ一家の映画、テレビでやってましたね。
ディーン・マーティンさまものが多かったような気がしますが。
本当、人気ありましたよね。すんごく懐かしく思い出してしまいました。

# ジョニー・ハンサム

１９８９年アメリカ映画
監督　ウォルター・ヒル
主演　ミッキー・ローク、エレン・バーキン、エリザベス・マクガバン

とっても評価が難しい俳優、ミッキー・ロークさまの主演作品です。
ミッキー・ロークさまっていやあ、「ナイン・ハーフ」「イヤー・オブ・ザ・ドラゴン」に主演して、そこからなんだかあまり選り好みせずにいろんな作品に主演を続けて、で、どの作品もイマイチ印象に残らない感じでだんだん忘れられていっちゃった～
みたいな感じがしてしかたないです。
実際に私にとって強烈な印象が残っているのは、やっぱり「ナイン・ハーフ」「イヤー・オブ・ザ・ドラゴン」「エンゼル・ハート」あたりでしょうか。
この映画以外にも「バーフライ」とか「死にゆく者への祈り」だとか見ましたが、なんかねえ。
どの映画も似たような感じだし、演技もそんなに違わないような気がするしい。
そんな感じの一本です。
めっちゃ醜い男がおります。
先天的に、例えば顔の骨の一部が欠損しているとか、そんな感じです。
ついたあだ名がジョニー・ハンサム。
すんげえ悪質な、逆説的なあだ名ですなあ。
その醜さのために、社会から相手にされずに、日陰ものとして生きております。
ある日彼は仲間に裏切られ、親友を失い、その上刑務所送りになってしまいます。
刑務所でもひどい目にあい続ける「ジョニー・ハンサム」。
彼は刑務所での主治医に、整形手術をして人生を生き直さないかと言われます。
大整形手術を受け、彼はどんな人生を歩くのでしょうか。
最近めっきりミッキー・ロークさまの姿、見なくなったな～
って思っていましたが、最近になって「アイアンマン２」とか「エクスペンダブルズ」、さらにその少し前の「レスラー」とかで華麗なるカムバックを見せてくださいました。
なんでも、映画に出ていなかった時期って、かなり大規模な詐欺事件にかかわってしまっていたのだとか。
だまされたわけでも、だましたわけでもないようですが。
やっぱりハリウッドでも、こういう事件の当事者になっちゃうと、映画とか出られなくなるんですね。

# ゲッタウェイ（１９９４）

１９９４年アメリカ映画
監督　ロジャー・ドナルドソン
主演　アレック・ボールドウイン、キム・ベイシンガー、ジェームス・ウッズ、マイケル・マドセン

サム・ペキンパー監督の名作、「ゲッタウェイ」のリメイク作品。
前作はスティーブ・マックウィーンさまとアリ・マッグロウさまのコンビ。
今回はアレック・ボールドウインさまとキム・ベイシンガーさまのコンビです。
物語は前作の「ゲッタウェイ」をご紹介したときに書いたと思いますが。
でも一冊目の前半でご紹介した作品ですしね。
とりあえずストーリーのおさらい。
銀行から出所したばかりのワル、ボールドウインさま。
彼の妻はベイシンガーさま。出所したばかりにもかかわらず、ボールドウインは組織のボス・ウッズさまの指示で、競馬場（だったかなあ。ドッグレースだったかも）の売上金を強奪します。
その襲撃チームにいたのがマドセンさまです。
大金を手にしたボールドウインさま、仲間のマドセンさまを撃ち、ウッズさまを殺して、ベイシンガーといっしょにメキシコに逃げようとします。
そんなボールドウインさまを追うのが一命をとりとめたマドセンさまでございます。
ってことで、ボールドウインさまとマドセンさまの間で、お約束ではありますが銃撃戦の火蓋が切っておとされるわけですね。
前作のころって、今ほど撮影技術がなかったわけでございまして、そもそもの映画の画質なんかもちょっとザラザラした感じでした。
それがさすがに９０年代の映画になりますと、画質なんかすごくクリアで、それが逆にメキシコの国境近くの砂っぽい感じを損ねてしまっているような、いないような。
画質がクリアだからかそうじゃないのかわからないですが、ボールドウインさまもベイシンガーさまもイチャイチャしすぎ。
なんか甘ったるい感じがしてしかたないです。
この作品に限っていえば、前作のほうが面白くて、リメイク版はちょっと苦戦していたようですね。
ちなみにこの映画の主題曲、リチャード・マークスの「ナウ・アンド・フォーエバー」はめっちゃベタベタダルダルのラブソング。
それはそれでええ感じでお気に入りだった私でございまする。

# 怒れるドラゴン・不死身の四天王

１９７３年台湾映画
監督　ジミー・ウォング
主演　ジミー・ウォング、チェン・シン、クム・カン、チャン・ユー

ブルース・リー以前の香港カンフーアクション映画をひっぱっていたジミー・ウォングさまの監督作品でございます。
私が把握している限り、ジミー・ウォングさまが日本で最初にカンフースターとして認知されたのは「燃えよドラゴン」公開直後に封切りされた「片腕ドラゴン」あたりでしょうか。
それ以前に座頭市シリーズにゲスト主演したこともあるようなんですが。
そんなジミー・ウォングさまの監督・主演作品です。
暗黒街のボスをやっつけるために集まった四人のカンフーの達人たちの戦いを描いた作品。
物語的にはほんまこんなもんなんですね。
この時期のカンフー映画って、物語的にはどれもほとんど同じようなもんだったりして。
で、ちょっくら思い出話。
私が映画に目覚めたのは「燃えよドラゴン」から始まるカンフー映画ブームのころでした。
この頃ってねえ、ビデオなんかなかったわけですから、カンフー映画を見るのに苦労しました。
日ごろはポルノ映画ばっかり上映しているようなＢ級映画館に、二本立てで上映されたりしておりました。
上映期間は一週間が基本だったですね。
そのころ私って、小学校の五年くらいだったですから、その週の土曜日曜あたりに映画館に行くことができなかったら見逃すしかないわけでして。
この映画もかなり苦労して見に行った記憶があります。
さてさて、この映画の準主役のチェン・シンさまは、「危うしタイガー」ってカンフー映画で主役はってました。
ドラゴンじゃなくてタイガーってのがすごく気になった作品です。
私が知る限り、タイガーはチャーリー・チャンさま主演の「怒れタイガー」と、このチェン・シンさまの「危うしタイガー」の二本だけだったと思います。
まあ思い出話はこのへんにしといて～。
とりあえず「不死身の四天王」が主人公ですから、映画ポスターとかチラシとか、ムキムキの上半身裸の横分けのおっちゃんが四人並んでおりました。
なんか、すっげえ変に思ったことだけよく覚えております。
とりあえず変ですわな。ビジュアル的に。まあ別にいいんだけど。

# ミッション

１９８６年アメリカ映画
監督　ローランド・ジョフィ
主演　ロバート・デ・ニーロ、ジェレミー・アイアンズ、レイ・マカナリー

「滝の上流で起こったことは、決して誰にも話してはならぬ」だったでしょうか。この映画のコピー。
この映画のレンタルが解禁になった時期、私はロバート・デ・ニーロさまにめっちゃはまっておりまして、それこそ何本もの作品を一気に見ましたです。
「レイジング・ブル」だとか、「ニューヨーク・ニューヨーク」だとか「恋におちて」だとか「ジャックナイフ」、「真実の瞬間」、「レナードの朝」、「未来世紀ブラジル」なんかも見ましたですね。
どんな作品のどんな役であっても、すごい集中力で役柄に取り組むって姿勢はとにかく学ぶべきところがありますね。
さあて、「ミッション」の話。
１８世紀中ごろの南米に赴いた伝導師たちの物語。
神父アイアンズさまは、南米の奥地の村で原住民たちに信頼されています。
一方のデ・ニーロさまは奴隷商人。
村へ奴隷入手のために来ていたわけですが、アイアンズさまとの交流から伝導活動に参加します。
しかしこの土地の征服を目論むスペイン・ポルトガルと対立し、両国の軍隊と戦うことになります。
様々なメッセージがてんこもりです。
しかし私本人にキリスト教への理解が乏しいせいもあるのでしょうか、「ちょっと難しい映画やなあ」って印象が残りました。
作品冒頭で、十字架に縛られた男が滝から落ちていくシーンがありまして、この撮影でエキストラが一人亡くなったってえ噂が流れたりしました。
迫真のシーンでございます。
作品全体を象徴するようなシーンではありますが、この場面だけ作品の中で異質な場面のような気がしました。
どうなんだろ。

# ジョー・ブラックをよろしく

１９９８年アメリカ映画
監督　マーチン・ブレスト
主演　ブラッド・ピット、アンソニー・ホプキンス、クレア・フォーラニ

とっても苦手な恋愛系ファンタジー映画でございます。
ホプキンスさまは大金持ちの社長さんでございます。
心臓の持病に苦しんでおります。誕生日を間近に控えた彼のもとに現れたのは死神。
ホプキンスさまを連れにきたわけですな。普通に死神なんかが出てくるのがいかにもファンタジーですね。
しかし死神さん、人間世界を体験したいと思ったわけですな。
となると行動が早い。だって神様だもん。
どっかん。ブラピさま演ずるにいちゃんをいきなり交通事故にあわせ、その体に乗り移って社長の前に現れたわけですね。
そして彼と行動を共にしたいと申し出ます。
ホプキンスさまにしてみたら選択の余地とかないわけですね。
断れば即連れて行かれるわけですから。
とりあえず「連れていくのは自分ひとりで、他の者を巻き込まない」ってえ条件をだして、死神さんを随時同行させることを了解します。
しかし、やっぱりいろいろあるわけですわな。
まずホプキンスさまの会社でどえらいことが起きます。
役員の中のある男が他の重役たちを裏で操り、社長を解任してしまいます。
えらいこっちゃ。
それだけではなく、プラピさま死神はホプキンスさまの娘フォラーニさまに恋をしてしまいます。
実はブラピさま、交通事故で死ぬ直前に女医でもあるフォラーニさまに出会っていたわけでございます。
恋する死神。あーこりゃこりゃ。
ブラピさま・フォラーニさまの恋愛エピソードと、ブラピさま・ホプキンスさまの重役会議に対抗するエピソードが並行して描かれます。
それでいて花婿と花嫁の父っぽい葛藤があったりとか、老人と若者っぽい意見の相違があったり、でもそれは神と人間の会話でもあったりしてですね。
恋愛テーマのわりにはけっこう楽しませていただきました。
ラストシーンはけっこうハートウオーミングな終わり方です。
うむむ。しかし、どうなんだろう。
けっこう安直というか、ご都合主義というか、破綻寸前というか。

とっても微妙な終わり方しました。面白く見ていただけにちょっと残念です。
ま、いいか。ファンタジー恋愛映画だし。

# 感染

２００４年ＴＢＳ作品
監督　落合正幸
主演　佐藤浩市、高嶋政伸、佐野史郎、南　香保

この映画、予告編見まして、そうなんじゃないかなあって思っていましたが、映画見たらやっぱりそうだったです。
そうだったって何やねんって話ですが。
この作品の元ネタは「世にも奇妙な物語」でございます。
手元の資料によりますと、１９９１年春の特別編のエピソード。
監督は同じ落合正幸監督で、ドラマ版の主演は近藤真彦さまと佐野史郎さま。
タイトルは「急患」でございました。
かなり経営状態が逼迫している病院が舞台です。
佐藤さま・高嶋さまはそこに勤務する医師。
南さまは看護師です。
給料も遅配。業者への支払いも滞っているため、入院患者へのフォローのための物資にも事欠くありさまです。
ある日、一人の入院患者の容態が急変します。
佐藤ら医師が対応しますが、救命のプロセスの中で佐藤の指示間違いがあり、患者は死亡してしまいます。
医師たちは全員共謀し、誤処置をごまかそうとします。
そのためにバタバタしているところに急患の受け入れ要請があります。
手一杯なので受け入れできないと主張する佐藤さまですが、気がつくと救急隊員たちは患者を放置して立ち去ってしまっています。
この患者を診たのは病院のもう一人の医師、佐野さま。
彼は患者を観察するべきだと言い出します。なんとこの患者、体液が緑色になり、体がずぶずぶと崩れていく奇病だったわけでございます。
常識では生きていることさえ考えられないその患者は、スタッフが目をはなした隙に病院の通風孔に姿を消します。
さあさここからがノンストップホラーざんすよ。
その症状は感染するらしい。つぎつぎと感染していく医師や看護師たち。ぎえええええええ。
お約束でございまして、このコラムを読んでおられる皆様はほとんど予想しておられるでしょうから続けますが、誤処置にかかわった医療スタッフがどんどん犠牲になり、やっぱり佐藤さまが最後に残ります。
「世にも奇妙な物語ヴァージョン」はここで物語がストンと終わりましたが、さすが映画ですよね。

というか、テレビみたいな状況で放り出されたらみんな怒るでしょうが。
ここからのオチが素晴らしい。ほうほう、なるほどそうだったのか、って感じでございます。
まあ出来ましたらテレビ版と併せて見ていただきたいですね～　けっこう面白かったですよ～

# トリプルＸ

２００２年アメリカ映画
監督　ロブ・コーエン
主演　ヴィン・ディーゼル、サミュエル・Ｌ・ジャクソン、マートン・ソーカス

新感覚のスパイ映画でございます。
製作総指揮、ヴィン・ディーゼルさまってことらしいです。
それだけに力入りまくりのアクション炸裂。とりあえずめっちゃすごい命懸けのスタントシーンが連発でございます。
街のならず者ディーゼルさま。
ただのならず者ではなく、巨悪に反抗するといいながらアホでムチャなことやってるワルというかチンピラというか。
「こいつは悪い奴だからこらしめてやる」って言って金持ちワルの車盗んで、その車でパラシュート背負って橋のガードレール突き破ってダイブする、その様子をネットやビデオで配信するってようなアホワルでございます。
そんなディーゼルさま、いきなり政府の特務機関に拉致されてしまいます。
政府は何をしようとしているかといいますと、ディーゼルさまをスパイエージェントとして使おうとしておるわけでございます。
んなアホな。
ディーゼルさまの上司はサミュエル・Ｌ・ジャクソンさま。
おやまあ、また会いましたなあって感じです。最近この人の勢いは止まらないですねえ。
さてさて、無茶苦茶なエージェント研修を無事つとめあげたディーゼルさま、ついに指令を受けるわけでございます。
大丈夫かいな。ディーゼルさまってどう考えても普通のヤンチャあんちゃんやないの。
と思う私の心配をよそに、物語はトントンと進んでいきます。
ディーゼルさまは悪の自動車窃盗グループの本拠地のあるプラハに潜入。
敵のボスとあっと言う間に仲良しになって、自動車窃盗なんかを依頼したりして信用させます。
ここらあたりはやっぱりワルの交渉術が生かされるのかなあ。
って思っておりましたらここからはディーゼルさま、ノンストップの大活躍。
敵ワルも、自動車窃盗グループどころか麻薬密売グループだったりして、それどころか世界壊滅を企む悪の秘密結社だったりするわけです。
かくして世界壊滅の危機はディーゼルさまの活躍にかかってくるわけですな。
破天荒な物語展開はさておき、スーパーアクションの連発で、飽きないです。
思わぬ裏切り者の登場とか、敵の中に味方となる人物がいたりとか。けっこういけてましたです。
しかしねえ。スキンヘッドに刺青のムキムキマッチョスパイが登場するなんて思わなかったです

。
面白かったから許すけど。

# ００７／ダイ・アナザー・デイ

２００２年アメリカ・イギリス合作
監督　リー・タマホリ
主演　ピアース・プロスナン、ハル・ベリー、トビー・スティーブンス、マドンナ

ウルトラ破天荒スパイムービーの次は、元祖正統派破天荒スパイムービーです。
この前後に、メイド・イン・ジャパンのリアルなスパイムービー、「黒の試走車」なんか見ちゃいましたが、いやはや、日本のスパイはショボイなあ。
まあこっちはサラリーマンの産業スパイだから比べちゃいけないんだろうけど。
さて００７。
ピアース・プロスナンさまのボンドとしては四作目です。
シリーズとしては２０作目にあたります。改めて作品リスト見ましたけど、なんだかんだ言いながらシリーズほとんど見てましたね。
そろそろ００７の数珠つなぎしようかな。
冒頭いきなりやってくれます。
今回の冒頭は北朝鮮。国家主導者である父の命令に背いて、非武装地域で武装蜂起の準備をしている息子。
ボンドは彼を暗殺するために北朝鮮へ潜入します。
例によっての大活躍でワルをやっつけますが、捕らえられてしまいます。
で、ここで主題歌。おお、こんなパターンなかったべ。
ボンドは北朝鮮に捕われ、一年以上の拷問に耐えて捕虜交換で帰国します。
で、次は悪のダイヤモンド王と戦うことになるわけなんですが、とっても意外だったのは物語の構造でございますね。
あんまり詳しく書いたらネタバレになるので書けないですが、敵役の設定がこれまでの００７シリーズとは一味違う感じです。
そういえば前作の「ワールド・イズ・ノット・イナフ」もちょっと冒頭のパターンが変わってて、敵役の設定も少し工夫しておりましたね。
（前作は厳密には意外だったのは敵役の協力者の設定だったですが）
最近二作の傾向がこんな感じってことは、今後はこういう流れになってしまうんでしょうね。
００７シリーズって、すごくわかりやすい悪役ってのがけっこう好きだったんだけどなあ。
だんだんワルがわかりにくくなってきましたね～
初期の作品だと、いきなり「ドクターノーってワルがいる」「ゴールドフィンガーって変な奴がいる」「プロフェルドってワルボスがいる」「スカラマンガって奴が怪しい」みたいに、とってもわかりやすかったんだけど。
これも時代なんでしょうか。
「ダイ・アナザー・デイ」のワルは、わかりやすいんだけどかなりひねっております。

００７も犯人は誰やみたいな推理ものっぽくなってくのかなあ、って思ってたら、めっちゃ人間っぽいボンド、ダニエル・クレイグの登場でちょっと初期の雰囲気が戻ってきたような。
ただ、個人的にはちょっと違う感もするんですが。
どないですやろ。

# 恋人はスナイパー・劇場版

２００４年「恋人はスナイパー・劇場版」製作委員会作品
監督　六車俊治
主演　内村光良、水野美紀、いかりや長介、中村獅童、田辺誠一、阿部　寛

正編・続編と、二本製作された大好評テレビドラマの劇場版です。
ちょこっと前二作のおさらいね。
そもそも、カンフーの使い手である女刑事水野さまのところに、中国人留学生ホイさん＝内村さまがやってくるのが事件の始まり。
このホイさん、中国の暗殺者組織の凄腕スナイパー、ウォン・カイコーだったわけです。
彼はそもそも日本人と中国人の混血で、中国残留孤児だったわけです。
内村さまと水野さまは惹かれあいますが、やっぱり叶うはずのない恋です。
スナイパーは女刑事に自分の素性を明かし、母を捜す情報と引き換えの「最後の仕事」を片付け、いずこかに姿を消します。
これが第一話。
第二話は母を探し続けるスナイパーが、母に会うためにまた仕事を重ねていくって話。
このエピソードで内村さまの弟分・中村さまが登場でございます。
このエピソードの最後で彼は逮捕されます。
で、映画版に続くわけですな。
内村さまは中国で服役中。
日本では狙撃事件が連続して発生します。
犯人曰く、「我々は日本人全員を人質にとった。いつ、どこで、誰を狙撃するかは我々の思いのままである。犯行を中止して欲しければ政府が身代金を払え」と、こういうことでございます。
政府は中国政府の協力で、服役中のカイコー（＝内村さま）に捜査協力させるべく日本に呼び寄せます。
政府からは身代金がとれないと判断した犯行グループは、今度は別の方法を考えます。
テレビの生放送番組に電話をかけ、狙撃の標的にされたくなかったら、街のバッジ屋にバッジ代金を振込み、その店が作っているバッジを胸につけろと、こういうことでございますね。
日本中からバッジ屋に振込がありまして、みんな胸にバッジをつけて歩いたりしております。
これでバッジ屋さんの口座からお金を奪う方法さえあれば、完全犯罪ですわな。
すげえすげえ。このへんの展開の部分では内村さま水野さまの影がうすくなっちゃいましたが、これはしかたないかな。
仲間の手引きで警察の手から逃れた内村さま、クライマックスでは刑事水野さまとともに犯人グループと戦うことになります。
しっかりとした原作をシリーズキャラクターに置き換えての映画化です。
ただ、ドラマ部分のウエートが高くなったせいか、アクションが弱くなってしまいましたね。

ドラマ版ではワイヤーアクションが見どころだったんですが、映画ではアクションシーンは控えめ。
ワイヤーなんかをバンバン使ってしまうと、リアリティなくなっちゃいますもんね。
リアリティをとるかアクションをとるかって苦渋の選択だったんでしょうが、私的にはドラマみたいにワイヤーアクション炸裂して欲しかったです。

# 遥かなる大地へ

１９９２年アメリカ映画
監督　ロン・ハワード
主演　トム・クルーズ、ニコール・キッドマン

恋愛もののような人間ドラマのような。基本線は恋愛ドラマになると思うんだけどなあ。
１８９２年の西アイルランドが舞台です。
永年にわたる大地主の搾取に耐えかねた小作人たちが、反旗を翻しはじめます。
って、オープニングで言ってました。
クルーズさまはアイルランドに住む貧しい農家の息子です。
イギリス人の大地主に使われる身分です。
彼の父は自分の土地を持つという夢を息子に託し、事故で息をひきとります。
その葬式の日、年貢を納めなかったって理由でクルーズさまの家は焼き討ちにあってしまいます。
怒れる小作人クルーズさま。
彼は父の形見の銃を持って単身大地主の家へ。
地主が現れるのを待っておりましたら、帰ってきた地主の娘キッドマンさまにみつかってしまいます。
クルーズさま、キッドマンさまに刺されるわ銃の暴発で怪我するわ、みじめで散々な目にあってしまいます。
しかたなく地主の家でやっかいになりますが、その夜、キッドマンさまがクルーズさまの寝室にやってきて、この場所から逃げようともちかけます。
行き先は自由の国アメリカ。
クルーズさまとキッドマンさまはアメリカについたら別行動するという約束で、アメリカに渡りますが、到着早々、キッドマンさまは全財産を盗まれてしまい、クルーズさまとともにアイルランド系のスラムみたいなところに住むことになります。
やがてクルーズさまはアイルランド人の顔役の勧めでストリートファイトみたいなことをはじめ、キッドマンさまはお金を稼ぐためにダンサーみたいなことをはじめたりします。
で、次第に二人の気持ちはひかれあっていくわけですな。あーこりゃこりゃ。
惹かれあう二人は新天地で「自分の土地を手に入れる」ためにあーだこーだするわけなのでした。
当時夫婦だったトム・クルーズさまとニコール・キッドマンさまの競演です。
二人の競演作はほかには「デイズ・オブ・サンダー」「アイズ・ワイド・ショット」など。
この二人の競演、常識的に考えてもうありえなくなってしまいましたよね。いい感じだったんだけどなあ。
あまりにも壮大なスケールの恋愛映画でございますね。

壮大すぎてちょっと消化に悪そうです。
悪くはないんですが、うむむ、どうなんやろって感想が残ってしまいました。
ちょっと評価が難しい作品ではあると思います。

# マイノリティ・リポート

２００２年アメリカ映画
監督　スティーブン・スピルバーグ
主演　トム・クルーズ、コリン・ファレル、サマンサ・モートン、マックス・フォン・シドー

スティーブン・スピルバーグ監督とトム・クルーズさまががっぷり四つに組んだＳＦ超大作でございます。
舞台は近未来。
三人の予知能力者がおります。ワシントンＤＣでは彼らの予知能力を使い、殺人を未然に防ぐというシステムを構築し、絶大な効果をあげております。
このシステムを利用し、殺人を未然に防ぐという仕事をしている捜査官がクルーズさまでございます。
プリコグと呼ばれる予知能力者が見る断片的なイメージ。
それを画像に変換してその内容から殺人発生の場所と時間を特定し、殺人を未然に防ぐというシステムでございます。
ある日、プリコグたちがある殺人事件を予知します。
そのイメージにはなななんと、クルーズさま自身が殺人を起こす場面が映っておりました。
捜査官クルーズさまは一転して「近い将来、殺人を犯すもの」として追われる立場になります。
むっちゃ逃げ回るクルーズさま。
未来世界ではあちこちに網膜スキャナーが設置されていて、どこに逃げても無駄。
クルーズさまは闇医師に眼球の交換手術を依頼したりします。
クルーズさまは手に入れた新しい眼球でスキャナーをかいくぐり、医者から受け取った自分自身の目で犯罪予防局は潜入します。
目指すのはプリコグ。
クルーズさまはプリコグの一人を拉致し、逃走します。
彼は、予知の信憑性を疑いはじめたわけですな。
予知といっても三人の予知能力者全員が同じイメージを見るわけではないってことがわかってきます。
予知能力者どうしでイメージが異なるとどうなるのか。
多数（予知能力者は三人だから、二人ですわな）のイメージが採用され、少数（一人の意見＝マイノリティ・リポート）は無視されると、こういうことです。
クルーズさまは犯罪予防局の動きに不信感を抱き、そこに陰謀を感じます。
クルーズさまを陥れようとしているのは誰なのか。
そして彼は本当に殺人を犯すのか。
物語は「殺人が起こると予言された時間」にむかってつき進みます。いぐわあああ。
さすがに物語展開も巧みだし、面白い映画です。

でもねえ～　ラストがめっちゃスピルバーグさま的です。
そこらあたりがちょっと不満ですかね。もうちょっとラストがくずれて欲しかったのですが。

# 風とライオン

１９７５年アメリカ映画
監督　ジョン・ミリアス
主演　ショーン・コネリー、キャンディス・バーゲン。

かなり強烈なアクション映画でした。ってこういう微妙な表現をするってことは、アクション映画だとは思わずに見始めた映画だったんですね。
見てましてとっても違和感があったのでいろいろ調べてみましたら、１９７６年の「ロビンとマリアン」と記憶がごっちゃになっておりました。
主演男優はどちらもショーン・コネリーさま。
「ロビンとマリアン」の主演女優はオードリー・ヘップバーンさまで、「風とライオン」はキャンディス・バーゲンさま。
どっちも私が映画を見始めた時期にベテランの域におられた女優さんです。
ってことで、豪快に勘違いしておりました。
さて、「風とライオン」です。
舞台はルーズベルト大統領時代のモロッコです。
大国の陰謀が渦巻くって感じの状況だったころですよね。
コネリーさまはモロッコの部族の長でございます。「一族の誇りのために」彼らはアメリカの資産家邸を襲撃し、母（＝バーゲンさま）と子を拉致します。
コネリーさま、ときどき爆発こそするものの、人質母子に対しては極力紳士的にふるまおうとします。
そんなコネリーさまのことが少しずつわかりはじめるバーゲンさま。
やがてコネリーさまとバーゲンさまの間に、奇妙な信頼関係のようなものが芽生え始めます。
そしてクライマックス。
モロッコ軍の罠で囚われの身となったコネリーさまを、バーゲンさまが助け出し、コネリーさまは部族の同朋たちとともにモロッコ軍と戦うのでありました。
いぐわあああ。
この時期のショーン・コネリーさま、００７シリーズから引退し、さまざまな役柄にチャレンジしはじめた頃です。
このころのコネリーさまの映画への取り組みを見て、中学時代の映画友達は「ショーン・コネリーさまはカツラをとって一皮むけたね」と、あまり笑えないジョークを飛ばしておりました。
それにしてもモロッコの部族の長の役だけど、コネリーさまはまりすぎです。
全然違和感なかったのは何故なんでしょうか。

# リーグ・オブ・レジェンド／時空を越えた戦い

２００３年アメリカ映画
監督　スティーブン・ソリントン
主演　ショーン・コネリー、ナサーラディン・シャー、ペータ・ウイルソン

めっちゃ面白い映画です。
小説の世界の有名人たちが一同に集まって、世界大戦を引き起こそうとしている悪人「ファントム」に立ち向かいます。
時代は１９世紀末。ショーン・コネリーさまは冒険家。
彼はイギリス政府の要請を受け、ある仕事を請け負うことになります。
世界戦争を起こして武器の取引で大儲けをたくらむ仮面の怪人がいるわけですな。
彼が起こした事件のせいで世界情勢は一触即発。
世界大戦を回避するために行われる世界会議を無事に行うため、コネリーさまは冒険小説のヒーローたちを集めた「超人同盟」みたいなチームのリーダーになります。顔ぶれがごっついすごい。ネモ船長、透明人間、ドラキュラの主人公ジョナサン・ハーカーの妻の女吸血鬼、ドリアン・グレイにジキル博士。アメリカからはなんと成長して諜報員になったトム・ソーヤ。そんな超ヒーローたちがああだこうだいいながら協力しあって、悪を退治します。
仮面の怪人の正体が意外な人物だったり、超人チームのなかに裏切り者がいたりと、けっこうとんでもない展開です。
ここからネタバレやで～　まだ見てない人は注意してや～

最後にはもう、めっちゃすごい展開が待っております。
実は超人同盟なんてのがそもそも創作。
悪人「ファントム」が狙っていたのは世界会議の妨害ではなく、スーパー超人たちを一同に集めることだったわけです。
ネモ船長のノストロモ号の秘密だとか不老不死キャラの秘密や超人キャラを生み出す薬だとかの秘密を盗み出すことが目的だったわけですね。
ファントムと裏切り者はノストロモ号に爆弾を仕掛け、秘密を手にアジトに逃げ帰ります。
さあそこで「超人軍団」と「ファントム軍団」が戦うわけですね。
この格闘シーンってけっこういけておりましたです。
複数の場所で同時進行する戦いを細かいカット割とシーン展開で描きます。
これがとっても良い。緊迫感のある映像でございますよ～
主演のショーン・コネリーさまはこの映画を最後に引退状態に入られました。
ショーン・コネリーさまの新作が見られなくなるって少し寂しいですね。

# ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

２００４年アメリカ映画
監督　アルフォンソ・キュアロン
主演　ダニエル・ラドクリフ、ルパート・グリント、エマ・ワトソン

人気のハリー・ポッターシリーズの第三弾。
主人公ハリー・ポッターの出生の秘密などが描かれております。
ここまでの作品で繰り返し触れられていたハリーの父親殺しの意外な真相が描かれております。
魔法の国アズカバンの牢獄から一人の男が脱獄します。シリウスという名の囚人でございます。
この男がポッターの両親を殺したといわれているわけですな。
この男の脱獄をうけて、ホグワーツの魔法学校には戒厳体制が敷かれます。
そんな中でハリーは色々なことを調べ、やがて真実を知ることになるわけでございます。
物語後半になって、物語前半で提示された謎が一気の解決していきます。
このあたりの処理がとても鮮やかで気持ち良いですね。さらに、中盤であえて消化不良のまま残してあったエピソードだとか、意味不明の伏線だとかが、物語幕切れ間近になってドドドっと「ハリウッド的」に解決していくストーリー展開は実に見事。
原作の持っている力を存分に引き出した演出でございます。
しかしねえ、ダニエル・ラドクリフさまでっかくなりすぎ～
原作読んでないからわかんないんですが、こんなに大きくていいのでしょうか。
すでにハリー・ポッターを演ずる限界を越えているように感じるのですが。
エマ・ワトソンも、第一作のころのようなこまっしゃくれた感じがなくなって、ただのクソ生意気なねーちゃんみたいだし。
あのこまっしゃくれ感がハーマイオニーってキャラの生命線のような気がするのですが。
ま、シリーズそのものは完結してしまったので、これはこれでよしとせなしゃあないですが。
そういえば前二作で校長先生役をしておられたリチャード・ハリスさまも亡くなりましたよね。
この第三作あたりでちょこっとキャストチェンジとかしたらよかったのにって思います。
とりあえずスネープ先生（アラン・リックマンさま）と、女の先生（マギー・スミスさま）と、ひげもじゃのでっかくて太い人（この人は名前わかりません）くらい残して。
どうなんでございましょう？

# リベラ・メ

２０００年韓国映画
監督　ヤン・ユノ
主演　チェ・ミンス、チャ・スンウォン、キム・キュリ、ユ・ジテ

かなり力の入った韓国製パニックスペクタクルアクションサスペンス。
冒頭からいきなりすんごい火災シーン。火災・爆発・崩落の連発でございます。
命がけで消火活動にとりくむ消防士たち。
この映画は「バックドラフト」とかかなり前のドラマ、「ファイヤーボイズ～め組の大悟」みたいに、消防士たちを主人公にした作品でござんす。
おお、韓国映画お得意のパ〇リでございますなあ。
オープニングからかなりのテンション。すげえすげえ。
消火活動の成果で、無事火事はおさまります。
ミンスさまたち消防士は鎮火した火災現場を調べます。すると妙なことに気づくわけですね。
炎が空気の流れとは逆の方向に進んでいることがわかるわけです。ガソリンだとかを室内に撒かないとそういう火の流れ方はしないって話になります。
そうなると疑われるのは放火。
消防チームは調査を開始します。消防隊の調査を妨害するかのように、次々と起こる放火事件。
やがて犯人が明らかになります。
犯人は周到な計画をたてて放火を行っています。
建物の構造を研究し尽くして最も効果的なポイントに火を放っているわけですな。
映画では犯人はかなり早い段階で明らかにされます。
で、作品中盤では犯人の描写とそいつを追う消防チームの描写が巧みに描かれ、さらに放火～消火活動がしっかり描かれます。
このへんの物語の組み立ては「ブローン・アウェイ」のジェフ・ブリッジスさまとトミー・リー・ジョーンズさまの描き方を思い出してしまいましたです。
クライマックスはやはり放火・消火、そして消火活動を妨害する犯人と消防士の戦いです。
おまけに女性消防スタッフが拉致されて人質にとられて、彼女を救い出さねばならないなんておまけつき。
犯人と消防士の戦いシーンですが、犯人めっちゃ強い。
あんたジェイソンか、ってつっこみたくなるような強靭な肉体をもった犯人です。
やっつけたと思ったら「ぬわあああああ」って復活するお約束つき。
あんた、ダイハードのテロリストちゃうねんから。
こういうところまでアメリアンムービーを真似せんでよろしい。
ちなみにタイトルの「リベラ・メ」ってのは、ラテン語で「我を救いたまえ」って意味だそうです。

へえ、そうやったんや。

# トパーズ

１９６９年アメリカ映画
監督　アルフレッド・ヒッチコック
主演　フレデリック・スタッフォード、ダニー・ロパン

サスペンスの神様、ヒッチコック監督のかなり後期の作品です。
遺作が５３作目の「ファミリー・プロット」（７６年）で、その前が「フレンジー」（７２年）、この「トパーズ」は５１本目の映画です。
物語の舞台は１９６２年。
ソ連の高官がアメリカに亡命します。
キューバ情勢が緊張し、東西関係が微妙な様相を呈しはじめた時期です。
東西各陣営の背後でスパイが暗躍します。この映画はフランスのスパイ、スタッフォードさまを中心に描いていきます。
スタッフォードさまはアメリカの友人からの依頼をうけ、アメリカ人嫌いのキューバの協力者から情報を入手し、その情報の確認をとるためにキューバに飛びます。
主人公、まさに暗躍でございます。
キューバに潜入して指導者夫人に接近。
夫人と仲良し（！）になってキューバの詳細情報を入手します。
この諜報活動のなかで、数々の協力者が犠牲になってしまいます。
作品ではこういった「スパイ活動の犠牲者」もしっかりと描いておりまして、うわべだけのスパイ映画で終わらせていないあたり、「やっぱりすごい監督だったんだなあ」って改めて思いましたです。
さて物語の続き。
主人公はアメリカに戻りますが、そこでさらに新しいミッション。
フランスの高官から、西側の情報がソ連に流れていることが明らかになります。
ところがアメリカ側はスタッフォードさまが入手した情報をもとに軍事行動を起こす考えのようで。
しかしスタッフォードさまがその情報を本国フランスに報告すれば、スパイ組織経由でソ連にそれが知れ、報復行動が起こると、こういうわけでございますね。
スタッフォードさまは、アメリカがキューバを攻撃開始するまでのわずかな時間の中で自国のスパイ組織「トパーズ」のメンバーを暴かなければならなくなります。
中盤から後半はまさに脳内ハラハラドキドキ。
頭の中いぐわあああって感じです。かなり堪能させていただきましたです。
さてさて、ヒッチコック監督は自作に必ずワンカット、エキストラ出演することでも有名だった監督さんですが、なんかねえ、前半家事とかしながら見てたので、監督の出演シーン見逃してしまったようです。

ちなみにヒッチコック監督、ワンカット出演が有名になりすぎ、映画を見た人が物語そっちのけで監督の出演シーンを探すようになってしまったので、後期の作品では物語の邪魔をしないように、作品の冒頭で登場するようになったとか。
でもわからなかったです。残念だなあ。もう一回見直そうかなあ。

# コットン・クラブ

１９８４年アメリカ映画
監督　フランシス・フォード・コッポラ
主演　リチャード・ギア、ダイアン・レイン、グレゴリー・ハインズ、ロネット・マッキー、ニコラス・ケイジ

フランシス・フォード・コッポラ監督の青春ムービー。
「アウトサイダー」「ランブルフィッシュ」に続いて監督が撮ったサクセスムービーざます。
コットン・クラブってのは、ハーレムにある実在の豪華ナイトクラブのことです。
禁酒法下、１９２０～１９３０年代が舞台になっています。
主人公のギアさまは場末のクラブでコルネットを吹くジャズメンです。
彼が暗黒街の顔役に見出され、ジャズメン～ギャングの手下～ギャング映画の主演俳優へと転進していくさまがゆったりとゴージャスに描かれます。
物語を彩るのは達者な役者陣でございます。
ダイアン・レインさま演ずるクラブのダンサー。
彼女もダンサー～マフィアの顔役の女～スターの妻へと転進。
天才ダンサー、グレゴリー・ハインズさまはダンサー希望の失業者～一流クラブのダンサーへと成功の道を歩き、思う人と結ばれます。
ええやないの。
しかしその影でニコラス・ケイジさま（ギアさまの弟役でさあ）みたいに暗黒街に生き、マシンガンでボロ雑巾のようになって殺される人もいる。
そこらへんがかなり丁寧に描かれておりまして、けっこうよかったです。
圧巻はクライマックスですね。やっぱり。
「ゴッドファーザー」のように、平和なシーンと殺戮シーンを音楽で見事にリンクしていきます。
今回はグレゴリー・ハインズさまの超絶タップダンスが虐殺シーンの残酷さを際立たせます。
最後の最後には、私的にはとっても気に入っているエンディング。
って言ってもわかりにくいでしょうか。
結ばれたギアさまとレインさまが汽車に乗って去っていくわけですが、そいつがいかにも作り物っぽい。
舞台だとか映画だとかのセットっぽいって表現したらいいのでしょうか。
で、デッキのところに乗っている二人にあからさまなピンスポットが当たる。
「そうですよ、ここまでの話はすべてつくりものですよ、楽しんでいただけましたか」みたいなラストです。
私はこういう幕切れ大好きなんですね。舞台出身者だから。
あえて言うと、舞台のラストのカーテンコールみたいな感じ。

というよりこのエンディングはほとんど舞台の方法論なんじゃないかなって思うんですが。
皆様はどうお感じになりましたでしょうか。
しかしねえ、さすがコッポラさま。
こういう映画ばっかり撮っていたら破算せずにすんだのに。
本当はこんな映画ドンドン撮ってもらいたかったんですけどね。

# 黒の試走車

１９６２年大映作品
監督　増村保造
主演　田宮二郎、叶　順子、船越英二

故・田宮二郎さま主演の社会派サスペンスでございます。
冒頭いきなり、黒い暗幕でボディを隠したテストカーの走行試験の場面です。
その試走車が横転事故を起こしてしまうことから、いろいろとややこしいことが起こります。
とりあえず普通に見ておりまして、台詞のあちこちにとても時代を感じさせるセリフが出てきまして、けっこう本編のあらすじ以外の部分で楽しんでしまいました。
「大衆車」だとか「スポーツカー」だとか「産業スパイ」だとか。
それとは別に「元陸軍中佐で、関東軍の特務機関にいた」ライバル会社の重役だとか、めっちゃ年代を感じさせる台詞がけっこう気に入ってしまいましたですねえ。
ある会社で、新型のスポーツカー開発を行っております。
発売間近になり、価格設定などが行われております。
しかし、ライバル会社も同様の車種の発売を予定しております。
そこで始まるのがスパイ合戦でございますなあ。
入院中のライバル社社長の隣の病室から室内の会話を盗聴するだとか、会議室の様子を隣のビルから盗撮して読唇術の先生に会議の内容を解析してもらうとか。
いやいや、えらい努力でございます。
努力の甲斐あって主人公田宮さまの会社は、ライバル会社よりも安く新車を発売できる運びとなりましたが、しかしライバル会社も起死回生の巻き返しをはかります。
さてその策とは？
そしてそれにどのような対抗をするのか？
前半のとにかくリアルな描写から、中盤はサスペンス色の強い展開。
なかなかやってくれます。けっこう引き込まれてしまいましたです。
最近って産業スパイとか暗躍しているんでしょうか。
なんか産業スパイって存在そのものがすっごく時代遅れ的な印象があるんですがね～
田宮二郎さま、すごくいい感じです。
この人の猟銃自殺は実に衝撃的でした。惜しい俳優さんを亡くしましたね～
もっと活躍していただきたかったです。

# ナースコール

１９９２年アポロン・ライトヴィジョン作品
監督　長崎俊一
主演　薬師丸ひろ子、松下由紀、大鶴義丹、江守　徹、渡部篤郎

大病院で働く看護師たちをコメディタッチで、それでいてシリアスに描いた作品です。
薬師丸さまは看護師です。
彼女とほぼ同じキャリアの後輩看護師が松下さま。
そこの医師が大鶴さまで、その上司の大先生が江守さま。
薬師丸さまは入院患者からお見合いを勧めまくられるようなナースでございます。
そんな病院に、事故が原因の骨折で入院してきた大学生が渡部さまです。
彼はめっちゃサッカー選手。けっこう強豪の大学に通っておりまして、入院してきたその日に「来月の試合出れますか」とか医師に聞くような子です。
骨折の術後を診断するレントゲン写真を見た江守が、彼の膝関節に腫瘍を発見します。
化学療法を施し、結果がよければ膝に人口関節を入れる、結果が悪ければ足を切断すると宣告されます。
すっかり自暴自棄になる渡部さま。
食事もとらなくなり、意味もなくナースコールを繰り返す「嫌な患者」になります。
そんな彼を変えたのが、看護師としてではなく、女性として人間として彼に接した薬師丸さまの看護でした。
しかし薬師丸さまのことを快く思っていないのは渡部の担当看護師だった松下さま。
松下さまはあてつけのように病院を退職します。
その一方で薬師丸さまに思いを寄せる大鶴さま。
渡部さまも薬師丸さまへの思いを抑えることができずにいます。さあさどうなるこの恋模様。
薬師丸ひろ子さま若い。松下由紀さまも若い。渡部篤郎さまも若い。大鶴義丹さまも若い。江守　徹さま変わってない。
当たり前か。
女性陣、なんかみんな眉毛細くて濃い～
途中、サッカーの試合のシーンがありますが、サッカーパンツの丈短い。
なんか変なところで時代を感じてしまいました。

# ミミック

１９９６年アメリカ映画
監督　ギレルモ・デル・トロ
主演　ミラ・ソルヴィーノ、ジェレミー・ノーザム、アレクサンダー・グッドウィン

ニューヨークに謎の疫病、ストリックラー病という病気が大流行します。
ワクチンもなく、感染するとほぼ死んでしまうという恐ろしい病気です。
この病気を封じ込めるため、とんでもない手段が使われます。
幸い、病気の媒体がゴキブリであるということがわかったため、昆虫学者ソルヴィーノがＤＮＡ操作によってゴキブリの天敵を創造し、伝染病の蔓延を止めます。
さあさここから物語が動きまっせ～
ＤＮＡ操作で創造された生物は、生殖能力を持っていなかったため、一世代だけで滅びる予定だったのですが、おやおや。
お約束の生殖能力をもった「突然変異」が発生しまして、やつらは新種として生き延びます。
それどころか巨大に成長し、人間に擬態する能力まで身に付けてしまいます。
昆虫学者たちは大都市の地下で、巨大な新種昆虫相手に孤独な戦いを強いられることになります。
あーこりゃこりゃ。
物語前半で、ぜんぜん可愛くない少年二人組が犠牲になる場面がありまして、そこで一気にブルーになってしまいました。
やっぱりね、あかんと思うんです。
たとえ映画でもあからさまに子供犠牲にしちゃいけません。
やっぱりタブーはタブーとして不可侵にしておくべきだったんじゃないかと思います。
それにしてもねえ、準主役のかわいいほうの少年も、主人公のソルヴィーノさまも、虫に拉致されるのですが命は助かる。
あのお、虫が差別しちゃいけないと思います。かわいくない子はソッコーで殺しちゃって、かわいい子は生き残るって、あかん。
それにしても、巨大な虫が人間に擬態するって設定はすごいと思いました。
「虫が人間に擬態した姿」はかなり早い段階から画面に現れておりましたが、私なんぞは「人間の中に昆虫君たちに見方する者がいて、そいつらが虫たちの手先になって悪いことしている」って思い込んでおりました。
この擬態ってネタ、大変面白かったです～

# イーストウイックの魔女たち

１９８７年アメリカ映画
監督　ジョージ・ミラー
主演　ジャック・ニコルソン、シェール、スーザン・サランドン、ミッシェル・ファイファー

テレビオンエアを見ましたが、オンエアの最初に「一部不適切な表現がありますが、作品のオリジナリティを尊重して、オリジナルの形で放送します」ってテロップが流れました。
不適切な表現って何やろって思いながら見ましたです。
「マッド・マックス」のジョージ・ミラー監督のセクシャル・コメディです。
魔女伝説のある村に住むセクシーな熟女三人組（シェールさま、サランドンさま、ファイファーさま）。
彼女たちには不思議な力があったりします。
彼女たちの家のすぐ近くに、謎の男ニコルソンさまが引っ越してきます。
実はこの男、悪魔でございます。
三人の熟女たちを次々に誘惑し、とってもいやらくてセクシャルな四人の関係が始まるわけですな。
あーこりゃこりゃ。
呪いをかけて隣人を殺すだとか、一人の男性を奪い合うわけではなくエッチ込みで三人の熟女が共存するとか、ニコルソンさまが「女性なんてのは…」みたいな感じでボロクソ言うとか、まあ問題あると言えば問題あるシーンがけっこうありましたが、わざわざテロップ流すほど問題あるシーンかというとそうでもないように感じましたが。
魔女三人と悪魔のすったもんだの恋愛コメディなんで、どの場面をどんな表現したところでおとぎ話だと思うのですが。
この映画見てテレビ局に抗議したりした人いるんでしょうか。
えっと、ラストはけっこう強烈でございます。
ニコルソンさまのことが悪魔だとわかった魔女三人組、ニコルソンさまに呪いをかけて彼を滅ぼしてしまいます。
呪いをかけられるニコルソンさまの演技が実に強烈。
「シャイニング」「ウルフ」「バットマン」あたりで見せつけた性悪演技炸裂でございます。
シェールさま、ファイファーさま、サランドンさまの熟女三人ってのが、ビジュアル的に面白いです。
悪魔とかを出さないで普通のセクシャルコメディにしたらもっと面白かったと思うのですが。

# トゥルー・ロマンス

１９９３年アメリカ映画
監督　トニー・スコット
主演　クリスチャン・スレイター、パトリシア・アークエット、デニス・ホッパー、ヴァル・キルマー、ゲイリー・オールドマン、ブラッド・ピット、クリストファー・ウォーケン、サミュエル・Ｌ・ジャクソン

とにかくめったやたらと豪華なキャストで製作された作品でございます。
んで映画タイトルが「トゥルー・ロマンス」。
「僕たちの愛は永遠に。トゥルー・ロマンス」みたいな甘ったるい青春ラブストーリーを期待してご覧になられた方、残念でした。
脚本はクエンティン・タランティーノさま。
ロマンティックのかけらも感じられない、バイオレンス・ラブ・ストーリーでございます。
なんか登場人物ズラッと見渡しても誰ひとり知性を感じさせる役柄がいないという、珍しい映画です。
唯一デニス・ホッパーさまが普通の理性を持っている大人でしたけども。
元祖センキレ俳優のデニス・ホッパーさまが唯一普通の理性を感じさせるってのも変な配置ではありますが。
主人公のスレイターさまは場末のビデオショップで働く青年。
サニ千葉のカンフー映画とプレスリーにイカれております。
誰ひとり一緒に祝う者のいない誕生日。心優しいビデオショップの店長さんは、一人映画館で誕生日を過ごすスレイターにコールガールのプレゼント。
普通の男女の出会いっぽく演出するおまけつき。
しかしそれはただのプレゼントでは終わらなかったわけですね。
たまたまスレイターのもとに派遣されてきたコールガールってのが、お客をとりはじめて間なしの娘アークエットさま。
彼女はお客であるはずのスレイターさまを好きになってしまいます。
スレイターさまもすっかりアークエットさまに夢中。
スレイターさま、アークエットさまのヒモにかけあって彼女との結婚を認めてもらおうとします。
まあ日本風に言えば身請けですな。
しかし話の流れで相談がすっかりこじれてしまう。
ポン引きの連中にボコボコにされたスレイターさま、キレてしまってそこで銃をぶっ放し、ヒモ一派を皆殺しにしてしまいます。
動転しながらも彼はアークエットさまの着替えを持ち出しますが、たまたまスレイターさまが手にしたボストンバッグにはヒモ君たちが抗争の末に手にした大量の麻薬が入っておりまして、さ

あ大変。
クスリなんてヤバイ物をいつまでも持っているわけにはいかないので、現金に換えようと躍起になるスレイターさま。
殺してでもクスリを取り返したいマフィアのボス。
ここから物語はひたすらディープでリアルな麻薬争奪戦になってしまいます。
さてスレイターさま、アークエットさまの運命やいかに。
タイトルにすっかりだまされましたが、なかなか迫力があって良い映画でした。

# ハイ・クライムズ

２００２年アメリカ映画
監督　カール・フランクリン
主演　アシュレイ・ジャッド、モーガン・フリーマン

けっこう面白かった法廷サスペンスです。
ただし、普通の法廷サスペンスとかではなく、軍事法廷サスペンスでございます。
日本には言うまでもなく軍隊ってのがありませんので、「軍事機密」とか「軍事法廷」ってのが原則ありません。
そもそも海上自衛隊の船と民間の釣り舟が衝突したってえ事故があったときにも、自衛隊がバッシングがなされるという平和な国ですからねえ。
自衛隊って準軍隊的組織の船とお遊びの釣り舟との間で、自衛隊に航路の優先権が与えられないってえ国ですから、「軍事」ってもののヴェールが真実を覆ってしまうって感覚がちょっとわかりにくいです。
アシュレイ・ジャッドさまは民間の法律事務所に勤める女性弁護士。
ある日、彼の夫が突然ＦＢＩに逮捕されてしまいます。
「どういうことなんよ」って調子で抗議してもとりあってもらえない。
「軍事機密だから」って感じです。
話を聞いてみると、実は夫はかつて海兵隊の特殊部隊のメンバーで、エルサルバドルで九人の一般市民を射殺し、軍隊を脱走して逃走したってことらしい。
なんじゃそりゃ。ジャッドさまは夫のため、軍事法廷の弁護人として事件にかかわる決意をします。
しかし軍事法廷ってところは一般の法律が通用しない世界だったわけですね。
そこで彼女は軍事法廷で勝訴を勝ち取った経験があるという元軍人の弁護士フリーマンに協力を要請し、「軍事機密」というものと戦うことになるわけでございます。
突然証人に出廷拒否されたり、すごい証拠を証拠採用してもらえなかったり、あげくの果てには盗聴されたり命を狙われたり。
悪質やなあ。ここから先の展開は書かないほうがいいでしょうね。
某大推理作家の傑作推理小説とそっくりの展開が待ち受けております。
私はその傑作推理小説をすでに読んでおりましたので、この展開は想定しておりましたが、もし読んでなかったらそうとう驚いただろうと思います。
おお、モーガン・フリーマンさま、またお会いしましたなあ、って感じでございます。
この人の映画的露出度もやたら高いですよね。
老練な刑事とかやらせたらけっこう上手いですよね。
ただ弁護士ってのはどうかなあ。ちょっとキャラじゃないような気がするんですけど。

# ゴジラ・モスラ・キングギドラ　大怪獣総攻撃

２００１年東宝作品
監督　金子修介
主演　新山千春、宇崎竜童、小林正寛、佐野史郎

平成ゴジラの、しかもミレニアム以降のゴジラ作品でございます。
ここでちょっとゴジラシリーズについておさらいです。
そもそもの「ゴジラ」は、１９６０年代、核の脅威などの社会性の高いメッセージを織り込んで製作され、大成功した傑作ざます。
大ヒットしたもんだからシリーズ化され、どんどんシリーズが肥大していってしまって、「核の恐怖の権化」といった当初のコンセプトが薄れていってしまいます。
キングギドラ登場以降、地球を守る正義の怪獣として安定した人気を保ちます。
でもゴジラそのものが怖くなくなってしまいまして、しばらく映画化が休止。
平成になって、再び「悪の権化」として復活。
平成シリーズは、最初の「ゴジラ」の続編としての位置づけでございました。
だもんで、だんだん性格が丸くなっていって地球を守ったりした二代目ゴジラ世界はなかったことになっております。
その平成ゴジラも「ＶＳデストロイア」でメルトダウンしてしまいまして、劇的な最後を遂げました。
で、ミレニアム以降のゴジラ世界。
これら作品群も、それぞれ前の作品がなかったことにしての続編が多いようでございます。
この「怪獣総攻撃」の作品世界もそう。最初のゴジラが退治され、それからずっとゴジラはいなくて、で、いきなりゴジラが現れたって世界です。
当然昭和の二代目善玉ゴジラも、平成メルトダウンゴジラも、オルガとかメガギラスとかと戦ったミレニアムゴジラもいなかったんだって世界の話。
物語はねえ、ゴジラが現れて、日本を守る神話の中の怪獣と戦って、ゴジラがやっつけられて終わり。
なんやそれ。
だってそうなんだもん。
今回ちょっと新しかったのは、モスラやキングギドラやバラゴンが、神話の世界に登場する日本を護る怪獣だったって設定です。
モスラやバラゴンはまあ置いておくとして、キングギドラを「神話の怪獣」にしてしまったのには驚きました。
キングギドラって明らかに悪役キャラですもんね。
でもヤマタノオロチっぽく見えなくもないから、ほお、すげえ発想の転換やなあと思ってしまいました。

特撮部に対し、物語部の主役は、マスコミ記者の新山千春さまと、その父の宇崎竜童さまの親子の愛憎と信頼関係の回復がドラマの軸になっております。
まあ、良い話なんだけどお。
宇崎さまが父親役ってどないよ。
でも違和感なかった。
もうそんなお年なんですね。
ダウンタウンブギウギバンドの頃、この人がこんなに多才な人だとは思わなかったです。
怪獣ファン・ロックファンのオヤジとしては、けっこう堪能してしまいましたです。

# ポセイドン・アドベンチャー２

１９７９年アメリカ映画
監督　アーウィン・アレン
主演　マイケル・ケイン、サリー・フィールド、テリー・サバラス

伝説の名作「ポセイドン・アドンチャー」の続編です。
「ポセイドン・アドベンチャー」はこの巻の最初らへんでご紹介しましたよね。
真横から津波をうけた豪華客船が天地逆に転覆になるという物理学上かなり難しいと思われるシチュエーションは別として、それでも傑作としての評価を不動のものとしている前作ではありますが、本作は前作とは似て非なるものであるとお思い下さいませ。
前作のラストから数時間後。
転覆した豪華客船「ポセイドン号」に謎の貨物が積み込まれておりまして。
その謎の荷物をめぐってのアクションサスペンス。少しわかりにくい物語が、やはり天地逆の船内で展開します。
マイケル・ケインさまとテリー・サバラスさまの演技合戦が思っていたより面白くはありましたが、しかしそれにしても第一弾と第二弾の内容に差がありすぎます。
明らかに別次元の物語であるような気がします。
そもそもポセイドン号のお話で続編を作ろうってのが無理がある話には違いありませんですね。
生き残りをかけた行き詰まるような物語展開の第一弾のサスペンスとはちょっと質の違う謎解きサスペンス。
論ずるフィールドが違いすぎて、何とも比較できない感じですね。
ちなみにこの「ポセイドン・アドベンチャー２」ですが、「ポセイドン・アドベンチャー」が「ポセイドン」としてリメイクされる際、おそらく「確かポセイドンアドベンチャーには続編があったと思うけど、とりあえずみんな、続編が存在していたことは忘れてリメイクがんばろうぜ」みたいな扱いをうけたでしょうなぁ。
不遇な作品やなあ。まあ、しかたないか。

# 事件

１９７８年松竹作品
監督　野村芳太郎
主演　永島敏行、大竹しのぶ、松坂慶子、佐分利　信、芦田伸介、丹波哲郎

野村芳太郎監督の傑作法廷映画です。
野村監督は後に「疑惑」なんて傑作を撮ることになりますが、この作品ですでに法廷ドラマの物語運びの手法だとか、わかりやすく裁判の進行を見せる手法だとかが完成されております。
よく考えたら、この映画って三十年以上前に撮られた作品なんですよね。
びっくりしてしまいます。
永島敏行さまはデビューしてすぐの頃だったと記憶しております。
大竹さまは映画に出始めたのが早かった関係で、当時はすでに有名だったですが、それでも若手女優って感じの時期だったです。
で、この作品の核になっているのはやはり松坂慶子さまでございます。
この時期は松坂さまはとにかくいろいろな映画に出まくっておられた時期でして、キャラクターの境遇が似ている関係で映画版「蒲田行進曲」の小夏の役とだぶってしかたない。
さてストーリーは…
若い女性の刺殺体が発見されます。
被害者はスナックで働く松坂さま。
警察は事件当日の夕方、犯行現場近くで目撃された青年・永島さまを逮捕します。
永島さまは松坂さまの妹・大竹さまと同棲しており、彼女は妊娠しております。
彼の裁判に携わるのは、裁判長・佐分利さま、検事・芦田さま、弁護士・丹波さま。
うおおおお。重い重い。なんという重厚な布陣でしょうか。
証言台に立つ証人たち。彼らの言葉から、「事件」はやがてその全貌を明らかにするわけでございます。
とにかく佐分利さま・芦田さま・丹波さまの三人がやたらいいです。
めちゃくちゃいい。
あと、キャスト欄には書いておりませんが渡瀬恒彦さまがめちゃくちゃいいです。
しかししかし、それよりも何よりも、大竹さまの演技が素晴らしい。
当時はまだ「女の子」に近い年齢でしたが、天才ぶりを見せつけるような素晴らしい演技です。
えっと、あと言っちゃ悪いかもしれませんが、永島さま、ちょっとまだ演技とか覚束ない。
「うわあ、この人演技下手〜」とか思ってしまいました。
申し訳ないですが。
今はもちろん永島さまは名優ですよ。
まあデビューして間もなくのこの時期の演技は片目つぶってあげてくださいませ。
まあそこらあたりの部分を割り引いてもすごく見ごたえのある名画でございました。

# 望郷（１９３７）

１９３７年フランス映画
監督　ジュリアン・デビュビエ
主演　ジャン・ギャバン、ミレーユ・バラン

私が小学生から中学生くらいのころ、「キネマ旬報」とか「スクリーン」とか「ロードショー」とかの雑誌で「是非見ておきたい名画ベストテン」みたいな企画がありましたら、常に上位に入っていた作品でございます。
映画を見始めたころは、もうジャン・ギャバンさまっていったらおじいちゃんでした。
「地下室のメロディ」だとか「シシリアン」だとかで渋いギャングのボス役を見せてくれておりましたです。
「現金に手を出すな」あたりでもすでに初老のギャング役だったですからねえ。
そんなジャン・ギャバンさまの名優としての評価を決定づけた作品ですから、そらもう古い映画ですわな。
作品の舞台はフランス領アルジェリアのカスバって町。
クラッシュの「ロック・ザ・カスバ」の「カスバ」ってこの町のことなんでしょうか。
この町にフランスからお尋ね者の凶悪犯ぺぺ・ル・モコ＝ギャバンさまが逃げてまいります。
この町でモコ＝ギャバンさまは、ギャビー＝バランさまと出会い、二人は恋におちるわけです。
しかしバランさまの情夫がギャバンさまの情報を警察に密告するわけです。
さあさどうなる。
って言ってもほとんどの人がこの映画のラスト知っているんじゃないかなって思います。
それくらい良いラスト。
久しぶりにこの映画見たくなりました。
ちなみにこの映画の原題はそのものズバリ、「ぺぺ・ル・モコ」ってタイトルです。
「望郷」って日本題は、いいのか悪いのか。
でも最近は洋画にはこういった系のタイトル、なかなかつかなくなりましたね。

# ガメラ２レギオン襲来

１９９６年大映作品
監督　金子修介
主演　水野美紀、永島敏行、石橋　保、吹越　満

さて、突然ですが問題です。
次の怪獣の姿を思い浮かべてください。
レベル１の問題。ゴジラ。キングギドラ。モスラ。メカゴジラ。ガメラ。ギャオス。
レベル２の問題。ビオランテ。オルガ。メガギラス。デストロイア。イリス。レギオン。
えーっと、変な入りかたしましたが、これぞ本日のテーマ。
怪獣の造形についてでございます。
申し訳ないですが、平成ゴジラ、平成ガメラのオリジナル怪獣って、どれも造形がわかりにくい。
そのうえ成長したりするものが多くて、映画を実際に見ても怪獣のイメージがはっきりしないものが多いです。
レベル１の怪獣は、昭和シリーズにも登場して、さらに平成シリーズにも登場した怪獣。
「ゴジラ・ファイナルウォーズ」に登場した怪獣なんかも入れると、かなりの数になりますが、とりあえず代表的なところだけ書きましたけど。
でも同じキングギドラ系でも、平成になって登場したデスギドラだとか白亜紀型キングギドラだとかカイザーギドラなんかは、やっぱりイメージしにくいですよね。
これってやっぱり、怪獣に対する思い入れってレベルではなく、造形に負うところが大きいような気がします。
その証拠に、平成シリーズで珍しく進化しなかった「スペースゴジラ」は、デザインがストレートでわかりやすかったせいか、イラスト書けって言われたらスラスラ書けそうです。
ってことで、「ガメラ２」。
デザイン的にビハインドを負ったガメラ新シリーズの新登場怪獣レギオン、果たしてその戦果はいかに。
レギオンってのは宇宙怪獣でございます。
北海道に落下した隕石に潜んで飛来した、カニとサソリとをかなり強引に合体させたようなわかりにくい形の怪獣。
平成シリーズのガメラは「人類を守る神の使い」みたいな性格に描かれております。
なんか体内に勾玉が埋まってたりしまして、ほうほう、うまいこと神話世界を使ってるやないの、みたいな感じでございます。
で、ガメラ、レギオンと戦う、みたいなあ。
ていうか。
やっぱあ。

って感じ。
ガメラの造形について。
えっとねえ、ガメラのデザイン、平成に入ってからは作品ごとにかなり大胆に変わっております。
「ガメラ」のガメラは昭和ガメラと比較すると、少し手足を太くして、よりカメっぽくリアルに作ったみたい。
顔が小さく、目が鋭くなってかわいい感じがなくなりましたです。
この「レギオン」のガメラは、手が少し平たい感じに変えられております。
ちょいとウミガメっぽい。
これが次回作の「イリス」になると、極端に頭が小さく、人間っぽいバランスになって、そのかわり甲羅にトゲトゲとかがついて怖いイメージになっております。
こんなふうに、メインキャラのデザインで怪獣映画を見るのも面白いですよ。

# ドラゴン危機一発

１９７１年香港映画
監督　ロー・ウェイ
主演　ブルース・リー、ジェームズ・ティエン

あちょおおおお、おたおたおたおたあああっ。ほあああああっ。
って雄叫びで有名なブルース・リー大先生さま。
彼の主演第一作でございます。
ここまでのブルース・リーさまはアメリカ製ヒーローテレビシリーズ「グリーン・ホーネット」なんかに出演しておりましたが、本格的スクリーンデビューはやっぱりこの作品になるかと思います。
残念ながら、ブルース・リーさまの象徴ともいえる怪鳥ボイスは本作では聞くことはできません。
雄たけぶのはこの次の作品、「ドラゴン怒りの鉄拳」からでございます。
上半身裸で戦うシーンもなかったような記憶があるんですが。
戦いのなかで服がだんだん破れたりはだけたりして、上半身裸に近い形にはなるんだけど、これ以降の作品のように「臨戦体制＝上半身裸」みたいな形ではなかったように記憶しております。
主人公のリーさまは田舎の農村で働く青年。
でも武術の達人なわけですな。
大雨の影響による凶作で出稼ぎせざるを得なくなり、しかたなく町の製氷工場で働くことになります。
しかあし。この工場に秘密があったわけでございます。
この工場の持ち主が実は暴力団と関係がありまして、警察の目を欺くために氷の中に麻薬を入れて全国の暴力団関係者に出荷するなどというごっつい悪党だったわけでございます。
工場で仲良くなったリーさまの親友は、この秘密を知ってしまったがために氷漬けにされて殺されてしまったりします。
リーさまの恩師も殺されてしまいます。
で、ブルース・リーさまの怒り爆発。
工場で手下どもをやっつけ、工場のオーナーの屋敷に単身乗り込んでいって直接対決となるわけでございます。
お約束ですが、このオーナーさんもやっぱりカンフーの達人。
息詰る戦いが繰り広げられます。あとおおおおおお。
ブルース・リーさまやっぱり若い。
あと、ちょっとふっくらした感じです。
この後、ブルース・リーはまるで剃刀で贅肉をそぎ落としたかのようなすんごい体になっていきます。

「死亡遊戯」のころなんて病的に痩せていたような印象があります。
カンフー映画ファンとしてはやはり外せない映画には違いありませんね。

# オーメン（１９７６）

１９７６年アメリカ映画
監督　リチャード・ドナー
主演　グレゴリー・ペック、リー・レミック

６６６は悪魔の数字。うひょおおおお。
悪魔の子「ダミアン」をめぐるホラー映画シリーズの第一作。
アメリカ外交官のペックさま。
妻はレミックさま。
二人の間にできた赤ちゃんは残念ながら死産となってしまいます。
ちょうど同じ産院で、身元のはっきりしない女性が赤ちゃんを産み、その直後に死んでしまったなんて事件がありまして、夫妻は死んだ赤ちゃんのかわりにその子供をひきとって育てることになるわけです。
赤ちゃんはダミアンと名付けられ、すくすくと成長しますが、その子が五歳の誕生日を迎えたあたりでじわりじわりとよくないことが起こりはじめます。
まずダミアンの乳母が、誕生日ガーデンパーティーの最中に首吊り自殺。
代わってやってきた乳母はめっちゃ不気味。
少しずつ外交官一家は変な雰囲気になっていきます。
そんな中、ペックさまの周囲に妙な人が現れます。
神父を名乗るその男は、ペックさまに「あなたの子供は生まれながらの悪魔の下僕で、世界を滅ぼすものだ」なんて言うわけです。
最初は彼を相手にしていなかったわけですが、神父の言葉にあった壁画に息子そっくりの悪魔の絵が書かれていたり、息子の母親を調べたりするうちに、神父の言葉が真実だったと気付くわけですな。
相手はやっぱり悪魔でございます。
神父が落雷で折れた避雷針にくし刺しにされたり、協力者のカメラマンがガラス板で首を飛ばされたりしていきます。
うひょおおおお。果たしてペックさまの運命やいかに。
って書いても、シリーズが続くわけだからダミアンは本作では死にません。
ってことは外交官夫妻が死んでしまうわけでございます。かわいそう。
私的には、ダミアン本人が自分の出生の秘密を知り、苦悩の末に「悪魔の子」として生きることを決意する「オーメン２」のほうが好きですね。
殺しのシーンも派手だし。
グレゴリー・ペックさま、とっても良い感じです。
この作品以降、あまり姿を見てないような気がするのですが、気のせいでしょうか。
シリーズではピンポイントで有名俳優を起用しておりまして、本作ではグレゴリー・ペックさま

、２ではウイリアム・ホールデンさまが出演しております。
３ではメジャー役者さんは登場せず。予算が底をつきたのでしょうか。
ちなみに３で成長したダミアンを演ずるのは、後に「ジュラシック・パーク」でグラント博士を演ずるサム・ニールさまでございます。

# 最後のブルース・リー　ドラゴンへの道

１９７２年香港映画
監督　ブルース・リー
主演　ブルース・リー、チャック・ノリス、ノラ・ミヤオ

えーっと。ブルース・リーさま主演映画第三作。
なんで最後のブルース・リーなのかといいますと、主演第四作の「燃えよドラゴン」が最初に日本で公開されてしまいまして、そこから主演第一作の「ドラゴン危機一発」第二作の「ドラゴン怒りの鉄拳」と公開されて、この主演第三作の「ドラゴンへの道」が最後に公開されたからですが…
実はこの映画のあと、未完成作品にそっくりさん画像を加えて完成させた「死亡遊戯」だとか、さらに未公開画像を加えて編集した「死亡の塔」、さらにはテレビシリーズのダイジェストの「グリーンホーネット」映画版まで公開されることになります。
ってことでこの作品、製作順でも日本公開順でも「最後のブルース・リー」なんかじゃなかったってことになります。
ただ、「完成した主演映画」って意味では確かに最後に公開されたブルース・リーさま作品です。
えっと。舞台はイタリヤ・ローマのチャイニーズレストランです。まあどこの国でもよくあることですが、このレストラン、地元のやくざもんに嫌がらせをうけております。
まあ地上げですわな。困った店主は、故郷の弁護士に相談するんですが、その弁護士はローマには行けないと。
で、代わりのものを行かせるってんでやってきたのがリーさま。
冒頭はなんかポワンとした兄ちゃんとして登場です。
法律家にきてもらうことを期待していた店主のミヤオさま。
なんかすっきりしない気分でリーさまを受け入れます。
ある日、店にやってきたヤクザさんたちを、ポワンとしたリーさまが中国拳法で叩きのめしたことから、店は活気づきます。
がしかし、ヤクザどものいやがらせも次第にエスカレートしていき、ついにはその一味と全面的に戦うことになってしまいます。
クライマックスは敵対組織の外国人用心棒、ヒゲが生えていないころの「地獄のコマンドー」チャック・ノリスさまとのコロシアムでの決闘ございます。
ブルース・リーさまはこの作品では脚本・監督・主演・武術指導の四役をこなしております。
そういう意味ではこの作品はブルース・リーさま本人が一番作りたかった作品だったのかもしれません。
過去二作のブルース・リーさまはけっこうストイックな暗さがあったんですが、この作品のリーさまはちょっと三枚目風。

本当はこんな人だったんでしょうか。
すでに結婚していて子供もいたリーさまの「心の恋人」って噂があったノラ・ミヤオさまもかわいくてきれいです。
ブルース・リーさまの代名詞ともいえるヌンチャクですが、今回はダブルで使います。
それはそれですっごく見応えのあるアクションざます。傑作、と評価しておきましょうぞ。

# 海猿

２００５年フジテレビ・ポニーキャニオン作品
監督　羽住英一郎
主演　伊藤英明、加藤あい、藤　竜也、海東　健、國村　隼、伊藤淳史

作品見たときに出演者とかワワワっとメモとりながら見たんですが、製作年度と監督をメモし忘れたもんでネットで「海猿」検索したら…
すごい件数でした。11万件とか。驚きやわ。
コミックスから映画、映画からドラマ、そしてまた映画、というメディアを飛び越えたヒット作品です。
基本的には、伊藤英明さま演ずる仙崎という青年の成長物語です。
この映画では彼が潜水士として訓練をうけ、訓練所を卒業するまでを描きます。
ちなみにドラマ版は彼がその後、巡視船「ながれ」に配属されてからその数ヶ月後、船が廃船になるまでを描いておりましたです。
伊藤英明さま、海東　健さま、伊藤淳史さまは海上保安庁の潜水士となるための訓練を受けております。
訓練所の教官は藤　竜也さまざます。
海上保安庁の訓練生ってのは、地元のねーちゃんなんかに「海猿」なんて呼ばれております。
この「海猿」って言葉は、かなりネガティブな使われ方をする言葉みたいですね。
「海猿なんかとかかわりあいになっちゃだめだよ」みたいな。
厳しい訓練の合間、外出許可がおりた日、伊藤（英）さまはベロベロに酔っ払った女、加藤さまと出会います。
介抱する流れでそのままホテルへ。
しかしまあそういうことはなかった一夜を過ごしまして、それ以来、二人は狭い港町でなんとなく意識しあう関係になります。
加藤さまは体調を崩した母の看病のためにこの町にやってきたわけですな。
彼女は東京のファッション誌のライターでございます。
初の記事が雑誌に掲載される予定だったんだけど、その記事はボツになり、仕事を続ける自信をなくしております。
伊藤（英）さまと加藤さまの関係はそんな感じ。
で、物語は潜水士のトレーニング描写を描きながら進みます。
二人の恋愛エピソードはドラマに続く伏線やね。
さてさて、訓練では伊藤（英）さまと海東さまがはりあっております。
伊藤（淳）さまは同期生の間でかなりお荷物になっております。
それでも一名の脱落者もなく、実習が順調に進みます。
そんなある日のこと。休みの日、訓練生たちがファンダイビングを楽しんだ後、伊藤（淳）さま

は溺者を発見、一人で救護に向かい、そのまま巻き込まれて帰らぬ人となってしまいます。
伊藤（淳）さまとバディだった伊藤（英）さまはショックを受け、脱落寸前。
脱落寸前の伊藤（英）さまに語りかけるのは食堂のおばちゃん（なんと元バービーボーイズの杏子さまです）。
教官の藤さまが現役潜水士だったとき、バディを死なせてしまった過去を話し、その話で伊藤（英）さま、奮起するわけですな。
やがて最終の海洋実習が行われます。
伊藤（英）さまとバディを組むのは海東さま。
さあさ、ここで大事件が発生するわけでございます。水深４０メートルの海中で、現役時代の藤さまとほぼ同じ状況に追い込まれた伊藤（英）さま、果たして彼はバディを死なせずに帰ることができるのでしょうか。
いぐわあああ。
テレビドラマに通ずる伏線があちこちに張られております。
で、テレビドラマでのエピソードが映画版第二弾の伏線になっております。
テレビシリーズもあわせて、時系列に沿ってお楽しみいただきたいと思います。

# ザ・グリード

１９９８年アメリカ映画
監督　スティーブン・ソマーズ
主演　トリート・ウイリアムズ、ファムケ・ヤンセン、アンソニー・ヒールド

どうジャンル紹介したらいいんでしょうか。
海洋モンスターサバイバルアクションでいいのかなあ。
物語の主人公は海の運び屋でございます。彼は謎の荷物と数名の乗客の運搬を請負います。
積荷はなんとミサイル。指示した場所に自分と荷物を運べと、そういうことでございます。
一方、ニセ・ニック・ノルティさまみたいなセレブのおっちゃんが豪華客船を進水させます。
その日はお金持ちの皆様を集めて処女航海でございます。
しかしその豪華客船の航行コンピューターシステムが突如ダウンし、船は航行不能となります。
さあさ、そこで突如登場する謎の生物。
乗客のほとんどがその生物に襲われてしまうわけでございます。
わけわからんままホラーな状況が加速してまいります。
いぐわああ。一方、海の運び屋さん。
ミサイルを運んでいたのは傭兵部隊みたいなならず者軍団だったってことがわかります。
船の行き先はなんと件の豪華客船が航行不能に陥った海域でございます。
で、いろいろなことがわかってまいります。
実は彼らの雇い主は豪華客船のオーナー、ニセ・ニック・ノルティさまだったわけです。
実は彼は豪華すぎる客船を作ってしまったがために破産寸前。
今後、どれだけ集客してもランニングコストだけで大赤字になることが確定してしまっている。
それならば処女航海で沈没かなんかしてしまって、保険金で建造費を補填するのが最も良い方法であると、そういうことでございます。
ミサイルは船の破壊のためだったわけですな。
さあさ、リアルな話はこのあたりで。ここまでの話とは別に…
海底に肉食性のミミズのような生物がおりまして、その生物が何かの拍子に海面付近にあがってまいりました。
深海では数センチの生物ですが、水圧の低いエリアにあがってきたせいで、巨大生物になって現れました。
豪華客船を襲った謎の生物はこいつだったわけですな。
豪華客船のほとんどの乗客と運び屋船のクルーや傭兵部隊のメンバーも次々と犠牲になっていきます。
さあさどうなるのでしょうか。
この手のモンスターホラーサスペンスが面白くなるかどうかは、物語の設定がうまくできているかどうかってのも大きな要素だと思うんですね。

この作品の場合、豪華客船の設定だとか海の運び屋の設定はきちんとうまく処理できていたんですが、肝心のモンスター登場の設定が少し弱く、リアリティに欠ける出来でございました。
うむむ。惜しい。もうちょっとしっかり設定を詰めておいていただきたかったですね。

# シェルタリング・スカイ

１９９０年イギリス映画
監督　ベルナルド・ベルトリッチ
主演　デブラ・ウインガー、ジョン・マルコビッチ

巨匠ベルナルド・ベルトリッチ監督が、「ラスト・エンペラー」でアカデミー監督賞を受賞後に撮った作品でございます。
作品の雰囲気としては、「ラスト・タンゴ・イン・パリ」の世界をフランスのアパートからアフリカにシフトさせたみたいな感じでしょうか。
不毛な恋愛っていうか、わかりにくい情念的な恋愛世界といいますか。
これはウインガーさま目線ね。
マルコビッチさま目線で物語を考えると、どっちかってえとビスコンティ監督っぽい退廃的なムードだとか滅びの美学を求めるとか、そういった空気を感じてしまいます。
アメリカからアフリカにやってきた一組の夫婦。
これがウインガーさまとマルコビッチさまです。
夫婦の愛情は醒めてしまっておりまして、この旅行は壊れかけた夫婦の絆をなんとかしようって目的だったわけです。
しかし皮肉なことに、この旅行が夫婦の溝を決定的にしてしまったりします。
ウインガーは旅行の世話人の男性とエッチしたりするわけですね。
夫はそのことを知っているけど気づいていない（ってウインガーさまは作中で言ってたんだけど、どう解釈すればいいんだろう）。
マルコビッチさまは妻をサハラ砂漠が見渡せる丘に連れてきたりします。
しかし二人はますますすれ違ってしまいます。
タイトルの「シェルタリング・スカイ」ってのは、このときのマルコビッチさまのセリフ、「空は我々を外の世界の危ないものから守ってくれている」みたいな言葉からつけられているようです。
そんなかわいそうな二人、アフリカ旅行を続けますが、夫のマルコビッチさまが熱病にかかってしまいます。
献身的に看病をするウインガーさま。
こんな事態になってはじめて夫婦の距離が近づきます。
しかし看病の甲斐なくマルコビッチさまは息をひきとってしまいます。
傷心のウインガーさまは一人でアメリカに帰るんだろうなあって思っていましたら、そうはならない。
ウインガーさま、なんと商人のキャラバンに同行し、商人とエッチを重ねるわけでございます。
どないやねん。もうここらへんですでについていけなくなってしまいました。
なんでこうなるのかがイマイチわからなかたので、「はあ？」って感じでございます。

結局うむむって考えている間に映画が終わってしまいました。
どうやらこういった系統の哲学的恋愛映画だとか、文芸的ラブストーリーだとかの作品を理解できる素養は私にはないみたい。
同時に、このへんの作品の素晴らしさを理解できるだけの感性も、どうやら持ち合わせていないようでございます。
悔しいけど、どこが良いのかわからなかった作品でございますです。

# ゲロッパ

２００３年シネカノン・電通作品
監督　井筒和幸
主演　西田敏行、常盤貴子、山本太郎、岸部一徳

バラエティ番組で辛口コメンテーターとして人気の井筒和幸監督作品です。
実はねえ、あまり面白くないだろうなあって勝手に思って敬遠してた監督さんなんですね、井筒監督って。
やたら評価が高い監督さんっておられますでしょ？
私って、そういう監督さん、苦手な人が多いんです。
森田芳光監督とか、亡くなった相米監督とか。
悪くはないんだけど、イマイチ感性がシンクロしないっていいますか。
ぶっちゃけ、好きじゃないんです。
個性が強い監督さんって意味では、大林監督とか最近評価がうなぎのぼりの中島哲也監督（下妻物語の監督さんざんす）なんかがおられますが、お二人の手法がついていける限界やなあ。
鈴木清順監督とか、実相寺昭雄監督なんかも個性が強すぎてついていけない。
まあ私が映画人生の師と仰ぐのは徹底的にエンターテイメントにこだわった深作監督ですからね。
しゃあないか。
井筒監督も、そういうこだわった映像撮る人だろうってご本人のイメージでそう思っておりました。
で、この「ゲロッパ」見てびっくりしちゃいました。
めちゃ面白かったです。
関西人なんやなあ。ノリというか、エピソードの落としかたがめっちゃ関西風。
こんな面白い映画は久しぶりだあ、っていうくらい感動しちゃいました。
西田さまはヤクザの大親分。
逮捕カウントダウン状態で、組を解散させようと思っています。
そんな大親分のために兄弟分が考えたのは、逮捕されるまでに親分が大好きなジェームズ・ブラウンさまを親分の前で歌わせること。
設定からしてけっこうメチャクチャ。
兄弟分岸部さまの指示で、山本さま初め若い衆がＪＢ誘拐のために動き出すわけですな。
ちょうど来日していたＪＢですが、山本さまが誘拐したのはそっくりさん。
あかんがな。
しかしそのそっくりさんを内閣調査室のエージェントが追っております。
なんでやねん。
この謎が、物語クライマックスにつながる重要な伏線なわけですな。

さてさて、親分の西田さまは逮捕されるまでのわずかな間に、自由であるうちでないとできないことをやってしまおうとします。
それは生き別れになった娘と会うこと。そしてその娘の子（孫ですわな）と会うことでございます。
実はこの娘ってのがそっくりさんショーを出し物にしているプロダクションのスタッフ常盤さまでございます。
でＪＢのそっくりさんは彼女のプロダクションと契約をしたタレントだったと、こういうことです。
さあさどうなる。
けっこうシッチャカメッチャカな展開ですが、物語後半で一気におさまるべきところにおさまるという、見ていて気持ち良いオチ。
すげえすげえ。とりあえず、西田さまというとんでもない才能の役者さんと、その才能を活かしきった井筒監督との出会いがこの傑作を生んだわけでしょうね。
脱帽でございます。

# ダンテズ・ピーク

１９９７年アメリカ映画
監督　ロジャー・ドナルドソン
主演　ピアース・ブロスナン、リンダ・ハミルトン、チャールズ・ハラハン

総制作費１３０億円をつぎ込んだパニック・スペクタクル大作。
「００７」のブロスナンさまと「ターミネーター」のリンダ・ハミルトンさまが共演しています。
プロスナンさまは地質学者。
地震の調査のため、「ダンテズ・ピーク」という町にやってきました。
この町は「全米で二番目に住みやすい小都市」（というより田舎町って感じです）という町でございます。
女性町長ハミルトンさまの案内で山の天然温泉を視察しますが、そこにあたのは若者の死体。
温泉で遊んでいるときに何かあったらしい。
他にも数々の火山活動の微細な前兆が観測されます。
即座に町議会に避難勧告を進言するブロスナンさま。
しかし地震調査所のえらいさんがやってきて、ブロスナンさまの避難勧告を撤回してしまいます。
調査を続けてダンテズ・ピークの火山活動の「客観的根拠」をつかんだブロスナンさま。
しかし避難の説明をするための町民集会を開催しているまさにそのとき、ダンテズ・ピークの休火山が活動を再開してしまいます。
うおおおおお。
大地震。粉塵。火山灰。溶岩に土石流に火砕流。
火山活動描写のオンパレードでございます。
ブロスナンさまとハミルトンさまは、子供たちだけで「山に住んでいるおばあちゃん」を助けにいったハミルトンさまの息子と娘を探しに、山に向かいます。
「私は山で死ねれば本望さあ」みたいなおばあちゃん、結局自分の頑固さのせいでかわいい孫や娘が死にそうな目にあうわけですな。
おばあちゃん後悔。
おばあちゃん救助班のご一行様、溶岩の流れを避けて湖にボートを出したわけですが、対岸に到着するまでに強酸性の火山噴出物でボートは立ち往生。
おばあちゃんが死ぬ覚悟で湖に入り、ボートを押してブロスナンさま・ハミルトンさまと二人の息子は助かります。
おお、なんか「ポセイドン・アドベンチャー」みたいやなあ。
そうかと思うと地震研究所のスタッフでは、ブロスナンさまが発令した避難勧告を撤回した「例のえらいさん」だけが土石流に流されて死んでしまうし。

おお、これはなんか「ジュラシック・パーク」みたい。
ここらあたりはすっごいハリウッド精神ですなあ。
主人公と対立する頑固な年寄りや主人公の意見を聞かない上司はたいがい途中で死んでしまいますよね。
まあ現実ではそういうワルキャラが出世して、ブロスナンさま型のキャラは出世しないか、キレて会社辞めるってのがオチだから、せめて映画の中くらいはそういう輩をひどい目にあわせてくれてるのでしょうか。
とりあえず、相手（火山だもんなあ）のスケールがでかすぎて、一切の小細工が通用しないもんで、中盤のＳＦＸはよかったんだけど後半がイマイチ。
相手が火山だと、危機一髪の状況だと普通に考えたら助からないと思います。
助かった人って、かなり早い段階で避難した人ばっかりだと思うし。
そんな事情で、とっても嘘っぽさばかりが目立つクライマックスになったのはちと残念だったような気がします。

# 下妻物語

２００３年「下妻物語」製作委員会作品
監督　中島哲也
主演　深田恭子、土屋アンナ、宮迫博之、篠原涼子、阿部サダヲ、岡田義徳、小池栄子、矢沢心

「嫌われ松子の一生」の中島哲也監督の出世作ざます。
この映画の予告編は映画館かビデオの新作情報か何かで見た記憶があります。
その頃はまだフカキョンさまにはまってなかったので、全くノーマークだった作品です。
この作品をどうして見ようと思ったかっていいますと、衝撃的だったかつてのドラマ、「富豪刑事」の影響だったです。
ロリータファッション命の深田さま。
彼女の父はヤクザになろうとしてなりきれない宮迫さまです。
宮迫さまは兵庫の尼崎でテキヤをやっとりまして、バッタもんのブランド品を扱う男。
「バッタもんでも安けりゃええやん」みたいな関西気質に後押しされ、彼が扱う商品は売れまくります。
でもブランド本社にそれがばれて訴訟騒ぎになりかけます。
ほとぼりが冷めるまで宮迫さまと深田さまは下妻で暮らすことになりますが、深田さまはロリータファッションを買うお金欲しさに、ニセブランド品をネット販売しようとします。
で、その商品を買いにきたのがレディースの暴走族土屋さま。
かくしてロリータファッション娘とレディースヤンキー娘の奇妙な友情物語が始まるわけであります。
と、文字にするとちょっと固いけど、ストーリー展開が軽妙で、いたるところに遊び心がチラチラ。
映画というよりは、バラエティに近い感覚で物語が進んでいきます。
オリバー・ストーン監督の「ナチュラル・ボーン・キラーズ」で、主人公に起こる事件を古い海外ドラマ風に演出していた場面がありましたが、なんか全編そんな感じ。
というか、テロップの入れかたとかＣＧの使い方が、コマーシャルみたいなところがあって、「おお、これも映画の新しい可能性なんだなあ」って感心してしまいました。
とりあえずフカキョンさまだけ見れたらいいかな、みたいな軽い気持ちで見はじめた映画でしたが、かなりはまってしまいました。
久々に「もう一回見たいなあ」って思えた作品です。
土屋アンナさまがお金が欲しくてパチンコで儲けようとする場面がありまして、そこに唐突に登場する謎のリーゼントあんちゃんを阿部サダヲさまが演じておられます。
この人の芝居も強烈ですよね。

# ミッドナイト・エクスプレス

１９７８年アメリカ映画
監督　アラン・パーカー
主演　ブラッド・デイビス、ランディ・クエイド、ジョン・ハート

後に「エンゼル・ハート」なんて作品を手がけることになるアラン・パーカー監督の初期の作品です。
この人、出演者がみんな子供で世間をあっと言わせた「ダウンタウン物語」（ジョディ・フォスターさまが脚光を浴びた作品です）で監督デビューを果たした人。
能天気で明るいチビッコミュージカルの次の作品がこれって、どうなんやろって思ってしまいます。
内容はかなり重い。実話をもとにした作品です。
主人公のデイビスさまは海外旅行中でございます。
トルコを旅行中に、現地で手に入れたマリファナを国外に持ち出そうとします。
ところが悪いことはできないもので、ちょうどその時期は飛行機を狙ったテロが続発しておりまして、飛行機搭乗直前に念入りなボディチェックを受け、その結果マリファナが見つかってしまい、デイビスさまはつかまってしまいます。
ところがとんだ計算違いが起きます。
トルコでは麻薬不法所持は重罪だったわけでございます。
罰金刑くらいだろうと思っていたデイビスさまですが、裁判の結果、数年の懲役刑が科せられます。
でも弁護士は勝訴だって言う。
不法所持ですんでよかった、密輸だともっと刑期が長かったと、こういうことでございます。
デイビスさま、刑務所に入れられるわけですが、そこの刑務所ではリンチやら拷問・虐待が日常茶飯事。
それでも我慢してお務めしておりましたが、出所間近になっていきなりの再審。
どうやらアメリカとトルコの国家間の関係が悪化したため、トルコは報復とばかりにトルコ国内のアメリカ人受刑者にひどいことをはじめたらしい。
案の定デイビスさまは再び密輸容疑で裁かれ、今度は四十年だとかの刑期をくらってしまいます。
もうやるっきゃない。
我慢の限界。
彼は脱獄（＝ミッドナイト・エクスプレス）を計画することになります。
果たして彼に自由になる日はやってくるのでしょうか。
実話の映画化ですから、とにかくどんよりしたタッチで物語が進みます。
でもなあ。そもそもマリファナを国外に持ち出そうとしたわけだから、「自業自得やん」って思

ってしまいます。
そういうことしてるのに、思った以上に罪が重かったからって、脱獄とかしちゃあいけませんやな。
まあ麻薬不法所持で四十年（＝実質終身刑ですなあ）ってのは極端だけど。
えっと、度々紹介しておりますホラー映画の総集編みたいな映画、「ザッツ・ショック」ってえ映画でも、この映画のことを紹介しておりました。
この「ミッドナイト・エクスプレス」がとりあげられていることだけはクレジット見て知っておりましたが、ホラー映画でもショック映画でもなかったから逆にちょっと驚きましたです。

# ノー・マーシイ～非情の愛

１９８６年アメリカ映画
監督　リチャード・ピアーズ
主演　リチャード・ギア、キム・ベイシンガー、ジェローン・クラブ

何と表現すれば良いのでしょうかね。
ちょっと表現と説明に困ってしまう映画であります。
面白くないわけじゃないです。しかしねえ、ちょっと作品とキャストがかみあっていないような印象をうけましたね。
難しい話なんですが。
主人公のギアさまは刑事です。
まあどっちかというとはみだし系の刑事でございます。
マークしている男がやってくるという情報を知り、カーウオッシュの従業員に化けて洗車場に張り込み、狙った男が来て麻薬取引が始まったとみるや、ハンマー持って突入するみたいな暴走刑事。
そんなギアさまは逮捕したクスリの売人からある情報を仕入れます。
それは殺しの情報。
殺しの鍵を握る「刺青の女」（＝ベイシンガーさま）を捜してニューオルリンズまでやってきます。
どうにか彼女を探し当て、狙われている男を確保しますが、ギアさまの目の前で男は殺され、相棒刑事も惨殺されてしまいます。
ここからははみだし刑事、がんばります。
ベイシンガーさまは実は麻薬組織のボスの女だったわけですな。
ギアさまは拉致同然に彼女に手錠をかけて連行しようとします。
たちまちボスの手下との激しい銃撃戦。
ギアさまとベイシンガーさま、手錠につながれたまま、ニューオルリンズの沼地を逃げ回ることになります。
で、お約束でございますが、ギアさまとベイシンガーさまの間に芽生える恋心。
おお、ヘルシンキシンドロームやあ。
まあこのへんまでは許しますが。
「僕の彼女を紹介します」でも手錠につながれた二人が恋におちたわけだし。
さてさて、ニューオルリンズの警察署に逃げ込んだギアさまとベイシンガーさまですが、現地の警察にとってギアさまは厄介なよそ者。
結局彼女は証拠不十分で釈放、逆にギアさまは上司が迎えにくるまでブタ箱で待つはめになります。
さあさここからギアさまの逆襲がはじまるわけでございます。

後半のショットガンを使ったホテルでのアクションシーンは、ペキンパー監督の「ゲッタウェイ」の影響を強く感じます。
それにしてもちょっとパクりすぎかもしれませんね。
最後のワルボスとの殴り合いは「うむむ」って感じでした。
ギアさまこんなんやったらあきませんわ。
こういう血なまぐさいシーンはシュワさまだとかスタローンさまあたりにまかせるべきだったかも。
リチャード・ギアさまとかもう一人おまけにヒュー・グラントさまとかって、私的にはタフガイには最も遠い位置にいる役者さんだと思うんだけど。
そんなギアさまが殴りあいしたらあきませんがな。

# Ｔ．Ｒ．Ｙ．（トライ）

２００３年「Ｔ．Ｒ．Ｙ．」パートナーズ作品
監督　大森一樹
主演　織田裕二、黒木　瞳、渡辺　謙、ピーター・ホー、夏八木　勲

２０世紀初頭の上海が舞台の痛快娯楽エンターテインメント。
織田さまは日本人の天才詐欺師。
ある詐欺事件で騙した中国人の金持ちから命を狙われていたりします。
そんな織田さま、中国人の男に助けられるわけですな。
で、殺し屋から命を守ってもらう代わりに、中国革命軍のために武器を調達する依頼をうけます。
詐欺師だから策略をめぐらせるわけでございまして。
彼がはめるターゲットは日本軍。
軍全体の武器調達に大きな影響力をもつ士官、渡辺さまが標的でございます。
渡辺さまを攻める手段が絞りきれない織田さまですが、二枚の写真が彼の作戦を決定づけます。
彼は上海の詐欺師と、北京から陸軍士官学校に研修に来ている清王朝の後継者がめっちゃそっくりだってえことに気づき、詐欺師を清王朝後継者に仕立てて渡辺さまに会わせ、清に次ぐ新しい王朝を創設するための武器を買いたいと申し出るわけでございます。
もちろん渡辺さまも馬鹿じゃない。
織田さまのこと、王朝後継者のこと、いろいろ調べるわけですが、さすがに織田さまは詐欺師でございます。
常に一歩先回りして渡辺さまの疑念を晴らしていく。
ここらの手際が実に見事。
しかし、渡辺さまの放蕩者の弟、今井雅之さまが上海で「後継者の替え玉の詐欺師」とちょこっと揉めていたことから、今井さまが今回のカラクリを見破るわけですな。
そして彼の動きから渡辺さまは自分がはめられようとしていることに気づくわけです。
さあさどうなる日本軍。いったいどうなる革命軍。うひょおおおおお。
文字にするとあまり起伏のない物語やったんやなあ。
かなりかいつまんだけど、ほとんどあらすじ説明できちゃった。
まあこれだけの物語を映画の尺で撮ったわけですから、人物描写とか、渡辺さまと織田さまの駆け引きとか、革命軍と詐欺師チームの駆け引きだとか、織田さまの過去とか、とにかくいろんなエピソードで登場人物の性格を際立たせていきます。
「スティング」だとか、タイトルが言えない騙し映画の傑作だとかの例をあげるまでもなく、クライマックスの「大騙し」が圧巻。
ドンデン返しに次ぐドンデン返し。
誰が騙していて誰が騙されているのかわけわからなくなるような展開。

実に気持ちよろしいです。
ラストの大オチがもうちょっとひねってくれてたらもっと楽しめたんだけどなあ。
しかしこれ以上の騙しを期待するのは欲張りすぎかなあ。けっこう楽しませていただきました
です。

# レイクサイド・マーダー・ケース

２００５年東宝作品
監督　青山真治
主演　役所広司、薬師丸ひろ子、柄本　明、鶴見辰吾、杉田かおる、黒田福美、豊川悦司

豪華キャストで映画化された本格ミステリ。
原作は直木賞受賞作家の東野圭吾さまの傑作「レイクサイド」です。
三組の夫婦（役所さまと薬師丸さま、柄本さまと黒田さま、鶴見さまと杉田さま）が湖畔のロッジに集まっております。
これってお友達ファミリーの集まりとかではなく、お受験合宿なわけですね。
父兄同伴ってすごいと思いますが、父兄面接の練習も兼ねた合宿らしいです。
この合宿の講師が豊川さま。
合宿地は柄本さま・黒田さま夫妻の別荘。
主人公の役所さまと薬師丸さまの家庭はすっかり壊れてしまっておりまして、二人はすでに別居中。
役所さまには愛人がおります。
で、その愛人がいきなり合宿場所に現れるわけですね。
さざ波、ざわざわって感じです。
愛人は、たまたま子供たちが志望している一流中学の卒業生だったってことがわかり、「受験の先輩からのご意見をいただきましょう」みたいなノリで合宿の夕食に招かれたりします。
愛人は役所さまに逢いびきの時間を告げて近くのホテルへと姿を消します。
チャレンジャー役所さまは仕事だって嘘をついて合宿所を抜け出します。
愛人が泊まっているホテルに行きますが、彼女は現れない。
しかたなく合宿所に戻りますが、そこには愛人の死体と「私が殺したの」という妻の姿。
自分が事情を知るより先に、柄本さま・黒田さま・鶴見さま・杉田さまらが妻を介抱していたりしています。
警察に連絡しようとする役所さまを強引に止める柄本さま。
お受験合宿の場所で、父兄の愛人が殺されたなんていい新聞ネタだし、そんなことが明らかになると受験に影響すると、そういう理屈でございます。
結局三父兄が合同で、死体の身元がわからないように顔と指紋と歯形を壊し、湖に沈めようってことになります。
何となく割り切れない気分の役所さま。
本当に犯人は妻なのだろうか。そこここにある矛盾点を集め、やがて役所はある仮説をたてますが…
二転三転する物語。
やっぱり推理ものはこうでなくっちゃ。

とにかく達者な役者陣の演技合戦が楽しめます。杉田かおるさまなんて「私、ちゃんと芝居したらこんなに巧いのよ」みたいな感じで、役所さま・柄本さまら新劇系俳優さんを向こうにまわしてもひけをとらない名演技です。
豊川さまの何を考えているのかわからない塾教師もええ感じ。
鶴見辰吾さまと杉田かおるさまが夫婦役って設定にはちょいと笑いました。
どうせだったら塾教師は武田鉄矢さまにしたらもっと笑えたんですが。

# オーメン２・ダミアン

１９７８年アメリカ映画
監督　ドン・テイラー
主演　ウイリアム・ホールデン、リー・グラント、ジョナサン・スコット・テイラー

この記事を書くにあたって、ちょこっと下調べをしましたが、この作品を評価している人多いみたいですね。
個人の映画サイトのレビューとかでも、けっこう好意的な意見が目立ちました。
人気のオカルトホラー映画の第二弾。
って書いてしまうと、どうせイマイチやろ、とか思われてしまいがちですが、なかなかどうして。かなりよくできております。
第一作でグレゴリー・ペックさまに殺されかけながらも生き延びた悪魔の子ダミアン。
彼は十二歳になりました。彼は叔父さんのウィリアム・ホールデンさまに引き取られ、叔母、従兄弟と平和に暮らしております。
で、少しずつ不思議な能力が開花しはじめるわけでございます。
さらに例によってダミアンの秘密を知ってしまった人だとか、彼をなんとかしようと考える聖職者だとか、ダミアンの邪魔になりそうな人だとかが、次々とごっつい死に方をするわけですね。
ごっつい死に方の内訳ってえと、まず遺跡の崩落による生き埋め。
これはまあツカミみたいなもんです。
カラスにつつかれて両目が見えなくなって、フラフラと車道に出たらそこにトラックが通りかかる。強烈。
スケートしてて、氷の割れ目から湖へ。
これだけだとまあ普通っぽい（普通やないやないの）んですが、「助けてくれえ」みたいな感じで流される場面を水底から撮るってイジワルぶり。
半透明の氷を通して、助けようとしている人の姿が見えるってえ残酷さ。
乗っていたエレベーターのワイヤーが切れ、その切れたワイヤーによってエレベーターごと上半身と下半身が切断されるってひどい殺されかたする人もおりました。
あとは科学研究所で有毒ガス浴びるとか、電車の連結器にはさまれるとか。
どれも嫌ですね。
まあ残酷シーンはおいといて、この作品の評価を高めているのは、とにかくダミアン少年の苦悩を丁寧に描いているところに尽きます。
普通の十二歳の少年が、自分は悪魔の子なのだと気づき、やがて兄弟のように育ったいとこを殺してしまう。
「僕は君が好きなんだ、だから殺させないで」みたいな感じです。
いとこはダミアンの秘密を知って、彼を恐ろしいものだと思い、彼を拒絶するわけですね。
そしていとこを殺してしまったダミアンは、叔父や叔母までもその手にかける。

悪魔覚醒って感じです。
ダミアン役のジョナサン・スコット・テイラー君、名演技でございます。
せっかくここまでシリーズが盛り上がったんだから、十四歳から十五歳あたりの、「悪に目覚めたダミアン」を見せてもらいたかったのですが、次作「オーメン３・最後の闘争」はいきなり三十二歳でございます。
ちょっとトホホって感じてしまいました。

# オーメン３・最後の闘争

１９８１年アメリカ映画
監督　グラハム・ベイカー
主演　サム・ニール、ロッサノ・ブラッツィ、リサ・ハロー

オーメンシリーズでございます。
この後に「オーメン４」なんてとってつけたような第四弾があるわけですが、とりあえずダミアン・ソーンシリーズの最終作。
監督は長編映画初演出となるグラハム・ベイカーさま。
主演はこれまた大抜擢のサム・ニールさま。
この映画を見終わった瞬間って、サム・ニールさまがこれだけ国際的スターになるなんて思ってなかったです。
ホラー映画好きな私にとっては、「ジュラシック・パーク」でのダミアン＝サム・ニールさまとザ・フライ＝ジェフ・ゴールドブラムさまの競演はうれしゅうございました。
さてさて、「オーメン３」でございます。
悪魔の子、ダミアン・ソーン＝サム・ニールさまはもう３２歳のおっさんになっております。
彼が経営するソーン社はすでに全米有数の企業に発展し、ダミアン本人も有能な外交官として大統領側近にまでのぼりつめています。
彼はイギリスへの派遣を命ぜられ、現地に赴きますが、そこは聖書で予言されていた「神の子」の復活の地だったわけでございまして、ダミアンはキリスト降臨のときに時の王が行ったように、その当日、その場所で生まれた赤ん坊を皆殺しにしようと、こういう策略をたてるわけでございます。
それと並行して、ダミアンを亡きものにしようと活動する神父さま軍団との戦いなんかがあります。
もちろんこれまでの作品同様、ダミアン本人が何かをどうかするわけではなく、「悪魔の不思議な力」で殺戮を行うわけですね。
これまでの「おっさん・おばはん殺し」ではなく（第二作で中学生のいとこを殺すなんて設定もあるにはありましたが）、今回は赤ちゃん殺しが繰り返されるので、見ていて次第にどんよりしてきます。
第一弾ではダミアンの義父グレゴリー・ペックさま寄りの心境で見ていた観客が、第二作では中学生ダミアン寄りの視点に変わって、今回は前半ダミアン寄りで後半反ダミアンの視点になるという、すごく器用なシリーズ構成ですね。
熱心なキリスト教信者は一貫して反ダミアンの視点で見ていたのでしょうが。
赤ちゃんをみんな殺したのに、「神の力」で次第に弱っていくダミアン。
なんでやねんと思ってたら、クライマックスで大ドンデン返しが待っています。
プロセスは伏せるとして、結局神が降臨してダミアンは滅ぼされます。

なあんや、普通に終わったやん、って感じ。
なんでもこのシリーズには、キリスト教団体から猛烈な批判があがっていたとか。
そういう圧力に耐えられなかったのでしょうか。
２００６年にリメイクされた「オーメン」、今後シリーズ化されるのでしょうか。
だとしたら、旧三部作で描ききれなかった部分を描いていただきたいなと思います。

# ゴースト・ニューヨークの幻

１９９０年アメリカ映画
監督　ジェリー・ザッカー
主演　パトリック・スエッジ、デミ・ムーア、ウーピー・ゴールドバーグ

とりあえずずっと避けて通っていた恋愛ものとか青春ものとかをつらつらとご紹介してまいりましょう。
定番のラブストーリー、「ゴースト～ニューヨークの幻」でござる。
この映画が公開されたころは私はちょうど二十代の後半でございました。
高校大学の友人たちは結婚ラッシュ。
結婚式のＢＧＭでこの映画の主題歌、聴いた聴いた。
「うおおおお、まっはいらぁぶ、まっはいだぁありん」って曲です。
恋愛映画が苦手な私は、この曲聴くだけで「もうええやん」って思ってしまいます。
こんな私ってひねくれ者でしょうか。
主人公のスエッジさまは恋人ムーアさまと結婚カウントダウン状態。
お二人はアツアツでございます。
ムーアさまは陶芸なんぞをやっておりまして、二人でロクロなんぞをまわしながらいちゃいちゃします。
で、流れる主題歌。
「うおおおお、まっはいらぁぶ、まっはいだぁありん」、もうええか。
ある日、スエッジさまとムーアさまが夜の町を歩いておりましたら、突然暴漢が襲撃してきまして、スエッジさま、殺されてしまいます。
で、彼は幽霊となって現世に残るわけですね。そしてムーアさまを守ることになります。
誰から守るねんって話なんですが、実はスエッジさまを殺したのは物盗りとかの暴漢ではなく、黒幕に殺人を依頼されていた男なんですね。
で、その黒幕ってのがスエッジさまの同僚だったわけです。
同僚は不法行為で会社の金を使い込みしておりまして、不明瞭な金の流れに気づきそうになったスエッジさまの口を封じようって理由で殺したわけなんですね。
不正の証拠がスエッジさまの遺品の中にあったもんだから、ムーアの周囲にも悪漢たちの魔手がせまります。
スエッジさまは街でインチキ占いをしている女ゴールドバーグさまに近づきます。
彼女は占いこそインチキだったんですが、実は死者の声を聞くことができるって能力があります。
かくしてムーアさまとゴールドバーグさま（と亡霊スエッジさまですな）は、悪漢たちに立ち向かうことになります。
とはいっても三人が共同で立ち向かうのは物語クライマックスになってからで、スエッジさまが

幽霊としてうろうろしているてことを信じないムーアさまは、ゴールドバーグさまをインチキ女だと決めつけていた関係で、物語中盤はスエッジさまとゴールドバーグさまのコンビでワルたちに対抗するわけでございます。
えーっと、死んでしまっちゃラブシーンなんぞできないわけですが、中盤のもりあがりのところで、スエッジさまがゴールドバーグさまの体に乗り移ってムーアさまとキスする、なんてシーンがあります。
冷静に考えると気持ちわるですな。
私だったらたとえ夏目雅子さまの幽霊でも、男に乗り移ってたらキスなんぞしません。
結末はとってもハリウッド的な、勧善懲悪のラストです。
こういうオチしかつけられなかったのかなあ。
もっと他の結末があってもよかったんじゃないかと思いますが。

# ひまわり

１９７０年イタリヤ映画
監督　ヴィットリオ・デ・シーカ
主演　ソフィア・ローレン、マルチェロ・マストロヤンニ

恋愛ものを集中的にとりあげてまいります。
シリーズで恋愛ものいくとなると、やっぱりこれくらいの作品とりあげとかないといけませんやな。
小学校の同級生にかなりおませさんの女の子がおりまして、その子はソフィア・ローレンさまの大ファンでした。
へえ、そうなんやってその子の話を聞いていた私ですが、そのころすでに「ロードショー」とかのジャクリーン・ビセットさまだとかラクウェル・ウェルチさまなんぞの水着グラビア切り抜いて引き出しの中に隠してたいけない小学生でしたが。
そんなソフィア・ローレンさまの主演作品です。
この人、すげえ乳でかいし、若いころはめっちゃきれいだったっす。
この「ひまわり」のころはけっこうオバサンっぽくなってましたが。
戦争に引き裂かれた男女の悲恋もの。出征して帰らない夫マストロヤンニさまを探す妻ローレンさま。
おお、悲しい物語やあ。
必死で夫を探しまわり、やっと見つけた夫には、妻と二人の息子がおりました。
おお、何という悲恋なのでしょうか。
結局ローレンさまは幼い「夫の子供」のために身をひくことになります。
必死になって夫を探していただけに、その再会は残酷で、その別れは辛いってことでさあね。
夫を探しまわるローレンが途中で通る、一面のひまわり畑。
映画のタイトルにもなっているこのひまわり畑の情景がすばらしいです。
で、流れるのはヘンリー・マッシーニさまの有名なテーマ曲でございます。
このシーンの出来がとにかくよかったから「ひまわり」ってタイトルがついたんだと勝手に思っておりましたが、ある映画関連書籍によりますと、「輝く太陽にむかっていつも顔を向けるひまわり。その太陽とひまわりの関係を男女の間柄に移し変えた作品」であるらしい。
なるほどね。そんな深い意味のあるタイトルだったんだ。
タイトルの意味は別として、とにかくとっても良い作品でございます。
とりあえずソフィア・ローレンさまの演技を見るだけでも値打ちのある作品でございます。

# 幸福の条件

１９９３年アメリカ映画
監督　エイドリアン・ライン
主演　ロバート・レッドフォード、デミ・ムーア、ウッディ・ハレルソン

恋愛ものを集中的にとりあげております。
１００万ドルで奥さんと一夜を共にしたいと、若夫婦（ムーアさま・ハレルソンさま）に申し出てくる大富豪（レッドフォードさま）。
深く深く愛し合っているがゆえにお互いのことをを信じあっている夫婦。
彼らには金が必要だったため、富豪の申し出を受け入れます。
うむむ。この時点で私的にはうむむです。
ムーアさまみたいにきれいな奥さんのいる、ハレルソンさまみたいに頭薄いにいちゃん。
しかも年とったとはいえ、相手はレッドフォードさまでっせ。
そんなん、いくら信じあってても…あかんやろ。
案の定二人の関係は、この夜以来、少しずつ歯車が狂い始めます。
えっと。
シェイクスピア悲劇なんかを評するときの言葉に、「予想される結末に物語が進むのが喜劇、予想できない結末に物語が進むのが悲劇」ってのがあります。
この物語の場合、富豪の申し出を受け入れれば夫婦関係が壊れてしまうのは、すっげえ予想できたことでございまして、「はらたいらさんに１０００点」くらいわかりやすく読める展開でございます。
ってことは、これって喜劇ですわな。
まあ、夫婦がそういう結論を出すに至る話し合いなんかはこれでもかというくらいに描いておりましたが、観客がひたすら先読みのできる「喜劇的状況」ってものは変わりませんです。
それにしてもエドリアン・ライン監督、何を描きたかったんでしょうか。
イマイチよくわからなかったです。
夫婦の愛とか、信頼関係の脆さみたいなものを描きたかったのかなあ。
それにしてもロバート・レッドフォードさま、年とりましたねえ。
なんかめっちゃおじいちゃんになってたのでびっくりしてしまいました。
「スニーカーズ」とか、若手の人と組んだスパイ映画（タイトル忘れてしまいました～）なんかのときは、そんなに年齢感じさせなかったんですが。
そういえばこの人も「華麗なるギャッツビー」だとか「追憶」とかで、ベタベタのラブロマンスばかりに出演していた印象がありまして、ちょっと苦手系の俳優さんでございます。

# ロミオとジュリエット

１９６８年イギリス・イタリア合作
監督　フランコ・ゼフェレッリ
主演　オリビア・ハッセー、レナード・ホワイティング、マイケル・ヨーク、ローレンス・オリヴィエ

恋愛ものを集中的にとりあげております。
めっちゃ有名で古典的な戯曲の映画化ざんす。
「大胆な解釈と斬新な映像」での「ロミオとジュリエット」の映画化だそうな。
へえ、そうなんや。
そもそもロミオとジュリエットに関しては、戦前はレスリー・ハワードさま、戦後はローレンス・ハーベイさまの主演で映画化されております。
で、そのへんの作品と比べて斬新なのでしょうが。
うむむ。
というのも、私が見た「ロミオとジュリエット」ってのはこの作品が最初だったわけで、この作品が基準になってしまいますから、「大胆な解釈」とか「斬新」だとか言われましても、「へえ、そうやったんや」くらいにしか思えません。
申し訳ない。
後になってローレンス・ハーベイ版を見ましたが、こっちを「古臭い芝居やなあ」と思ってしまいましたから、やっぱり斬新だったんでしょうね。
ロミオとジュリエットのベッドシーンがある作品なんて、やっぱりそれまでは考えられなかったんでしょうなあ。
物語はいまさら説明するまでもないでしょうが、モンタギュー家のロミオ＝ホワイティングさまと、その仇敵キャピレット家のジュリエット＝ハッセーさまが恋におちまして、しかしロミオはひょんなことから人を殺してしまいまして、ああだこうだしているうちにジュリエットの縁談がもちあがって、思い余ったジュリエットが神父に相談したところ、仮死状態になる薬を飲んだらええやないの、ってことになって…てえ話がだるだるまったりと続くわけでございますな。
音楽はニーノ・ロータさま。
永遠の映画音楽、みたいなレコード（！）には必ず入っていた名曲でございます。
でもねえ、よく考えてみたら、今では物語を現代に置き換えたディカプリオさま版の「ロミオ・アンド・ジュリエット」だとか、それより先に同じ主題をとりあげた「ウェストサイド物語」なんかも高い評価を得ているわけだし、変化球ものでは「恋におちたシェイクスピア」みたいな作品もあるわけですから、そもそもロミオとジュリエットの悲恋を描いてますってのは初手からビハインドを背負っているような気がしますね。
もちろん公開された当時は斬新な解釈だったんでしょうが、今となっては大時代的な「ロミオとジュリエット」のほうが見直されることになってしまうんでしょうね。

# ワーキング・ガール

１９８８年アメリカ映画
監督　マイク・ニコルズ
主演　メラニー・グリフィス、シガニー・ウイーバー、ハリソン・フォード

恋愛ものです。
「卒業」「キャッチ２２」「イルカの日」「心みだれて」「ウルフ」。
うむむ。同じ監督さんの作品とは思えませんですなあ。
まあ、なんせ「卒業」の名匠、マイク・ニコルズ監督の作品でございます。
やる気だけはあるけれど、イマイチ評価されない女性秘書のグリフィスさま。
彼女のボスはウイーバーさま。
ある日、ボスがスキーで骨折してしまいまして、グリフィスさまはこれぞチャンスとばかりに自分が暖めていた企業合併計画を実行にうつしてしまいます。
これに巻き込まれるのが、ちょっとおバカなエグゼクテョブのフォードさま。
なんかねえ、なんでこんなにアホに描くんでしょうか。
女性主人公に翻弄され、次に復職したボスに誘惑され、どがちゃがに事態をややこしくして、それでもエヘラエヘラ笑っているようなキャラ。
こんな映画があるから実力のない女性社員が勘違いするんだよ。
あ、これは私の元上司の女性と、元部下の女性に個人的にあてた言葉ですので、女性全般に向けた言葉ではございませんことよ。
でもそう言いたくなるくらい、男って単細胞なのね、みたいな描かれ方されております。
そういえば「ブリジット・ジョーンズの日記」でもこんな単細胞キャラの男性上司がおりましたなあ。
まあね、いるにはいるんだけど。こういう人。
でもあんまりいないですよ。こんな単細胞。って書くとハリソン・フォードさまに悪いけど。
さてさて。
えっとね、シガニー・ウイーバーさま、めっちゃ良いです。
この人、こんなに面白くて巧かったんだあって新鮮な感動でした。
もっと活躍してほしいですね。最近あまりお見かけしておりませんが。
でもなあ。この人ちょっと顔こわいからなあ。
対するメラニー・グリフィスさま。
キュートでかわいい。
この人、デ・パルマ監督の「ボディ・ダブル」でもめっちゃエロかわいかったです。
こんな子に秘書になって欲しいんだけどなあ。
でもこんな子は上昇志向強いだろうから、やさしい私の手に余るだろうなあ、と妄想がエスカレートしちゃうくらい、いい感じでございます。

それだけに、ラストシーンはめっちゃ気持ち良い。
明るくて爽やかな恋愛サクセスコメディ。
映画を見終わったあと、あまり味わえない爽快な感覚が残りました。おいしい映画には違いありません。

# 小さな恋のメロディ

１９７１年アメリカ映画
監督　ワリス・フセイン
主演　マーク・レスター、トレーシー・ハイド、ジャック・ワイルド

恋愛ものです。
後に「エンゼルハート」「ミッドナイト・エクスプレス」などの名作を手がけることになるアラン・パーカー監督が、脚本家として映画界入りしたのがこの作品。
へえ、そうやったんや、と感心してしまいました。
役者から監督（イーストウッドさまとかレッドフォードさまとかが有名ですわな。リチャード・アッテンボローさまもそうやなあ）とか、カメラマンから監督（ピーター・ハイアムズさまなんかがそうですよね）、舞台演出家から監督（実は多いこのパターン。日本では蜷川さまなんかが有名ですが、ブロードウエイの演出家出身の監督さんってけっこういてます）。
いろんなパターンでみんな監督として成功しているんだなあ。
映画監督から作家（ジュラシック・パークのマイクル・クライトンさまなんかは元映画監督です。「ウエストワールド」なんか撮っております）、逆に作家から映画監督（クライブ・バーカーさまなんかは「ヘルレイザー」を撮ってるし、スティーブン・キングさまも自ら「シャイニング」のリメイクを製作しておりますよね）なんて人もおります。
そんな感じで、映画監督がそれまでに監督以外で手がけていた作品なんかを調べてみるとけっこう面白い発見なんかがあったりしますよね。
さて「小さな恋のメロディ」です。
１１歳のダニエル君＝レスターさまとメロディちゃん＝ハイドさまが恋におちます。
二人は純真に愛しあっているわけですな。
ある日二人は学校をさぼって海に遊びに行きます。
それを咎めた先生の前で、二人はいきなり結婚宣言しちゃいます。
あかんやろ。いくらなんでも、それはあかんやろ。
でもなんだか許してしまいそうになるふざけた映画でございます。
でもなあ。冷静に見てたら石なげたくなります。
って思い出があるってことは、「彼女できない症候群」時代に見た映画なんだろうなあ。
アホボケ勝手にさらせ、みたいな印象しか残ってなくて、純真な恋愛映画ファンの皆様ごめんなさいね～
ビージーズが歌う主題歌もとにかくええ感じの青春恋愛映画の傑作でございます。

# 恋しくて

１９８７年アメリカ映画
監督　ハワード・ドイッチ
主演　メアリー・スチュワート・マスターソン、エリック・ストルツ

恋愛ものです。
監督のハワード・ドイッチと脚本のジョン・ヒューズは「プリティ・イン・ピンク」で組んだ青春映画の巨匠だそうです。
まあ、巨匠なんやろ。ピンとこないけど。
実はこの映画大好きでございます。
主人公のマスターソンさまがめちゃタイプ。
かわいい。ええ感じ。
彼女がボーイッシュなドラマーガールだって設定もとにかくいいですなあ。
彼女は幼馴染の少年のことが好き。
だけど、彼は別の女の子のことが好き。
彼は彼女の気持ちに気づいていない。
で彼女は彼の恋を応援しようとします。
で、切ない気もちをドラムにぶつけると、こういったお話であります。
ひえええええ。かわいそうすぎ。
めっちゃ感情移入してしまうわ。
というのもねえ、この映画を見たころに私が好きだった女の子も、ええ感じでボーイッシュだったし、その子にもやっぱり好きな男の子がいたんだけど、映画みたいにその男の子の恋愛応援してるフリとかしてたし。
ボーイッシュな女の子ってどうしてこう揃いも揃って素直じゃないんだろう。
あほめ。
そんなボーイッシュ系の子の恋愛を応援するフリして話を聞いたり、励ましたりするこっちの身にもなれってんだ。
バカ野郎。
こっちにも恋愛感情あるっちゅうねん。
…屈折してますなあ。私も。
なんか映画見てて胸いっぱいになっちゃって、大好きな映画の割には結末とか全然覚えてないし。
でも映画を見ているシチュエーションはめっちゃ鮮明に覚えていたりします。
その子と一緒に見たいなあって最初から最後まで思いながらみたせいでしょうかね。
なんかその日の夕食のメニューまで思い出しそうな勢いです。
あ、そうそう、この映画見た当時の私は炎の劇団員だったですから、早朝から昼くらいまでバイ

トして、帰ってビデオで映画見て、時間になったら稽古場に向かう、みたいな毎日だったような記憶があります。
だから夕食のメニュー思い出しそうって書いたわけです。
ま、いいんだけど。
とりあえずマスターソンさま見たさにこの映画もう一回見ちゃおうかなって思っている私です。

# 俺たちに明日はない

１９６７年アメリカ映画
監督　アーサー・ペン
主演　ウォーレン・ベイティ、フェイ・ダナウェイ、ジーン・ハックマン

青春ものです。
アメリカン・ニューシネマの先駆け的作品で、銀行強盗を重ねながら破滅への道をひた走る男女の青春を描いた作品でございます。
現代は「ボニー・アンド・クライド」。
主人公二人の名前でございます。めっちゃ素直。
同じアメリカン・ニューシネマの「明日に向かって撃て」の原題は「ブッチ・キャシディとサンダンス・キッド」で、これまた主人公二人の名前です。
この二作は妙に共通点が多くてですね、タイトルに「明日」って言葉が入るとか、どちらも銀行強盗を描いているとか、どちらも作品ラストで主人公二人は悲劇的な死を迎えるだとか。
もちろん「明日に向かって撃て」のほうのラストはストップモーションではっきり殺された場面を映したわけではありませんけど。
さて「俺たちに明日はない」です。
１９３０年代のダラス。
この町でウェイトレスとして働くボニー＝ダナウェイさまと自動車泥棒のクライド＝ベイティさま。
彼らは意気投合し、やがて銀行強盗という犯罪に手を染めるようになります。
次第に仲間ができてきますが、仲間が増えるにつれて彼らにかけられる賞金の金額もあがっていくわけですね。
銀行強盗を繰り返すうち、次第にその現場は凄惨なものになっていくわけですね。
やがて仲間は一人やられ、二人やられ。
それがまた二人を追い詰めたりします。
クライマックスちかくで、男性としての能力に問題があったクライドとボニーは結ばれます。
つかの間も恋人気分を味わう二人。
しかしそういう場面さえも、映画史に残る悲惨なラストをより際立たせるツールのように感じられてしまいます。
結局二人は結ばれてすぐに、８７発の弾丸を体じゅうに浴びるという末路をたどるわけですな。
余韻も何もなく、とにかくマシンガンで撃たれまくって終わり。
実に衝撃的なラストでございます。
このラスト、あまりにリアルで凄惨で、夢に見るほど衝撃的だった記憶がございますです。
製作者も兼ねたベイティも、ヒロインのダナウェイも、この作品一本で大スターの仲間入りを果たしました。

ちなみにちなみに、ウオーレン・ベイティって、この映画のころはウオーレン・ビューティっていってましたよね。
「天国からきたチャンピオン」のときはまだビューティって表記されてたような気がします。
「レッズ」あたりで表記を変えたのでしょうかね。
「ディック・トレーシー」の時点では、ベイティになってました。
ま、別にどっちでもいいちゃあどっちでもいいんだけど。

# 火山高

２００１年韓国映画
監督　キム・テギュン
主演　チャン・ヒョク、シン・ミナ、キム・スロ

青春ものです。
というよりＳＦＸ格闘学園青春ムービーでございます。
この映画を青春映画として紹介していいものかどうか、ちょいと悩みましたが。
「僕の彼女を紹介します」で、すっかり良いポジションにいってしまったチャン・ヒョクさまの主演作品でございます。
あらすじ上手く書けるかなあ。あまりにも破天荒な内容なんだけど。
ある学校に武術の秘伝書がありまして、その秘伝書をめぐって教頭一派と学生の運動部一派が争いを続けております。
秘伝書のありかを知っていた校長は、教頭の陰謀で化石みたいになっております。
そんな学校に気功を操る高校生（チャン・ヒョクさま）が転校してきます。
この時点では教頭一派がやや不利。
でも運動部一派も一枚岩というわけではなく、ウェートリフティング部とラグビー部、さらに戦いを止めさせたがっている女生徒会長を擁する剣道部が、秘伝書をめぐってつば競り合いをしているわけですね。
やってきたのが気功を操る転校生ですから、みんな彼を味方につけようとします。
なんせこの生徒は、先生が投げたチョークを気功の力で空中で止め、それを手を使わずに投げ返すみたいな技が使える男なわけでして。
しかし転校生は戦いを望まないわけですね。
旗色が悪い教頭、彼は強力な助っ人を連れてきます。
「学園鎮圧教師軍団」でございます。
気功を使える教師軍団なわけですね。
んで、この軍団のリーダー教師は気功の力で空を飛んだりするわけですな。
メチャクチャですが、面白い。
私、こんな世界を普通に許してしまうタイプでございます。
なんせコミックスの「炎の転校生」大好きだったんだもん。
というか「こち亀」みたいにちゃんとした組み立てで笑わせる作品より、主人公がいきなりツエッペリンに変身する「マカロニほうれん荘」が好きなタイプだったというか。
とにかくそんな私にはこたえられない傑作でございます。
韓国の俳優さんたちの名前よくわからないんですが、剣道部キャプテンの生徒会長役の女の子、めっちゃかわいい。
チャン・ヒョクさまよりもこの子がブレイクして欲しいでござる～

# グレート・ブルー

１９８８年フランス映画
監督　リュック・ベッソン
主演　ロザンナ・アークエット、ジャン・マルク・バール、ジャン・レノ、ポール・シェナール

青春ものです。
「サブウエイ」でド注目を浴びた映像派監督のリュック・ベッソンの監督第三作。
私はこの映画を見たのはけっこう遅かったです。
同じベッソン監督の「アトランティス」とほぼ同じ時期に見ましたです。
「アトランティス」は１９９１年の作品で、これはけっこう公開されてすぐに見ましたから、ひょっとしたら見たのは「アトランティス」のほうが先だったかもしれないです。
この「アトランティス」はですねえ、仲良しさんの誕生日にＤＶＤプレゼントとして選んだりするくらい好きな作品でございます。
「アトランティス」についてはまた後日ご紹介するといたしまして、今日のお題は「グレート・ブルー」でございます。
この作品とは別に、フランス語ヴァージョンの「グラン・ブルー～グレート・ブルー完全版」って作品があります。
これは英語ヴァージョン。
ダイビング器材、スキューバーなどを使わずに水深１００メートル近くまで潜る「フリーダイビング」。
この潜水世界記録を競い合う二人の男を通して、「海」ってぇやつを描きます。
非常にわかりやすい前半。
でも、中盤から後半にかけて急にわかりにくくなります。
「２００１年宇宙の旅」を思い出してしまいました。イメージショットのように描かれる「海」。
何かを象徴するかのように登場するイルカ。
この「海」だとか「イルカ」が何を意味するのか、わかったようなわからなかったような。
このへんを感覚的に見せるあたりがリュック・ベッソン監督の上手さなんでしょうかね。
それにしてもねえ、息苦しい映画じゃ。
なんかねえ、フリーダイビングの場面になったら、息止める必要ないのに息を止めてしまうのは私だけでしょうか。
なんかすっごい苦しい気分で映画見ておりましたです。
コラム書くにあたってリュック・ベッソンの監督のこと調べてみましたが、びっくりするほど作品少ないんですね。
もっと作品を撮っているもんだとばかり思っておりましたが、「ＴＡＸＩ」シリーズだとか「キス・オブ・ザ・ドラゴン」、「ＷＡＳＡＢＩ」などは製作・脚本リュック・ベッソンってこと

でした。
まあ私的にはこの作品、好きは好きなんだけど、このあとの「アトランティス」のほうがはるかに好きな作品でございますので、その分星は少なめの評価になってしまいますね。
ってことで私の採点は、星五つ満点だとしたら星三つでございます。

# サタデー・ナイト・フィーバー

１９７７年アメリカ映画。
監督　ジョン・バダム
主演　ジョン・トラヴォルタ、カレン・リン・ゴーニイ、ドナ・ベスコー、バリー・ミラー

青春ものです。
いやあ、懐かしいなあ。
この映画の公開は私が中学生のころでした。
当時中学生だった私は、塾の休憩時間にトラボルタダンスの真似とかしてましたです。
映画のパンフレットにダンスの振り付けがイラストつきで描かれておりまして、塾にそのパンフレットを持ってきた友人とワーワー大騒ぎしながら踊っていた記憶がありますね。
いうまでもなく、ジョン・トラヴォルタさまをスターダムにのし上げた作品です。
普通の店員をしているあんちゃんのトラヴォルタさま。全くもって平日はトホホな男ですが、土曜の夜はディスコの花形になります。
ここでのダンスシーンがかっこええ。
ある日、彼はニューカマーの少女ゴーニイさまに目をつけます。
で、デュエットダンスを踊ってみたらこれがまた巧いわけですわな。
いつしか惹かれあう二人。このデュエットダンスもめっちゃかっこええです。
しかしそんな毎日もずっとは続かないものなわけですよね。
自分が夢中になっているディスコの世界の裏事情を知ったりとか、友達を亡くすとかの事件を乗り越え、トラヴォルタさまは自分自身を見つめはじめるわけでございます。
７０年代後半の大ディスコブームに火をつけたのは誰が何といってもこの作品でございます。
そういう意味では伝説的な傑作ということになるでしょうね。
原題は邦題と同じ「サタデー・ナイト・フィーバー」。
フィーバーってのは熱病だとか熱中だとか、そういう意味に訳されると思いますが、本来はあまり良い意味の言葉ではないと思うのですが。
しかし、ディスコで踊ることを「フィーバーする」、熱中することも「フィーバー」（僕の先生はフィーバーなんてドラマ主題歌もありましたなあ）、果てにはパチンコで大当たりすることもフィーバーなんて言われるに至ります。
これらすべてこの映画が大当たりしたから生まれた使い方だと思います。
主題歌はビージーズ。
サウンドトラックからは「ステイン・アライブ」「恋のナイト・フィーバー」「愛はきらめきの中に」の三曲が同時にチャートインなんてえらい状況になりました。
これも懐かしい話ですよね。
この映画ねえ…　好きなんだけど、話題も記憶も印象もダンスシーンに集中しちゃいますよね。
ダンスシーンはとにかく素晴らしい。

しかしドラマ部分が少し弱く感じてしまいます。
ってことで、私の採点は、五点満点の三点でございます。

# スタンド・バイ・ミー

１９８６年アメリカ映画
監督　ロブ・ライナー
主演　ウィル・リートン、リバー・フェニックス、コリー・フェルドマン、リチャード・ドレイファス

青春ものです。
スティーブン・キングの短編「死体」の映画化です。
この映画、めっちゃ好き。
この映画、というよりこの世界が大好きですね。
作品構造が好きというか。実は同じブクログさんでも公開しております拙作「ベストイレブン」って本がこの映画と同じ構造です。
おっさんになった主人公が、少年時代の友人の死をきっかけに、その人との関係を辿りなおすって構造でございます。
過去を思い出すおっさんがドレイファスさま。
ドレイファスさまをそのまま若くしたような少年リートンさまが主人公。
彼はフェニックスさま、フェルドマンさまら友人たちと田舎町で暮らしています。
彼らは秘密の隠れ家で遊んだりしているわけですわな。
彼らはそれぞれに家庭に問題を抱えていたりします。
というか、だからこそ彼らの結びつきがあったのかもしれませんね。
ある日、彼らは数十キロ先の線路沿いの森の中に、列車にはね飛ばされてそのまま発見されていない死体が放置されているという噂を聞きます。
で、彼らは生まれたときから一度も出たことのない町を出て、死体探しの旅に出発するわけでございます。
ベン・Ｅ・キングの歌う主題歌がめっちゃ良い感じ。
この曲を聴くだけで甘酸っぱい気分になります。
とにかく「少年時代の淡い思い出」って作品だとやたら評価が甘くなる私でございます。
そういえば「少年時代」も「瀬戸内少年野球団」も私的評価はやたら高かったです。
そういうことで、とりあえずかなり好き度が高い作品です。
ただの少年時代回顧ものではなく、その後の彼らの人生そのものを暗示するってところまで踏み込んで描かれているところに好感がもてます。
ってことで、私の採点は、五点満点の四・五点でございます。

# トゥームレイダー２

２００３年アメリカ映画
監督　ヤン・デ・ボン
主演　アンジェリーナ・ジョリー、ノア・テイラー、クリストファー・バリー、ジェラルド・バトラー

コンピューターゲームとしても人気のトゥームレイダーシリーズの第二弾。
前作の破天荒でオカルティックな、おおらかな世界観が薄れ、スパイ映画のような生々しいストーリーが展開してまいります。
監督は「スピード」のヤン・デ・ボンでございます。
海底地震によってアレキサンダー大王の宮殿が姿を現します。
大王が集めた秘宝の中で、特に重要なものばかりを集めた「月の神殿」。
おなじみのララ・クロフト＝アンジェリーナ・ジョリーさま、やっぱりその神殿に一番乗り。
真の秘宝のありかを記した黄金の珠みたいなものがありまして、それを調べているうちに悪漢が侵入。
あわれジョリーさまはその珠を奪われてしまいます。
仲間のギリシャ人ガイドも殺され、ジョリーさまは海面を漂流しているところを助けられて英国へ戻ります。
本国へ戻った彼女の前に現れたのはイギリス諜報部。
珠を奪った連中が、アレキサンダー大王の秘宝「パンドラの箱」を奪おうとしていることが明かされます。
この「パンドラの箱」ってのが、「決して開けてはいけない古代の細菌兵器」だってことがわかり、ジョリーさまは珠の奪還を目指して中国～上海～香港～そしてアフリカへと飛びまわります。
彼女を助けるのは、元恋人の傭兵バトラーさまでございます。
いぐわあああ。
オカルト色がちょっと薄れたといいますか、オカルティックな舞台設定が物語後半に集中したせいでしょうか、前半はジョリーさまの身体をはったアクションが拝見できます。
水上スキーとか軍用機からのパラシュート脱出だとかバイクアクションだとか岸壁ロープ急落下だとか。
ほんま、ようやりはりますなあ。
前作はかなり早い段階からロボットとか動く仏像だとかが出てきていたように記憶しているんですが。
こういうゲームの世界っぽいおいしいツールを、もっと早い段階から出していただきたかったですね。
前半はドラマでひっぱって後半はＳＦＸで盛り上げる、というと「インディジョーンズ」みたい

ですが、明るく無邪気な冒険活劇としてもっと前半から盛り上げてもらいたかったなあって思いました。
やはり前半から中盤がちょっと生々しかったですね。

# 戦場のメリークリスマス

１９８３年日本・イギリス合作
監督　大島渚
主演　坂本龍一、デビッド・ボウイ、ビートたけし、トム・コンティ、内田裕也、ジョニー大倉

「愛のコリーダ」で世界中の注目を集めた大島渚監督、本格的世界進出を果たした作品でございます。
厳密にはこれの前の作品「愛の亡霊」が海外資本で撮った最初の作品になるかと思いますが、海外の大スターを起用して、大規模な海外ロケを行ったのはこの作品が最初…のはずでございます。
原作はサー・ローレンス・ヴァン・テル・ポストの「影の獄にて」。
とにかく海外では評価の高い大島監督ですが、国内ではめっちゃ評価が分かれる監督さんであり、評価の分かれる作品であることは間違いないですね。
同性愛映画が嫌いな方には、この映画にしても「御法度」にしても、耐えられない作品なのではないだろうかと思います。
この記事を書くにあたって、あるサイトの一般参加型のシネレビューを見ましたが、やっぱり評価は真っ二つ。
難しいんだなあ。
舞台はジャワの日本軍捕虜収容所。
ここに美しいイギリス人の捕虜、セリアズ＝ボウイさまが送られてきます。
収容所の司令官、ヨノイ＝坂本さま、ときめくぅ、みたいな。
ボウイさまの行動・考え方がさざ波のように日本兵の間に広がり、少しずつ収容所の雰囲気がおかしくなってくるわけですな。
おかしくなるのはもっぱら坂本さまなんだけど。
坂本さまは自身の動揺を払拭しようと、収容所全体に「行」（苦行、荒行の『行』です）を強制します。
さらには負傷兵や瀕死の病人を含め、全捕虜に召集をかけたりします。
で、ここで有名なシーン。
ボウイさまが優雅に坂本さまに歩み寄り、抱擁しキスをする。
なんじゃそりゃ。
その罪でボウイさまは顔だけ出して生き埋めにされ、坂本さまは切腹、だそうです。
これがヨノイとセリアズの物語。
それと並行して、下士官ハラ＝たけしさまと日本語が話せるイギリス人捕虜ローレンス＝コンティさまとの物語があったりするわけです。
ラストシーンは日本敗戦後、戦犯として処刑される前夜のたけしさまとコンティさまの再会。
このシーンが好きですね。

幕切れのたけしさんのセリフと、そこから始まるテーマ曲。
この流れだけは鳥肌もの。この一瞬のために全てのドラマがあったんじゃないかなとさえ思ってしまいます。
ってことは坂本龍一様の映画音楽があったらそれでよかったんだろうか。
って意地悪な考え方してしまいそうになるくらい、このシーンは大好きでございます。
しかしながら作品評価はやや低めの１０点満点の５点。ちょっと無条件では推薦できない映画かもしれませんね。

# 銀河英雄伝説・我が往くは星の大海

１９８８年徳間書店作品
監督　石黒　昇
声の出演　堀川りょう、富山　敬

全２６話×４シリーズの壮大なＳＦ宇宙大河ロマンアニメ「銀河英雄伝説」。
外伝を含めるとビデオ４０巻以上、原作小説は本編だけで全１０巻のノベルスになります。
この作品は若い頃に勤務していたスイミングスクールが主催するスキーキャンプのバスの中で初めて見ました。
もうはまりまくりました。帰って即ビデオレンタル屋さんに走った思い出があります。
ロボットの出てこない、リアルなスペースアニメでございます。
人類が宇宙に進出して数十世紀。
遥か彼方の銀河系で繰り広げられる銀河帝国軍と自由惑星同盟の戦いの物語。
銀河帝国の下級貴族の家に生まれ、後に帝国皇帝の位にまで登りつめるラインハルト・フォン・ミューゼル（この後の本編では貴族ローエングラム家の門地を継いだため、ラインハルト・フォン・ローエングラムという名前になります）。
学者肌で、本当は研究者になりたかったが食うために仕方なく軍人になった自由惑星同盟のヤン・ウエンリー。
後に物語の中心になる二人の初めての戦いを描く外伝でございます。
冒頭に「惑星レグニッツア上空遭遇戦」、後半に「第四次ティアマト会戦」が描かれます。
って書いても見てない人にとっては何が何かわからんやろなあ。
とりあえず見なされ。で、ちょっとでも面白いなあと思った人は迷わず第一シリーズから順に見るべし。
一巻から見始めて、第一シリーズが終わる七巻あたりで、すでに銀英伝中毒になっておられることでしょう。
ちなみに第一シリーズはラインハルトが旧貴族勢力を制圧し、その途中で親友キルヒアイスを失うまで。
第二シリーズはラインハルトが銀河帝国皇帝となり、ローエングラム王朝をひらくまで。
第三シリーズは銀河帝国と自由惑星同盟が和平を結ぶまで。
第四シリーズは忠臣の謀反とか、自由惑星同盟系の新勢力との戦いとかを経て、ラインハルト皇帝が若くして世を去るまでが描かれます。
簡単に書きましたが、この作品のことを書きはじめたらそれこそ１エピソード（アニメだから１エピソードは３０分ですよ）でコラム１本書けるくらいです。
それくらい深い。で、それくらい面白い作品でございます。
この映画は一時間の作品で、物語の連続アニメ化に先駆けてのパイロット版みたいな性格のものだったようです。

しかし、後に本編の主要キャラとなるミッターマイヤー、ロイエンタールなどもしっかり登場しております。
「第四次ティアマト会戦」の戦闘シーンのバックに流れるＢＧＭは、何とラヴェルの「ボレロ」。
とりあえずそれだけでノックアウト状態でございます。是非見て、はまっていただきたいと思います。
私の評価。
私は銀英伝フリークですからね。
甘～いって言われるかもしれませんが、１０点満点で９点でございます。
だって好きなんだもん。

# チャンプ

１９７９年アメリカ映画
監督　フランコ・ゼフェレッリ
主演　ジョン・ボイド、フェイ・ダナウエイ、リッキー・シュローダー

私が知る限りにおいて、史上最強の「お涙ちょうだい映画」でございます。
こういう映画を見るときは、ハンカチ（タオルのほうがいいかなあ）ティッシュをスタンバイして、「よっしゃ、めっちゃ泣いたるで～」みたいな気分で見るのが正解かと思います。
「ロミオとジュリエット」の名匠フランコ・ゼフェレッリが情感たっぷりにこれでもかこれでもかと泣かせてくれます。
さあ、泣いていただきましょう～
ボイドさまはボクシングの元世界チャンピオン。
妻ダナウエイさまと別れ、息子シュローダーさまと暮らしております。
それでもかつて手に入れた栄光の座にカムバックしようと、トレーニングに励んでおります。
もちろんボクシングだけでは生活できないわけですから、競馬場で働いたりしているわけですね。
息子はそんな父のことを「チャンプ」と呼んでおります。
チャンピオンだった父をめっちゃ尊敬しているわけですね。
で、少年は父が再び世界チャンピオンになることを信じておるわけでございます。
老ボクサー、愛する息子のために戦います。
って展開の話です。
となると、ここから先はああなってこうなって、結局こうなってこうなるんだろうなあ、って予測がつくと思いますが、そうです。その通りです。
物語の展開が読めるのに泣けてしまうのは何故なんでしょう。めっちゃ謎やわ。
リッキー・シュローダーさまがめっちゃ巧いです。
そら泣くわな。こんな名演技見せられたら。
ジョン・ボイドさまもけっこういい感じです。
実はこの頃のジョン・ボイドさまってあんまり好きじゃなかったんですが。
なんかねえ、感動作とか文芸作とかばっかりに出ていた印象がありまして。
しかし近年、「エネミー・オブ・アメリカ」とか「トゥームレイダー」とか「ミッション・インポッシブル」みたいな娯楽作品にバンバン出るようになって、最近ではけっこう好きな俳優さんになりました。
フェイ・ダナウエイさまはなんかすっごくありがちな感じに描かれておりますです。
大女優なのに。ここらはちょっと減点材料かな。
ただ、「お涙ちょうだい」ものですからしかたないかもしれませんが、泣かせよう演出がちょっと鼻につきますね。

それでも泣いてしまうからどうしようもないんだけど。
私の評価は十点満点で七点でございます。

# エクソシスト

１９７３年アメリカ映画
監督　ウイリアム・フリードキン
主演　リンダ・ブレア、エレン・バースティン、マックス・フォン・シドウ、ジェーソン・ミラー

７０年代前半のオカルト映画ブームの火付け役となった作品でございます。
この映画の公開直後に「ヘルハウス」「悪魔のシスター」などの作品が次々に紹介されました。
で、その後続けて公開されたホラー映画（「吸血の群れ」とか「悪魔のいけにえ」あたりが公開された時期じゃないかと記憶しているのですが。記憶違いならごめんなさい～）を含めて「オカルト映画」ブームなんて流れが生まれました。
まあオカルトな要素のない、今でいうスプラッター映画とかショック映画なんかもオカルト映画なんて紹介されたりしておりました。
ともあれこの作品は間違いなく心霊現象を扱う「オカルト」映画でございます。
バースティンさまの娘、ブレアさまがある日突然奇妙な行動をとったり、変な言葉を言ったりします。
医者だとか精神分析医だとかがブレアさまを診察しますが、原因がわからない。
やがて彼女の奇妙な言動の原因は「悪魔憑き」ではないかという話になりまして、彼女のもとに二人の神父が派遣されてまいります。
この二人がシドウさまとミラーさまなわけですな。
かくして二人の神父と悪魔の壮絶な戦いが繰り広げられるわけでございます。
リンダ・ブレアさま、この頃はまだまだかわいいですね。
この直後の「エアポート７５」でぽっちゃりとして、さらにこのあとの「エクソシスト２」ではでっかく成長した姿を見せてくれております。
あ、今のところで、普通は「美しく成長した姿」って書くべきところですが、あえて「でっかく成長」という記述をさせていただきました。
だって本当にでっかく成長したんだもん。
ちなみに７３年の公開当時にはカットされたシーンが追加・再編集された「エクソシスト・ディレクターズカット版」が２０００年に公開されました。
とはいっても、今ではすでにこの作品を軽く越える怖さの作品が量産されておりますので、怖さもほどほどって感じです。

# エクソシスト２

１９７７年アメリカ映画
監督　ジョン・プアマン
主演　リンダ・ブレア、リチャード・バートン、ルイーズ・フレッチャー、マックス・フォン・シドウ

かの「エクソシスト」の続編でございます。
そりゃあね、ヒットした映画の続編を作るってのは映画界の当然の流れだから、止めはしませんが。
うむむ。どうなんやろ。
あの事件から四年。
平和に暮らす少女リーガン＝ブレアさま。
事件は完全に終わったものだとみんな思っておりましたが、再びブレアさまに異変が起きます。
このころ、教会の命を受けて前回の悪魔払いを調べていた神父バートンさま。
シドウさまらの行った悪魔払いに間違いがあった可能性があることに気づき、かつてシドウさまが悪魔パズズと戦った儀式を行ったアフリカに飛ぶわけですな。
この神父と少女の人生がやがて錯綜することになるわけでございます。
難解で宗教性の高い作品です。
さすがジョン・プアマン大先生でございますなあ。
コアでディープなファンの中には、「エクソシスト」こそ邪道で、この「エクソシスト２」こそ傑作であるなんておっしゃる人もおられます。
まあねえ、これは映画のみかたですから、人それぞれだとは思いますが。
そもそも第一作のメガホンをとったウイリアム・フリードキンさまって監督さんもかなり個性が強く、好き嫌いが激しい監督さんだったですしね。
ただ、娯楽に徹した前作よりも哲学的な本作を推す人の気持ちもわからないではないって作品。
でも私はこんな世界観はとっても苦手。
だって宗教っぽい作品ってついていけないんだもん。
作品クライマックスは、有名なイナゴの大群が押し寄せてくるシーン。
若干ネタバレで申し訳ありませぬ。
悪魔の力の象徴としてのイナゴに対抗するのは、実は神の力を宿していた少女リーガン＝ブレアさま。
でもぽっちゃり。
あかんがな。
気持ちはわかるんだけど。
こういうシーン撮りたかったんだったら、ぽっちゃりブレアさまはミスキャストだったんじゃなかろうかって思います。

個人的に、ですが。
私の採点。
宗教映画が苦手なので点数は低め。さらにクライマックスでリンダ・ブレアさまがぽっちゃりしていたのでさらに減点です。
１０点満点で４点。プアマン監督ごめんなさい。

# ミッション・インポッシブル

１９９６年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　トム・クルーズ、ジョン・ボイド、エマニュエル・ベアール、ジャン・レノ、ヴァネッサ・レッドグレーブ

うおおおおおお。
見てましたよね、「スパイ大作戦」。
ピーター・グレーブスさまだとかマーティン・ランドーさまだとかレナード・ニモイさまだとかが出ていたテレビドラマです。
めっちゃおもろかった。
私と同世代の人（というか、私はけっこう早熟映画少年だったから、実際には私より少し上の世代なんですが）なら涙ちょちょ切れるテーマ曲。
この曲がまた聴けるとは思ってなかったです。
「おはようフェルプス君」のジム・フェルプスはドラマのピーター・グレーブスさまからジョン・ボイドさまに変わっておりまして、なんでだろうって思ってたら、あとでわかるちゃんとした理由がありました。
この役をピーター・グレーブスさまに振っちゃいけませんやね。
ピーター・グレーブスさまはこの「ミッション・インポッシブル」については批判的だったそうでございます。
そらそやろ。そんなグレーブスさま２０１０年に他界されておりました。
えっと、スパイ組織ＩＭＦのエージェントたちの物語です。
クルーズさま、ボイドさま、ベアールさまらは、西側スパイの機密情報を東側に売ろうとしているスパイを逮捕するというミッションに失敗し、チームはクルーズさまを除いて全滅。
クルーズさま、しかたなく本部と連絡をとります。
しかし何か様子がおかしい。
実は本部の立てたこのミッションてのは罠だったわけでございます。
そもそもこの任務ってのが、クルーズさまのいるチームに潜む裏切り者をあぶりだすための囮指令だったわけでございます。
当然、疑惑の目はチームの唯一の生存者クルーズさまに向けられます。
でもってクルーズさまは逮捕直前に脱走。
自らの手で真の裏切り者を探し出そうと動きはじめます。
まず、最初のミッションで奪還するはずだった「東側に潜入している西側スパイのリスト」を買いたがっている武器商人「マックス」＝レッドグレーブさまに話をもちかけ、ＩＭＦ本部に潜入して本物のスパイのリストをコピーします。
そしてそのデータをレッドグレーブさまに売るって話を進め、生き残っているはずの裏切り者を

おびきだすと、こういった作戦ざます。
すげえすげえ。
さすがデ・パルマ監督。
最初から最後までハラハラドキドキ。すっごい集中して見ちゃいました。
めっちゃ面白いですよ～
私の採点。
娯楽映画って大好きだから点数あまいです。
１０点満点で９点。さすがデ・パルマ監督。

# モダン・タイムス

１９３６年アメリカ映画
監督　チャールズ・チャップリン
主演　チャールズ・チャップリン、ポーレット・ゴダード、ヘンリー・バーグマン、チェスター・コンクリン

昔話でございます。私が劇団活動をしていたころの話。ある舞台で、サンドイッチマンの役をやることになったわけでございます。
で、演出家のイメージはチャップリンさまなんだと。
この頃はホームビデオが普及しはじめた頃で、今は昔の「ＶＨＳ対ベータ戦争」なんてやってたころです。
役柄のためですから、チャップリンさまの映画けっこう見ました。
でも長編ってなぜかＶＨＳばっかりだったりして、しかたなく短編集とか見たりして。
「君ね、チャップリンってのはユーモアとペーソスだよ。それを身体で表現したまえ」っていう先輩と、「チャップリンはね、ペーソスとかじゃなくて生きるバイタリティを体現しているんだよ。もっと力強く演じなさい」って別の先輩と。
けっきょくわけわからんまま必死にサンドイッチマン役を演じた若き日の私でしたあ。
チャップリンさまの世界って「ユーモアとペーソス」なのか「生きるバイタリティ」なのか。多分両方なんでしょうね。
私はそれ以上に、反骨心とか批判精神みたいなものを感じましたが。
大工場で働くチャップリンさま。彼はベルトコンベアで運ばれてくる部品のネジを締め続けるうちに手が止まらなくなり、おかしい人と間違えられてそういう系の病院に送られます。
退院したものの、会社は当然クビになっております。あてもなく街をさまよっておりましたら、デモ隊の指導者と間違えられて今度は刑務所送り。
そこからも求職者チャップリンさまの受難は続くわけですな。
やがて彼は波止場で盗みを働く少女ゴダードさまと知り合います。二人はそろって職探しを続けるわけですが…
これでもかこれでもかと展開していくストーリー。確実に笑いのポイントを押さえながら、それでいながら別のメッセージが伝わってくるのはさすがとしか言いようがありませんなあ。
この作品が製作されたのは、トーキー映画が公開された十年後。
もちろんトーキー全盛の頃ですね。
サイレントにこだわっていたチャップリンがはじめて観客たちに聞かせた肉声が、かの有名な「ティナティナ」の曲。
意味のない歌詞に振りをつけて歌うってのがなんかチャップリンさまらしいですね。
それでも伝わってくる歌詞の意味。とんでもない表現力だと思います。
パパの採点。１０点満点で９点。

ありがちな評価ですが、ほとんどマイナス材料が見つかりません。やっぱりチャップリンさまって天才だったんだなあ。

# チャップリンの黄金狂時代

１９２５年アメリカ映画
監督　チャールズ・チャップリン
主演　チャールズ・チャップリン、ジョージア・ヘール、マック・スエイン

数あるチャップリン映画のなかでも最高傑作のひとつに数えられる傑作長編コメディでございます。
原題は「ザ・ゴールド・ラッシュ」。そのままやんけ。
この映画を見たのは小学五年のとき。
隣の駅の近所に名画座とＢ級映画館の中間みたいな映画館がありまして、小学生の私は自転車に乗って見に行きました。
併映は「シンドバット黄金の航海」だったです。ってことですから、私的にはかなりアーリーな時期に見た映画でございます。
それでも強烈に印象に残っている場面がたくさんありまして、さすがチャップリンさまやなあって感心してしまいます。
ゴールドラッシュのころのアラスカが舞台です。一攫千金を夢見る放浪者チャップリンさまの夢と希望の物語。あーこりゃこりゃ。
この作品が最高傑作といわれる所以は、とにかく優れたシチュエーションの名場面が多いことにつきます。
中でも山小屋のシーンは秀逸。
飢えたチャップリンと相棒が、履いていた靴を調理して食べる場面。
フォークとナイフを巧みに使い、まるで豪華ディナーの魚料理を食べるように「靴」を食べちゃいます。
すげえすげえ。靴紐を食べるところはなんかスパゲティを食べるときみたい。
この場面はチャップリンの全作品の全ての演技の中でもかなり上位にランキングされる名演であると思います。
そこから一転して、風で飛ばされた山小屋が谷底に転落しそうになる場面。これもすごくいい場面です。
強烈なサスペンス描写。でもコメディとして見事に消化されている。すげえすげえ。
とにかく抱腹絶倒のコメディ作品です。
しかし、後の作品に見られるような、強烈な体制批判だとか文明批判、英雄批判などの辛口の切れ味は感じられません。
まああえて言うとそこらがマイナスポイントなんでしょうが、それもチャップリンさまの作品を相互に批判しあったうえではじめてでてくる意見だと思います。
作品単独で考えると、やはりとんでもない傑作でございます。
パパの採点。１０点満点で８点。

理由。個人的に高く評価しております「モダンタイムス」が９点だったもんで、どうしてもそれより低くなってしまいます。
しかたないところですなあ。

# 街の灯

１９３１年アメリカ映画
監督　チャールズ・チャップリン
主演　チャールズ・チャップリン、バージニア・チェリル、フローレンス・リー

チャップリンさまが初めて肉声を披露した「モダンタイムス」の五年前の作品です。
「モダンタイムス」のころにはハリウッドはすっかりトーキー映画が主流になってしまっていたことは「モダンタイムス」のご紹介のときに書きましたですね。
この「街の灯」が製作されたときはちょうどサイレントからトーキーへと時代が流れていたころです。
チャップリンさまがサイレント映画へのこだわりを見せた執念の作品がこの「街の灯」なんじゃないでしょうか。
物語はねえ、すっごく良い話です。
浮浪者チャップリンさま。
彼は街で、盲目の花売り娘と知り合います。花を買ってあげたいんだけどお金はない。
そういうわけでチャップリンさまはいろいろな仕事をしてお金をためて、花を買おうとするわけですね。
で、チャップリンさまは娘との会話の中で、彼女の目は手術をすれば直るってことを知ります。
ますますお金を用意しなきゃならなくなったチャップリンさまでございます。
ある日、彼は酔っ払いの大富豪と知り合い、意気投合。
大富豪は手術費用になるような大金をポンとくれます。
大喜びで娘にお金を渡すチャップリンさま。
しかしその大富豪、酔いがさめたら自分がやったことを忘れてしまっております。
その結果チャップリンさまは泥棒だってことにされちゃって、警察にやっかいになることになります。
で、数年後。
刑期を終えて出所したチャップリンさま。
手術で目が見えるようになり、幸せな毎日を送っている娘が、町をうろつく浮浪者チャップリンさまに目をとめます。
娘は彼を哀れみ、お金を恵んであげようとしますが…
結末はとにかく有名な「あなただったの…」って字幕。
娘とチャップリンさまの何ともいえない表情。
おお、ペーソスやあ。チャップリン世界を表す言葉に「ユーモアとペーソス」って言葉がありますが、このペーソスって言葉はおそらくこの作品あたりの演技を言うのでしょうね。むっちゃ哀愁ですもんね。

パパの採点。１０点満点で８点。
すごく良い作品なんだけど、「モダンタイムス」「独裁者」「黄金狂時代」「ライムライト」あたりの作品と比べると、やや弱いかなあ。
あくまでも、これは好みの問題ですが。
ってことで申し訳ないですが、「モダンタイムス」より１ポイント下の８点でございます。

# 死霊のはらわた

１９８３年アメリカ映画
監督　サム・ライミ
主演　ブルース・キャンベル、エレン・サントワイズ

チャップリン作品三連発のあとにいきなりこの映画はないわなあ。
作品のカラー違いすぎ。
映画紹介の日記的ブログでオンエア予定日順に作品を解説していったら、結果的にこういう並びになっちゃうわけですなあ。ほんま、びっくりします。
サム・ライミ監督のデビュー作になります。
「スプラッター・ムービー」という言葉を一般化させた傑作ホラーでございます。
指が潰されるだとか、死霊の体がずぶずぶ崩れていくだとか、もうやめてや、みたいな残酷描写が売り物の作品。
悪魔の墓がある、みたいな伝説のある地にやってきた男二人女二人のグループ。
なんか自主映画製作のチームだったような記憶もあるんですが…記憶違いかなあ。
とにかくそういう危険な場所にある山小屋に入った四人。
彼らは何も知らずに、たまたま手に入れた「悪魔復活の呪文」を唱えてしまいます。
で、お約束の悪魔復活でございます。
かわゆい女の子が、突然えげつない悪魔の顔に変わりまして、「しぎゃあああああ」とか言うわけでございます。
とんでもない極悪特殊メイク。で、「スプラッター」というジャンルを創造したともいえる、強烈シーンがやたらひたすら、延々と続くわけでございます。
どうでもええけど、山小屋の中での残虐シーン長すぎ。
もうお腹いっぱいになってしまいました。まあ残虐シーンがウリだから、たっぷりやりたい気持ちはわかるんですが。
とりあえずホラー映画好きの私が見ても「めっちゃ長いスプラッターシーン」って思うくらいのボリュームでございます。
画面とかなんかざらざらした感じがします。
ちょっと画面とかも遠いように感じます。
今はもっときれいな画像でもっときれいなホラーが撮れるでしょうね。
というより逆に、あのザラザラした感じでもいいんだってスタートラインがあったからこそ低予算でも仕上がったんだろうなあ。
パパの採点。１０点満点で６点。
歴史的傑作であるというのはよくわかるんですが、やはりこの映画の世界は肌にあわないです。
サム・ライミ監督ごめんなさい。

# チャップリンの独裁者

１９４０年アメリカ映画
監督　チャールズ・チャップリン
主演　チャールズ・チャップリン、ポーレット・ゴダード

前回は「死霊のはらわた」。で、今回は「チャプリンの独裁者」。
ええ感じでとんでもない並びになりつつありますなあ。
なんかいいなあ。無節操な感じがして。と、けっこう自画自賛してます。
チャップリンさまのかなり後期の作品になると思います。
トーキーに抵抗を続けていたチャップリンさまですが、いよいよサイレントから卒業しちゃいました。
同時に、山高帽に燕尾服のスタイルで銀幕に登場するのもこの作品が最後。
ここからあとの「殺人狂時代」「サーカス」「ライムライト」ではかのチャップリンファッションは見ることはできません。
いろいろな意味でターニングポイントにあたる作品になりますでしょうか。
この作品ではチャップリンさまは二役を演じます。
かの「独裁者」と、その独裁者に間違われる街の床屋の二役。
独裁者と入れ代わり、大観衆の前で演説をする床屋。
その深いメッセージに胸が熱くなりますですね。
この作品が製作されたのは、ナチスドイツが次第に勢力を増していった時期です。
１９４０年ですもんね。
第二次世界大戦の情勢がはっきりしないこの時点でこの作品を撮るってのは、とんでもなくすごいことだったんだろうなあと思います。
資料によると、ごっつい勢いの妨害なんかもあったようですよね。
それでも撮影を続け、これだけの傑作を完成させたチャップリンさまの才能と努力には頭が下がる思いですよね～
しかしながらチャップリンさまはこの「独裁者」と、この後発表する「殺人狂時代」で、思想が偏向していると指摘され、「赤狩り」の対象にされかかってハリウッドを追われることになってしまいます。
それってとんでもない文化的損失なんだけど。
「アカ狩り」やっている人たちにはわからなかったんでしょうね。
ちなみに、「赤狩り」についてはロバート・デ・ニーロさま主演の「真実の瞬間」なんかで詳しく描かれております。
興味のある人はこちらもご覧いただきたいと思いますです。
パパの採点。１０点満点で７点。
ちょっとテーマが深すぎて重すぎるきらいがあるようです。

間違いなく傑作なんですが。何度も書きますが、私的には「モダン・タイムス」のほうが好きな作品ですので、「モダン・タイムス」より１ポイント低い７点ってことでお許しくだされ。

# となりのトトロ

１９８８年徳間書店・スタジオジブリ作品
監督　宮崎　駿
声の出演　日高のり子、坂本千夏、糸井重里

だららっ、だららっ、だららっだららっだららっ。あ～る～こ～、あ～る～こ～、わたしわあげんきいいいい。
いやはや懐かしい。
スイミングスクールで仕事をしていたとき、幼児クラスの体操でこの曲にふりつけして「ちびっこエアロ」とかやってました。
そのころ、幼児クラスで教えていた子が今では大学生。
時の流れの早さを感じてしまいますね。
この作品、すでに十回以上テレビオンエアされているような気がします。
いや、物語は悪い話じゃないんですよ。むしろいい話やし。
というか、いい話すぎてついていけないのがジブリ作品でございます。
ってことで、「魔女の宅急便」のときにも書きましたけれども、ジブリ作品は苦手な私です。
物語の舞台は少し懐かしさを感じさせられる昭和３０年代。
まるでアニメに出てくるような（ってアニメなんだけど）、森の近くにある集落に引っ越してきた二人の姉妹。
彼女たちは森で不思議な生き物トトロと出会います。
で、森の生き物だとかと不思議なふれあいの時間をもちます。
ふれあったらええがな。
で、両親との心のふれあいだとか、姉妹同士の心のふれあいなんかも描くわけですね。
そやから、ふれあったらええがな。
あまりに良い話なんで、逆に心がケバケバしてしまいます。
いかんなあ。最近の私は若干心が病んでおりますなあ。はやく立ち直ろっと。
とりあえず良い話。
内容もよくできているし、作画なんかもとにかくきれいに仕上がっております。
パパの採点。１０点満点で６点。
宮崎監督ごめんなさい。単純に好き嫌いのレベルでこんなポイントになってしまいました。

# 突入せよ　あさま山荘事件

２００２年「あさま山荘事件」製作委員会作品
監督　原田眞人
主演　役所広司、宇崎竜堂、天海祐希、伊武雅刀、藤田まこと、椎名桔平

日本じゅうを震撼させた連合赤軍あさま山荘事件の映画化です。
物語は一貫して警察視点で描かれます。
私的には、警察視点・犯人視点半々で描いてるんだろうなあって勝手に想像しておりましたので、ちょっと期待外れでしたね。
連合赤軍については、昔、芝居をしていたときに、この事件とは別の「榛名山～妙義山山岳ベースリンチ事件」を題材にした戯曲を書きまして、そのときにけっこう文献とか調べました。
少しは山岳ベース事件のことを描くかなあって思って見ておりましたが、全く触れられず。
映画はあさま山荘の立てこもりから突入までのみを丁寧に描いておりました。
長野県の別荘地を徘徊している若者のグループ。
遠巻きにその様子を探る警官隊。
このグループこそが連合赤軍のメンバーたちだったわけです。
彼らは警官隊と銃撃戦の末、「あさま山荘」にたてこもります。
警察はすぐに動き、海外でテロ対策を勉強してきた役所さまを長野に派遣します。
ここでまず長野県警と警視庁のメンツをめぐっての攻防みたいなものがあったりするわけですな。
犯人グループの家族を呼んでの説得工作も失敗。人質にされている山荘の管理人夫人の生死も不明。
次第に警察は突入作戦を計画し、それを実行に移します。
鉄球による家屋破壊だとか放水攻撃、催涙ガス攻撃。
膠着し、情報が混乱する状況の中での人質救出作戦が続きます。
けっこうハラハラドキドキしました。特に、山荘一階の突入部隊が催涙ガスや放水に苦しみながら犯人と銃撃戦を行うみたいな描写をきっちりと入れてくれているあたり、感心しました。
キレイキレイな警察側の勝利、みたいな描きかたをしなかったところはポイントが高いです。
えっと、事件の詳細はいろんなサイトだとか出版物だとかがありますので、そちらを参照していただいたほうが良いとは思いますが、この「あさま山荘事件」の時点ではもちろん「山岳ベース事件」は明らかにはなっていませんでした。
また、連合赤軍の指導者（実名出さないほうがいいですよね。みんな知っているでしょうが、その人たちは逮捕され、裁かれて刑に服しております。自身の罪を悔いて獄中で自殺した人もおります）たちがすでに妙義山で逮捕されていたってこともはっきりとは伝えられていなかったんじゃないでしょうか。
「連合赤軍事件」全体を俯瞰して見ると、「あさま山荘事件」は、思想と統率力、そして恐怖政

治を繰り広げていたリーダーを失った組織が、迷走の上にたどりついた哀れな結末って感じに受け止められます。
被害者・加害者の別なく、事件全体で亡くなられた方のご冥福を改めてお祈り致します。
パパの採点。１０点満点で８点です～

# ホワット・ライズ・ビニース

２０００年アメリカ映画
監督　ロバート・ゼメキス
主演　ハリソン・フォード、ミッシェル・ファイファー、ダイアナ・スカーウィッド、ジョー・モートン

ハリソン・フォードさまとミシェル・ファイファーさまのミステリアスサスペンスでございます。
なんでも、「ヒッチコック監督が生きていたら撮っていたような作品」を撮りたかったゼメキス監督が撮りあげた作品でございます。
どうなんでござんしょうねえ。
そういう予備知識なしに普通に見てたら「ああそうなんや、そういう映画なんや」で終わっていたでしょうが、ヒッチコック監督の名前出されるとねえ…
自動的にヒッチコック作品と比べられるわけですし、そうなるとかなりの完成度とサスペンスとドンデン返し的仕掛けが必要になるわけで。
ちょっとこの売り方は失敗のような気がしますね。
きれいな人妻ファイファーさま。彼女は隣人の不審な行動を見てしまいます。
おせっかいにもその隣人の家に行って追い返されたりするってお約束の描写があったりします。
やがてファイファーさまの家で霊が出没したり、心霊現象が起きたりします。
何かおかしい。
で、彼女は一部記憶を失ってしまっていた数年前の交通事故を思い出すわけですね。
ひょっとしたらこの霊騒動と交通事故には関連があるんじゃないだろうか…
で、そんないろいろな事実がパズルのピースみたいに埋まっていって、最後には驚愕（っていうかあんまり驚愕しなかったけど）の事実が浮かび上がるって構造でございます。
って書いててハリソン・フォードさまあらすじに出てこなかったし。
フォードさまはファイファーさまの夫で、全ての謎の鍵を握る人物ざんす。
ってこんな書き方したら物語の展開めっちゃ読めると思いますが、そのへんは大目にみてくだされ。
全編ミッシェル・ファイファーさまのためにつくられたような映画。
でも途中で不自然に視点が入れ替わってファイファーさま以外の人物から見たファイファーさまの不思議な行動、みたいな場面もありまして、どないやねんな、みたいな印象を受けました。
キャスティングにしても、中盤までは「なんでこの役ハリソン・フォードさまやの？」とか思っていたらラストに謎が解けたりして。
まあ面白いといえば面白いんだけど、面白くないといえばそう思えなくもないっていう、実に微妙な映画でございます。
とりあえずファイファーさまとフォードさまの演技合戦を見るつもりで、あまり期待しないで見

たら楽しめるんじゃないでしょうか。
「ゼメキス監督がヒッチコック監督に捧げた作品やあああああ」みたいな気持ちで見たら、期待が空回りするかもしれませんです。
パパの採点。１０点満点で６点。
期待が大きかった分、なんじゃこりゃって思ってしまいました。

# 引き裂かれたカーテン

１９６６年アメリカ映画
監督　アルフレッド・ヒッチコック
主演　ポール・ニューマン、ジュリー・アンドリュース、リラ・ケトロヴァ

ヒッチコック監督通算５０本目の監督作品で、監督生活４０周年を記念して作られたスパイアクションです。
タイトルが「引き裂かれたカーテン」だもんで、「サイコ」みたいなカーテンごしにナイフ炸裂、みたいな作品かと思っていましたが、全然そうじゃなかったです。
この作品でのカーテンは、「鉄のカーテン」なんかの意味に使われるような「カーテン」でございまして、国家機密を護るというか隠すというか、そういう意味あいでの「カーテン」でございます。
科学者ニューマンさまが、婚約者アンドリュースさまを伴って東側に亡命します。
ある画期的な実験を成功させたニューマンさま、その実験結果をもっての亡命でございます。
彼を受け入れるのはソ連。旧ソ連、今のロシアでございますな。
連邦科学アカデミーみたいなところの、同じ分野の研究をしていて、その画期的な実験にすでに成功している博士と共同で研究したいというのが亡命理由でございます。
しかしこの亡命には裏がある。
西側はこの画期的な実験は成功に至っていないわけです。
で、実験成功のニセ情報を流し、東側に亡命するふりをして第一人者の博士から実験データを盗み出そうと、そういうことでございます。
ほうほう。
なるほどなスパイサスペンスなわけですなあ。
で、「画期的な実験」ってえのがマクガフィン。物語の筋道に直接は関係ないんだけど、登場人物たちにとっては共通して重要な「何か」ですな。
ところがかなり早い時点でニューマンさまにとっての計算違いが発生します。
ロシアの中に入り込んでいる西側の協力者がいるのですが、その協力者とコンタクトをとっている現場を、政府の調査官みたいな男に見られてしまいます。
困ったニューマンさま、男ともみあった末に男を殺してしまう。
えらいこっちゃ。死体と男が乗ってきたバイクは埋めて隠すわけですが、当然政府では行方不明になった調査官のことを調べるわけでございます。
さあここから先はおっかけっこです。
男の死体が発見され、ニューマンさまがつかまってしまうのが早いか、例の博士から実験データを聞き出すのが先か。
きわどいところでデータの入手に成功したニューマンさまですが、もちろんそこはソ連のド真中。

協力者たちの組織による「ニューマンさま・アンドリュースさま国外脱出計画」が進められるわけでございます。
けっこう面白い作品でした。
さすがヒッチコックさま。
惜しむらくは、ポール・ニューマンさまが、ちょっとマヌケキャラなこと。
というか、この人科学者顔してないと思うんだけど。そこいらがマイナス材料でしょうか。
もうちょっと賢そうな役者さん使えばよかったのに。
パパの採点。それでも１０点満点中８点。
ポール・ニューマンさまの科学者役はマイナスだけど、後半は科学者としてじゃなく、西側の人間として逃げ回るわけで、そうなると賢そうな顔は不要ですもんね～

# タービュランス２

１９９９年アメリカ映画
監督　デビッド・マッケイ
主演　クレイグ・シェイファー、ジニファー・ビールス、トム・ベレンジャー

１９９７年に製作された「乱気流・タービュランス」の続編でございます。
至れりつくせりのパニック映画。
物語の冒頭は「飛行機恐怖症」の人々に対する飛行機会社のサービスの描写。
本当にこういうサービスあるのかなあ。
客席のシミュレーターみたいなところに飛行機恐怖症の乗客に入ってもらってのトレーニング。
そして最後は実際の飛行機に搭乗して飛行機への恐怖心を払拭しようと、そういう講習のようです。
飛行機恐怖症の乗客とその他の一般客を乗せた飛行機は目的地に向かって出発します。
さあさここからでございます。
とりあえずは至上最大規模の乱気流の発生でございます。
続けて原因不明の病人の大量発生。
やがて機内にハイジャックが発生。
犯人は貨物室に化学兵器を持ち込み、起爆装置を持っております。
乗客たちの協力によって犯人は取り押さえられますが、乗客の中に犯人とは別のテロリストが乗っていました。
今度はそいつが起爆装置を持ち、ハイジャックを継続します。
事件のどさくさで機長は死亡、副操縦士は意識不明（原因不明の病人たちはテロリストが機内の飲料に鎮静剤を混入したことが明らかになります）ほんま、これでもかこれでもかというくらい続く危機的状況。
立ち向かうのは親友を航空機事故で亡くし、飛行機恐怖症になってしまった飛行機設計士のシェイファーさまと、閉所恐怖症の受講生ビールスさま。
地上からは管制官のベレンジャーさまがアシストします。
貨物室の化学兵器はどうなるのか。
ハイジャック犯は逮捕されるのか。
そして乱気流の中、飛行機は着陸できるのか。
山もりの危機的状況でございますです。普通に考えたら助かったりするわけないですわな。
いやあ、映画って本当に良いもんだ。
クライマックスはちょっと拍子抜け。ハラハラドキドキはたっぷり用意されているんですが、いささか都合がよすぎ、「んなわけないやろ」って印象が残りました。
ラストの主人公とテロリストの対決もいかがなものでしょうか。
テロリストの鎮圧と飛行機着陸の順番を逆にしたらよかったのにって思いました。

パイロット不在での着陸って大技の印象が軽くなってしまって、残念です。
この作品のパパの評価は１０点満点のところ５点でございます。

# 戦国自衛隊１５４９

２００５年「戦国自衛隊１５４９」製作委員会作品
監督　手塚昌明
主演　江口洋介、鈴木京香、鹿賀丈史、北村一輝、綾瀬はるか、生瀬勝久、中尾明慶

半村良様の傑作小説の映画化。
ではないんです。厳密には。
原作小説の映画化は、千葉真一さま主演・斎藤光正監督の「戦国自衛隊」のほうで、今回は「自衛隊が戦国時代にタイムスリップする」という設定のみが取り入れられている作品です。
そもそも、前回の千葉さま版も、原作小説のラストで解明される驚愕の大オチを描かないまま終わってしまっちゃったってえほにょほにょ作品でございまして、どんな作り方しても前作を超えるだろうって思いながら見始めたのに、結局前作のほうがまだましだったってとんでもない作品でございました。
えっと、めっちゃ特殊な技術の実験中に、鹿賀さま率いる自衛隊の小隊が戦国時代にタイムスリップします。
自衛隊はその小隊を救出するため、救援チームを戦国時代に送り込むことになります。
最初の小隊がなんで戦国時代に行ったことがわかんねんって話ですが、最初のタイムスリップが起こった一週間後に、タイムスリップの揺れ戻しみたいな現象が起こりまして、戦国時代の武将が現代にやってきたから。
へえ、そうなんや。
でね、救援チームがなぜ派遣されることになったかというと、戦国時代へ行った自衛隊の小隊が、どうやら歴史に干渉しているらしいと。
で、その歴史の歪みのせいで、ブラックホールが日本各地に発生しまして、今や日本が消滅の危機にさらされているんだって話でございます。
すげえすげえ。
んで、自衛隊をやめた江口さまに召集がかかります。
江口さまは鹿賀さまが隊長を務めていた特殊任務チームのエースだった男でございます。
歴史に干渉をはじめた鹿賀さまに対抗できるのはこの男しかおらんっちゅうことですわ。
さあさ二個小隊の自衛隊、それぞれの運命やいかに。
原作を読まれた人はおわかりだと思いますが、原作を傑作小説として成立させているのは、とにかく織田信長の取り扱いの一点につきます。
ってことはね、私的には、織田信長の取り扱いを間違えれば、駄作とならざるを得ないっちゅうことになってしまうんです。
そういう意味では「戦国自衛隊」「戦国自衛隊１５４９」どちらも不合格っぽいなあ。
さらに「１５４９」版では、江口さまがいかに頭の切れる男であるかをわからせるために「自衛隊時代に、江口さまだけが合格したシミュレーション」があるって話があったのですが…

ごめんなさい。見抜いちゃって。
このエピソードの元ネタは「スタートレック２・カーンの逆襲」でございます。
スタートレックでは、歴代の士官候補生の中で、「勝てる見込みのない救出作戦」の演習を、ただ一人クリアしたのがカーク船長だったって設定でした。
ってことは自衛隊員江口さまって、カーク船長なみに作戦構築能力があるってことなのかなあ。
まあいいか。パパの採点。１０点満点で４点。ごめんなさい。あまり高い点数つけられませんでした。

# 沈黙の断崖

１９９７年アメリカ映画
監督　フェリックス・エンリケス・アルカラ
主演　スティーブン・セガール、マーグ・ヘルゲンバーガー、スティーブン・ラング、クリス・クリストファーソン、ハリー・ディーン・スタントン、レヴォン・ヘルム

実際にＣＩＡで合気道を教えていたスティーブン・セガールさま。
彼の「沈黙シリーズ」の第三弾でございます。
とはいえ、「沈黙の戦艦」や「沈黙の要塞」との続編みたいな話ではなく…
むしろ全く関係ないです。
「燃えよドラゴン」と「ドラゴン怒りの鉄拳」くらい関係がない話です。
主演が同じセガールさまだからとりあえず「沈黙の…」ってタイトルつけただけなんじゃないでしょうか。
このパターン、いまだに続いているみたいですね。
ええんやら悪いんやらよくわかりませんが。
少なくとも、ＤＶＤのパッケージを手にとって「この映画は見たかな、見てないんかな」って真剣に考えないとわからないシリーズであることだけは確かでございます。
今回のセガールさまは環境保護局の調査官でございます。
とっても田舎町にやってきたセガールさま。彼は町の廃坑に毒性の強い産業廃棄物が捨てられていることを知ります。
廃棄を指示していたのはクリス・クリストファーソンさまが社長をつとめる地元の大企業でございます。
物語が動きだす前の伏線として、セガールさまに先行して派遣されていた別の調査官が、クリストファーソンさま一派に殺されてしまったという事件があったりして、セガールさま最初から喧嘩ごし。
それでも不法投棄の現場を押さえないとあかんってことで、「教会のお手伝いの力持ち野郎」を装って住民たちに溶け込んで情報を仕入れようとします。
町全体がクリストファーソンさまの会社の世話になってるみたいな町なんで思うように情報が入ってこない。
セガールさまは町の人たちから何故かつまはじきになっているヘルゲンバーガーさま母子に近づきます。
彼女の兄がまたクリストファーソンさまの手先だったりするわけですが。
で、少しずつセガールさまの悪者退治が始まるわけですね。
「自然を破壊する企業対セガールさま」みたいな感じで、物語の構造としては「沈黙の要塞」に似てますなあ。
でもちょっとなあ。話としては似たような感じだし、ワクワクドキドキみたいな勢いに欠けます

。
自然破壊に対抗する話としては、懐かしいドラマ「合言葉は勇気」（役所さんが主演されてました）なんかのほうがよくできていたような気がします。
パパの採点。１０点満点で６点。
セガールさまの役柄が環境保護局の役人さんなんで、積極的に合気道は使えないっぽいキャラ。
ちょっと消化不良でしたね。

# キャノンボール２

１９８３年アメリカ・香港合作
監督　ハル・ニーダム
主演　バート・レイノルズ、ジャッキー・チェン、ディーン・マーティン、フランク・シナトラ

「キャノンボール」紹介してないのに「キャノンボール２」紹介したり、「乱気流・タービュランス」紹介してないのに先に「乱気流・タービュランス２」紹介したり。
テレビオンエアのご案内ブログとしてアップしていった記事だもんで、こうなっちゃいます。テレビオンエアの順番の悪さを私のせいにしないでくださいまし。
「キャノンボール２」は、もちろん「キャノンボール」の続編でございます。
テレビオンエアでも、シリーズものなんだから二週続けてオンエアとかしたらいいのに。
さて物語…の前にぃ。
そもそもキャノンボールってのは、東海岸コネチカットから西海岸ロサンゼルスまで、アメリカ大陸横断の公道カーレースをする話。
公道でレースするわけだから、スピード違反でおまわりさんとかがガンガン追いかけてきたりします。
その追求の手を逃れながらレースするわけざんすね。
で、ここからは「２」の物語。前作の少し後のお話です。
前作のレースにもエントリーした「中東方面の石油王」の息子。不甲斐ない結果に父石油王はご立腹。
今度は自分がレースを主催するから、お前必ず勝てよ、ってな具合で、第二回キャノンボールが開催されます。
前回参加メンバーを中心にレース参加者が集まり、大陸横断レースが再び行われることになるわけでございます。
リチャード・キールさまとジャッキー・チェンさまがチームを組んでいたり、サミー・デイビス・ＪＲさまとディーン・マーティンさまが同じ車に乗っていたり。
それはそれで楽しいシーンが展開します。
極めつけ、物語の途中でからんできたフランク・シナトラさまが飛び入り参戦したりとか、けっこうハチャメチャ。
レースの話とは別に、ギャングＡ（テリー・サバラスさま）から金を借りてる貧乏ギャングが、金を工面するために主催者の石油王を誘拐しようとする話とかが入ってきて、かなりドガチャガな内容になります。
石油王を誘拐しようとしたギャングの下っぱを演じていた役者さんって、「ゴッドファーザー」で大幹部テッシオを演じていた役者さんじゃないでしょうか。
あと「ゴッドファーザーパート２」で組織を裏切る大幹部役の人もいたような気がします。
なんか細部まで豪華なキャスティングの映画でございます。

しかしながら私の採点は１０点満点中６点。間口を広げすぎて収拾がつかなくなったっぽい作品ですね。

# 乱気流・タービュランス

１９９７年アメリカ映画
監督　ロバート・バトラー
主演　ローレン・ホリー、レイ・リオッタ、ベン・クロス

２を先にご紹介して１があとまわしになってしまいました。何故かブログ書いていた当時のオンエアの順番が２が先で１があとでした。
作品はやっぱり１のほうがはるかに面白かった。
キャスト的には、ジェニファー・ビールスさまだとかトム・ベレンジャーさまなんかが出ている２のほうが豪華なんですが、やはり「乱気流・タービュランス」のほうが圧倒的によかったですね。
とりあえずシチュエーションが自然だったように感じました。
性犯罪者でサイコキラーのリオッタさまが逮捕されます。
ただ、本人は冤罪を訴えて再審請求をしております。リオッタさまはもう一人の強盗殺人犯といっしょに飛行機で護送されることになります。
護送に使われるのは一般旅客機でございまして、ってことはもちろん一般乗客も搭乗しております。
この旅客機の客室乗務員がホリーさまでございます。
気流はとっても不安定。
前方にはごっついハリケーンがあるわけですな、やっぱり。
なんせ「乱気流・タービュランス」でございますから。
で、やっぱり事件が起きます。
強盗殺人犯がトイレに行くとみせかけて護衛のＦＢＩ捜査官に重傷を負わせ、彼の銃を奪うわけですね。
で、機内で乱闘アンド銃撃戦。
護衛の捜査員はみんな撃たれてしまいます。
客室で騒ぎが起こったわけで、様子を見にきた機長も撃たれてしまいます。
さらに銃撃戦の流れ弾が窓を突き破ってしまいまして、客室の気圧が急低下。
自動操縦に切り替えてどうしようかおたおたしていた副操縦士は、気圧急低下のときに機が揺れたはずみで倒れて頭をうち、昏倒してしまいます。
さあ困った。
強盗殺人犯は結局捜査員に撃たれて死んでしまいますが、ある意味強盗殺人犯よりもはるかにアブナイ、サイコキラーのリオッタさまが野放しになってしまうことになります。
客室にはアブナイ男。
操縦士はいない。
前方にはハリケーン。

絶体絶命。
ホリーさまは操縦席に座り、管制官からの通信だけをたよりに着陸を試みます。
いぐわあああ。
「タービュランス２」で感じた物語展開上の違和感なんかもほとんどなしにけっこう楽しめました。
パパの採点。１０点満点で７点。
レイ・リオッタさまが犯人を好演しております。かなり楽しませていただきましたです～

# 案山子・ＫＡＫＡＳＨＩ

２００４年伊藤潤二、ＥＭＧ、朝日ソノラマ、プラネット作品
監督　鶴田法男
主演　野波麻帆、柴咲コウ、りりぃ、河原崎建三

ジャパンホラーの監督さんが好んでとりあげる、ホラー漫画の大家、伊藤潤二様の原作。
この人の漫画のドラマ化は、「富江」だとか「押切」だとか「顔泥棒」だとかを見ましたが、どうなんやろ。
私的にはあまり好きじゃないんです。
「富江」はすごい傑作だと思いますが、それ以外の作品はクライマックスの処理がイマイチなものが多く、この作品もやはりラストに難ありでございました。
ある日突然行方不明になった兄の消息を追って、野波さまは兄の彼女が住んでいる田舎町を訪れます。
あからさまに怪しい村の人々。
野波さまはいろいろなことを調べるうち、村の人々が言う「大事な日」をその村で迎えることになってしまいます。
村の広場に案山子を集める人々。
なぜか彼女をつけ狙う不気味な影。
きゃあああああ。
と予告編っぽく盛り上げてみましたが、映画はそんなに盛り上がらなかったです。
残念ながら。そもそも物語の最初にテロップが流れ、「人の形のものには魂が宿る」だとか「昔の人は霊を払おうとして案山子を作った」だとか「人形（ひとがた）にやどる魂は善良なものばかりではない」なんて説明するもんだから、ネタバレバレです。
テロップに頼らないで、もう少し状況でそれを描くとかしてもらいたかったんですが。
柴咲コウさま、出演シーンは少ないけど熱演でございます。
でも本人はきっとこの映画に出演したことを忘れてしまいたいんじゃないでしょうか。それくらい微妙な作品です。
私が演劇していたころ、「第三エロチカ」って劇団の中心俳優だった有薗芳記さまがチョイ役で出演されてました。
あら懐かしい。
主役の野波さまって、けっこうかわいかったりします。でもラストがなあ…
パパの採点。１０点満点で６点。もうちょっと頑張って欲しかったですね。

# カジノ

１９９５年アメリカ映画
監督　マーティン・スコセッシ
主演　ロバート・デ・ニーロ、シャロン・ストーン、ジョー・ペッシ、ジェームズ・ウッズ

むっちゃ力の入ったマフィア系人間ドラマでございます。
私がこの作品を見たときのテレビオンエアは２００６年３月３１日でした。
何でオンエアの日付を書いたかということはあとで詳しく書きますが、この作品のオンエアがもし２００６年７月とかだったら、テレビ局の人ってめっちゃ良識派の人が揃っておられますので、ソッコーオンエアが中止になって、他の作品と差し替えになっていただろうと思います。
１９７０年代のラスベガス。
デ・ニーロさまは伝説のカジノディーラー。
彼はその腕を買われ、今ではギャングに複数の店を任される立場です。
彼は独自の才覚でカジノの売上を伸ばし続け、経営に参加できるレベルになります。
そんな彼が恋した相手は、詐欺師のストーンさま。
そして彼の親友がギャングのペッシさま。
この三人が中心になって物語が進んでいきます。
どっしりとした視点で、見るに耐えない残酷なシーンも、煌びやかなカジノの世界も、コミカルにさえ感じられる彼らの日常をも、飽きのこない映像で見せてくれます。
ストーンさまに恋したデ・ニーロさまの目の前に現れるのは、ストーンさまの元恋人というか元ヒモのジェームス・ウッズさま。
嫉妬心にとらわれたデ・ニーロさまは、ストーンさまの行動にことごとく干渉するようになり、その不満から彼女はアルコールと薬におぼれていきます。
怖い怖い。
さまざまな理由から抗争が起こったり、当局の捜査の手が伸びそうになって口封じのために「トカゲのしっぽ切り」の論理で消される者がいたり。
主人公デ・ニーロが栄華を極める様子から落ちぶれていく末路までを丁寧に、それでいてスピーディに描きます。
で、冒頭にちょっと触れた話ですが。私はこの映画見ておりまして、めっちゃどんよりしてしまいました。
マフィアのギャングが、邪魔になった組織のメンバーを「消す」場面。
ひと気のない場所に二人の邪魔者を呼び出し、バットでボコボコにして、生きたまま土に埋める。
二人を同時にボコボコにするわけではなく、一人の目の前でもう一人が撲殺されるわけです。
生きているほうも腕だとか足だとかをバットで折られて動けない。
「まだ生きている、お願いだからやめてやってくれ」みたいな懇願を無視して、さらにボコボコ

にされる。
もう一人はそれを見つづけるしかない。
実は２００６年の６月だか７月だかに、こんな事件、本当にあったんですよね。
「あの事件もこんな感じだったんだろか」なんて考えてたら、めっちゃどんよりしてしまいました。
もちろん事件よりこの映画のほうが先に作られたわけですが。
パパの採点。１０点満点中７点。
さっき書いた場面までは８点から９点の評価だったんですが、ちょっとあの場面はいただけなかったです。
事実をもとにした映画なんで、そのようなことはあったんだろうと思いますが、ちょっと描写に工夫してほしかったですね。

# 悪魔の植物人間

１９７３年イギリス映画
監督　ジャック・カーディフ
主演　ドナルド・プレゼンス、トム・ベイカー

今日から「絶対にテレビでは放送されないであろう映画」シリーズでございます。
こういうシリーズになるとやっぱりホラー映画が並びそうですね。
その内容の異常さゆえに、カルト的傑作と呼ばれている作品。ビデオは絶版になっているはずです。
ＤＶＤは発売していない模様。
先日、一部の常連さんを対象に「個人的に」海賊版ＤＶＤを売っている店で、この作品を見つけました。
でも私は常連さんじゃなかったから、「非売品です」とか言われましたが。
主演はドナルド・プレゼンスさま。器用な役者さんですよね。
「大脱走」「ハロウィン」シリーズみたいに善玉やってたかと思うと、「００７は二度死ぬ」とか「ミクロの決死圏」とかでは悪玉やったり。
この映画では超悪玉。めっちゃ悪い男を好演しております。
マッドサイエンティストのプレゼンスさま。
彼は人間と植物を合成させ、植物人間を創造しようとしております。
植物ってすごいですよね。自分の体内でエネルギー合成できるわけだし。
だからこの博士の気持ちもわかるんだけど。
博士は町で人を誘拐しまして、植物人間合成の実験を繰り返しております。
実験に失敗した個体は、旅回りの見世物一座に払い下げられます。
で、そうこうしているうちに植物人間は次第に弱っていきまして、その一座で最後を迎えると、そういうことでございますね。
普通の描くと、ほお、そういう映画なんやって思ってそれで終わりなんですが、この映画の強烈なところは、見世物一座の座員役に本物の「フリークス」を起用しているところです。
彼らはまるで見世物小屋に自分たちの姿を見にきた観客に自分の症状を説明するかのようなトーンで、自分のどこが他人と違うかを説明していきます。
「フリークス」って言葉が訳しにくいんですが。まあ「畸形」と訳すべきなんでしょうか。
五分ほどのこのシーンがとにかくこの作品を微妙なものにしています。
考え方によってはとっても非人道的な作品。
フリークスを見世物として扱っているわけです。
しかし彼らは自分自身の特異な部分をさらすことを生きる術として選んだ人なわけで、その気持ちを全否定するのもどうかとは思いますし。
まあ、ここらあたりが放送されないであろうと考えられる理由であります。

さて物語のほうですが、結局、人間改造手術を行っていた博士は、植物人間によって殺され、見世物一座でフリークスたちを苦しめていた男はフリークスたちの手で罰をうけます。
トッド・プラウニング監督の１９３２年の作品、「怪物団」の、ある意味リメイク。
ただ、フリークスを現実に登場させた人間ドラマである「怪物団」と、ホラーというフィールドでしか物語を展開できなかった「悪魔の植物人間」。
作品的評価は明らかかと思われます。
パパの採点。１０点満点中４点。
映画の中に現実のフリークスを登場させる神経ってのは私にはやはり理解できませんです。

# バスケットケース

１９８２年アメリカ映画
監督　フランク・ヘネンロッター
主演　ケヴィン・ヴァン・ヘンテンリック、テリー・スーザン・スミス

「絶対にテレビでは放送されないであろう映画」シリーズです。
ゲテだグロだ、いやいや傑作だと、実にさまざまな評価をうけているカルト的ホラー作品でございます。
この作品はどうなんでしょうか。
テレビで放送したことあるのかなあ。私的には「こんな作品がテレビで放送されることなどあってたまるか」って気分でとりあげたわけですが。
シャム双生児として生まれた二つの命。
二人は切断されてしまい、健常者の弟と、肉塊に目鼻口と手足がついた兄に分離されます。
分離されることに反対していた兄弟は、やがて彼らを切断した医師に復讐するという行動にでます。
うむうむ。ありがちな、ホラーな展開。
弟は兄を、バスケットケースの中に入れて持ち歩きます。
なんか「グレムリン」のモグワイみたいな感じです。
そんな一心同体状態の双子兄弟ですが、そんな二人に転機が訪れます。
弟のほうが、知り合った女の子に恋してしまうわけですな。
奇形の兄は弟に激しく嫉妬します。兄はバスケットケースから抜け出し、弟の恋人をレイプして殺してしまいます。
ここからは兄と弟の愛憎劇へと物語がシフト。
結局二人は兄弟心中みたいな形で死んでいって、物語は終わります。
なんとまあ救いのないお話でしょうか。
しかし後半の兄弟の心理的葛藤があったからこそカルト的傑作としてホラー映画の歴史に名を残すことになったのも事実ではありますが。
でもねえ、良識派の私にとってはかなり耐えがたい作品世界ではありますです。
パパの採点。１０点満点中３点。
あきまへんなあ。畸形とかシャム双生児だとかを作品の核にもってきてはいけません。
少なくとも私はそんな立場です。当然採点は辛くなります。

# 悪魔のはらわた

１９７３年イタリヤ・フランス合作
監督　ポール・モリセイ
製作　アンディ・ウォーホール
主演　ジョー・ダレッサンドロ、モニク・レ・ボーレン、ウド・キア

「絶対にテレビでは放送されないであろう映画」シリーズです。
この映画がテレビオンエアされない理由は簡単。成人指定されていた映画だからです。
公開当時小学生の映画少年だった私は、とっても悲しい思いをしながらこの映画の上映館の前を素通りした記憶があります。
この映画、公開当時は３Ｄ作品として公開されました。
３Ｄの映画って、めっちゃ魅力的でした。ホラー映画も嫌いじゃなかったし。
結局年齢制限にひっかかってこの映画を見逃した私は、１９８２年の「１３日の金曜日パート３ーＤ」も見逃し、１９８３年になってようやく「ジョーズ３ーＤ」で３Ｄの洗礼を受けることになりますです。
しかしこの映画。
観客の皆さんはやっぱり、例のマヌケな３Ｄメガネかけてこの作品を見ていたのでしょうか。
客席見るほうがホラーな状況かもしれません。って冗談はさておき。
性倒錯の傾向大なフランケンシュタイン博士（キアさま）が主人公。
この博士、内臓嗜好の趣味あり。
しかも実の妹と結婚しているって人。
むっちゃアブない。
博士は「完全なる肉体」の創造を目指しています。
あちこちから優秀な人間の肉体のパーツを集め、二体の人造人間をつくります。男と女。
完璧な肉体を持った人造人間を交配させて子供を作ろうと考えたわけですよね。
しかししかし、ここでとんでもないミスが起こってしまいます。
「優秀な男の脳」とゲイの男の脳をとりちがえてしまい、「カンペキな肉体を持っているんだけど、ゲイ」って人造人間になってしまいます。
さあここから物語は次第にアブナク、ディープな展開を見せるわけでございます。
クライマックスはタイトル通り、はらわたを撒き散らしながらフランケンシュタイン博士、ご絶命でございまする。
なんかねえ、中盤から後半にかけてが強烈すぎます。
でもなんかすっごく倒錯してて、いい感じ。思っていた以上に面白かったです。
パパの採点。１０点満点中７点。
映画的にはあんまり面白いとは思わなかったです。普通ならいいとこ５点～６点でしょうなあ。
しかし作品監修のアートの神様、アンディ・ウォーホールさまに敬意を表して、プラス１点。

# 処女の生血

１９７４年イタリヤ・フランス合作
監督　ポール・モリセイ
監修　アンディ・ウォーホール
主演　ジョー・ダレッサンドロ、ヴィットリオ・デ・シーカ、ウド・キア

「絶対にテレビでは放送されないであろう映画」シリーズです。
この映画も成人指定されていました。
この映画も前項で紹介した「悪魔のはらわた」同様、めっちゃ見たかったんだけど年齢制限にひっかかって見られなかった映画。
何がどう見たかったのかと言いますと、名監督ヴィットリオ・デ・シーカさまとかロマン・ポランスキーさまなんかが役者として出演されていたからでありまして、決してエロティックな場面が見たくて「めっちゃ見たかった」わけではございません。
勘違いされませんように。
かつてこれほどまでに哀れなドラキュラがいましたでしょうか。
あまりにもかわいそうな吸血鬼伯爵が描かれます。
ドラキュラ伯爵＝キアさまはすっかり老いさらばえております。
白髪の髪を染めて若く見せようとしてたりするわけです。
気力も体力もない状態。せめて生き血でも吸いたいわけですが、彼の身体は「処女の生血」しか受け付けない体質でございまして、間違えて処女じゃない女性の血を吸ったりしたら、ゲーゲー吐いてしまうというかわいそうなバンパイアでございます。
伯爵は処女を求めてカトリックの本場イタリヤにやってきます。
しかしさすがはイタリヤ。
それっぽい少女を捕まえて血を吸おうとしますが、実はその子は体験済でございまして、哀れドラキュラはまたまたゲーゲーすることになります。
せっかく見つけた処女（というより少女ですなあ）は、伯爵が毒牙にかける前に交通事故とかで死んでしまったり。
路面に残った彼女の血を必死ですする哀れな伯爵が描かれます。
で、苦労の末に別の処女を見つける。
ここで吸血鬼の存在に気づくのがイケメン・ダレッサンドロさまでございまして、彼は彼女の身を守るために、ベストな方法を考えるわけですな。
方法は簡単。しちゃうわけです。
しちゃったら彼女はもう処女じゃないわけで、もう襲われない。
襲われても伯爵ゲーゲーなっちゃう。
おお、神の名のもとに繰り広げられる崇高なエッチ。
しかしどんな背景があろうともエッチシーンはエッチシーンでございます。

「おおお、すげえええええ」なんて思いながら画面にくぎ付けになった若き日の私でございました。
結局最後には伯爵はダレッサンドロさまに滅ぼされます。
かなりえげつないラスト。
しかたないか。いくらかわいそうで弱そうでも、吸血鬼は吸血鬼。
そういう最後を迎えないといけないんですよね～
映画を見終わったあとは、ストーリーよりもダレッサンドロさまのエッチシーンしか記憶に残っていないという、私的には実に不遇な作品でございます。
パパの採点。１０点満点中８点。
ドラキュラもののパロディとしてはこれほど強烈で辛辣な作品はないかと思います。
非処女の生き血を吸って、ゲーゲー吐きまくるドラキュラなんて哀れすぎですよね。
そのセンスにホラーでは珍しい８点を献上させていただきます。

# ブレインデッド

１９９２年ニュージーランド映画
監督　ピーター・ジャクソン
主演　ティモシー・バルム、ダイアナ・ペニャルバーム、エリザベス・ムーディ

「絶対にテレビでは放送されないであろう映画」シリーズです。
一般常識的なセンスから考えますと、このような映画がテレビでオンエアされることはまずありえないと思います。
そういう意味ではある意味「見る人を選ぶ映画」であることは間違いないです。
この記事を書くにあたって、いろいろなサイトのこの作品の批評を見ましたが、やっぱり評価は両極でございます。
１０点満点で批評すると、８点以上か２点以下か。この映画を面白いと評価できる人ははまる。
面白くないと思えば最後まで見つづけることさえできない。そんな映画です。
主人公のバルムさま。かなりマザコンが入った青年。
そんな彼が恋をした相手は、むっちゃラテンノリのアホ女ペニャルバームさま。
二人は楽しげに動物園を散歩。そんな二人のあとを尾行する影がある。バルムさまの母ムーディさまでございます。
大事な一人息子に悪い虫がついたんじゃなかろうかって感じでしょうか。
おかんはその動物園で、密輸されてきた珍獣「ラットモンキー」にかまれてしまいます。
こいつは黒魔術などにも使われる獣で、そいつの毒が体じゅうにまわってしまったおかんは哀れゾンビと化してしまいます。
おかんの世話を一生見つづけると誓っていたバルムさま、ゾンビママを地下室に入れて看護することになります。
しかしやっぱりゾンビは増殖する。まずは母の様子を診にきた看護師、たまたま近くを通りかかったパンクス兄ちゃん、神父さま、だんだんとゾンビが増えていきます。
事情を全く知らないバルムさまの叔父さんが、バルムさまを元気づけようと彼の家でパーティを開きましょうてえことになりまして、そこから先はご想像の通り。
とにかくエグい内容です。
ゾンビ化するのは母・看護師・神父だし、神父ゾンビと看護師ゾンビはエッチしちゃってベビーゾンビとか生まれるし、バルムさまはベビーゾンビ虐待とかするし。
ラストは大量発生したゾンビ相手に芝刈り機で対抗。
スプラッター映画史上おそらく最高の血糊が流れるし。
うわああ、と思うか面白れえって思うかはホラーに対する感覚次第であろうと思います。
ちなみに本作の監督は後に「ロード・オブ・ザ・リング」を撮ることになるピーター・ジャクソン監督でございます。
ほんま、びっくりしてしまいますわ。

パパの採点。１０点満点中５点。
血糊の量が圧倒的すぎて、感覚的についていけませんでした。
よくできたスプラッターコメディではあるのですが、ちょっとやりすぎ。
ちょっとおさえたほうがよかったんじゃないでしょうか。
まあ、これだけ流血したら逆に「んなアホな」みたいな感じでコメディっぽい感覚で見てしまうんでしょうが。
それにしてもやりすぎやなぁ。

# 悪魔のしたたり

１９７４年アメリカ映画
監督　ジョエル・Ｍ・リード
主演　シーマス・オブライエン、ルイ・デ・ジーザス

「絶対にテレビでは放送されないであろう映画」シリーズです。
前項の「ブレインデッド」はどちらかといいますとコメディタッチの仕上げであり、「おぞましいけど笑えるホラー」って作品だったわけですが、この作品は「おぞましくて、笑えなくて、救いがない」映画であります。
もはやホラーとも呼べないのではないかって感じですわな。
残酷映画というか、ＳＭ映画というか。ホラー＝恐怖はほとんど感じなかったです。
嫌悪感とか不快感が先行する感覚です。もちろんスプラッターではありましたが。
サルドゥー座って見世物一座がありまして、その一座は、グランギニョルみたいな残酷トリック芝居を出し物にしている一座でございました。
そういえばありましたなあ、東京グランギニョル。
飴谷法水さまだとか嶋田久作さまとか越美晴さまだとかが在籍していた劇団ざます。
まああの劇団よりは低俗な、ＳＭショーが繰り広げられ、最後にはＳＭが殺人にまで発展する構成になってて、そこで芝居は終わります。
で、そのショーの舞台上で行われていたのは、演技やトリックなどではなく、実際の殺人だったわけですな。
うひょおおおお。
設定としてはそれだけでけっこうえぐい話ですが、ここからますます外道がエスカレート。
一座はさらってきた女たちを劇場の地下で飼育しておりまして、こいつらがもう獣人状態で、舞台で死んだ人の死肉を食べているだとか、舞台を酷評した批評家だとかバレリーナだとかをさらってきて拷問したり見世物に使ったりとか。
センキレの医者を呼んで（ここからすごいこと書きます。読みたくない人は読まないでね）仕事をさせる代わりに奴隷女の頭蓋骨を割ってストローで脳ミソチュウチュウ吸うだとか。
もう見るに耐えない外道悪辣シーンが続きます。
まあ最後にはこの一座の悪党どもは悲惨な最期を遂げて終わります。
ホラー映画が大好きな私ですが、この映画だけは見てしまったことを後悔しました。
めったにないです。こんな映画。
そういう意味では逆にすごい映画なのかもしれないですね。
パパの採点。１０点満点中０点。おお、出た。０点。
私は評価しませんが、グロ映画史に残る作品であることだけは確かですね。
そういう意味では記録に残る作品ではなく、記憶に残る映画といっていいんじゃないかと思います。

# 幸福の黄色いハンカチ

１９７７年松竹作品
監督　山田洋次
主演　高倉健、倍賞千恵子、武田鉄矢、桃井かおり

ちょっと気分を変えまして、珠玉の名画。
いやあ、不朽の名作でございます。もうねえ、感動の一作。
清々しく泣いてください、みたいな一本です。
この映画を初めて見たのは、おそらく中学生くらいのころだと思います。
で、二回目に見たのが学校の映画鑑賞会。
このときはまわりのごんたくれの友人たちがガヤガヤ言いながら見てたから、あんまり集中できなかったことだけを覚えております。
ストーリーです。っていってもほとんどの人がもう知っていると思うのですが。
全国を車で旅する青年武田さま。
彼はヒッチハイクの若い女性、桃井さまと知り合います。
武田さま、桃井さまとめっちゃくちゃしたいわけですな。
なんだかんだと旅しているうちに、二人はわけありっぽい男、高倉さまと知り合います。
高倉さまは刑務所を出所したばかり。自分の家に帰る途中でございます。
寡黙な高倉さまが言うには、家には妻・倍賞さまが待っているわけですね。
出所してすぐに、高倉さまは倍賞さまに手紙を出しておりまして、自分が帰って良いなら、家の屋根のところに「黄色いハンカチ」をかけておいて欲しいと伝えております。
で、武田さま桃井さまペアは高倉さまを家まで送っていってあげようってことになりまして、その道すがら、高倉さまが刑務所に入った理由だとか、高倉さまと倍賞さまがつきあうことになったなれそめだとかを聞くことになりまして。
高倉さまと倍賞さまのお互いを思いあう気持ちを知って、武田さま桃井さまの心境に少しずつ変化が生まれていく、みたいな物語。
タイトル失敗しています。
このタイトルだったら、ハンカチはためいてあたりまえじゃないですか。
ってことはハッピーエンドが予測されるわけで。
さらにこの映画の予告とかになりますと、ほぼ百パーセント、ラストシーンの「はためく黄色いハンカチ」のシーンが放送されちゃうわけで。
うむむ。どうなんでしょう。
映画の内容を端的に伝えることのできる良いタイトルだとは思いますが、タイトルでネタバレってのはいかがなもんざんしょ。
ちょっと工夫していただきたかったですね。
御存知武田鉄矢さまの映画出演第一作です。

フォークグループ「海援隊」でヒットを飛ばし、いまいち上昇気流に乗れずにくすぶっていた武田さまを、主役級俳優に押し上げた作品で、そういう意味では山田監督の眼はやっぱり確かだったんですね。
パパの採点。１０点満点中８点。
嫌いじゃない映画なんで、９点とかつけてもよかったんだけど、ちょっと良い映画すぎるんで、８点にしておきます。

# スターウォーズ・エピソード１・ファントムメナス

１９９９年アメリカ映画
監督　ジョージ・ルーカス
主演　リーアム・ニースン、ユアン・マクレガー、ナタリー・ポートマン

旧スターウォーズ三部作から十年以上の時を経て製作された、超大作シリーズの第一エピソード。
アミダラ（パドメ）＝ポートマンさま女王の統治する惑星ナブーを通商連合が狙っております。
銀河連邦の命をうけたジェダイの騎士クワイ・ガン・ジン＝ニースンさまとオビ・ワン＝マクレガーさまは、囚われていたアミダラを救出。
しかしマシントラブルで惑星タトゥーインに不時着します。
そこで彼らが出会ったのがアナキンという少年。
クワイ・ガン・ジンは彼の持つ人並み外れたフォースの力を見抜き、彼を自らの弟子にしようと心に決めるわけですな。
タトゥーインでは恒例の飛行機というか、ジェットホバークラフトというか、なんせそんな感じの乗り物のレースの時期が近づいておりまして、アナキンは自らの自由をかけてそのレースに出場するわけです。
果たしてレースの結果はどうなるのか、そして通商連合と惑星ナブーの戦いの行方は…
えー、この作品で一番光っている敵役は、赤い顔で角ある「鬼」キャラのダース・モールちゃんでございます。
作品クライマックスではニースンさま・マクレガーさまのジェダイ二人を相手に大暴れです。
とにかく魅力的な悪役がどんどん登場するのがこのシリーズのいいところですよね。
旧三部作ではモフ・ターキンだとか帝国皇帝だとかが出てくることは出てきたわけですが、最強悪役のポジションを勝ち取ったのはやっぱりダース・ベイダーだったわけで。
本作ではダース・モール、エピソード２ではドゥークー伯爵、そしてエピソード３ではダースベイダーと帝国皇帝って感じで、「強い悪役」がドラマを引き締めてくださっております。
まあこのシリーズ見ていなかったら映画ファンとは呼べない、みたいな空気さえ流れている大作。
まだご覧になっておられない人、ぜひエピソード順にご覧いただきたいと思います。
パパの採点。１０点満点中９点。
とにかくよくできております。ＳＦＸの完成度もとにかく素晴らしいです。
さすがルーカス監督。
でもこうなると当初製作が予定されていて製作中止になった「エピソード７～９」が見たいですよね～
このシリーズの権利を手に入れたディズニー・プロダクションの手腕に期待したいと思います。

# あの夏・いちばん静かな海

１９９１年オフィスキタノ作品
監督　北野　武
主演　真木蔵人、大島弘子、河原さぶ

かなりびっくりした作品。
北野監督といいましたら、「その男、凶暴につき」でバイオレンス派の映像作家として絶賛されましたですよね。
第二作もやっぱりバイオレンス。
で、監督が「監督・主演」ではなく、「監督」として勝負した最初の作品がこの作品でございます。
完成品見たら実に甘酸っぱい青春ラブストーリーだったもんだから、みんな唖然。
みんなびっくり。
しかもごっつい良い映画やないですか。もうねえ、ラスト見て鳥肌たってしまいました。
真木さまは聾唖の青年。清掃車に乗っております。
彼の恋人の大島さまも聾唖者。
ある日、彼は荒ゴミに混じって壊れたサーフボードが捨てられているのを見つけます。
彼はそのボードを持ち帰り、自分で修理してサーフィンのまねごとを始めるわけですな。
恋人はじっとその姿を見ている。
おお、ええなあ。
やがて真木さまは新品のボードを購入、めきめきと腕をあげていきます。
そんなある日、真木さまはサーフショップの店長に大会への参加を勧められます。
大会に参加する真木さまですが、彼は海に入ることさえできずに失格となってしまいます。
呼び出しのアナウンスが聞こえなかったわけですね。
かわいそう。
しかしそんなことにもめげずにますますサーフィンにのめりこむ真木さま。
最初は彼のことを馬鹿にしていた海岸のサーフィン野郎たちも、いつしか彼と仲間になります。
そして翌年のサーフィン大会。見事入賞。そして夏は終わり、そして秋。
何の言葉もなく、映像だけで起こった事件が胸を突き刺すようなすばらしいラスト。
とにかく感心、めっちゃ感動。
ラストシーンももちろんなんですが、そこからクレジットへの流れるような演出も見事。
えっと、この作品は始まってからこのラストまで、タイトルもクレジットも一切ありません。
物語のクライマックスで、海の画像がいきなり暗転して、そこに濃いブルーの文字で「あの夏」「いちばん静かな海」とタイトルクレジット。
そしておもむろにキャストスタッフのロールがはじまる。すげえええええ。やられてしまいました。

パパの採点。１０点満点中９点。北野作品の中では「座頭市」に次いで好きな作品です。
でもこの作品ってイマイチ評価低いですよね。どうしてなんだろう。

# ＢＲＯＴＨＥＲ

２０００年オフィスキタノ作品
監督　北野　武
主演　ビートたけし、オマー・エプス、真木蔵人、加藤雅也

ここでいうブラザーってのはヤクザのいう「アニキ」のことでございます。
北野監督お得意のバイオレンス作品。
日本を飛び出し、アメリカで大暴れした挙句に現地マフィアともめごとを起こし、マフィアと戦争する日本の暴力団が描かれます。
ヤクザ同士の抗争が起きまして、主人公のヤクザ北野さまは組を追われることになります。
彼はアメリカでヤクの売人をやっている弟をたずねてロサンゼルスへ行くことになります。
ジャパニーズヤクザスピリッツで組織を拡大する北野さま。
しかし彼の無謀とも思えるその行動は、あたかも「死に場所を探している」、「自分を殺してくれる誰かが現れるのを待っている」ように見えます。
やがてマフィアの逆襲が始まるわけですね。
ラストはまるで「俺たちに明日はない」を思わせるような強烈なショットです。
いやいや、本当に才能のある監督さんです。
さすが「世界のキタノ」。
こんなすごい人がいまだにかぶりものかぶったりバカメイクしたりしてテレビに出ているわけですから、素直にすごいなあって思ってしまいます。
トークだとかインタビューだとかを聞いておりますと、頭の回転のめちゃくちゃ速い人だなあ、って思っておりましたが、それはあくまでお笑いの人としての評価。
こんなにとんでもない映画を連発できる感性の持ち主だとは正直思ってなかったです。
その才能、ちょっとだけでも分けてもらいたいもんだ。
ビートたけしさまはもちろん良いですが、加藤雅也さまがめっちゃいいです。
なんか立っているだけで「滅びの美学」が感じられる人。
ひさしぶりにこんな破滅的なパワーをもった役者さんに出会えたって感じでございますね。
パパの採点。１０点満点中８点。
お気に入りの「あの夏、いちばん静かな海」よりも１ポイント低い８点。
この映画もめっちゃ良かったんだけど、私的には「あの夏…」を超える作品ではなかったかなってことで。

# デモリッションマン

１９９３年アメリカ映画
監督　マルコ・ブランビア
主演　シルヴェスタ・スタローン、ウエズリー・スナイプス、サンドラ・ブロック

肉体派スター、スタローンさまとスナイプスさま。
この二人がめっちゃ戦います。この時点ではスタローンさまが大スターで、スナイプスさまは明らかに格下っぽいです。
今ではスタローンさまがちょっと大人しくて、スナイプスさまは「ブレイド」シリーズで大暴れって感じですよね。
これも時の流れかなあ。
めっちゃ凶悪犯スナイプスさま。彼は人質をとってめっちゃ悪事を働いたりしております。
そんな彼の目の前に現れた男こそ、不屈の魂をもった刑事スタローンさま。
スナイプスさまはスタローンさまに逮捕されるわけですが、スタローンさまはスナイプスさま逮捕の際、一般市民を巻き添えにしてしまいます。
それが有罪とされ、スタローンさまもスナイプスさまも冷凍催眠の刑に処せられます。
で、時は流れて数十年後。世界はすっかり非暴力の世界となっておりまして、未来の人間同士は皮膚を接触させることさえなくなってしまっております。
握手もキスもアレもなし。
なんやそら。
そんな世界にいきなり目覚めたスナイプスさま。
彼は脱走して暴れまくります。
非暴力の世界の捜査に慣れきってしまった警察は、彼を逮捕することはおろか、行動を静止することさえできません。
で、スタローン刑事の出番。
冷凍催眠から目覚めたスタローンさま、未来世界での「しきたり」に戸惑いながらもスナイプスさまを追うことになります～
スタローンさまと未来社会の女性警察官ブロックさまのバーチャルセックスのシーンが面白かったですね。
なんか「バーバレラ」思い出してしまいました。
役者でとにかく光っていたのはやっぱりスナイプスさま。
おいしい役をめいっぱい楽しんでおりましたですね。
これくらいの力がある人ですから、その後の彼の活躍はあたりまえの結果だったのかもしれませんね。
パパの採点。１０点満点中６点。
スタローンさま・スナイプスさまはとにかくよかったですが、彼らを盛り上げる脇役チームさん

がもう少し頑張ってほしかったです。

# 金田一耕助の冒険

１９７９年角川春樹事務所作品
監督　大林宣彦
主演　古谷一行、田中邦衛、吉田日出子

「きんだいっち　こうすけええの、ぼぉおけん、ぼぉけん」と、映画を見て二十年以上経っても普通に主題歌を歌えるという、強烈なインパクトのテーマ曲をもつ怪作。
そのあまりにも個性的な内容ゆえに、いつしか「金田一耕助映画」のフィルモグラフィから外されてしまった、とっても不遇な作品です。
まあしかたないですね。
金田一耕助世界そのものをパロディにした作品です。
００７シリーズの「カジノロワイヤル」みたいなもんですわ。
作品全体を彩るのは、やっぱり強烈このうえない大林カラーでございます。こういう作品はいろいろ考えずに、素直に楽しめばよろしいかと思います。
一応原作は横溝大先生の短編「瞳の中の女」。
この作品、読んでないんですが、小説の中では未解決だそうな。
ここから物語がめっちゃふくらんでいきます。
でもねえ、パロディ映画としてボリューム持たせようとするあまりに、無意味な登場人物がバンバン出てきて、その登場人物が少しずつ物語の本筋にからむもんだから、物語は蛇行してシッチャカメッチャカになって、わけわかんなくなります。
では説明しにくいあらすじ。
美術品窃盗団がおります。
このリーダーが熊谷美由紀さま。ボスが東千代之介さまで、その妻が吉田日出子さま。
窃盗団は美術評論家仲谷　昇さまの家から彫刻の頭部を盗み出すわけですが、この彫刻が例の「瞳の中の女」事件と関係があるわけですね。
で、古谷さま演ずる金田一探偵と田中さま演ずる等々力警部は、窃盗団熊谷さまから金田一探偵が未解決の「瞳…」事件を解決してみせろと言われてしまいます。
調べるうちに横溝作品恒例の連続殺人。
で、古谷さま田中さまがすったもんだしながら事件を解決するわけですな。
岸田　森さまが吸血鬼役でいきなり出てきたり、志穂美　悦子さまが本人役でいきなり登場したり、そうかと思うと夏八木　勲さまご本人が「白昼の死角」そのまんまのいでたちで金貸し演じてたり。
ちなみにこの金貸しの口癖は「狼は生きろ、ブスは死ね」だそうです。
ラスト近くではなぜか渓谷に麦わら帽子が飛んで、「人間の証明のテーマ」が流れたりします。
なんでもありです。
最後には撮影監督の木村大作さまや角川春樹社長、横溝大先生なんかもご登場。

もうどうにでもしなされ。
パパの採点。１０点満点中４点。
大林監督ごめんなさい。パロディはいいんだけど、物語の本筋ちゃんと通して欲しかったです。
「ホットショット」とか「裸の銃を持つ男」みたいに。
ちょっとしっちゃかめっちゃかにしすぎましたです。

# 未来警察

１９８４年アメリカ映画
監督　なんとマイケル・クライトン
主演　トム・セレック、シンシア・ローズ、ジーン・シモンズ

「ジュラシック・パーク」原作者のマイケル・クライトンさまが映画監督出身だったって話は有名でございますが、これも監督時代の一本です。
未来社会。
ロボットとかが社会を運営しております。
で、ここでワル登場。ロボットとコンピューターを使って悪事をはたらくのがシモンズさま。
で、こいつに対抗するのが警察のロボット犯罪捜査チームのセレックさまでございます。
さあさ、この二人の戦いやいかに。
ロボット犯罪者のジーン・シモンズさまがめっちゃええ感じです。
物陰からロボットリモコンの端末を操作して、ニヤリと笑いながら悪事を働く感じ。
私はこの映画を「ジーン・シモンズさまが出ている」って理由だけで見ましたです。
ご存知の方はご存知でしょうが、このジーン・シモンズさま、かの有名なロックバンド「キッス」のベースアンドヴォーカル。
当時のキッスはまだフルメークアップでギンギンコスチュームでやっていたころじゃないでしょうか。
あるいはメイク落として活動をはじめたばかりの時期か。
「あのキッスのジーン・シモンズさまの素顔が見られる」みたいなノリでめっちゃよろこんで見た記憶があります。
でもさすがマイケル・クライトン監督ですね。
この時点ですでにスパイダーロボットなんてアイデアを完成させておられたわけです。
かの「マイノリティ・リポート」のスパイダー型ロボットの原型がこんなところにあったとは。
めっちゃ忘れておりました。
ただ、ロボットの動きはもちろん「マイノリティ・リポート」のほうがクモっぽい。
「未来警察」のロボットの動きってなんか「前に進むカニ」っぽい。
これって偏見かなあ。
ＳＦＸの出来を語るには時代が違いすぎるので、ちょっとフェアじゃないかもしれませんがね〜
パパの採点。１０点満点中７点。
ほめた割には点数低め。
実はクライマックスで、ジーン・シモンズさまにもうちょっと頑張って欲しかったなあって思いまして、その分１ポイントダウンでございます。
ジェイソンとか「ダイハードの長髪テロリスト」みたいに、あとほんのひと暴れしていただきたかったと思います。

# スーパーマン

１９７８年アメリカ映画
監督　リチャード・ドナー
主演　クリストファー・リーブ、マーロン・ブランド、ジーン・ハックマン

アメリカンコミックスの金字塔とも言える「スーパーマン」の実写映画化。
とってもよくできた映画でございます。
この作品の大ヒットで「スーパーマン」は同じクリストファー・リーブ主演でシリーズ化されました。
第四作くらいまで製作されたと思うのですが。
スーパーマンの母星、クリプトン星から物語が始まります。父スーパーマン・ブランドさまは星のえらいさん。
裁判官だったかな。このへんの記憶は定かではありませんが。冒頭でいきなり流刑にされてしまう罪人はテレンス・スタンプさま。
この人はこの後、別のエピソードで敵役として登場いたします。
さて、クリプトン星はいきなり大爆発。
ブランドさまは生まれたばかりの息子をカプセルに乗せ、宇宙空間に向けて発射します。
カプセルが着いたのが地球。おじいさんおばあさんに拾われた赤ん坊はすくすくと育ち、社会人となって新聞社に就職。
ここまでで一時間くらいの物語があります。
で、成長した赤ん坊＝スーパーマン＝クラーク・ケント＝クリストファー・リーブさまが悪人たちを退治する物語が描かれるわけですな。
今回の悪役はルーサー＝ジーン・ハックマンさま。
めっちゃ楽しそうに悪役を演じておられます。
名シーンは数々ありますが、とりあえず恋人との空中散歩シーンはめっちゃいい感じ。
これで彼女ができるなら俺も空飛びたいよお、と真剣に思った若き日の私でございました。
ただ、クライマックスはめっちゃご都合主義。
そらないやろ、みたいな結末でございます。
でもまあいいか。アメコミの映画化だし。
細かいこと考えないで、楽しめばいいのだ。みたいな勢いで納得させられてしまいました。
パパの採点。１０点満点中８点。
あのクライマックスさえなければ９点くらいいってたんですがね。ちょっと残念だなあ。

# ワイルドバンチ

１９６９年アメリカ映画
監督　サム・ペキンパー
主演　ウィリアム・ホールデン、アーネスト・ボーグナイン、ウオーレン・オーツ、ベン・ジョンソン

めっちゃ懐かしい、壮絶な西部劇でございます。
監督はバイオレンスの神様サム・ペキンパー監督。
とにかくいろいろな映画に影響を与え、いろいろな模倣作・模倣技法、のみならずいろいろなパロディさえ生んだ傑作であります。
とりあえずワイルドバンチってのは西部を暴れまわる強盗団の名前でございます。
むっちゃワルばっかりでございまして、保安官とか賞金稼ぎとか、いろんな奴が彼らを狙っているわけですな。
その日も駅に金貨が着くってんで、「ワイルドバンチ」の面々は金貨強奪にやってくる。
しかしそれは鉄道会社が仕組んだ罠でございまして、駅は賞金稼ぎの連中に包囲されているわけでございます。
壮絶な銃撃戦の末、グループは逃亡。
で、盗んだ金貨はがらくた。一同、大笑い。
おお、男の世界ですなあ。
この強盗団にメキシコ人の男がおりまして、こいつは強奪した武器を影で生まれた村に横流ししてたりするわけですが、この武器強奪の仕事はそもそも政府軍の将軍の依頼だったわけで。
このことがもとでこのメキシコ人は強盗団から離脱します。
強盗団、政府軍と武器の取引。
そこで強盗団が見たのは、政府軍につかまって拷問を受け、瀕死の状態になったかつての仲間のメキシコ人。
それを見た男たち、政府軍と戦うことを決意します。
リーダーのホールデンさまが言うわけですな。
「レッツゴー」
ワイルドバンチの面々は、勝てるわけのない人数の相手に挑みます。
映画史上に残る、滅びの銃撃戦。
いぐわあああああ。スローモーション～
とにかくここから先は強烈の一言。
パパの採点。１０点満点中９点。
またこの映画見たくなっちゃった。
とにかく男の世界にはまっていただきたい傑作でございます。

# １３日の金曜日パート２

１９８１年アメリカ映画
監督　スティーブ・マイナー
主演　ジョン・フューリー、エイミー・スティール

ホラー映画特集でございます。
ええと。申し訳ないですがちょっとだけネタバレ致しますです。
「１３日の金曜日」第一作をご覧になっておられなくて、これから見ようと思っておられる方はごめんなさい。
クリスタルレイクのキャンプ場で、キャンプリーダーの兄ちゃんと姉ちゃんが仕事ほったらかしにしている間に湖で溺れて姿を消したジェイソン少年。
そのジェイソン少年が生きていてキャンプリーダーたちに復讐してまわってるんだってお話が御存知「１３日の金曜日」第一作でございますわな。
殺人鬼ジェイソンってのは実は存在していなくて、子供を失ったジェイソン君の母ボリーズ夫人が犯人で、彼女が無差別殺人を繰り返していたってのが第一作のラストのオチでございました。
で、第二作の本作。
前作で生き残った少女のその後の描写から始まります。
湖畔での事件で、最後にはボリーズ夫人の首をキャーキャーいいながら斬っちゃった彼女です。
やっぱりそのときの恐怖が拭いきれないようで、ビクビクしながら暮らしておりましたが…
いきなり彼女の家（どうでもいいけどけっこう都会なんですね、これが）の冷蔵庫にボリーズ夫人の生首。
きゃあああ。次の瞬間、この子が殺されてしまうのはいつものパターンざます。
で、舞台はクリスタルレイクに戻る。
あかんがな。簡単に湖畔のキャンプ場とちょっとした町を物語が行き来したら。
物語が行き来するってことはジェイソン君も行き来するってことなんだから。
野生児ジェイソン君は電車とかバスとか乗れないわけだから、彼の移動って大変なんだよ、きっと。
えーっと、前作の生き残り（というかママの仇ですわな）を毒牙にかけたジェイソン、湖畔に戻ってやっぱりキャンプ指導員のにいちゃんたちを殺していきます。
でもなんでなんやろ。
母の仇はもう討ったしなあ。
単純に、人殺しの衝動で殺していってるんでしょうか。
この作品はねえ、前作みたいにフーダニットの意外な犯人さがし映画にしようか、湖畔の殺人鬼スプラッターにしようかってところを、映画撮りながら悩んだみたいなところがありますね。
で、結局ジェイソン君は生きていて、事件は全てジェイソン君のせいで、ジェイソン君をみんなでやっつけて終わり。

以前少し書きましたが、この作品ではまだジェイソンはトレードマークのホッケーマスクをかぶってはおりません。
ちなみにこの作品でのジェイソン君は、なんか「エレファントマン」みたいな布の袋に目のところだけを開けて登場しておりました。
パパの採点。１０点満点中５点。
うむむ。かなりイマイチ度が高い作品。
そもそも「意外な犯人」とかいないし、ホッケーマスクは出てこないし。しかたないところですね。

# １３日の金曜日パート３

１９８２年アメリカ映画
監督　スティーブ・マイナー
主演　ダナ・キンメル、ポール・クラッカー、トレーシー・サヴェージ

ホラー映画特集でおま。
「１３日の金曜日」シリーズの第三弾。
そらそうやわな。パート３やねんから。
この映画は３Ｄムービーとして製作されました。
だもんで、ところどころで意味もなく鋭利な刃物とかがカメラに向いてじいいいいいいいっとしたりするカットがあったりします。
だからどないいやねん。
これをちゃんとした映画館で見たりしたら、３Ｄ仕様のフィルムで、しかも眼鏡かけて見るだろうから「おおおおお、刃物が飛び出すううう」みたいな感じである意味感動的なのでしょうが、通常の画面に変換されたビデオを見ても、刃物の先がうっとうしいだけですね。
でも最近の３Ｄムービーってすごいですよね。
ＵＳＪ行ってびっくりしましたが。久々に映画館で３Ｄムービー見ようかなあ。
さて物語。
前作で死んだと思われていたジェイソン君、生きていました。
で、またまたキャンプ地に訪れた若者たちを襲います。
あのさあ。冷静に考えてみたら、この設定ってむちゃ無理がありますわな。
数年前に少年が溺れて行方不明になって、そのあと二度にわたって連続大量殺人があったキャンプ地にまとまった人数の若者が行くってことがそもそも無理があります。
普通閉鎖で、その上立ち入り厳禁でしょうに。
今回犠牲になるのは肝試し大会の若者でございます。
この肝試しツールの一つが、例のホッケーマスク。
落ちていたこいつをジェイソン君が拾って、以後このマスクが彼のトレードマークになるわけですな。
パパの採点。１０点満点中６点。
昨日のパート２が５点で、今日のパート３が６点ってのは、内容に差があるわけではなく、ホッケーマスクが出てきたか出てきていないかでございまして、内容的にはこの二作は大差ないですよ。

# １３日の金曜日完結編

１９８４年アメリカ映画
監督　ジョセフ・ジトー
主演　キンバリー・ベック、コリー・フェルドマン

ホラー映画特集です。
「１３日の金曜日」シリーズの第四弾。
一応、この時点での完結編になります。
というのも、ここまでの作品でははっきり死ぬシーンが描写されなかったジェイソン君、本作ではっきりと「死ぬ」場面が映ります。
やれやれ。
でもこの映画製作時点では「完結編」であったにもかかわらず、今ではここから話がずっと続いていくことがわかっているわけでして、複雑な気分で見なきゃならない作品ではありますね。
どこが完結編やねん。ぜんぜん完結してへんやないの。
前作のラストで絶命したジェイソン君、実は絶命してなくて、また復活します。
もうええって。で、またまた湖に戻って殺人を繰り返すわけですな。
今回新しいのはやっぱりトミー少年を演ずるコリー・フェルドマンさまの存在でございます。
若者から少年へ。
ジェイソンに対峙することのできるキャラクター軸がここで若干変わりました。
で、ここから第六弾、第七弾と、トミー君が主人公の物語となります。
で、第八弾でジェイソン君にとって史上最強の敵が登場するに至ると、こういうわけですね。
まあ第八弾の敵役（というか、そもそもジェイソンが敵役のはずなんですが）については後日のご紹介ということで。
後に「スタンド・バイ・ミー」だとか「ロストボーイ」だとかで活躍するコリー・フェルドマンさま、クライマックスでは頭を丸めてまでの大熱演。
大頑張り大会です。彼の頑張りが、完結編を完結編らしく盛り上げてくれました。
とりあえず彼の努力だけは報われたのではないでしょうか。
なかなか見ごたえのある作品でございました。そして物語は私的最高傑作「新１３日の金曜日」に続きます。
パパの採点。１０点満点中７点。
第一作をご紹介したころは作品の採点してなかったですよね。第一作は７点にしておきます。
ってことはこの作品って第一作レベルなの？って思われるかもしれませんが、クライマックス、フェルドマンさま対ジェイソンの対決シーンは第一作を越えているかもしれません。

# 新・１３日の金曜日

１９８５年アメリカ映画
監督　ダニー・スタインマン
主演　ジョン・シェパード、シャバー・ロス

ホラー映画特集です。
「１３日の金曜日」シリーズの第五弾。今日は原題と邦題の考察。
１３日の金曜日の原題ですが、１から３までは「１３日の金曜日」にパート３、みたいな数字がつく形でした。
「完結編」は「Friday the 13th PartⅣ:The Finalchapter」。
で、この「新・１３日の金曜日」が「Friday the 13th PartⅤ:New Beginnings」です。
原題の上では同じ話として扱われておりますが、作品世界のニュアンスはこの話だけちょっと毛色が違います。
タイトルの先読みになりますが、このあとの第六弾は「１３日の金曜日パート６・ジェイソンは生きていた」ですから、この第五作は「ジェイソンが生きていなくても成立する物語」なわけでございます。
「完結編」のラストで死んでしまったジェイソン。
しかしジェイソンを倒した当のトミー君は事件のせいで心の病にかかってしまっております。
で、クリスタルレイクでまたまた起こる連続殺人事件。
果たして犯人は誰やねんって物語。トミー君、ジェイソンを倒したことによって自分にジェイソンの魂が乗り移ったのではないかと心配しております。
トミーのその心の病が物語の重要な鍵になっております。
第二作以降は「犯人は誰やねん」どころではない殺人鬼退治スプラッターだったわけですが、物語はここで重要な転機を迎える…　はずだったんだけど。
ここから先はもう言いません。
ここからのシリーズの顛末は次項でご確認くださいませ。
パパの採点。１０点満点中８点。
私は「１３金」シリーズではこの作品が一番好き。
第一作の「ジェイソンは生きているのか死んでいるのか、そして死んでいるとしたら犯人は誰やねん」的なもやもやした筋運びがけっこう楽しいです。
ラストのサプライズも私好み。ってことで第一作を越えて８点献上です。

と、いうことで、第二集上巻はこの180作品でご紹介完了です。
下巻は185作品をご紹介って感じでまいりたいと思います。
皆様下巻もお楽しみいただけましたら幸いです。

では皆様、第二集下巻でまたお会いしましょう。

いやぁ、映画って本当に良いものですね。
下巻でもごいっしょに楽しみましょう。
では、サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ。